

博士論文 『諸国百物語』論

名前…塚野晶子

所属…早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程
学籍番号…3706B591|9

『諸国百物語』論

一・はじめに……………	四
二・『諸国百物語』における怪異と人との関わり……………	七
二―一・怪異に挑んだ者たちの行く末……………	七
二―二・怪異に巻き込まれた人間の運命……………	十七
二―三・変貌する怪異の正体……………	二十五
(一) 罪業から人外へ……………	二十五
(二) 怨念と神聖性……………	二十八
二―四・まとめ……………	三十五
三・『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ……………	四十二
三―一・救済を得られる章群……………	四十二
(一) 経・念仏・加持の功德……………	四十二
(二) 僧侶の法力・功德・機転……………	五十三
(三) 仏教帰依による罪業・苦悩の消滅……………	五十九
三―二・救済を得られない章群……………	六十一
(一) 仏事・祈祷・経……………	六十一
(二) 万能の「聖域」としての寺……………	六十五
(三) 怪異を退散させられない僧侶……………	六十七
三―三・僧侶が醜態をさらす章群……………	六十九
三―四・僧侶が世俗から害される章群……………	七十三
三―五・まとめ……………	七十四
四・「後妻うち」の系譜……………	八十三
四―一・「後妻うち」――『諸国百物語』以前……………	八十三
四―二・『諸国百物語』の「後妻うち」……………	九十四
(一) 章題に「後妻うち」と書かれた章群……………	九十四
(二) 激化してゆく「ルール破綻」……………	九十七
(三) 典拠との比較を通じて……………	一〇一
四―三・「後妻うち」――『諸国百物語』以後……………	一〇四
四―四・まとめ……………	一〇七
五・「執心」譚の系譜……………	一一八
五―一・「執心」譚――『諸国百物語』以前……………	一一八
五―二・『諸国百物語』の「執心」譚……………	一二八
(一) 正式の婚姻関係にない男女間において……………	一二八
(二) 「後妻うち」との緊密さ……………	一四〇
(三) 正式の婚姻関係にある男女間において……………	一四六

(四) 金銭への執着……………	一四九
五―三・「執心」譚――『諸国百物語』以後……………	一五三
五―四・まとめ……………	一五五
六・「斬首」の系譜……………	一六八
六―一・斬首・首を持ち去る話――『諸国百物語』以前……………	一六八
六―二・『諸国百物語』の斬首・首を持ち去る話……………	一八二
(一) 怪異からの「罰」……………	一八二
(二) 消えやらぬ「執心」……………	一八五
(三) 「後妻うち」の為に……………	一九二
(四) 「不孝・不倫」への罰……………	一九六
(五) 「へんげの物」退治……………	一九七
六―三・斬首・首を持ち去る話――『諸国百物語』以後……………	一九九
六―四・まとめ……………	二〇四
七・「天狗」譚の系譜――『諸国百物語』と『狗張子』――……………	二二二
七―一・はじめに……………	二二一
七―二・「天狗」譚――『諸国百物語』以前……………	二二一
七―三・『諸国百物語』の「天狗」譚……………	二三四
七―四・「天狗」譚――『諸国百物語』以後『狗張子』以前……………	二三九
七―五・『狗張子』の「天狗」譚……………	二四二
(一) 卷六ノ二「天狗にとられ、後に帰りて、物がたり」を中心に……………	二四二
(二) 卷六ノ三「板垣信形逢 _二 天狗 _一 」を中心に……………	二四七
(三) 卷六ノ五「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」を中心に……………	二六二
七―六・まとめ……………	二七四

一・はじめに

『諸国百物語』は、延宝五年（一六七七）に京都菊屋七郎兵衛から刊行された。

作品の内容について「『曾呂利物語』に拠ったものが多かった」という太刀川清氏の指摘をはじめ（1）、小澤江美子氏からは「説話構成・展開は先行作に依存するところ大きいもの」「安易な創作態度」と（2）、長島弘明氏からは「民話のパターンを踏んでいたり、あるいは先行の仏教的な説話のパターンをひいていたり、一見非常に素朴」（3）と、それぞれ言及を受けている『諸国百物語』の、物語内容それ自体の独自性についての評価は、決して高いものではない。

しかしながら、高田衛氏による「古い話を使うけれども、その中に新しい要素（中略）新しい恐怖のスタイルがどんどん入ってくる」という指摘からもうかがわれるように（4）、『諸国百物語』は先行の怪異小説に作品内容の多くを依拠するだけの作品ではない。

太刀川氏は「今此双紙はその国々の諸人も聞および見及びたる咄の証拠たゞしきをあつめ」という『諸国百物語』の序文を引き合いに出し、『諸国百物語』が説話の「証拠や出所に固執する」のは、「怪談」を「咄本」と区別して「物語」として人の読み物にしようとする意図のあらわれであり「話にまさる文学性を強調したかった」ためであることを指摘している（5）。

また前述の小澤氏は「『諸国百物語』は収める怪異譚を一個人の体験談とすることによって怪異の実在性を強調し、自らの話を「証拠たゞしき」ものとした」と『諸国百物語』の方法について述べている（6）。

さらに江本裕氏は『諸国百物語』に登場する武将群に着目し、「大名クラスの武将の実名（あるいは仮託）」を多く採りあげたのは「著者なりの「証拠正しき」であったと同時に、「教説の草子」から「世間咄の草子」への変貌を示すもの」であることを指摘している（7）。

堤邦彦氏は『諸国百物語』巻四ノ一「端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」を例に挙げ、『諸国百物語』が「怪異小説が仏教説話の教戒性、唱導性を脱して、より物語的な方向に向かう道筋を明らかにするもの」としてこれを位置づけ、『諸国百物語』の脱仏教・教訓性、そして物語性について言及しており（8）、小澤氏も「仏教的・教訓的要素も『諸国百物語』の中では薄れている。」こと、「唱導や教訓からは離れた、話を話として楽しむための娯楽本位の怪異小説」であることを述べている（9）。

このように『諸国百物語』は、その物語構成・展開は、先行作に多くを

依拠していながら、脱唱導・教訓色に起因する文芸化や世間咄化、娯楽性、ならびに文学性については、高い評価が賦与されている様相がうかがわれるのである。

しかしながら前述のように、『諸国百物語』は、典拠ならびに類話となる、それ以前の怪異小説の存在なくして成立したわけではない(10)。

本稿ではそこで、『諸国百物語』がその収録作品の多くを依拠する『曾呂利物語』をはじめ、『諸国百物語』刊行以前に成立したとされる近世怪異小説群。ならびに太刀川氏が「近世の怪異小説を意義づけた」と指摘する、「伽婢子」と「百物語」が書名に冠せられた(11)『諸国百物語』の後の怪異小説を取り上げる。

そして典拠や類話とされる作品との比較、仏教的なものの位置づけへの考察、さらには「後妻うち」「執心」「斬首」「天狗」といった共通のテーマを有する作品群の比較を通じ、これら作品の成立年代に伴う唱導色・教訓性、文学性、ならびに娯楽性の変遷を明らかにしてゆく。

そうすることで『諸国百物語』を主軸とした、近世初期～中期の怪異小説における一源流を見出すことを、目的としたい。

註

- (1) 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)(初出:『諸国百物語』成立の背景)(『長野県短大紀要』第二十八号、一九七三・十二)
- (2) 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」(『大妻女子大学大学院文学研究科論集』第二号、一九九二・三)
- (3) 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「(鼎談) 江戸の怪異譚と西鶴」(高田衛他編『西鶴と浮世草子研究 特集・怪異』第二号、笠間書院、二〇〇七・十一)
- (4) 註(3) 前掲 高田衛、小松和彦、長島弘明「(鼎談) 江戸の怪異譚と西鶴」
- (5) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』
- (6) 註(2) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」
- (7) 江本裕氏「延宝期の仮名草子『諸国百物語』序説」(高田衛他編『西鶴と浮世草子研究 特集・怪異』第二号、笠間書院、二〇〇七・十一)
- (8) 堤邦彦氏「近世説話の一視覚―唱導から文芸への軌跡―」(内田保廣氏他編『近世文学の研究と資料―虚構の空間―』、三弥井書店、一九八八・十二)
- (9) 註(2) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(10) 小澤江美子氏は「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」(註(2)前掲)において、『奇異雑談集』を「近世初期の怪異小説」として定義づけている。また『諸国百物語』以前の寛文期に成立したとされる『因果物語』、『曾呂利物語』、『伽婢子』については「後続の怪異小説に大きな影響を及ぼした。」と述べているし、『諸国百物語』と同年の正月に刊行され、『諸国百物語』巻四ノ十一「浅間

の社のやしろばけ物の事」、巻四ノ十一「気ちがいの女をみて幽霊かと思ひし事」との出典関係が認められる『宿直草』(『御伽物語』)については、これら寛文期の「作品の影響を受けて」版行されたとしている。

(11) 太刀川清氏「序章 百物語と伽婢子」(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)「初出…「怪談会から怪異小説へ」(『国語国文研究』第二十四号、一九六三・二)」。

しかしながら、太刀川氏によって「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)「初出…『諸国百物語』成立の背景」(『長野県短大紀要』第二十八号、一九七三・十二)において「雑話集」と指摘される『百物語』、さらには江本裕氏によって「第一部 作品と作者」(『四了意怪異談の素材と方法』(『近世前期小説の研究』、若草書房、二〇〇〇・六)「初出…「了意怪異談の素材と方法」(『近世文芸 研究と評論』第二号、一九七二・五)を一部補筆」において「零本で、巻七のみ」と指摘される『続伽婢子』に関しては、所収比率が完全には網羅出来ない為、取り上げなかった。なお、『狗張子』に関しては、「伽婢子と狗張子」(『国語と国文学』第四十八巻第十号、一九七一・十)における、『伽婢子』と「正編続編の関係」にあるという富士昭雄氏の指摘を受け、ここに掲載した。

『諸国百物語』本文をはじめとする、テキスト引用にあたっての留意点を、次に記しておく。

- 一・ 作品中の漢字は現行の新字体になおした。
- 二・ 作品中の仮名遣いは原本の通りにした。また、振り仮名についても同様である。

以下『諸国百物語』本文引用は全て、高田衛氏、原道生氏他編『叢書江戸文庫2 百物語怪談集成』(図書刊行会、一九八七・七)による。

二・『諸国百物語』における怪異と人との関わり

二―一・怪異に挑んだ者たちの行く末

先に述べたように、その脱唱導・教訓色に起因する文芸化や世間嗤化、娛樂性、ならびに文学性について、高い評価を与えられている『諸国百物語』。

しかしながら先行研究においては、このような文芸的意匠への考察に加え、典拠の探索や類話との比較がなされてきたものの(1)、そうした際に、作品の主題である怪異それ自体については、あまり言及がなされてこなかったようである。

そこで本稿では始めに、従来あまり言及されてこなかった、怪異と人間との関わりという観点から、『諸国百物語』中、出典が判明している三十六話のうち、改変が顕著であるもの、あるいはその改変が特定の傾向を有しているものを取り上げ、人物設定や物語展開を中心に、典拠と本編の比較とを行う。

そして典拠に加えられた改変を分析することで、『諸国百物語』における、怪異と人との関わりについて、考察を加えてゆきたい。

『諸国百物語』巻一ノ十四「雪隠せっちんのばけ物の事」において、雪隠に行つた際に「うつくしき喝食かつじき」に笑われた主人公は、人のいるところへ「をどろきいそぎ立ちかへ」っている。

また巻二ノ四「仙台せんだいにて侍さむらいの死霊しれいの事」では、夜更けに棺からはい出した死人に襲われかけた僧侶二人は「おどろき台所へにげ」入っている。拙稿でも言及したが、これらの人物たちの行動は常人の反応であり、一種の「自己保存本能の閃き」でもあろう(2)。

しかしながら『諸国百物語』の主人公は、怪異から逃げるだけの者ばかりではない。豪胆である、ないしは己の武勇を頼むといった描写を有する者たちが、怪異が起こるといふ噂のある場にわざわざ出向く話が、前述の三十六話のうちに六話含まれている。巻一ノ一、巻一ノ七、巻二ノ二、巻三ノ一、巻三ノ七、巻四ノ十が、それに該当する。

本章段ではこのような、武勇や胆力を有し、またそれに自信を持つ人間たちが登場し、かつ彼らがわざわざ怪異の出来する場に出向き、それに挑もうとする話(3)を取り上げてゆく。

第一の例として『諸国百物語』巻四ノ十「浅間あさまの社やしろのばけ物の事」を挙げる。信濃の国の「心がうに力つよき」侍が、ある夜、浅間の社の化け物

の正体を見届けようと刀、脇差し、鎧通し、鉄の棒という出で立ちで、件の社に出かける。何者でも一打ちにしてやろうと拝殿に腰掛けていると、十七、八ほどの美女が三歳ほどの子とやって来る。女の指図で子が侍に近寄って来るのを棒で打つというのを五、六度繰り返すと、件の棒も曲がってしまふ。ついで子どもに斬りつけると、子どもはそのたびに数を増す。侍が切り殺そうと思いつつも、恐ろしく感じてみると、背後で大石を落としたような音がし、十丈ほどの鬼が侍に襲いかかろうとする。それを脇差で三度刺し、とどめをと思いつつ気を失ったところへ、家来たちがやって来る。見れば脇差しで塔の九輪を突き刺しており、化け物は消え失せていたというのが、そのあらすじである。

本編は『宿直草』（『御伽物語』）巻二ノ一「急きうなるときも思案しあんあるべき事」を典拠とする（4）。ここでそのあらすじについて、少しく言及する。

ある「青侍なまきやうじ」が道を歩いていたところ、人里離れたところで日が暮れてしまった。そこで林の中の古い宮で夜を明かすことを決めた侍であったが、丑の刻になると、十九、二十ほどの女が、幼児を抱いて忽然と現れる。侍が、相手の正体は化け物だろうと用心していると、女の指図で子どもが近寄ってくる。しかし侍が、刀に手をかけて睨み据えると、子どもは離れてゆく。こうしたことを数度経たのち、女が向かって来たので、侍がそれを切り捨てたところ、女は壁を伝って天井に上がった。やがて空が白んで来たので天井裏を見やると、そこには女郎蜘蛛の死骸があった。連れて来た子と見えたのは、古びた五輪であったという。

このように、「浅間の社のばけ物の事」と、典拠とされる「急きうなるときも思案あるべき事」には、化け物が、若い女と幼児の姿を取って現れる点。女の指図で子どもが侍に抱かれようと、近寄ってくる点。侍が子どもを威嚇する、ないしは打ち据えることでそれを撃退する点。怪異の正体の一部が石塔である点など、幾つかの共通項が見出されるのである。

しかしながら「浅間の社のばけ物の事」と「急きうなるときも思案あるべき事」を比較した際には、これらの類似点以上に、相違点の方が多く目につく構成を取っている様うかがわれる。以下にそれを挙げる。

第一の相違点は、主人公が化け物の出る場所で夜明かしをすることになった経緯である。

「急きうなるときも思案あるべき事」の主人公が化け物の出る宮で夜明かしをすることになったのは、その道中で日が暮れてしまったからである。「浅間の社のばけ物の事」の侍のような怪異の正体を見届ける為ではなく、また、件の侍がしている「二尺七寸の正よしむねの刀に、一尺九寸の吉よしみつのわき指さしをさしそへ九寸五分のよろひどをしをふところにさし、五六人ほどし

でもつくるがねの棒をつえにつき」といった、嚴重な身ごしらえの描写も見受けられない。

第二の相違点は、怪異に遭遇するまでの主人公の態度である。

「浅間の社のばけ物の事」の侍は、前述のように「心がうにちからつよき」人物であり、社に出立する際に「もしわがあとに一人にてもつききたらんものは、はらをきらすべし」と言つてのける程、己の武勇に対する自信を隠そうともしない。他方、「急なるときも思案あるべき事」の青侍には、己の武勇について自ら言及する描写はないのである。

第三の相違点は、化け物に相對した際の侍の態度である。以下に当該箇所を引用する。

母も、「今はそれがしもまいらん」と云ふ。何がしもかゝらばきりころさんとと思ひしかども、いづくともなくうしろさむく、身の毛もよだちておぼへけるが、(傍線は筆者による。以下同じ)

「浅間の社のばけ物の事」

件の女房、忽しやくもなく来るを、臆せずもぬきうちに、ちやうどきれば

「急なるときも思案あるべき事」

このように「浅間の社のばけ物の事」の侍は、当初こそ化け物に対して豪胆に對応しているものの、次第に恐怖心を覚えるようになってゆく。對する「急なるときも思案あるべき事」の侍には、怪異に對して恐怖を覚える描写はないのである。

こうしたことから「浅間の社のばけ物の事」において、侍が抱いた恐怖は、怪異の恐ろしさを際立たせる効果を上げると共に、当初は己の武勇に絶対的自信を持っていた侍のプライドを崩壊させ、いざ怪異に相對した際は怯んでしまう――すなわち彼は真の「心がう」なる人物ではないという否定的な側面を、侍に付与していると言えよう。

第四の相違点は、その結末である。以下に該当箇所を引用する。

(1) そのたけ十丈ばかりの鬼となり、何がしにとびかゝるを九寸五分にてつゞけざまに三刀さし、とつて引きよせとゞめをさすと思ひしが、

(2) そのまゝ心もうせはつるところへ、家來のものどもかけつけみれば、わき指をさか手にもち、塔の九りんをつきとをしてぞゐられける。

ばけ物はきへうせけるに、ぜひ一刀とおもわれしねんりきにて、(3) 九りんをつきとをされけると也。

「浅間の社のばけ物の事」

(4) 件の女房、多しやくもなく来るを、臆せずもぬきうち、ちやうどきれば、「あ」といひて、かべをつたひ天井へあがる。(中略) 天井を見るに、爪さき長事、(5) 二尺ばかりの上らう蛛、かしらよりせなかまで、きりつけられてししたり。(中略) またつれし子とみえしは、五りんのふりしなり。をよそ思ふに、(6) ばけ物とおもひ気をせきつとも、五りんをきらば、ばくやがつるぎもあるはをれ、あるは刃もこ

ぼれなん。(中略)(7) 此人も心せきて、身もはやらば、心のほかに越度もあるべし。思案して五りんをきらざるは、ああ、くはほう人かな。

「急なるときも思案あるべき事」傍線部(4)、(5) からうかがわれるように、「急なるときも思案あるべき事」の主人公は妖怪を退治しており、その正体を明らかにしてもいる。

他方、「浅間の社のばけ物の事」の侍は、傍線部(2) のように、化け物に切りつけつとも気を失っている。化け物は姿を消しており、典拠に見る、怪異の首領格の正体が「上らう蛛」であったという描写も削除されている為、化け物が真実、退治されたのか否かも不明のままである。

また傍線部(1) からは、鬼の姿を見て即座に攻撃を加えている様うかがわれる。典拠である「急なるときも思案あるべき事」の傍線部(6)、(7) のいましめを念頭に置くと、「思案」も何もなく鬼に切りつけ、その結果傍線部(3) のように、塔の九輪を突き刺している侍の行為は、思慮が浅いものであると考えられる。

さらには、「急なるときも思案あるべき事」の傍線部(6)、(7) に見る、『異地記』を引き合いに出し(5)、感嘆詞を用いた、些か大仰かつ衛学的とも言える末尾の言辞には、侍の沈着さ、豪胆さといった肯定的側面と共に、かえって怪異に起因する恐怖を減じさせる効果を感じてしまうが、「浅間の社のばけ物の事」には、このような物語筆者のコメントは見受けられないのである。

これらの事柄から、「浅間の社のばけ物の事」において、己の剛胆さを頼み、怪異に挑んだ主人公の位置づけは、典拠のそれに比し、浅薄な、否定的なものとなっている様。また、怪異のもたらす恐怖ならびに人間に対する優位性がいや増している様が、うかがわれる。

同様の事柄は『諸国百物語』巻二ノ二「相模の国小野寺村のばけ物の事」にもあてはまる。以下にそのあらすじを挙げる。——相模の国小野寺村

には、化け物の住む無人の家があった。その噂を耳にした旅人が、話の種にする為にと、件の家へ出向くものの、「年のころ四十あまりなる男かげろふのごとくやせおとろへ、色せう／＼としたる」有様の化け物が現れ、戸を蹴り放して家の中に入ってくる。旅人はこれを組み止めようとするものの、あべこべに胸を蹴られて気絶してしまう。夜が明けて人々がやって来、旅人に事の次第を聞くと、化け物が蹴放した筈の戸には、皆宵の通りにかげがねがかかっていた。その家に住む者はいよいよなくなつたという。

寛文三年（一六六三）に刊行された『曾呂利物語』巻四ノ十「怖ろしく

あいなき事」を典拠とする（6）本編は、「怖ろしくあいなき事」の物語展開を、ほぼ忠実に踏襲しているが、旅人が化け物の住まいに向かうくんだり、小さな改変が見受けられる。
以下にそれを引用する。

このたび人ぶへんものにて、「是れはめづらしきことこそあれ。そのばけ物のありさま見をきて都へ帰りてのはなしにせん」と云ふ。

「相模の國小野寺村のばけ物の事」

旅人は、「左様の事を見置きて故郷の物語にもなるべし。」とて、其の夜、

「彼の家に行かん。」と云へば、

「怖ろしくあいなき事」

旅人を「ぶへんもの」として設定し、その旅人が怪異のもたらす恐怖の前にあつては無力である様を描くことで、己の武勇を頼む者の位置づけを否定的なものにしようとする傾向。ならびに怪異のもたらす脅威を増大させようとする傾向が、ここでも見受けられるのである。

『諸国百物語』巻三ノ一「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」もまた、主人公の人物設定が典拠のそれに比し、否定的なものへと変貌を遂げている話である。

若い侍たちが集まり、化け物がでるといふ噂のある山の堂で、夜明かしをする者を募った。武勇の腕に慢心を抱いている若者が堂に出向き、辺りを警戒していると、夜更けに座頭がやって来た。若者は警戒心を緩めないが、座頭の語る平家物語の面白さに、つい心を許してしまう。やがて座頭は「松やにのいろしたる手まりのごとくなる物」を取り出す。興味をひかれた若者がそれを手に取ると、両手にとりつき、はなれなくなる。化け物に欺かれたと悔いていると、座頭は嘲笑し刀を奪って立ち去る。そこへ仲

間の侍たちがやって来たので、若者は一部始終を語る。侍たちは驚くが、刀をとられたことを笑い、若者の顔を一人一人がなで、かき消すように消える。若者が気を失うと、明け方になって本当の仲間たちがやって来る。若者はようよう昨夜の出来事を語り、その帰るさ、刀がそばの杉の木にかけてあったことを発見するというのが、この話のおおよそのあらすじである。

この「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」は『曾呂利物語』巻三ノ六「をんじやくの事」を出典としており（7）、物語の展開は二作品ともに、ほぼ同じである。

しかしながら「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」と「をんじやくの事」には、三つの大きな相違点が見受けられる。

第一の相違点は座頭との会話に見られる、「わか者」の人物設定である。以下に当該箇所を引用する。

・そのときかのわか者声をかけて、「なに物なれば夜ふけてこゝにきたるぞ。（1）われはようじんするものなればあたりへよりたらば、たゞ一うちにせん」とて、刀に手をかけゐたりければ、

・「われは上野あたりのものなるが、さるしさいありてこよい此どうに一夜をあかす也。（2）いかほど座頭にさまをかへ、われをたぶらかさんとするとまたやすくあざむかるゝものにてはなし。ちかふよりてけがするな」と、いよ／＼心をゆるす事なし。

「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」
・座頭一人、琵琶箱を負ひて杖をつき、堂の内に入り来る。（3）不思議に思ひ、いかさま唯者にてはあらじと、先づ、「何者なれば此処に来れるぞ。」と云ひければ、

・「云々の仔細有りて来りたり。（4）扱はよき連にて侍るものかな、向後
は我等が方へも来り候へ、そんじようそこ程にみ侍る。」

「をんじやくの事」
傍線部（1）、（2）のように「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」においては、若者は座頭に対してなかなか警戒をとかず、用心深い。同時に、己の判断力や武力に相当の自信を持っており、攻撃的で居丈高になっている様もうかがわれる。

一方、「をんじやくの事」の若者は、傍線部（3）、（4）からうかがわれるように、最初のうちこそ座頭を不審に思うものの、警戒心を解くのが早い。また、良い連れが出来たといって招じ入れるなど、座頭に対して比較的好意的であり、攻撃性や居丈高さもより少ない。

第二の相違点は物語の結末である。以下に当該箇所を引用する。

かのわか者あまりにぶへんにかうまんせしゆへに、天狗のなすわざにてありしと也。そのうちかのわか者も心うつけて気がいのやうになりしと、その所の人かたり侍る。

「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」

見る人毎に、化物の来りて吾を誑すとのみ人に云ひて、少時人の心地もなかりしが、遂には本性になりて斯く語り侍る。

「をんじやくの事」

傍線部に見るように、「をんじやくの事」では怪異に遭遇した若者は、しばらくは錯乱状態に陥っているが、やがて正気に戻っている。対する「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」の主人公は怪異に遭遇したことがきっかけで、正気を失ってしまったのである。

このように「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」においては、己の武勇に自信を持った若者の、怪異に対する居丈高で不遜な態度と、その受ける報いとが、より強調されている様子がうかがわれるのである。

第三の相違点は怪異の正体である。「をんじやくの事」において若者を**おびやかした妖怪は「長一丈もあるらんと覚しく、頭は焰立ち夥しき、口**

大きに裂け、角生ひて、怖ろしとも云はん方なし。」という鬼のような形態をとっている。他方、「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」に登場する妖怪は、座頭、仲間の侍らの姿をとるのみで、結末になつてはじめて、正体は天狗であったということが判明する。このように、鬼のような恐ろしいな妖怪から、天狗という明確な名称を冠せられた妖怪へと、怪異の正体は変貌しているのである。

さらには「かのわか者あまりにぶへんにかうまんせしゆへに、天狗のなすわざにてありしと也。」という、「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」の結末の一文は、若者の蒙った災難が、己の武勇に対する慢心に、天狗が与えた罰だという事を示唆している。

また拙稿でも述べたように、『諸国百物語』をはじめとする近世初期の奇談・怪談集においては「慢心を抱いた人間が天狗に罰せられるという構図」が比較的流布していた様が推測される（8）。

以上の事柄から、「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」では、典拠たる「をんじやくの事」に比し、怪異に挑んだ主人公の人物造形が、より否

定的なものになっているのみならず、怪異がこうした人間にもたらす返報を拡大することで、人間に対する怪異の優位性が強調されているという結論が、導き出されるのである。

ついで『諸国百物語』巻一ノ一「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」を取り上げる。するがの国の住人・儀本がある夜、魔所として名高い浅間の社に向く者を募ったところ、「ぶゆうのほまれある人」で「大かうの人」でもある家臣・板垣の三郎がこれに応じた。社に赴いた板垣はその帰るさ、一つ目の鬼に遭遇する。その場は事なきを得たものの、儀本に事の経緯を尋ねられた板垣が、何事も無かったと答えると、俄かに激しい雨となり、虚空からは板垣に懺悔を促す声が響く。板垣は社での怪異を儀本に語るが、雨風はいよいよ激しさを増したので、人々は板垣を長持ちにかくまった。夜明けに人々が件の長持ちを開けたところ、中には何もなかった。人々が奇異な思いを抱いていると、虚空からは二、三千人が一度にどっと笑う声をした。人々が走り出して見に行くと、縁の上には板垣の首が落とされ、妖怪たちの姿は見えなくなったというのが、本編たる「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」の、おおよそのあらずじである。

『曾呂利物語』巻一ノ一「板垣の三郎高名の事」を典拠とする「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」には(9)、その典拠と比した際に見受けられる幾つかの相違点が、先学によって指摘されている。本章段では以下にこれらの点を挙げ、考察を加えてゆきたい。

第一の相違点は、前述の太刀川氏が指摘しているように(10)、典拠である「板垣の三郎高名の事」に見る、板垣が「魔所」として名高い「千本の上の社」に向かう途中の「石だんを通りけるが、杉の木の上より小さきもの一つひらめきて足もとへ落ちけるが、あやしみこれを見るにへぎ一枚なり。かかる所に何とて有りけるぞと思ひながら踏みわりてこそ通りけれ。われたる音の山彦にこたへ 夥しく聞えけるを、不審に思ひながら別の事もなくて、」というくだり、板垣が城に戻ってから俄かに空が曇って激しい雨が降り、虚空より「さきに我等が腹を何とて踏みわりけるぞ」との声を聞くくだりが省かれている点である。

その為、「板垣の三郎高名の事」では虚空からの呼びかけが、「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」では「いかに板垣さんげせよ／

」に変わっている。

太刀川氏はこれらのくだりが省かれていることについて「これではなぜ板垣が懺悔しなければならぬのか明かでないばかりか、実際ここがこの話の核心であるだけに、その趣向が生かされないとすると説話としての興味も半減する。」と述べているが(11)、この説には些かの疑問を感じる。

「板垣の三郎高名の事」において、化け物が板垣を責め立てているのは、彼がへぎ板を踏み割った為であり、このことから板垣の無残な死は、へぎ板を踏み割ったことの報いということがうかがわれる。

対する「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」では、板垣が化け物たちの怒りを被った理由は、彼が社にて、「白きねりのひとへきぬをかづきたる女ぼう」に遭遇した際「扱さてはおとにきくへんげの物、我を心みんとおもふにや」と走りかかり「かづきのきぬを引きのけて見」という、その怪異を恐れぬ行為に起因するものなのか。あるいは件の「女ぼう」

の正体が鬼であると判明した際「なにものなればとて腰こしの刀かたなに手をか」けるといふ、怪異に対する挑戦的な態度に起因するものなのか。はたまた「きこゆるましやうのすむ所」に行くことと板垣がその意志を明らかにした時、怪異から板垣に罰が下ることは既に定まっていたのか、判然としない。

すなわち「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」は、板垣の無残な死のいわれを明確にしないことで、怪異が人間にもたらす影響の不条理さ、怪異に相対した人間の無力さが際立ち、作品に薄気味悪い余韻を賦与する効果をあげていると言えよう。

第二の相違点は結末である。以下に当該箇所を引用する。

こくうより二三千人の声として、一度にどつとわらひけるを、はしり出でてみければ板垣がくびをゑんの上へおとして、そのすがたはみへずなりにけるとなり。

「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」

又虚空より二三千人の声してどつと笑ふ。走り出でて見れば板垣が首を

縁上縁上に落してけり。かかる不思議も有ることにこそ。

「板垣の三郎高名の事」

太刀川氏は傍線部について「怪異の姿を明かにしていない『曾呂利物語』の場合に対して、『諸国百物語』では確かにその姿を認めただに叙べているのは体験談としての意味をもつ。」と、「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」の有する高いリアリティについて、指摘をしている(12)。

本稿ではこうした氏の指摘に対し、テキスト中に姿に関する描写はないながらも「そのすがたはみへずなりにける」——すなわち、登場人物には

見えて、読者には見ることが叶わなかった——怪異が、「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」に、よりいっそうの不気味さを付与し、読者の想像力をかき立てていること。

ならばに「かかる不思議も有ることにこそ。」という客観的な言辞の削除されている様が、登場人物目線で話を進める効果をさらに促進させていることを、付け加えておきたい。

ついで、巻一ノ七「蓮台野二つ塚ばけ物の事」の読解を進めてゆく。——都の蓮台野に二つの塚があり、一方の塚は夜になると燃え、もう一方の塚からは「こいや／＼」との声がしていた。ある雨風の激しい夜、若者たちが集まって、件の蓮台野の化け物の有様を見て来る者を募ったところ、「ちから人にすぐれて心がうなる」若者が、この申し出に応じて出かけた。若者が「こいや／＼」と呼ぶ塚に向かい、その正体を誰何して懺悔するよう言うのと、塚の内から「四十あまりなる、色あをざめたる女」が現れ、もう一つの塚に自分を連れて行って欲しいと頼む。若者は「おそろしくはおも」ったが女を背負い、件の塚に下ろしたところ、女はそのまま塚の内に入り、ややあつてすさまじい鬼神の姿になって出てきた。再び、もとの塚に自分を連れて戻れと言われた男は、この時は「気も魂もうせはて、死に入るばかり」の心地であったが、それでも鬼神を背負い、その言う通りにしてやった。鬼神は喜び、再び塚の内から女の姿となって現れ、若者の勇気を褒め、感謝の言葉を述べてから、ちいさな袋に「なにやらんおもき物」を入れて与える。男は「わにの口をのがれたるこゝちして」帰宅し、人々に事の次第を語った。件の袋の中身は黄金百両であった。その後、塚に異変は起こらなくなったという。

この「蓮台野二つ塚ばけ物の事」は、『曾呂利物語』巻三ノ三「蓮台野にて化物に逢ふ事」を典拠とする(13)。そして「蓮台野二つ塚ばけ物の事」の物語展開は、典拠である「蓮台野にて化物に逢ふ事」をほぼ忠実に踏襲しているが、結末に改変が見受けられるのである。以下に当該箇所を挙げる。

ちいさき袋になにやらんおもき物を入れてあたへける。かの男、わにの口をのがれたるこゝちしていそぎわが屋にかへりて、右の人々に、はじめをわりを物がたりして、件の袋をとり出だし見ければ、金子百両ありけると也。

「蓮台野二つ塚ばけ物の事」

ちいさき袋ちひ ふくろに何なにとは知らず、重き物おもものを入れて与へけるが、彼の男かの男おとこの口

を逃れたる心地してぞ、急ぎ家路に帰りける。前の友達に逢ひ、爾々を語りければ、各手がらの程を感じける。彼の袋に入れたる物は、如何なる物にかありけん知らまほし。

「蓮臺野にて化物に逢ふ事」
傍線部に見るように、「蓮臺野にて化物に逢ふ事」では、化け物が寄越した袋の中身については、謎のままに終わっている。しかしながら、対する「蓮臺野二つ塚ばけ物の事」では、主人公が得た袋の中身は黄金百両であったと、明記されているのである。

これらの事柄から、『諸国百物語』においては、ただ怪異の出現する場に出向き、それに挑むだけの間が蒙る害は、典拠のそれに比していや増しているが、怪異に力を貸した者の受ける善報は、典拠に比し、明確なものとなつていよう、一つの傾向がうかがわれると言えよう。
以上、本章段においては、豪胆、ないしは己の武勇を頼むという描写のある者たちが、怪異が起こるといふ噂のある場にわざわざ出向き、それに挑む話を取り上げてきた。

そしてこれらの作品群からは、
①己の武勇や豪胆さを頼むあまり、怪異の脅威を脅かそうとした者が、妖怪から被る被害が大きくなっている。
②怪異に挑んだ者の人物設定が、否定的なものとして位置づけられている。
③怪異に挑む者には「ぶへんもの」「心がうなるもの」といった、その武勇や胆力を強調する言辞が、付与されている。
④怪異に力を貸した者の受ける「善報」が明確化されている。
⑤怪異と人間との因果関係を曖昧にすることで、怪異のもたらす不条理さが描かれている。
という文芸的意匠が見受けられ、結果、怪異が人間にもたらす恐怖、ならびにその優位性がいや増すという効果をあげているのである。

二―二・怪異に巻き込まれた人間の運命

『諸国百物語』においては、自らの剛胆さや武有を頼み、怪異の起こる場所に出向いた人間の人物造形が否定的なものになっており、かつ、こうした人間の被る害が、典拠より拡大される傾向があることは、先に述べた。また『諸国百物語』には、怪異の出来る場にわざわざ出向いてこそいないものの、慢心故に天狗に罰せられる僧侶の姿を描いた、卷一ノ三「河内

の国 峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」。またその徳の為に亡霊に招かれた僧侶を描いた、巻一ノ十「下野の国にて修行者亡霊にあひし事」など、その性質故に怪異に遭遇する人間を扱った話。

あるいは、寝ている狐をわざわざ驚かした為にその返報に遭う山伏を描く、巻一ノ六「狐山伏にあだをなす事」。一度は契りを交わした女性を、醜貌故に疎んじ、遂には殺害にまで至った男がその報いを受ける様を描いた、

巻一ノ十三「越前の国永平寺の新発意が事」、巻二ノ一「遠江の国見付の宿御前の執心の事」。知らず女人結界の寺に立ち入った百姓が、女房を化け物

に殺害される様を描いた、巻二ノ十一「熊野にて百姓わが女ぼうを変化にとられし事」など、己のとった行動が原因で怪異に遭遇する人間の登場する話が、散見されるのである。

本章段ではそこで、典拠が判明している三十六話のうち、前述の章群の主人公たちとは対照的な、怪異の出来する場にわざわざ出向いたわけでもなく、怪異を呼び寄せるような個性を有しているわけでも、そうした言動をしたわけでもない、すなわち、怪異に巻き込まれる理由が明らかにされていない人間たちの登場する章群（巻一ノ四、巻一ノ十一、巻一ノ十六、巻二ノ四、巻二ノ六、巻二ノ七、巻三ノ九、巻三ノ十八、巻四ノ六、巻四ノ十五）に着目し、改変が顕著と見られる、このうちの数話を取り上げる。

そして、これらの因果関係の不明な怪異に巻き込まれた人間の登場する章群と、その典拠との比較を通じ、怪異と人間との関わりの変貌を分析することで『諸国百物語』における怪異の位置づけについて、さらなる考察を加えてゆきたい。

先ず『諸国百物語』巻二ノ七「ゑちごの国猫またの事」を取り上げる。

越後の国のさる富裕な人のもとへ、奉公を望む女が現れる。礼儀作法をよく心得た件の女を、主人夫婦は重用する。ある夜、北の方が女の部屋を覗くと、女は自分の首を外し、それを鏡台の前に置いて化粧をしていた。恐ろしくなった北の方が件の女に暇を取らせる由を告げると、女の気色が変わり、北の方にとびかかった。夫が女を切りつけると、その姿は猫またに変わった。家に長く飼っていた猫の姿が見えなくなったものが、猫またに変じたのだというのが、おおよそのあらすじである。

「ゑちごの国猫またの事」は『曾呂利物語』巻五ノ一「龍田姫の事」を
出典とする（14）。

そして「ゑちごの国猫またの事」は「龍田姫の事」のストーリー展開をほぼ忠実に踏襲しているのだが、結末を些か異にしている。以下に当該箇所を引用する。

云ふよりはやくとびかゝり、北のかたのどぶえにひしとくひつく所を、何がしきゝつけ、刀をぬきて切りつけゝれば、(中略)さしものうつくしき女のすがたたちまちへんじて、としへたるねこの口は耳のわきまでさけ、角をいたゞきたる猫またにて有りしと也。(中略)北のかたも其のち五六十日ほどもわづらひ給へると也。

「ゑちごの国猫またの事」

飛びかかりけるところを、男かねて心得けるにや、後に立ち添ひけるが、刀を抜きはたと切る、(中略)心の儘に切れば、年経たる猫の、口は耳まで切れて、角生ひたるにてぞおはしける、其の名を龍田姫と云ひ侍るとぞ。

「龍田姫の事」

典拠たる「龍田姫の事」の「其の名を龍田姫と云ひ侍るとぞ。」という、妖怪についての名称が「猫また」に変貌しているのみならず、傍線部の一条からは、妖怪に偶然遭遇しただけの「北のかた」の被害が拡大されている様うかがわれる。

また「北のかた」の「わづらひ」は妖怪に襲われた衝撃が原因であるとも考えられるが、無念のうちに斬り殺された妖怪の祟りに起因するものではないかという推測も可能であり、妖怪が退治された後も「北のかた」を悩ませたこの災いが、目には見えない薄気味の悪い余韻を、本編に賦与しているといえよう。

ついで『諸国百物語』巻一ノ四「松浦伊予が家にばけ物すむ事」を取り上げる。——会津若松に住む松浦伊予の家には種々の怪異が出来る。その化け物は長い髪をさばいた色白の、白いかたびらをまとう女の姿となり、およそ六日間にわたって伊予夫婦をおびやかす。加持祈祷も効果が無い。七日目の夜も夫婦の枕元にやって来、夫婦の頭をとって打ち当てる、夜具の裾から手を入れ、冷たい手で夫婦の足をなでる等の振る舞いに及ぶ。為に夫婦はともに「物ぐるはしく」なってしまうという。

「松浦伊予が家にばけ物すむ事」は『曾呂利物語』巻二ノ三「怨念深き者の魂迷ひありく事」を出典としている(15)。これら二編の物語展開は

ほぼ同じであるが、結末を異にする。以下に当該箇所を引用する。

七日めの夜は、伊予ふう婦いねたる枕もとに立ちより、ふう婦の頭をとりてうちあて、又すそよりつめたき手にて、ふう婦の足をなでけるをふう婦をどろき気をうしなひ、ふう婦ともに物ぐるはしくなりて死にけると也。いかなるゆへともわきまへがたし。

「松浦伊予が家にばけ物すむ事」

七日めの夜は女夫臥したる枕許に立ち寄り、頭どちをよせがまちにし、其の上夜の物を裾よりまくり、冷き手にて足を撫でければ、夫婦の者

は魂を消すのみならず、しばし物ぐるはしくなりけるとぞ。

「怨念深き者の魂迷ひありく事」

「怨念深き者の魂迷ひありく事」における「魂を消す」は「非常に驚き怖れる。肝を冷やす。」(16)の意で、夫婦は化け物のもたらす怪異のため恐怖を味わい、しばらくの間精神錯乱を起こしのだと解釈される。

対する「松浦伊予が家にばけ物すむ事」の夫婦は、恐怖のため精神錯乱を起こしたのみならず、ついには死んでいる。怪異に巻き込まれた人間の被害が、典拠に比して拡大されている様が、ここからもうかがわれるのである。

池田彌三郎氏は「怨念深き者の魂迷ひありく事」について「この話、題は「怨念深きものの魂」と言っているが、話の中には、この女が何もので、どうしてこの家に出没したかについては話されていない。」「別に夫婦の者に対する恨みを持った霊というのでもなさそうだ。」と、被害者である夫婦と化け物との因果関係が不明である由を述べている(17)。

そして「松浦伊予が家にばけ物すむ事」も、「怨念深き者の魂迷ひありく事」のこの設定を踏襲している。

さらに夫婦と化け物の因果関係が明記されていないことに加え、出典にはない結末の「いかなるゆへともわきまへがたし。」という表現が、たまたま化け物が出来る場所に住んでしまった為に、命まで奪われてしまった人間の無力さ、ならびに怪異のもたらす理不尽さ、恐ろしさを、より強調している様が、うかがわれるのである。

以上の二編を考慮に入れると『諸国百物語』においては、先の章段で取り上げたような、怪異に挑んだ人間だけではなく、怪異の出来る場所に赴いてもおらず、怪異を呼び込むような個性を有してもおらず、さらにはそのような言動をしてもいない人間たちの被害までもが、典拠に比して拡大される傾向にあると言えよう。

ついで『諸国百物語』巻一ノ十六「栗田源八ばけ物を切る事」を取り上げる。屋敷の後ろの野を散策していた栗田源八が「年のころ六十ばかりなる女かねくろく／＼とつけ、しらがなる髪を四方へみだ」すという異形の老婆に遭遇するものの、その場合は素知らぬ体にてやり過ぐす。しかしその夜、源八が縁に出て月を眺めていると、何となく物凄い気配がする。そこで障子をさして内に入った源八であるが、昼間見た異形の老婆の影が障子に映っているのを見る。驚いた源八は、障子を開けて内へ入ろうとする化け物を切り付け、化け物も少しく弱ると見えたが、源八自身も気を失ってしまふというのが、この話のおおよそのあらすじである。

「栗田源八ばけ物を切る事」のあらすじは、典拠である『曾呂利物語』巻二ノ四「足高蜘蛛の変化の事」(18)を、ほぼ忠実に踏襲している。

しかしながら、これら二編はその結末を異にする。以下に当該箇所を引用する。

をの／＼出であひ見ければ源八いきたへてゐける。をの／＼おどろき気つけをあたへければ、やう／＼気つきてはじめをわりをかたりけると也。

「栗田源八ばけ物を切る事」

各出であひ見るに、男死に入りてぞゐたりける。やう／＼気をつけられ、本の如くになりけり。ばけ物と覚しき物はなかりしが、大なる

蜘蛛の足ぞ切り散らしてぞ侍る。かかる物も星霜経ればばけ侍るものとぞ。
「足高蜘蛛の変化の事」

このように、「足高蜘蛛の変化の事」は、化け物の正体が判明しているのみならず、傍線部のような合理的解釈で締めくくられているのに対し、「栗田源八ばけ物を切る事」では合理的解釈が削除されており、怪異の正体も不明のままである。

こうした文芸的意匠は、「栗田源八ばけ物を切る事」における恐怖を増大させるのみならず、人間に対する怪異の優位性を高める効果を上げていると言えよう。

また『諸国百物語』巻三ノ九「道長の御前にて三人の術くらべの事」は——「第三章『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」にて詳細な読解を進める為ここでは主に梗概についての言及にとどめ置く——、瓜に宿った怪異を、陰陽師の安部清明らが退治する話である。

典拠の『本朝神社考』巻六「安部清明」(19)では、瓜の中に毒があ

ったのは、件の瓜が献上されたのが「術家」が道長に対し「家内ニ怪有ラン。」と予言していた期間だった為という設定がなされている。

しかし、「道長の御前にて三人の術くらべの事」ではこの設定が削除され、毒のある瓜が道長のもとに届いたいわれは、不明のままとなっているのである。

前述の「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」や「栗田源八ばけ物を切る事」に見る、怪異の正体やそれに通じる手がかりを不明瞭なものにすることで、怪異のもたらす不条理さ、薄気味悪さを強調しようとする手法が、ここからも見受けられよう。

このような、怪異の正体に対する合理的解釈の削除という傾向は『諸国百物語』巻一ノ十一「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」にも見受けられる。――出羽の国の杉山兵部の妻が、ある夜小用の為に外に出、戻ってきて眠っていたのだが、しばらくすると再び外から妻の声が出た。兵部が戸を開けて妻を内に入れたところ、二人の妻の姿は全く違わない。二人をあれこれ調べていたところ、ある者が「へんげの物は両手が丸いものだ」と言った。一人の妻の手が少しく丸かったので、これが「へんげの物」だと思った兵部は、その首をうち落としたのだが、「まことの妻」であった。残る一方を「へんげの物」と思った兵部は、妻が嘆き怨むのも聞かず、首をうち落とした。しかしこの妻も「まことの妻」であった。あまりに不思議なことなので、死骸を数日置いてみたのだが、色が変わることもなかったという。

『曾呂利物語』巻三ノ二「離魂と云ふ病ひの事」を典拠とする(20)本編もまた、典拠の物語展開をほぼそのまま踏襲しているのであるが、物語の末尾に改変が見られる。以下に当該箇所を引用する。

死骸を数日おきて見けれども、かわることもなかりしと也。かゝるふしぎも有ることにこそ。

「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」

扱死骸を数日置きて見たれども変る事なし、如何なる事とも弁へ兼ね
あたるが、或人の曰く、「離魂と云ふ病ひなり。」と。

「離魂と云ふ病ひの事」

典拠では明らかになっている、怪異の出来した原因が削除され、怪異の不可思議さを強調する描写を以て、それに替えている様子がうかがわれる。

怪異の不可解さを強調しようとするこうした傾向は、先に少しく言及した巻二ノ四「仙台にて侍の死霊の事」にもあてはまる。――奥州の仙台で、主君の命に背いた侍が、東岸寺という寺で切腹した。この侍の葬礼をしようと、遺骸を棺に入れ、周囲には十人ばかりの僧侶が控えていた。夜

がふけて僧侶たちは眠りについたが、下座の僧侶二人がまだ起きていたところ、死人が件の棺から這い出してきた。死人は灯火のもとへ行つて紙燭をこしらえ、上座の僧侶の鼻へ紙燭を入れ、これを舐めた。それから次々と、僧侶の鼻に紙燭を入れては舐めてゆき、とうとう件の下座の僧侶の隣まで来た。二人の僧侶は驚いて台所へ逃げ込み、人々に事の次第を語った。訝った人々が僧侶たちのところへ行つてみると、僧侶たちは眠ったまま死んでいたというのがおおよそのあらすじであり、典拠たる『曾呂利物語』

卷二ノ六「将棋倒しの事」(21)のそれを、ほぼ忠実に踏襲している。

しかしながら、「将棋倒しの事」においては、人々が棺を改めたところ、「別の事も」なく、僧侶たちを蘇生させようと色々と手を施したものの、ついに生き返らなかつたと話が結ばれているのに対し、「仙台にて侍の死霊の事」は、

棺ももとのごとくにして有りけれども死人はなし。ふしぎともなか／＼たぐひなき事也。

と、「将棋倒しの事」にはない不可思議な事象が新たに加えられ、その不思議さを強調する形で、話が結ばれているのである。

ついで『諸国百物語』卷四ノ六「丹波申楽へんげの物につかまれし事」の読解を進めてゆく。――丹波申楽が妻子弟子と共に二十人ばかりで都を目指していたが、その中途の山中で日が暮れてしまう。山中で夜明けかしたところ、女房が産をした。夜明けを待っていると、二十歳ばかりの女性を通りかかったので、猿楽はこれを呼び寄せ、少しく赤ん坊を抱いていてくれるよう頼んだ。女はこれを承諾したが、人々が眠っている間に子どもの頭を舐り始め、仕舞いには舐め尽くしてしまう。驚いた猿楽が弟子たちを起こしたところ、何者とも知れぬものが二十人ばかりの弟子をつかみ、虚空を指して上がった。その後、虚空からしわがれた声がし、残った猿楽もとるよう促すが、女は「りやうかはの脇指」をさしているのだからめないと言う。すると虚空からは、つかまれないなら助けよとの声がかかり、女も姿を消した。猿楽が夜明けを待っていると、昼間であったというのが、このあらすじである。

「丹波申楽へんげの物につかまれし事」は、その前半を『曾呂利物語』卷四ノ六「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」に、後半を卷三ノ一「い

かなる化生の物も名作の物には怖るゝ事」に、それぞれ拠っている(22)。

「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」――第三章『諸国百物語』

における仏教と僧侶の位置づけ」において詳述する為、ここでは梗概を記すにとどめて置く――は、殺人を犯して逃亡してきた武士が、山中の辻堂にて、侍女に姿を変えてきた化け物に、産をした女房を舐り殺され、その死骸は大木の上に、ずたずたに引き裂かれて掛け置かれてしまう。武士は自害しようとするが、麓の寺の長老に教訓され、出家したというのが、おおよそのあらすじである。

また、「いかなる化生の物も名作の物には怖るゝ事」は、都から田舎へ下る座頭が、夜半に辻堂で、女の姿に変化した妖怪に遭遇し、弟子を食い殺されてしまうものの、自身は持っていた脇差の威徳で助かるという話である。

神田朝美氏は、この「丹波申楽へんげの物につかまれし事」ならびに、典拠たる「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」に共通する要素ついて、「主人公」が「非農耕民である。」、その「旅の連れ」に関しては「身重の女性が旅の連れとなり、旅中の山中で出産する。」、そして彼らが遭遇する「若い女」については「山中での援助者で、身重の女性の介護や産まれた子どもの世話をする。この女は、産後の母子を食らう鬼、化物へと変化する。」と、主な登場人物を通じて、指摘を加えている(23)。

さらに神田氏は「モテイフをやや抽象的に解釈すれば、現世からアウトロ―として逃亡した男が異界(ここでは山中)へ迷い込むが、異人(鬼、化物)へイケニエ(妻子)を差し出すことにより、男は現世へ無事に帰還できる、という筋書きになるだろう。」とも述べている(24)。

「丹波申楽へんげの物につかまれし事」ならびに、「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」の特質と要旨を的確に捉えた指摘と思う。

本章段では、「丹波申楽へんげの物につかまれし事」の読解を進めるにあたり、神田氏のこれらの指摘に対して、二つの点を加えてゆきたい。

第一の点は、「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」と「いかなる化生の物も名作の物には怖るゝ事」とを組み合わせ、「丹波申楽へんげの物につかまれし事」という新たな話を構成する際に、「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」に見受けられた、神田氏が言うところの「唱導仏教系怪談の強い影響があったと見られる。」「仏教的な行為」(25)である、主人公の出家という結末が削除されている点である。

これは「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」に見る、「妖怪変化に遭遇して妻子の命をとられること」仏道に入る契機」という発想が無くなっていることを意味している。

それ故、「丹波申楽へんげの物につかまれし事」においては、典拠たる「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」に比し、その唱導色が希薄になっていると言える。

第二の点は、怪異によってもたらされた犠牲者についてである。「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」における怪異の犠牲者は、主人公の妻と子であり、「いかなる化生の物も名作の物には怖るゝ事」のそれは、座頭の

弟子一人である。

対する「丹波申楽へんげの物につかまれし事」の犠牲者は、「妻子弟子」二十人ばかりに、山中で生まれた赤子が加わっているのであるから、その規模は典拠たる二話に比して遙かに大きく、それだけに怪異の有する得体の知れない力、ならびに不条理さ、無慈悲さが際立つ展開となっていると言えるだろう。

以上、本章段においては、怪異に巻き込まれる理由が詳らかになっていない人間たちの登場する章群を取り上げ、典拠と比した際の考察を加えてきた。

結果、これらの章群からは、

- ① 不条理な怪異に巻き込まれた人間の被る害が拡大されている。
- ② 怪異現象に対する合理的・教訓的解釈が削除されている。
- ③ 怪異の不可思議さを強調しようとする。
- ④ 典拠に比し、その教化的色彩が薄れている。

といった意匠が見受けられる。

そしてこれらの意匠からは、前章段でも指摘したような、怪異が人にもたらず恐怖を、より強いものとして設定し、人間に対する怪異の優位性を描こうとする『諸国百物語』の側面のみならず、怪異を怪異として純粋に楽しむといった娯楽色が、うかがわれるのである。

二―三・変貌する怪異の正体

(一) 罪業から人外へ

前述した『諸国百物語』巻三ノ一「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」では怪異の正体が、典拠に見る鬼のような姿の妖怪から、天狗へと変貌を遂げていること。そして「かのわか者あまりにぶへんにかうまんせしゆへに、天狗のなすわざにてありしと也。」という作品末の一文、近世初期の奇談・怪談集において流布していたと見られる「慢心を抱いた人間が天狗に罰せられるという構図」があいまって、怪異に挑んだ人間の人物像を否定的なものにする効果をあげていることを述べてきた。

また、巻一ノ十一「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」、巻一ノ十六「栗田源八ばけ物を切る事」、巻四ノ十「浅間の社のばけ物の事」では、典拠に見る怪異の正体の描写が削除されており、それが怪異の不可思議さを強調する効果、あるいは怪異に挑んだ人間の人物像を否定的なものにする効果をあげていることは、先に述べた。

本章段ではそこで、これら四話のように、典拠と比較した際、テキスト本文から怪異の正体ならびに描写に変貌がうかがわれる話に着目する（巻一ノ三、巻一ノ十一、巻一ノ十六、巻二ノ三、巻二ノ六、巻二ノ七、巻二

ノ八、卷二ノ十一、卷三ノ一、卷三ノ七、卷四ノ六、卷四ノ十、卷五ノ四、卷五ノ十一)。そしてこれらの章群のうち、変貌が顕著であると考えられるものを取り上げ、怪異の正体の変化が作品にもたらす影響について、さらなる考察を加えてゆきたい。

初めに『諸国百物語』卷二ノ三「越前の国府中ろくろ首の事」を例に挙げる。越前から上方へ向かう旅人がある夜、野原の石塔の下から現れた女の首を目撃する。脇差を抜き放ちその首を追って行くと、首はある家の中に入った。件の家の中からは女房の声がし、野原を通りかかった際に男に追われる夢を見たという。旅人は家の中に入り、一部始終を夫婦に語る。己の罪業を恥じた女房は夫にいとまを乞い、京にのぼって尼になったというというのが、そのあらすじである。

本編は『曾呂利物語』卷一ノ二「女のまうねん迷ひありく事」を出典としており(26)、物語展開も典拠のそれをほぼ忠実に踏襲している。ただこの二作品は、結末を異にする。以下に当該箇所を引用する。

「(1) 扱々罪業のほど御はづかしく候ふ」とて、夫婦おどろき、そのちかの女は夫にいとまをこひ、京にのぼり髪をおろし、(中略)ぼだいをねがひて往生しけると也。「(2) ろくろ首と云ふものもある事にこそ」と、人のいひける也。

「越前の国府中ろくろ首の事」
「たゞ今おひ参らせ候は我等にて候。(3) 扱は人間にて渡らせ給ひ

けるか、(4) 罪業の程こそあさましけれ。」とて通り侍る。女も身の程をなげき、「此のありさまにては男に添ひさふらふことも心うし。」とて京へのぼり、(中略)ひとへに後世をぞ祈りける。まことにあり難きためしにぞ。

「女のまうねん迷ひありく事」
傍線部(1)、(4)からうかがわれるように、女がその身に「罪業」を有する存在だという設定は、二話ともに共通している。

しかしながら、「女のまうねん迷ひありく事」、「越前の国府中ろくろ首の事」という作品名やテキストに見られるように、各々の主題を異にする――前者は女人罪障思想に主眼を置き、後者は妖怪のもたらす怪異に着目している――点。

そして傍線部（3）に見るように、「女のまうねん迷ひありく事」では、女の正体があくまで「人間」として設定されているのに対し、「越前の国府中ろくろ首の事」では傍線部（2）のように、女が「ろくろ首」という妖怪として設定されている点。

以上の事柄からは、怪異の正体が「女のまうねん」から、「ろくろ首」という名称を有した妖怪へと変貌している様子がわかるのである。

怪異の正体が「女のまうねん」から、具体的な名称を冠せられた人外の存在へと変貌を遂げている作品は、他にも例が見受けられる。『諸国百物語』

卷二ノ八「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」がそれである。

鬼神の変化である女性が、僧侶の極楽往生を妨げようとするも失敗に終わるといふ物語展開は、本編も典拠とされる『曾呂利物語』卷一ノ三「女のまうねんは性をかへても忘れぬ事」（27）も同じである。

しかしながら、「女のまうねんは性をかへても忘れぬ事」は怪異の正体を「女のまうねん」として設定づけているのに対し、「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」には、女と「まうねん」を結びつける記述はない。

さらに「まことに第六天の魔王しゆしやうをさまたげて、げどうにいれんとすると仏のとき給ふもかくのごとくなるべし。」の記述に見るように、怪異の正体を「魔王」という、明確な名を有した人外の存在へと変化させている様子がわかるのである。

なお、前述の「女のまうねん迷ひありく事」、「女のまうねんは性をかへても忘れぬ事」は共に、「まうねん」を有した女性の、異形の姿を描いた作品である。

そして「女のまうねん迷ひありく事」においては「まうねん」を有した女が、その「罪業」をあさまいと評されているのである。

さらに中村博保氏は、「女のまうねんは性をかへても忘れぬ事」について「女性が鬼に変身するのではなくて、逆に鬼が女に変身していたというはなしをのせており、極端な形でこの変貌が女性に内在する悪業によるところの因果的な結果であるという仏教的な思想を示している。」ことを述べ、本編において女性が悪業を内在させたものとして設定されていることを指摘している（28）。

以上の事柄から、これら二話においては「女性に内在する悪業」ないしは「罪業」こそが「女のまうねん」であり、怪異の正体が女性に内在する罪深さであると設定されている様が、うかがわれるのである。

しかしながら、「越前の国府中ろくろ首の事」においては、女性が「罪

業」を有している存在であるという、「女のまうねん迷ひありく事」の設定こそ踏襲されているものの、「越前の国府中ろくろ首の事」、「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」では、怪異の正体が、典拠で設定されている「女性に内在する悪業による」ところの因果的な結果」から、「ろくろ首」、「魔王」という名称を冠せられた人外の存在へと変貌を遂げているのである。

そしてそれにもなつて、作品に見られる唱導的色彩は薄れており、そこに反比例する形で、怪異のもたらす不気味さが、より強調されていると言えよう。

以上、本章段においては「越前の国府中ろくろ首の事」、「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」を取り上げ、その典拠に比した際の考察を加えた。

結果、

①怪異の正体が、典拠に見るような、「女性に内在する悪業」ないしは「罪業」という抽象的な概念ではなくなっている。
 ②怪異の正体は「ろくろ首」「魔王」といった、具体的な名称を冠せられた妖怪、ないしは人外の存在へと変貌している。

という意匠が見出された。

そしてこれらの事柄からは、『諸国百物語』においては典拠に比し、仏教色が希薄となる反面、妖怪のもたらす不気味さや、怪異の恐ろしさが強調される傾向があるという結論が、導き出されたのである。

(二)． 怨念と神聖性

先の章段では主に、『諸国百物語』中、典拠と比して怪異の正体の変貌が顕著である作品として、巻二ノ三「越前の国府中ろくろ首の事」、巻二ノ八「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」を取り上げ、その読解を進めた。

結果、怪異の正体の変貌が、作品の唱導的色彩を希薄なものとする効果をあげていること、ならびに怪異のもたらす恐怖の度合いを増幅させていることが、明らかにになった。

本章段ではさらに、典拠と比した際、怪異の正体に変貌が見られる話を取り上げ、その変化がもたらす効果について、考察を深めてゆきたい。

本章段では初めに、『諸国百物語』巻五ノ十一「芝田主馬が女しばたしゆめばによう嫉妬しつとの事」の読解を進めてゆく。

丹波の宮津に住む芝田主馬の妻は嫉妬深く、腰元のもみじと夫との間を疑っていた。夫が留守の間、妻はもみじを井戸に放り込み、その跡を埋めた。帰宅した主馬は井戸の事、もみじの事を尋ねるが、井戸は急につぶれ

たので掘りかえ、もみじには暇をとらせたという妻の言い分に不審を残しつつも、そのままにしておく。その後、主馬の子ども三人は急病にかかり、皆死んでしまう。妻は子どもを一人産むが、その子どもは三歳になる頃病気にかかり、手当をしても効果が無い。主馬の知人の浪人が針立ての名人を紹介し、子どもの病はやや快方に向かう。その夜、主馬の屋敷に「こしより下はちしほにそま」った、異形の女がやって来る。浪人がその素性を問うと、自分がかつてこの屋敷に奉公していた女で、本妻の無実の嫉妬のため殺された。恨みを晴らすため、三人の子を殺し、今一人もとり殺す。針立てなど無駄であることを言い、姿を消す。ちょうどその時、件の子が死んだ。浪人が主馬に事情を話したところ、主馬は驚いて妻に暇を出し、自分は出家した。――「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」のあらずじは、このようなものである。

本編は『曾呂利物語』巻一ノ六「人をうしなひて身にむくふ事」を出典としている(29)。これら二話の物語上の展開はほぼ同じであるが、その設定ならびに物語展開において、いくつかの相違点が見受けられる。以下にそれを挙げる。

第一に、「人をうしなひて身にむくふ事」では、夫は「召使ひける女を忍びて棲を重ねけり。」と、実際に妻以外の女と関係を持っている。すなわち召使いの女は、妻にとって己から夫の情愛を奪った篡奪者なのである。

他方、「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」では、「内儀むじつの嫉妬」というもみじの亡霊の言葉からもうかがわれるように、夫は妻以外の女性と関係を持つてはいない。妻が殺したのは、実は夫の愛妾ではなかったのである。それが為、本妻の嫉妬の理不尽さ、振る舞いの悪辣さが、より強調されている様が見受けられると言えよう。

第二の相違点は、亡霊の報復の及ぶ度合いである。

「人をうしなひて身にむくふ事」では、亡霊によって殺される子どもは一人であるのだが、「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」では四人になっている。

そして事の元凶である本妻だが、「人をうしなひて身にむくふ事」においては、嫉妬のため召使いの女を死においやった北の方は、可愛がっていたただ一人の子の死、さらには「一門眷属次第々々に取りて、北の方に思ひ知らせん。」という亡霊の言葉通りに、一門の滅亡に直面し、重病に陥っている。

他方、「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」では、根拠のない嫉妬のためにもみじを殺した本妻は、崇りにより四人の子の命を奪われ、主馬からは離縁

されている。自業自得ではあるが、どちらもそれ相応の報いを受けている様うかがわれる。

しかしながら、「人をうしなひて身にむくふ事」では、召使いに手をつけていた夫には、亡霊の祟りは直接の影響を及ぼしていない。

対する「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」では、実際には腰元と関係を持つていなかった夫が、妻を離縁した後に出家するという形で幕を閉じている。亡霊の報復は、直接の加害者である本妻に及ぶのみならず、無関係である筈の夫の俗世での生活をも、絶ち切っているのである。

このように「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」は、典拠たる「人をうしなひて身にむくふ事」に比して、加害者である人間の理不尽さ、悪辣さがより強調されていること、さらには亡霊の復讐の及ぶ範囲が変貌していることが、うかがわれるのである。

第三の相違点は、亡霊の姿である。当該箇所を以下に引用する。

こしより下はちしほにそまり、たけなるかみはさかさまにはへ、いろあを／＼とやせおとろへて、

「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」

女はたけ一丈もあるらんと思しくて、そらざまに生ひたち、髪は白が

ねの針をならべたる如く、角さへおひて、朱まなこ牙を噛みたる有様、

「人をうしなひて身にむくふ事」

このように傍線部からは、「人をうしなひて身にむくふ事」の亡霊が、鬼のような形態をとっている様うかがわれる。

他方、「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」の亡霊は角も牙も有してはいないが、「こしより下はちしほにそまり」という特徴を備えているのである。

貞享三年（一六八六）に刊行された『百物語評判』の巻二ノ五「うぶめの事附幽霊の事」には、次のようなくだりがある。

世に語り伝ふるうぶめと申す物こそ心得候はね。其の物語に云へるは、
産の上にて身罷りたりし女、其の執心此の者となれり、其の形腰より

下は血に染みて、其の声をばれう／＼と泣くと申し慣はせり。

傍線部に見るように、『百物語評判』において産女は、下半身が血に染まった姿をとるものとして書かれている。

西田耕三氏は『百物語評判』は要領よく当時の産女理解をまとめている。「近世の随筆類はほとんどこれらの説の一部をとりあげて産女を説明している。」とこのくだりを評している（30）。

また西田氏は、鶴屋南北の『東海道四谷怪談』に、お岩が「うぶめのこ

しらへにて、腰より下は血になりしていにて、子を抱へてあらはれ」る場面があることを指摘しているのである（31）。

さらには寛永頃の成立とらしい『奇異雑談集』（写本）の、下巻ノ四「姑獲の事」にも「そのかたち、腰より、しもハ、血にひたつて」という、産女の外見に関するくだりがある。

以上の事柄からは、産女とは腰から下は血に染まった妖怪であるとの認識が、近世期に流布していたことがわかれるのである。

「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」におけるもみじの亡霊は、産褥で死んだ産女として設定されてはいないのだが「こしより下は血しほにそまり」という姿には、近世期の産女像に通底するものがあるといえよう。

また、産女ではないが「こしよりしもはちしをにそま」った亡霊が登場するさらなる事例は『諸国百物語』にも見出される。巻三ノ五「安部宗兵衛

が妻の怨霊の事」（典拠未詳）がそれである。本編については「第四章 「後妻うち」の系譜」にて、より詳細な読解を試みる為、ここにはその概略ならびに変貌した異形の有様のみを記すが、宗兵衛に邪険にされ、食べ物も薬も与えられず、悔しさのあまり死に至った妻は、その死後、

こしよりしもはちしをにそまり、たけなるかみをさばき、かほはろくしやうのごとく、かねくろくつけ、すゞのごとくなるまなこを見ひら

き、口は鰐のごとくにて、

という姿に変貌し、遂には宗兵衛を引き裂き殺してしまふ。

前述の西田氏もまた、「安部宗兵衛が妻の怨霊の事」、「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」二話を「産女の特徴の一つである、腰より下は血に染みて」という要素が転用されている話と評している（32）。

しかしながら、「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」のもみじも、「安部宗兵衛が妻の怨霊の事」の宗兵衛の妻も、その死に産産は関連していない。

様相こそ産女に似ているものの、彼女たちは『百物語評判』に定義されているような、産産に起因する執心の為に立ち現れる「産女」ではないのである。

「内儀むじつの嫉妬にて、われを井のもとにうづめころされたり。此うらみをはらさんため、はや三人の子をとりころしたり。今一人もとりころす也。」と浪人に告げるもみじの亡霊。

長年の恨みを「いつの世にかはわすれ申さん。やがておもひしり給へ」と臨終の際に夫に告げ、死後夫を惨殺した宗兵衛の妻（33）。

彼女たちのこうした台詞からは、己が受けた処遇への恨み、強い復讐の

念がうかがわれる。

また西田氏は、『東海道四谷怪談』のお岩を「頼む夫に裏切られ、隣人に血の道の薬といつて毒薬を飲まされ、醜貌をきらわれ、惨殺され、戸板にくくりつけられて川に捨てられたお岩は、何一つ納得していない。納得する理由がない。その残酷さが、お岩の死霊の残虐を呼びおこす。それは産女の杵をこえ（事実お岩の産女姿は一瞬だけである）、すでに怨霊一般といつてよい。」と評し、お岩は真実の産女ではなく、その産女の姿はお岩の死霊の残虐さを示す一つの様態である由を指摘している（34）。

そして、己が受けた仕打ちへの怨念を抱き、それに起因する残酷な復讐を決意した、もみじ、宗兵衛の妻たちの有様は、自分のおかれた状況を「何一つ納得して」おらず、それが為に「死霊の残虐」を呼びおこされたお岩の姿に、通底するものがあると言えよう。

以上のことを考慮すると、「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」、「安部宗兵衛が妻の怨霊の事」で惨死を遂げた女性たちが、「産女」たりうる要素を有していないにも関わらず、産女に似た形態をとっているのは、鬼や産女といった特定の妖怪の杵を超越する程に壮絶で残酷な、彼女たちの怨念を描く為であるという結論が、導き出されるのである。

典拠たる「人をうしなひて身にむくふ事」にとは異なり、腰元を夫の愛妾として位置づけないことで、加害者の嫉妬の理不尽さ、残酷さが強調されていること。亡霊の復讐の及ぶ範囲が変貌していること。加えて、「産女」となる要因を持ち得ていない亡霊に産女の姿を取らせることで、特定の妖怪の域を超えた、その怨念の壮絶さを強調していること。——前記してきた事柄から見出される「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」の文芸的意匠は、このようなものであると言えよう。

ついで『諸国百物語』巻五ノ四「播州姫路の城ばけ物の事」を取り上げ

る。——播磨の国・姫路城の主である「秀勝」が、ある夜家臣たちを集め、この城の天守に夜な夜な灯をともし者がいるが、誰かそれを見て来る者はないかと言った。引き受ける者が誰もいない中、十八になる侍が、その命に応じた。秀勝は件の侍に提灯を渡し、天守の怪火を之に灯してくるようと言う。侍が天守に上ったところ、年の頃十七八程で、十二単を着た「女らう」が居り、用件を問う。侍が事情を話すと、主命ならば許す由を告げ、提灯に火を灯してくれた。嬉しく思った侍であるが、その帰るさ、提灯の灯が消えてしまう。侍は天守に戻り、消えないように灯して欲しい由を言ったところ、「女らう」は蠟燭を変えてくれ、しるしにせよと言つて櫛をくれた。侍が秀勝のもとに戻り、提灯の火と櫛を差し出すと、件の櫛は具足櫃に入れてあったものだと言明した。それから秀勝は一人で天守へと向かったのだが、ややあって常の座頭が来た。秀勝が用件を問うと、無聊を慰

めに来たのだが、琴の爪ばこの蓋がとれないと言う。秀勝が開けてやろうと、爪ばこをとると、手足が取りついて離れなくなった。すると件の座頭は一丈ほどの「鬼神」となり、己が城の主であること、己を尊ばなければ今引き裂き殺すことを告げた。秀勝が「さまぐ、かうさん」したところ、爪ばこも離れ、夜も明けた。そして秀勝は天守ではなく、常の御座の間にいたという(35)。

「播州姫路の城ばけ物の事」は、その後半部を前述の『曾呂利物語』巻三ノ六「をんじやくの事」に拠る(36)。

これら二作品からは、当初は座頭と想っていた者が、実は鬼の如き形態をとる妖怪であった点。座頭の持つ小物(「播州姫路の城ばけ物の事」では「爪ばこ」、「をんじやくの事」では「をんじやく」)に触れた人間が、それに手をとられ、身動きもままならなくなる点といった、幾つかの類似要素が見受けられる。

しかしながら、「播州姫路の城ばけ物の事」と巻三ノ六「をんじやくの事」を詳細に比した際には、これらの類似点以上に、相違点の方が多く目につく構成を取っている様子がわかれるのである。以下にそれを挙げる。第一の相違点は、妖怪に遭遇した人間の態度である。

先に述べたように、「をんじやくの事」における、妖怪の化身である座頭に遭遇した侍は「不思議に思ひ、いかさま唯者にてはあらじ」と、初めのうちこそ警戒心を解かない。

しかし最終的には「扱はよき連にて侍るものかな、向後は我等が方へも来り候へ、そんじようそ程にゐ侍る。」といった言葉を座頭にかける程に打ち解けており、「播州姫路の城ばけ物の事」と典拠を同じくする、「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」の侍に比しても、座頭に対する攻撃性や居丈高さの度合いは、より少ないのである。

対する「播州姫路の城ばけ物の事」の秀勝は、城主という立場もあいま

つてか、

「何とてきたるぞ」とい給へば、「御さびしく候はんとぞんじまいり

候ふが、琴の爪ばこのふたとれ申さず候ふ」と申し上る。秀勝きゝ給

ひ、「これよよせ、あけてとらせん」

と、終始傲慢な態度で座頭に接している。その傲慢さの度合いは、彼の家臣の侍が「女らう」と相対した際、「われは主人のおほせにて是まできたり候ふ。その火をこれへとぼして給はり候へ」「とてもものにきへ申さぬやうにとぼして給はれ」という丁寧な物腰に比すれば、一目瞭然であろう。

第二の相違点は、妖怪がその正体を現した時の態度である。

「をんじやくの事」の侍は、鬼の形態をした妖怪に「色々になぶり威」

された後、「無念比むねんたぐひもなくて」と悔しさを嘯みしめている。そこへ友人たち

に化けた妖怪が現れ、侍が事の次第を語ると再び「化物ばけものの形かたち」をとったが為、侍は気絶してしまふのである。

それに対し、「播州姫路の城ばけ物の事」の秀勝であるが、爪ばこが手にとりつき、離れなくなつた際に「くちをしや、たばかられる」と悔しさを表明する点までは、「をんじやくの事」の侍の行動に類似するものがあると言えよう。

しかしながら秀勝は、座頭が鬼神の正体を現し「われをおろそかにして、たつとまずんばたゞ今ひきさきころさん」と、己を威嚇してきた際に、夜が明けるまで「さまぐ／かうさん」という醜態を晒している。

この描写は、先刻の秀勝の居丈高さ、この世の者ならぬ「女らう」への丁重な物腰を崩さなかつた臣下の英邁さと、それに起因する「櫛」という善報。そして城主という秀勝の立場とあいまって、秀勝の威厳が低下するとの甚だしきを読者に印象づけると共に、座頭の風貌のみに気をとられて「しろの主」の鬼神――すなわち相手は異界の存在である――という正体を見抜けなかつた彼の愚かさ、ならびに怪異の有する不可思議かつ驚異的な力を、より引き立てる効果を上げていると考えられるのである。

ちなみに「をんじやくの事」の侍も、妖怪に騙されて歯嘯みをする羽目になる、再度騙されて気絶をする羽目になると、あまり褒められた行動をとつてはいないが、その居丈高さならびに攻撃性の低さ、さらには怪異の脅迫に対する謝罪の描写がないこと、城主という要職に就いていないこともあいまって、威厳を損ねている度合いは、秀勝よりも少ないと言えよう。

第三の相違点は、怪異の正体である。

前述のように、「をんじやくの事」の妖怪は「長一丈もあるらんと覺しく、頭は焰立ち夥しき、口大きに裂け、角生ひて、怖ろしとも云はん方なし。」という、鬼のような形態の描写があるのみで、そこに具体的な妖怪の名は冠せられていない。

一方、「播州姫路の城ばけ物の事」に出現する妖怪には「鬼神」「しろの主」といった具体的な名称、ならびにその正体が明記されている。そしてこれらの言葉からは、「播州姫路の城ばけ物の事」に出現する怪異が、単なる妖怪ではなく、一種の神聖性を備えた存在であることを意味していると言えるだろう（37）。

以上の事柄からは、「播州姫路の城ばけ物の事」においては、怪異に対して居丈高な態度を取った者の晒す醜態をより強調すること、それに反し、怪異に敬意を以て接した者には善報がくだるという物語展開にすること。怪異の正体に「神」としての要素を付与すること、それに対する畏怖の念を強調するという文芸的意匠が、見受けられるのである。

以上、本章段においては、典拠と比した際、怪異の正体に変貌が見られ

る作品をとりあげ、それらに考察を加えてきた。

その結果、これらの章群には、

①怪異の正体を変貌させることで、その怨念や神聖性といった特定の要素を強調している。

②怪異を引き起こす原因となった者、ないしは怪異に相対した者の人物造形をより否定的なものにしている。

といった文芸的意匠が見出され、これらの事柄からは、既存の怪異小説の手法、及び妖怪の姿を用いつつ、それに新たな要素を加えることで、怪異がもたらす恐怖を強調してゆくという『諸国百物語』の側面がうかがわれるのである。

二―四・まとめ

このように、第二章においては、『諸国百物語』中、出典が判明している三十六話のうち、改変が顕著であるもの、あるいはその改変が特定の傾向を有しているものを取り上げ、人物設定や物語展開を中心に、典拠と本編の比較とを行い、かつ、典拠に加えられた改変を分析することで、『諸国百物語』における、怪異と人との関わりについて、考察を加えてきた。

以上、『諸国百物語』における怪異と人間との関わり方は、

(A) 豪胆な者や己の武勇を頼む者たちが、怪異が起ころという噂のある場におざわざ出向き、それに挑む。

(B) 理由は不明であるが、人間が一方的に怪異に巻き込まれてしまう。という二パターンに大別されることが明らかとなった。

そして(A)のパターンにおいては、

①己の武勇や豪胆さを頼むあまり、怪異の脅威を脅かそうとした者が、妖怪から被る被害が大きくなっている。

②怪異に挑んだ者の人物設定が、否定的なものとして位置づけられている。

③怪異に挑む者には「ぶへんもの」「心がうなるもの」といった、その武勇や胆力を強調する言辞が、付与されている。

④怪異に力を貸した者の受ける「善報」が明確化されている。

⑤怪異と人間との因果関係を曖昧にすることで、怪異のもたらす不条理さが描かれている。

という文芸的意匠が見受けられ、結果、怪異が人間にもたらす恐怖、ならびにその優位性がいや増すという効果をあげていること。

そして(B)のパターンにおいては、

①不条理な怪異に巻き込まれた人間の被る害が拡大されている。

②怪異現象に対する合理的・教訓的解釈が削除されている。

③怪異の不可思議さを強調しようとしている。

④典拠に比し、その教化的色彩が薄れている。

といった意匠が見受けられ、これらの事柄からは、怪異が人にもたらす恐怖を、より強いものとして設定し、人間に対する怪異の優位性を描こうとする『諸国百物語』の側面のみならず、怪異を怪異として純粋に楽しむといった娯楽色が、うかがわれることが判明したのである。

また、典拠と比した際に怪異の正体の変貌が顕著である作品群からは、①怪異の正体が、典拠に見るような、「女性に内在する悪業」ないしは「罪業」という抽象的な概念ではなくなっている。

②怪異の正体は「ろくろ首」「魔王」といった、具体的な名称を冠せられた妖怪、ないしは人外の存在へと変貌を遂げている。

③怪異の正体を変貌させることで、その怨念や神聖性といった特定の要素を強調している。

④怪異を引き起こす原因となった者、ないしは怪異に相対した者の人物造形をより否定的なものにしている。

という意匠が見出されるのである。

そしてこれらの事柄からは、『諸国百物語』においては典拠に比し、仏教色が希薄となる反面、妖怪のもたらす不気味さや、怪異の恐ろしさが強調される傾向があるということ。既存の怪異小説の手法、及び妖怪の姿を用いつつ、それに新たな要素を加えることで、怪異がもたらす恐怖を強調してゆくという『諸国百物語』の創造的側面がうかがわれるということが、明らかとなったのである。

註

(1)『諸国百物語』の典拠探索は、太刀川清氏による「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)(初出:『諸国百物語』成立の背景(『長野県短大紀要』第二十八号、一九七三・十二)に始まる。加えて現在では、堤邦彦氏「近世説話の一視覚——唱導から文芸への軌跡——」(内田保廣氏他編『近世文学の研究と資料——虚構の空間——』、三弥井書店、一九八八・十二)、高田衛氏他編『叢書江戸文庫2 百物語怪談集成』(図書刊行会、一九八七・七)における太刀川氏の「解題」及び、小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考——曾呂利物語」から『諸国百物語』(『大妻女子大学大学院文学研究科論集』第二号、一九九二・三)、江本裕氏の「延宝期の仮名草子『諸国百物語』序説」(高田衛氏他編『西鶴と浮世草子研究 特集・怪異』第二号、笠間書院、二〇〇七・十一)などの研究により、『諸国百物語』はうち二十六話を『曾呂利物語』に、各三話を『宿直草』(『御伽物語』)、『沙石集』に、二話を平仮名本『因果物語』に、各一話を片仮名本『因果物語』、『剪燈新話』、『本朝神社考』に依っていることが明らかになった。また堤邦彦氏は「幽霊女房譚の変容」(『昔話——研究と資料』第二十二号、一九九四・六)において、幽霊の子育てを主題とする話を集め、その一例として『諸国百物

語』卷五ノ一「釈迦牟尼仏と云ふ名字のゆらいの事」を取り上げてい
る。さらに神田朝美氏は「山中で妻子を食われる話より」(『世間話研
究』第十二号、二〇〇二・十)において、山中に逃亡した一家が妻子
を妖怪に食い殺される話を収集し「同じ伝承を扱ったと見られる」怪
異小説の一例として『諸国百物語』巻四ノ六「丹波申楽へんげの物に
つかまれし事」を取り上げている。

(2) 拙稿『伽婢子』の方法——異界に翻弄される人間——(『近世文
芸 研究と評論』第六十七号、二〇〇四・十一)において、『伽婢子』
巻三ノ二「鬼谷に落て鬼となる」、巻三ノ三「牡丹灯籠」の主人公らを
引き合いに出し、「夜中に怪しいものに追いかけられたり、亡霊に魅入
られているという事態が判明したなら、逃げ出したい、その場から隠
れたいと思うのが人間として当然の心理であり、自己保存本能の閃き」
であることを述べた。

(3) なお、巻三ノ七「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」は典拠か
らの改変が顕著である作品と考えられるが、本編については「後妻う
ち」「斬首」という観点から、「第四章 「後妻うち」の系譜」ならび
に「第六章 「斬首」の系譜」において考察を加えることを意図して
いるので、ここでの言及は省略した。

(4) 註(1)前掲の小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物語』
から『諸国百物語』へ」による。しかしながら富士昭雄氏は『宿直草』
『御伽物語』の諸本(『駒沢国文』第十八号、一九八一・三)におい
て、延宝五年刊行の大洲市立図書館蔵矢野玄道文庫本は内題、柱が「宿
直草」となっているが、延宝六年刊行の京都大学本では内題、柱とも
に「御伽物語」に変えられ、玄道文庫本に比し、巻二と巻四が入れ替
わっていることを指摘している。小沢氏はその論中で、初版本である
矢野玄道文庫本をテキストとして用いているので、本稿もこれになら
い、底本として矢野玄道文庫本を用いている、谷脇理史氏他校注『新
編日本古典文学全集 64 仮名草子集』(小学館、一九九九・九)をテ
キストとして用いた。

(5) 註(4)前掲 谷脇理史氏他校注『新編日本古典文学全集 64 仮名
草子集』頭注。なお、『呉地記』は唐代の陸廣微による。

(6) 註(1)前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百
物語』と『諸国百物語』

(7) 註(1)前掲 太刀川清氏「解題」

(8) 拙稿『狗張子』論——巻六ノ五「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」を
中心に——(『近世文芸 研究と評論』第七十三号、二〇〇七・十一)

において、『諸国百物語』中、高慢な人間が天狗に罰せられる話として、

卷一ノ三「河内の国 關峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」、卷三ノ十五

「備前の国うき田の後家まん気の事」を例に挙げた。また拙稿『狗張

子』論——卷六ノ三「板垣信形逢二天狗」を中心に」（『早稲田大学大

学院教育学研究科紀要』別冊十五号一、二〇〇七・九）においては、
慢心した心がけゆえに天狗に懲らしめられる人間の話として『醒睡笑』

卷一ノ四「ト都天狗に懲らさる」、『新御伽婢子』卷四ノ三「金峰崇」、

『曾呂利物語』卷二ノ七「天狗の鼻つまみの事」、平仮名本『因果物語』

卷三ノ九「学匠高慢して、天狗につかれし事」を例に挙げた。なお、

本稿においては「第七章 「天狗」譚の系譜——『諸国百物語』と『狗
張子』——」にて、近世期の天狗像にさらなる考察を加えてゆく。

(9) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百
物語』と『諸国百物語』

(10) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節
『百物語』と『諸国百物語』

(11) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節
『百物語』と『諸国百物語』

(12) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節
『百物語』と『諸国百物語』

(13) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節
『百物語』と『諸国百物語』

(14) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節
『百物語』と『諸国百物語』

(15) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節
『百物語』と『諸国百物語』

(16) 『日本国語大辞典 第八卷』第二版（日本国語大辞典第二版編集委
員会・小学館国語辞典編集部編、小学館、二〇〇一・八）

(17) 池田彌三郎氏「場所に出る妖怪」『日本の幽霊』（中央公論新社、
一九七四・八）

(18) 註(1) 前掲 太刀川清氏「解題」

(19) 註(1) 前掲 江本裕氏「延宝期の仮名草子『諸国百物語』序説」

(20) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節
『百物語』と『諸国百物語』

(21) 註(1) 前掲 太刀川清氏「解題」

(22) 註(1) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物

- 語』から『諸国百物語』へ」
- (23) 註(1) 前掲 神田朝美氏「山中で妻子を食われる話より」
- (24) 註(1) 前掲 神田朝美氏「山中で妻子を食われる話より」
- (25) 註(1) 前掲 神田朝美氏「山中で妻子を食われる話より」
- (26) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』
- (27) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』
- (28) 中村博保氏「三 「吉備津の釜」の構想」(『上田秋成の研究』、ペリカン社、一九九九・四)「初出…「吉備津の釜の構想」(『近世文芸』第七号、一九六二・三)」
- (29) 註(1) 前掲 太刀川清氏「解題」
- (30) 西田耕三氏「産女ノート——文芸がとらえた産女とその周辺——」(小松和彦氏編『怪異の民俗学⑥幽霊』、河出書房新社、二〇〇一・二二)「初出…「産女ノート——文芸がとらえた産女とその周辺——」(『熊本大学教養部紀要 人文・社会科学編』第十五号、一九八〇・二二)」
- (31) 註(30) 前掲 西田耕三氏「産女ノート——文芸がとらえた産女とその周辺——」
- (32) 西田耕三氏「産女ノート(続)」(『熊本大学教養部紀要 人文・社会科学編』第二十四号、一九八九・一)
- (33) 高田衛氏は高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「〈鼎談〉江戸の怪異譚と西鶴」(高田衛氏他編『西鶴と浮世草子研究 特集・怪異』第二号、笠間書院、二〇〇七・十一)において、妻が宗兵衛に対して「復讐の予言」をしていることを「珍しい」「古い形にはない」と評している。妻の怨念の壮絶さが強調されている様子がうかがわれる。
- (34) 註(30) 前掲 西田耕三氏「産女ノート——文芸がとらえた産女とその周辺——」
- (35) 文政四年(一八二一)から天保一年(一八四一)にかけて執筆された、松浦静山の『甲子夜話』巻三十には「姫路の城中にヲサカベと云妖魅あり。城中に年久く住りと云ふ。或云。天守櫓の上層やぐらに居て、常に人の入ることを嫌ふ。念に一度、其城主のみこれに対面す。其余は人怯おそれて不_レ登。(中略)天守櫓の脇に此祠有り。社僧ありて其神に事つかふ。城主も尊仰せらるゝとぞ」との記載があり、姫路城の天守には「ヲサカベ」なる妖怪が住む由、人々の尊崇と恐怖の念を引き起こしていた由、城主との関わりを有し、その尊崇を受けていた由がうかがわれる。また、井原西鶴の『好色五人女』——貞享三年(一六八六)

刊行——卷一・三「太鼓に寄る獅子舞」には「とにかく、女は化物、姫路

の於左賀部狐も、かへつて眉毛よまるべし。」といった描写が、『西鶴

諸国ばなし』——貞享二年（一六八五）刊行——卷一「狐四天王」に

は「としひさしく、播磨の姫路にすみなれて、その身は人間のごとく、

八百八疋のけんぞくをつかひ、世間の眉毛おもふままに読みて、人を

なぶる事自由なり。」といった描写がそれぞれにあり、姫路城の妖怪伝

承が、近世期の人々の間に流布していた様が見受けられる。『諸国百物

語』卷五ノ四「播州姫路の城ばけ物の事」に登場する妖怪には、「ヲサ

カベ」の名こそ冠せられていないものの、姫路城の天守に住まうこと、

「しろの主」として設定づけられていること、城主である秀勝に、己

を尊崇するよう命じていることから、『甲子夜話』に見る「ヲサカベ」

の要素を備えていることがわかれよう。以上のことから、「幡州姫

路の城ばけ物の事」は、近世期に流布していたとみられる姫路の「ヲ

サカベ」伝承の要素を組み込んだ作品であると言える。

(36) 註(1) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物

語』から『諸国百物語』へ」

(37) 『甲子夜話』卷三十の「天守櫓の脇に此祠有り。社僧ありて其神に

事ふ。」といった描写から、姫路の天守に住まう「ヲサカベ」なる妖怪

は「神」としての側面を有していることがわかれる。そしてこの

神聖性は、「ヲサカベ」伝承を組み込んだとみられる、卷五ノ四「幡州

姫路の城ばけ物の事」の妖怪にも通底すると考えられる。

以下、『甲子夜話』本文引用は全て中村幸彦氏、中野三敏氏編『東洋

文庫314 甲子夜話2〔全6巻〕』（平凡社、一九七七・九）に、『好

色五人女』は暉俊康隆氏、東明雅氏校注・訳『日本古典文学全集38

井原西鶴集一』（小学館、一九七一・三）に、『奇異雑談集』（写本）

は朝倉治彦氏、深沢秋男氏編『仮名草子集成』第二十一卷（東京堂出

版、一九九八・三）に、『呉地記』は『五朝小説 22』（『出版地不

明』、『出版者不明』、『出版年不明』、早稲田大学中央図書館蔵）に、『西

鶴諸国ばなし』は宗政五十緒氏、松田修氏、暉俊康隆氏校注・訳『日

本古典文学全集39 井原西鶴集二』（小学館、一九七三・一）に、『曾

呂利物語』は国民図書株式会社編『近代日本文学大系13 怪異小説

集』(国民図書株式会社、一九二七・五)に、『宿直草』(『御伽物語』)は谷脇理史氏他校注『新編日本古典文学全集64 仮名草子集』(小学館、一九九九・九)に、『百物語評判』は国民図書株式会社編『近代日本文学大系13 怪異小説集』(前掲)に拠る。

三．『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ

三―一．救済を得られる章群

(一)．経・念仏・加持の功德

先の章段でも言及したように、その脱仏教・啓蒙的色彩に起因する文芸化や世間咄化、娯楽性、ならびに文学性について、高い評価を与えられているのみならず、種々の創造的側面を有していることが明らかとなった『諸国百物語』。

その反面、太刀川清氏による『諸国百物語』は『曾呂利物語』に依ったものが多かった」という指摘や(1)、小澤江美子氏による『曾呂利物語』を享ける延宝期の『諸国百物語』が「話を話として楽しむための娯楽本位の怪異小説となっている」という指摘(2)、ならびに先学による、収録作品中の二十六話を『曾呂利物語』に依拠しているという指摘(3)からうかがわれるように、『曾呂利物語』に文学的特質の多くを依拠しているという事実からは、全きまでに脱却し得ないようではある。

さらに、脱唱導的色彩について述べられてこそのいるものの、従来の研究においては、『諸国百物語』中の怪異に巻き込まれた人間に対し、仏教が果たす役割。ならびに各々の作品の有する唱導的要素の度合いについては、あまり具体的な言及はなされてこなかったようである。

そこで本稿では、『諸国百物語』における念仏・経文・加持・僧侶ないしは仏の功力によって、人間が怪異に相對している章群、ないしは僧侶を主人公にした章群などの読解。ならびに『諸国百物語』がその典拠として負うところが多い『曾呂利物語』における仏教の位置づけとの比較を通じ、怪異に対する仏教の役割、唱導的色彩に考察を加え、『曾呂利物語』との文学的特質の違いをより一層明らかにしてゆくことを、その目的とした。

はじめに、【表1】に着目してもらいたい(表は章末に附した。以下同じ)。
この表は『諸国百物語』及び『曾呂利物語』における仏教・僧侶を扱った話の、所収話数に対する割合を示している。仏教・僧侶を扱った話は『諸国百物語』においては全体の四分の一以上、『曾呂利物語』では全体の四割近くを占めている。

『曾呂利物語』が「寛文期にあつては仏教臭・教訓臭の薄れた」怪異小説であり、『諸国百物語』においても「仏教的・教訓的要素」が「薄れている」(4)という前述の小澤氏の指摘があるが、仏教・僧侶の登場する話が、二作品中で占めている比率は、必ずしも低いとは言えない様が、この表からうかがわれるのである。

さて『諸国百物語』、『曾呂利物語』に収録された、これらの僧侶・仏教を扱った章群であるが、大きく分けて、四つの型に分類することが可能であ

ると考えられる。

すなわち【表1】に提示した、①仏教によって、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得る章群、②仏教によっても、怪異の被害者ないしは亡霊が救済を得られない章群、③僧侶が醜態をさらす章群、④僧侶が世俗から害される章群、である。

そして以下に挙げた【表2】【表3】は、これら四つの章群の題名・巻次を具体的に提示したものである。この表からもうかがわれるように、①の章群は（A）経・念仏・加持の功德を扱った話、（B）僧侶の法力・功德・機転を扱った話、（C）仏教帰依による罪業・苦悩の消滅を扱った話という、三つの型に分けることが出来る。

そこで本章段では、これらの分類をふまえ、『諸国百物語』、『曾呂利物語』における①—（A）の章群—経・念仏・加持の功德を扱った七話—の読解を進め、その特徴を比較してゆく。そして『諸国百物語』における、怪異に対して仏教が果たす役割、唱導的要素の度合いについて、考察を加えてゆきたい。

初めに『諸国百物語』巻一ノ八「後妻うちの事付タリ法花経の功力」を取り上げる。「第四章 「後妻うち」の系譜」にて詳細な読解を進める為、ここではその梗概のみを記すにとどめておくが、出産で妻を亡くした男が、後妻を迎えた。ところが男は先妻の亡霊におびやかされ、旅僧からはこのままでは命が危ないと言われる。旅僧は男の全身に法花経を書き、彼はその功力で難を逃れる。しかし先妻の生前から、彼女を呪詛していた後妻は亡霊に殺されるといのが、本編のおおよその展開である。

このように、先妻の死霊ないしは生霊が、後妻及び夫に災いをもたらす話は『諸国百物語』に散見される。以下に幾つかの事例を挙げてゆく。

例えば、巻二ノ九「豊後の国何がしの女ばう死骸を漆にて塗りたる事」は、先妻の亡霊が後妻の首をねじきり、夫—自分の死後は妻を娶らないという約束を反故にした—のど首を噛み切って殺す話である。

また巻五ノ十四「栗田左衛門介が女ばう死して相撲を取りに来たる事」は、先妻の亡霊が後妻に、自分が勝ったなら実家に帰ることを条件に相撲を挑み、そのため後妻は衰弱して死ぬという話である。

さらに巻五ノ十六「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうちの事」には、嫉妬深さのため夫から離縁された先妻の執心が、後妻を殺す様が描かれているのだ。

そして、前述の「栗田衛門介が女ばう死して相撲を取りに来たる事」に見る、前妻の亡霊が後妻の許に初めて出現した際の—この時点では、後妻は前妻がこの世のものではないとは知らない—二人の女の会話からは、近

世社会における前妻・後妻の、互いに対する感情の一端をうかがい知ることが出来る。以下に当該箇所を引用する。

内儀おどろき、「さやうにを、せ候ふはいかなる御かたぞ」と、たづね

給へば、「われは此家のあるじにて候ふ」と云ふ。内儀なごきよて、「さや

うの事もぞんじ候はで、ちかきころこれへゑんにつき参り候ふ。御は

らだちは御尤ごよりにて候ふ。」(傍線部は筆者による。以下同じ)

このように傍線部からは、前妻の後妻への対抗意識。加えて後妻の、己の存在が前妻の怒りをかきたてるのはもっともなことであるとみなし、その感情を受容する様うかがわれるのである。

さらに池田彌三郎氏は、

「後添いは、鼠が出てもびっくりし

黒闇の浴衣に、後妻ぞつとする

なぜ着物着た、と後妻は夢に見る

後添いのひやひや思う梓弓

(口よせのみこの使う梓弓である)

大施餓鬼してから 後妻気が軽し

後の妻 袷あじに守りの紐が見え」

といった川柳を「風俗資料」として用い、「先妻の死霊は、多く後妻をおびやかしたらしい。少なくとも、近世の社会ではそういう風に考えていたらしい。」と述べている(5)。

以上の事柄からは、近世期の社会において「後妻＝前妻の怨嗟の対象」という認識が、流布していたことがうかがわれよう。

それゆえ夫が後妻を迎えるということは、先妻——その生死の如何に関わらず——の怒りや怨みをかき立てるといふ危険性を孕んでいたと言えよう。

しかしながら、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」の男は、後妻をめとるといふ、先妻の怨念を引き起こしかねない行為をやったのけた。

それに加えて後妻になったこの女は、先妻の生前から彼女を呪っていたのだから、この夫・後妻には共に、亡霊の怨念の対象になる理由は大ありなのである。

すなわち「後妻うちの事付タリ法花経の功力」は、怪異の被害者が、自らの行為の為に災いしないしは怪異を呼び起こしてしまった話であり、この話において仏教は、怪異を退けるための防衛手段的な役割を担っている様うかがわれると言えよう。

同様のことは、巻四ノ十四「下総しもふまの国平六左衛門へいろくざへもんが親の腫物しゅもつの事」にも当てはまる。

「第四章 「後妻うち」の系譜」にて詳細な読解を進める為、ここでは

その梗概のみを記すが、ある男が召使いの女に手をつけた。本妻が嫉妬深い女で、件の下女を絞め殺した。それから三日もたたぬうち、男の右肩に腫れ物が出来、程なくして本妻も死んだ。すると男の左肩に腫れ物が出来、両肩の腫れ物が「こちらをむけ」と間断なく男を責める。結果、男は旅僧の法花経読経によって腫れ物が平癒するというのが、本編の物語展開である。

このように本編において、怪異から最も被害を蒙ったのは男であるが、その災禍の発端となったのは、それが為、本妻をして嫉妬の鬼へと変貌せしめた、浮気という本妻への不実である。自らの行為のために災いしないしは怪異を呼び起こすという構図が、ここでもうかがわれる。

そして、この話における仏教は、怪異を退散させる対抗手段的な役割を課せられていると言えよう。

ついで巻五ノ七「ほんすぎ三本杉を足にてけたるむくい的事」を取り上げる。――

――ある天台宗の僧侶が、下人を一人連れて諸国修行に出た。江戸から日光に行つて帰る際、三本杉を見た下人は、それを侮る言葉を吐き、足で蹴散らかしてしまふ。その夜錯乱状態に陥つた下人を見、「ましやうのわざ」

と思つた僧侶が「天台てんだいのぎやうりきをもつてかぢ」をしたところ、下人は、

「かぢ」の強さに耐えられないので、もはや帰る由を言う。しかし僧侶が姿を現すように言うと、大きな石仏となつた。僧侶がなおも眞の姿を現すように言い、「かぢ」を続けると、額に目が一つある一丈ほどの坊主、額に五尺ほどの角がある十丈ほどの蛇にと姿を変え、ついには眞実の姿である「十六七なる女のすがた」となり、背戸口から帰つていくと、たちまち下人は正氣に戻つたというのが、おおよそのあらすじである。

このように「三本杉を足にてけたるむくい的事」において「かぢ」――すなわち仏教の功力――は、怪異の原因であるところの三本杉の霊を「まことのすがた」にする効果、ならびに、

・あまりにかぢつよきゆへたまられず。もはやかへるぞ

・はやかへるぞ。今よりのちは来たるまじ。われをあしにてけたるゆへ也。あまりにかぢのつよければ、いとま申してさらば

といった描写からもうかがわれるように、怪異を退散させる効果をも有しているのである。

それと同時に、怪異が「かぢ」という仏教の力の前にあつては、その効力の強さ故に翻弄されるか、せいぜい「われをあしにてけたるゆへ也」という恨み言を述べるか程度の行動しか取れておらず、「三本杉を足にてけたるむくい的事」は、怪異に対する仏教の圧倒的優位性が描かれている話と

いうことが出来るだろう。また本編において、三本杉の精霊から被害を蒙つたのは下人であるが、

それは三本杉を「おとにきゝしにはおとりたる杉かな。かやうの杉は上^{かみ}たにはなにほどもあり」と痛罵し、蹴散らかしたが故の報いとして位置づけられている。前述の「後妻うちの事付タリ法花経の功力」、「死霊の後妻うち付タリ法花経にて成仏の事」同様、自らの行い故に怪異の返報を招いた人間の姿が、ここでも表出されているのである。

続いての作品は、巻五ノ十九「女の生霊^{いきりやう}の事付タリよりつけの法力^{はうりき}」である。相模の国の信久という高家の人間は、美貌の奥方を寵愛していたが、それに劣らぬ美人の腰元「ときわ」をも寵愛していた。そして「ときわ」は奥方によく仕えた。ある時奥方が病にかかり、次第に重くなっていたので、「人の妬みであろうか」と訝った信久が高僧に頼んで祈祷をさせたところ、生霊がとりついていて由、「よりつけ」によってその正体を明らかにする由を告げられる。その結果、生霊の正体は「ときわ」であることがわかったものの、同時に奥方も落命してしまう。信久は無念に思い、奥方の追善供養のため、「ときわ」を牛裂きにしたという。

このように本編においては、仏教が生霊を直接退散させているわけではないものの、「よりつき」の女を媒介にして生霊が姿を現していく様、僧侶の「まことのすがたをあらはせよ」の一言で「ときわ」が姿を現した様から、怪異の正体を暴くという側面を有していることがうかがわれるのである。

これらの事柄から、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」は後妻の先妻に対する呪詛、ならびに夫が先妻の死後、後妻を娶るという行為が、「死霊の後妻うち付タリ法花経にて成仏の事」においては、夫の本妻への不実——それ故、嫉妬に苛まれた本妻が下女を殺めた——が、「三本杉を足にてけたるむくい^{むくい}の事」では下人の三本杉への横暴が、そして「女の生霊の事付タリよりつけの法力」では奥方がいるにもかかわらず、腰元と関係を持つという男の不実な行為——為に腰元は奥方に嫉妬心を抱いたわけであるから——といった、それぞれ人間の負の側面が、死霊や杉の精霊、生霊といった怪異を呼び込む契機として位置づけられている様が、うかがわれるのである。

すなわちこれら四話は、自らの行いの為、怪異に起因する災いを招いた人間が、経・念仏・加持などにより、怪異を退ける章群であり、仏教は怪異に対する防衛・対抗手段としての側面を有しているといえよう。

ついで、これらの作品群とは趣を異にする話を取り上げよう。巻二ノ十

「志摩^{しま}の国雲松^{うんしょう}と云ふ僧毒蛇^{どくじや}の難^{なん}をのがれし事」がそれである。ある旅の僧侶が洞窟で修行をし、念仏を唱えていると、大蛇が出現し、僧を飲み込もうとした。僧が恐ろしさを堪らえ、念仏を続けていると、大蛇は退散す

る。程なくして「衣冠たゞしき人」となって僧の前に現れた大蛇は、自分がこの洞窟の主であること、僧の念仏のために悪心が消え、仏道に入ったことを告げて姿を消すというのが、おおよそのあらすじである。

怪異に対する自己防衛の手段として、主人公が念仏を用いているという構図は前述の四話に類似している。しかしながら、怪異に遭遇した人間の行為・心情に、怪異を招くべき要素がない点、ならびに仏教の功力により怪異の主体が仏道に入るという点が、前述の作品群とは異なっていると見えよう。

ついで巻四ノ十二「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあひせし事」の読解を進める。——いよの国・長谷川長左衛門の娘は容貌、心映えともに優れ、和歌や漢詩、経論の心得まであった。ある日、手水桶に小さな蟹がいるのを見つけた娘は、食べ物を与えるなどして、これを可愛がった。ある時、この邸の近くの淵に住む大蛇が娘に執心をかけ、娘をくれるよう、長左衛門に言った。長左衛門は嘆き苦しむが、娘は自らの命を捨てて、父を助けると言った。約束の日に、大蛇は大小の蛇と共に庭にやって来たのだが、娘は水晶の数珠、法花経の五巻を持って庭に下りたため、その功德によつてか、大蛇たちは近付くことが出来ない。そこへ何処からともなく大きな蟹たちがやって来、大蛇たちに鉢をたてたので、蛇たちは恐れて逃げ帰ってしまったというのが、おおよそのあらすじである。

前述の章群同様、本編の典拠は明らかにない。

しかしながら、先に述べた堤氏は「巻四の十二「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあひせし事」は、一話の骨格をいわゆる蟹満寺伝説に拠っている。日頃可愛いがついていた蟹が蛇に見入られた娘を救う筋立、そして「法花経の五まき」の功力と加護を描いたのは、山城国相楽郡の普門山蟹満寺にまつわる縁起をふまえたものとみてよい。」ことを指摘し、本編の骨子が「蟹満寺伝説」にあることを述べている(6)。

そして中里隆憲氏はこの「蟹満寺伝説」として、『法華験記』巻下の第百二十三「山城国久世郡の女人」、『今昔物語集』巻十六「山城ノ国ノ女人、依観音助遁蛇難語 第十六」、『古今著聞集』巻第二十 魚虫禽獣第三十「山城国久世郡の女観音経を讀誦して蛇の難を免るる事並びに蟹報恩の事」、『元亨釈書』巻第二十八 志二 寺像志」を挙げている(7)。

これら『本朝法華験記』巻下・第百二十三「山城国久世郡の女人」、『今昔物語集』巻第十六「山城ノ国ノ女人、依観音助遁蛇難語第十六」、

クワンオンノタスケニヨリテクチナハノシラノガレタルコト

『元亨釈書』巻第二十八・志二「寺像志」は、その物語展開がおおむね類似している。『古今著聞集』巻第二十・魚虫禽獣第三十「山城国久世郡の女観音経を讀誦して蛇の難を免るる事並びに蟹報恩の事」のみ少しく趣を異にするのであるが、このことに関しては後述する。

また黒沢幸三氏は、日本最古の蟹報恩説話である『日本靈異記』中巻の十二話が「ある程度変容されて『法華験記』にとり入れられ、その説話が『今昔物語』『元亨釈書』に踏襲された」ことを指摘している為（8）、本稿では『本朝法華験記』『山城国久世郡の女人』を中心に、『今昔物語集』『山城ノ国ノ女人依観音助遁蛇難語第十六』及び、『元亨釈書』志二「寺像志」に見る「蟹満寺伝説」のおおよそのあらすじを取り上げてゆきたい。

山城国久世郡に一人の娘がいた。幼い頃から法華経の観世菩薩に帰依し、信仰心が殊のほか深かった。ある時、蟹を捕えて持って行く人と出会った。娘は魚と引き換えに蟹を手に入れ、それを逃がしてやった。その後、娘の老父が畑仕事をしていると、蛇が蛙を飲もうとした。それを可哀想に思った老父は、蛙を助けたなら娘の婿にしようと言った。蛇は蛙を捨てて、去って行った。老父は自分が言ったことを悔やみ、帰宅しても食事がのどを通らずにいた。妻や娘がわけを聞くので理由を話したところ、娘は「速く食事をしてください。心配しなくても大丈夫です」と言った。父親は嘆くことを止め、食事をした。その夜、蛇がやって来た。娘は父に「三日たつたら来てくれるよう約束して下さい」と言った。父親が門を開けると、五位の姿をした人がいて「今朝の約束に従ってきました」と言う。父親が娘の言葉を伝えると、男は帰って行った。それから娘は蔵代——正式の蔵の代わりに、一時的に物を入れて置く所——を作らせて、三日目の夕方そこに入った。日が暮れてから五位がやって来たが、娘が籠っているのを見ると激怒し、蛇の姿になった。蔵代を困んで、その尾で叩いた。父母は恐れおののいていた。夜半になり、この音が止んだ。夜が明けて様子を見たところ、たくさんの蟹たちがこの蛇をさし殺していた。蔵代から出て来た娘は父に、「読経をしていましたところ、観音様が現れて、虺蛇及蝮蠍、気毒煙火熱の文言を唱えるようにと仰いました。わたしは妙法と観音さまのお力によって蛇の難を退けることができました」と言った。その蛇の死骸を埋め、蛇の苦しみと蟹たちの殺生の罪過を救うために、その地に寺を建てた。それを蟹満寺という——「山城国久世郡の女人」に見る「蟹満寺伝説」の概略は、このようなものである。

「山城ノ国ノ女人依観音助遁蛇難語第十六」においては、娘を救うのは観音ではなく「端正美麗」な僧侶であり、志二「寺像志」では娘が籠るのは「蔵代」ではなく「小室」であるという違いはあるものの、
①観音を信仰していた慈悲深い娘が、魚を代金がわりに蟹を買い取り、これを助ける。

②父親は蛇から蛙を助けるため、娘を嫁がせることを約束する。

③娘は父親の苦悩を和らげることを約し、食事を勧める。

④蛇が官人の姿をして娘の許を訪れ、娘が蔵ないしはそれに準ずる密室に閉じこもっているのを見て怒り、正体を現す。

⑤娘は観音信仰と蟹の報恩により、難を逃れる。

という、これらの物語展開における主要な点は類似している。

そして前述のように「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」とこれらの「蟹満寺伝説」は、信仰心が篤く慈悲深い娘が、法華経の功力と蟹の報恩により蛇の魔手から逃れるという物語の骨子が共通していると言えよう。

しかしながら、これらの共通点はプロット上のみにとどまっており、文章表現における類似点は見られないため、再検討の必要性を感じた。

「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」における、蛇が娘の許を訪れる箇所に着目してみると、『沙石集』巻七ノ四「蛇ノ人ノ妻犯ス事」を、部分的に用いている可能性が浮かんできた。

本稿ではそこで、「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」と「蛇ノ人ノ妻犯ス事」の当該個所の比較を通じ、この可能性を論証してゆきたいと考える。

先ず「蛇ノ人ノ妻犯ス事」のあらすじを紹介する。——遠江国の山里に、莊園の事柄を取り扱う、聡明な者がいた。ある時この男が外出し、妻は昼寝をしていた。男が帰宅し寝所に入ると、大きな蛇が妻にまとわりつき、陰部に口をつけて臥していた。男は杖で蛇を打ちすえ、「本来なら殺してやるところだが、今度だけは許す。以後このような真似をしたなら命はないと思え」と言い、蛇を捨てやった。数日後、大小様々の蛇が大勢、男の家に集まって来た。男が己に非はなく、蛇の方にあることを説いて聞かせると、蛇たちは件の蛇を噛み殺し、山へと帰って行ったという。

ついで、「蛇ノ人ノ妻犯ス事」の蛇たちが男の家を訪れる場面、「山城国久世郡の女人」、「山城ノ国ノ女人依観音助遁蛇難語第十六」、志「寺像志」、「山城国久世郡の女観音経を誦して蛇の難を免るる事並びに蟹報恩の事」における三日後の蛇の再訪場面、「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」の蛇の再訪場面をそれぞれ引用する。

(1) 一—二—尺ノ蛇頭ヲナラベテ。間モナク四方ヲカゴミテ。庭ノキ

ハマデ來ル。サシマサリタル蛇ツゞキテ。幾千万ト云数ヲ知ズ。ハテ

ニハ一—丈二—三尺バカリナル蛇。左—右二五—六—尺バカリナル蛇。

十バカリ具シテ來ル。ミナ頭ヲアケ舌ヲウゴカス。(2) オソロシナン
ト云計ナシ。

「蛇ノ人ノ妻犯ス事」

初夜の時に至りて、(3) 前の五位來れり。門を開きて入り來り、女の

蔵代に籠りたるを見て、怒り恨める心を生し、本の蛇の形を現じて、蔵代を囲み巻き、尾をもてこれを叩く。(4) 父母大きに驚怖せり。

「山城国久世郡の女人」

(5) 五位、入来テ女ノ籠居タル倉代ヲ見テ、大ニ怨ノ心ヲ発シテ、本ノ蛇ノ形ニ現ジテ、倉代ヲ囲ミ巻テ、尾ヲ以テ戸ヲ叩ク。(6) 父母、此レヲ聞テ、大ニ驚キ恐ル、事無限シ。

「山城ノ国ノ女人依観音助遁蛇難語第十六」

(7) 冠人果タシテ来タル。女ノ室ニ屏ルルヲ見テ、忿恨ノ心ヲ生ズ。乃チ本形ニ復ス。長キコト数丈。身ヲ以テ室ニ纏フ。尾ヲ拳テ戸ヲ敲ク。(8) 父母、大イニ恐テ。争奈トスルコトヲ得ズ(訓点は私にほどこした)。

志二「寺像志」

夜にも入ぬれば、いかゞとあなじゐたるに、五位のすがたしたるおのこいりきたれり。(中略) 兩三日をへてきたり。(9) 此たびはもとのくちなはのかたちなり。むすめのかくれ居たる所をしりて、そのあたりをはひめぐりて、尾をもちてその戸をたゞきけり。これをきくに、(10) いや／＼おそろしき事せんかたなし。

「山城国久世郡の女観音経を誦誦して蛇の難を免るる事並びに蟹報恩の事」

さてやくそくの日にもなりしかば、(11) 大じやども大小あまたにわにはいきたる。(12) おそろしきとも云ふばかりなし。

「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」

このように「山城国久世郡の女人」、「山城ノ国ノ女人依観音助遁蛇難語第十六」、志二「寺像志」、「山城国久世郡の女観音経を誦誦して蛇の難を免る

る事並びに蟹報恩の事」に見る「蟹満寺伝説」において、娘の許を再訪する蛇は一匹である。

これに対し、「蛇ノ人ノ妻犯ス事」、「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」では傍線部(1)(11)のように、大きさがさまざまの蛇が群れをなして、娘の許にやって来たことになっている。

また傍線部(1)(3)(5)(7)(9)(11)に見るように、「山城国久世郡の女人」、「山城ノ国ノ女人依観音助遁蛇難語第十六」、志二「寺像志」三話における蛇は、再訪の際に衣冠をまとった人間の姿をとっているが、「山城国久世郡の女観音経を誦して蛇の難を免るる事並びに蟹報恩の事」、「蛇ノ人ノ妻犯ス事」、「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」では、蛇の姿のままである。

さらに、「山城国久世郡の女人」、「山城ノ国ノ女人依観音助遁蛇難語第十六」、志二「寺像志」では、蛇が娘の籠っている密室を囲み、尾でその戸を叩く場面において、傍線部(4)(6)(8)のように、娘の父母がこれを恐れるという表現が見られる。

これに対し、「山城国久世郡の女観音経を誦して蛇の難を免るる事並びに蟹報恩の事」、「蛇ノ人ノ妻犯ス事」、「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」では、傍線部(2)(10)(12)のように、「おそろしきとも云ふばかりなし」に類する表現が見受けられるのである。

そして「蛇ノ人ノ妻犯ス事」、「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」はともに、大ききのさまざまな蛇が大勢の描写の後に、「おそろしきとも云ふばかりなし」ないしはそれに類する表現が続いている。

以上の事柄から、「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」は、蛇が娘を妻にする為、群れをなしてその住まいを訪れるという怪異の描写に、「蛇ノ人ノ妻犯ス事」の表現を用いているという結論が導き出されるのである。

このように「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」は「蟹満寺伝説」をその骨子としつつ、怪異の描写には「蛇ノ人ノ妻犯ス事」を用いるという構造をとっているのだが、その為に怪異に起因する薄気味の悪さが増大する効果をあげていると言えよう。

また、蛇に魅入られた娘が、怪異を退けるために法花経を用いている様からは、仏教が怪異を退散させるための手段を担うという構図が見受けられるのである。

以上、「志摩の国雲松と云ふ僧毒蛇の難をのがれし事」、「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」二話からは、主人公が怪異に起因する災いに遭遇したのは偶然であり、妖怪の怨念をかき立てるような行為はしておらず、また、怪異に巻き込まれるような悪心を抱いてもいないという点。そして日頃の信心や慈悲によって怪異を退けるといふ点がうかがわれるのである。

このように、前述してきた事柄から、『諸国百物語』の①—(A)の章群は、怪異に巻き込まれる人間に非がある話と、怪異に偶然巻き込まれた人

間の話に大別出来ること。

話の数としては、前者が四話、後者が二話と、怪異に巻き込まれる人間に非がある作品の方が多いことがわかれるのである。

そしてこのことは①—(A)の章群が、怪異を通じて、それを引き起こした人間の行為、ないしは心情の醜悪さを描く効果をあげているとも言える。

さらにこれらの話においては、自分の行為ゆえに怪異を招いた人間であれ、偶発的に怪異に遭遇した人間であれ、経・念仏・加持を、怪異に対する防衛・対抗手段として用いている側面が濃厚であるという結論が、導き出されるのである。

ついで『曾呂利物語』における経・念仏・加持の功德を扱った話——【表3】に見る①—(A)の章群——の読解を進めてゆく。

しかしながら【表2】【表3】の比較からうかがわれるように、『曾呂利物語』における(A)の話型の作品は『諸国百物語』に比し、その数が少ない。

該当するのは巻四ノ五「常々の悪業を死して現はす事」のみである。以下にそのあらすじを述べる。——何かにつけ不得心で、使用人に対しては無慈悲であった北の方が死に、その死体は寺へ運ばれた。一族や僧侶らの集う中、俄に棺が激しく揺れ、死人が棺の中から「怪しからぬ姿」で立ち上がる。しかし長老が引導をわたし、弔ってやると、もとの姿に戻ったという。

仏教が怪異への対抗手段として用いられている様、人間の心根の醜悪さが怪異を引き起こす様が、ここからもうかがわれよう。

また「常々の悪業を死して現はす事」は「悪心の怖ろしさ、仏教の尊さ、

彼これもつて疑ふべきことかは。」といった唱導・教訓的表現が、その末尾に付されている。

そして文中の「斯かる心より万事不得心にて、(中略)慈悲の心は夢程もなかりけり。さるから身まかりけるに、臨終の有様怖ろしき事思ひやるべし。」といった、北の方の生前の罪業。その報いとして臨終の際の怪異を招くのではないかという、仏教的な因果応報観の描写。これらの描写と前述した文末の一条とがあいまって、「常々の悪業を死して現はす事」の仏教的・唱導的色彩を、より強調しているといえよう。

なお、『諸国百物語』の①—(A)の六話のうち、話の末尾に唱導的ないしは教訓的表現が見られるのは、「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」

における「まことに御経きやうのきとく、又はぢひの心ざしふかゝりしゆへあやうきいのちをたすかりけると也。」という一条、「下総の国平六左衛門が親の腫物の事」の「このざいしよにはみな／＼法花ほっけに受法じゆほうしけると也。」といった一条の、六話中二話であり、その数がさほど多いとは言えない。

以上の事柄を考慮に入れると、仏教によつて、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得る章群①のうち、経・念仏・加持の功德を扱った話は、①『曾呂利物語』においては仏教の功力を通じて、唱導的・教訓的要素を強調している。

②『諸国百物語』においては、仏教の怪異に対する防衛的・対抗的側面をそれぞれ強調している。

③『諸国百物語』においては、怪異を通じて、それを引き起こした人間の行為、ないしは心情の負の側面を描くことに、より力点を置いていく。

といった意匠が見受けられ、結果、『諸国百物語』の唱導・教訓性は『曾呂利物語』のそれより希薄となっている様うかがわれるのである。

(二)．僧侶の法力・功德・機転

『諸国百物語』、『曾呂利物語』各々に見る、経・念仏・加持の功德を扱った話において、前者では仏教の怪異に対する防衛・対抗的側面ならびに怪異を引き起こす人間の醜悪さ、後者では唱導的・教訓的要素が強調されていること。

『諸国百物語』巻四ノ十二「長谷川長左衛門が娘蟹をてうあいせし事」は、物語の骨子を「蟹満寺伝説」に拠りながら、怪異の描写には『沙石集』巻七ノ四「蛇ノ人ノ妻犯ス事」を用いており、結果として怪異に起因する薄気味悪さが増大していることは、先に述べた。

つづいて、本章段では『諸国百物語』、『曾呂利物語』における、僧侶の法力・功德・機転を扱った話——【表2】【表3】に見る①—(B)—を取り上げてゆく。

初めに『諸国百物語』巻三ノ十九「艶書えんじよのしうしん鬼をにとなりし事」を取り上げる。——旅の途中、一休が「うつくしき児ちご」のいる寺に宿をかりる。その夜、稚児の寝間の縁下から火の玉が無数に飛び出し、稚児のふところに入った後、鬼の姿になる。鬼は一休を食おうとするが、一休の修行の功德のため、それがかなわない。翌朝、寝間の縁下を見ると、稚児への恋文が数知れぬほどあった。稚児がこれらの文主たちに返事もせず、縁下に放り込んでいたため、文主の執心が積もって鬼となっていたのである。

一休が文を焼き、経を詠んだところ、その後災いはなくなつたという。以上の事柄からは、本編が仏教の功德という主題を有しているのみならず、

- ・ たちまち二丈ばかりの鬼となり、きやくでんに来たり、(中略)と、さがしまわる。一休もとよりをこなひすましてみ給へば、さがしあたららず。

- ・ 一休この文どもをとり出だし、つみかさねてやきはらい経をよみしめし給へば、それよりのちはなにのしさいもなかりしと也。

といった描写からもうかがわれるように、一休という、当時人口に膾炙していたであろう(9)、著名な僧侶の威徳をも主題とした話である様が見受けられるのである。

そして同様のことは巻四ノ二「叡山の源信ちごくを見て帰られし事」にもあてはまる。比叡山の高僧である源信が、羅刹女という鬼の眷属——人を誘惑して鬼の餌食にする役割を担わされている——に、人間を捕らえられなかつたので今日は自分が鬼に殺されること。その法力で自分を助けて欲しいことを告げられる。その頼みに応じた源信が、鬼に食われた羅刹女の供養をしてやると、羅刹女は天上に生まれ、成仏したというのが、本編のおおよそのあらすじである。

このような物語展開ならびに、

- ・ ひゑい山に源信とてたつときちしまし／＼ける。
- ・ ねがはくは御僧の法力をもつて、じやうぶついたしたく候ふ。
- ・ われ師の法力によつて天上にむまれじやうぶつせり

といった、源信の威徳を称え、強調する描写。

そして先学からも指摘がなされているように、源信が近世期にあつても著名な僧侶であつたこと(10)を考慮に入れると、「叡山の源信ちごくを見て帰られし事」が、源信の験力譚である様がうかがわれるのである。

また巻三ノ九「道長の御前にて三人の術くらべの事」も、前述の二話に類似した側面を備えている。藤原道長の御前に僧・欽朱と安倍晴明と医師・重正が集つた。差し出された瓜を見、晴明はこの瓜の中に毒がある瓜が入っているという。欽朱が瓜に向かつて加持をし、一つの瓜に見当をつけた。重正が件の瓜に針を刺すと、瓜の動きが止んだ。瓜を割ると、中には蛇がおり、その目に針が刺さつて死んでいた。道長は三人が各々の道に精通し

ていることに感じ入ったというのが、おおよそのあらすじである。

「道長の御前にて三人の術くらべの事」は、「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」でも述べたように、『本朝神社考』巻六「安部晴明」を出典とする（11）。

そして、この「道長の御前にて三人の術くらべの事」に登場する安倍晴明は著名な陰陽師であり、多くの説話集や近世期の文芸作品にも取り上げられている（12）。

また「道長の御前にて三人の術くらべの事」には「三人ともにその術にとうじけるとして道長みちながはなはだかんじ給ひけると也。」といった、前述の「艶書のしうしん鬼となりし事」、「叡山の源信ぢごくを見て帰られし事」同様、登場人物の威徳を讃える表現が見受けられるのである。

これらの事柄を考慮すると、先の二作品と同じく巻三ノ九「道長の御前にて三人の術くらべの事」もまた、著名な人物の威徳を扱った験力譚としての側面を備えている様が、うかがわれる。

前述してきたこれらの事象をふまえると、『諸国百物語』の①—(B)の章群からは、『諸国百物語』の①—(A)と同様に、僧侶・修行者の法力が、怪異・災いへの対抗・防衛手段である話が目立つこと。さらには著名人を作品に登場させ、その人物が験力を以て怪異に対抗する様を描いて読者の興味を惹くという、意匠がこらされていることが、見受けられるのである。

つづいて巻二ノ八「魔王女まわうにばけて出家の往生わうじようを妨げんとせし事」を取り上げる。

摂州勝尾寺の近郊に、尊い僧侶がいた。とはいうものの色欲の道は絶ちがたく、長年馴染んでいる女がいた。しかしある時、仏の道に入りながら俗人と交わっている後世が恐ろしいと思いついた僧侶は、高僧の許へ行って懺悔をし、修行をしていた。他方、未練の断ち切れぬ女は僧侶につきまとい、僧侶はこれをうるさく思うあまり病気になる。そして近くの人々には、女が訪ねて来たならば、留守だと偽って欲しいと言いついておいた。やがて僧侶は病気が重くなりついに死んだ。近くの人々が女を呼び寄せ、事の次第を語ると女は、僧侶が五百生以前より自分の敵である由、僧侶となつて成仏しようとするところ、仏果を妨げて来た由、死に目に間に合つたならば往生は遂げさせなかつた由を言う。やがて、女の姿は二丈余の鬼神に変じ、口から火炎を吐き、大音をあげて天に上つたというのが「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」のおおよそのあらすじである。

この「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」は、前述した三話と異なり——「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」において、おおよそ言及したが——『曾呂利物語』巻一ノ三「女をんなのまうねんは

性しやうをかへても忘れぬ事こと」を出典とすることが明らかになっている(13)。

そして「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」のあらすじは、「女のまうねんは性をかへても忘れぬ事」を比較的忠実に踏襲している。前述した小澤氏は、

まことに第六天だいろくてんの魔王まわうしゆしやうをさまたげて、げどうにいれんとすると仏のとき給ふもかくのごとくなるべし。

「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」

かかることは仏ほとけも説きおき給たまふとかや。恐おそれてみづから慎つしむべきこととぞ。

「女のまうねんは性をかへても忘れぬ事」という二話の結末に着目し、「教訓を付す話」とこれら二話を評しているのである(14)。

また中村博保氏は、典拠である「女のまうねんは性をかへても忘れぬ事」について「女性が鬼に変身するのではなくて、逆に鬼が女に変身していたというはなしをのせており、極端な形でこの変貌が女性に内在する悪業によるところの因果的な結果であるという仏教的思想を示している」という指摘をしている(15)。

さらに、「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」でも取り上げた『曾呂利物語』巻一ノ二「女のまうねん迷まよひありく事こと」は、女

性が首だけの姿となり、野を彷徨うという話であるが、本編では「扱さては人間にんげんにて渡わたらせ給ひけるか、罪業ざいごふのほどこそあさましけれ。」といった登場人物の台詞からもうかがわれるように、異形の姿をとる女性はいくまで「人間」であり、その身に内在する「罪業」が怪異を引き起こすものとして設定されているのである。

以上の事柄から「女のまうねんは性をかへても忘れぬ事」、「女のまうねん迷ひありく事」は共に、怪異の正体を女性に内在する負の「業」として位置づけた、仏教的色彩の濃厚な話であることがうかがわれよう。

しかしながら、この「女のまうねんは性をかへても忘れぬ事」が、怪異の正体を「女のまうねん」——即ち女性に内在する業に起因させているのに対し、「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」は、怪異の正体を「魔王」という明確な名を冠せられた、異形の存在に帰着させているのである。

以上の事柄から、「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」は、それが希薄になっているとはいえ、典拠たる「女のまうねんは性をかへても

忘れぬ事」の教訓色を受け継いでおり、著名人の験力が主題であった前述の三話とは、少しく趣を異にする作品である様。さらには『曾呂利物語』は『諸国百物語』に比し、怪異の正体を女性に内在する「業」に帰着させようとする事により、仏教的思想が濃厚である様が、うかがわれるのである。

ついで卷一ノ十「下野の国にて修行者亡靈にあひし事」を例に挙げる。

旅の僧侶が修行のために下野の国にさしかかり、野原で夜をあかすべく、経念仏をしていたところ、どこからともなく笛の音が近付いてきた。笛の主は年十六ほどの高貴な若衆であり、僧侶はへんげのものではないかと疑う。若衆は、自分はそうしたものではなく、月の美しい夜は笛を吹いてなぐさみにしている由、自分の家へ僧侶を案内し、宿を供する由を言う。二人が連れ立って行くと、そこはとある在所の大きな城であった。若衆は僧侶を座敷へと案内し、食事と茶をふるまう。やがて僧侶と話をした若衆は、奥へと入る。夜が明けると、大勢の人々が座敷へとやって来、不審な者として僧侶を厳しく詰問する。僧侶が事の次第を語ると、人々は驚いて涙を流した。その訳を問うと、この城主の若君は、さる二十日ばかり前に、風邪のため十五歳で亡くなった由、常に笛をたしなんでいらつしやつたので、漢竹の笛を仏前に供えている由を述べる。人々は、若君の亡魂が僧侶を尊い者と思いなして、この座敷へと招じ入れたのだと言い、僧侶に若君の供養を頼む、というのが「下野の国にて修行者亡靈にあひし事」のおおよそのあらすじである。

この「下野の国にて修行者亡靈にあひし事」は、『曾呂利物語』卷二ノ五「行の達したる僧には必ずしるしある事」を出典とし（16）、あらすじも比較的忠実に典拠のそれを踏襲している。

さらには、

「さてはわか君の亡魂、此御僧をたつとびて御居間までしやうじ給ふと見へたり。此うへはいよ／＼こゝに逗留まし／＼て、わか君の御あとをとぶらひ給はれ」とて、上へそのむね申し上げ、此僧をとめをき、いろ／＼ちさうをいたしけると也。

「下野の国にて修行者亡靈にあひし事」
「お僧貴う思はれける故なれば、しばらく爰に逗留し給へ。」とて、色々追善を営み、其の後僧は帰り給ひけり。

「行の達したる僧には必ずしるしある事」

という両者の結びからもうかがわれるように、「下野の国にて修行者亡靈にあひし事」においては、無名僧の験力を描くことで仏教の尊さを強調するという、典拠の構図も踏襲されていることがわかるのである。

ついで卷二ノ二十「越前の国にて亡者よみがへりし事」を取り上げる。越前の府中に法花寺があった。ある時、死人を沐浴させ髪を剃っていたのだが、寺の聖人は手に腫れ物が出来ていた為、その役を弟子に譲った。すると死人の髪がにわかになり、のみならず長くなつたので、弟子は怯え逃げようとした。そこで聖人が「お前は常々心根が悪かつた為、死してなお迷うのだ」と言い、経を読むなどしたところ、死人の髪はやわらかくなり、もとの長さに戻つたというのが、おおよそのあらすじである。

「きく人みな聖人のしゆしやうなる事をかんじけると也。」という結びからも、無名僧の徳を描くことで仏教の尊さを強調するという、本編の構図はうかがわれよう。

以上の事柄からは、『諸国百物語』の僧侶の法力・功德・機転を扱った話——【表2】に見る①——(B)の六話——は、有名人の活躍を描くことで読者の興味を惹こうという意匠のこらされた章群と、『曾呂利物語』を出典とする、無名の僧侶の活躍を通じて、仏教的・教訓的要素を描く章群に大別されるという結論が導き出されるのである。

つづいて『曾呂利物語』における、僧侶の法力・功德・機転を扱った話——【表3】に見る①——(B)の四話——に考察を加えてゆきたい。

このうちの二話、卷一ノ三「女のまうねんは性をかへても忘れぬ事」、卷二ノ五「行の達したる僧には必ずしるしある事」には、仏教・教訓色がそれぞれ濃厚である由は先に述べた。

ついで同章群の卷二ノ一「信心深ければ必ず利生ある事」を取り上げてゆく。——興福寺の律師なにがしは、かすが山の麓のしのやの地藏を長年信仰していた。ある時所用があつたため、常より遅く出かけると、道中で一人の稚児に遭遇した。稚児の家に誘われた律師は、地藏に参詣する途中であるため断ろうとするが、相手の誘惑に負けてしまう。やがて稚児の家で酒宴となり、酔つた律師は稚児と同衾する。明け方に辺りを見ると、稚児をはじめ、臥している人々は、皆鬼の姿をしていた。恐怖にかられた律師が抜け出す方法を考えていると、律師の飼犬がやって来、その導きによって、律師は家から抜け出す事が出来た。僧は犬の心根を誉め、その首に念珠をかけてやった。それから律師が地藏堂へ出向いたところ、地藏の首には先刻の念珠がかけられてあつた。件の稚児、犬は「地藏の化現にてたうしんの真諦を示し給」つたのだと思ひ当たつた律師は、ますます信

心を篤くしたというのが、おおよそのあらすじである。

こうした物語の展開からは、怪異や不可思議な出来事が、仏道に専心するためのよすがとして位置づけられている様。また「今生後生たのもしかりける悲願かなと、感涙を押へかねてぞ。」という結びの一条からは、作品に見られる唱導的要素が一層強調されている様が、それぞれうかがわれるのである。

また、同作品群の巻四ノ四「万のもの年を経ては必ず化くる事」は、寺に住みついた化け物を、その正体を見破った旅の僧侶が退治する話であるが、その結末は「真に智者なりとて、則ち彼の僧を中興開山として、今に絶えず古跡となり、仏法繁盛の霊地とぞなりにける。」といったものであり、怪異が仏道繁栄のきっかけとして位置づけられるという唱導的色彩の濃厚な構図が、ここでも見出されるのである。

そして、前述してきたこれらの事柄からは『曾呂利物語』における僧侶の法力・功德・機転を扱った話——【表3】に見る①——(B)の四話——は、唱導・教訓色の強調された章群である様が見受けられる。

以上の事柄から、『諸国百物語』、『曾呂利物語』における、仏教によって、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得る章群①のうち、僧侶の法力・功德・機転を扱った話においては、

①僧侶・修行者の法力が、怪異・災いへの対抗・防衛手段である話が目立つ。

②『諸国百物語』におけるこれらの章群は、著名人を登場させ、その人物が験力を以て怪異に対抗する様を描いて読者の興味を惹くものと、『曾呂利物語』を出典とする、無名の僧侶の活躍を通じて、仏教的・教訓的要素を描く章群に大別される。

③『曾呂利物語』におけるこれらの章群からは、怪異を仏教繁栄ないしは仏道に入る契機として位置づけるといふ傾向が見受けられる。

という意匠がうかがわれるという結論が、導き出されるのである。

(三) 仏教帰依による罪業・苦悩の消滅

『諸国百物語』、『曾呂利物語』中の、僧侶の法力・功德・機転を扱った話において、前者には、著名な僧侶ないしは修験者を登場させ、そして件の人物が験力を以て怪異に対抗する様を描いて読者の興味を惹くものと、『曾呂利物語』を出典とする、無名の僧侶の活躍を通じて、仏教的・教訓

的要素を描く章群に大別されるといった傾向が見受けられ、『曾呂利物語』には見受けられなかった娯楽色をも内包していること。後者では、怪異を仏教繁栄ないしは仏道に入る契機として位置づけられており、唱導的要素が濃厚である傾向がうかがわれることは、先に述べた。

つづいて、本章段では『諸国百物語』、『曾呂利物語』における、仏教帰依による罪業・苦悩の消滅を扱った話——【表2】【表3】に見る①—(C)——を取り上げてゆく。

まずは『諸国百物語』における、当該話を取り上げる。

前述の『曾呂利物語』巻一ノ二「女のまうねん迷ひありく事」を出典と

した(17)、巻二ノ三「越前の国府中ろくろくびの事」がこれである。「第二章『諸国百物語』における怪異と人との関わり」にてあらずじを詳述した為、ここではその梗概を記すにとどめ置くが、「ろくろ首」となって野原を彷徨していた女性が、旅人にその正体を暴かれ、己の罪業を恥じた彼女は、後に尼となったというのが、本編のおおよその展開である。

そして前述のように、「越前の国府中ろくろくびの事」は、怪異の正体が典拠における「女のまうねん」即ち「女性に内在する罪業」から、「ろくろ首」という「妖怪」へと変貌を遂げており、仏教的要素が希薄になっている様子がうかがわれるのである。

つづいて『曾呂利物語』における、仏教帰依による罪業・苦悩の消滅を扱った話——【表3】に見る①—(C)——を取り上げる。

当該話二話のうち、「女のまうねん迷ひありく事」が、仏教的要素の濃厚な話であることは、先に述べた。

ついで巻四ノ六「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」の読解を進める。——信濃国の守護に召し使われる男が、ある時人を殺め、身重の女房とともに、並びの国に逃亡を試みた。その夜を深山の辻堂で明かすことになった二人の許を、召使いの「はる」が訪れる。男は当初「はる」の正体をいぶかるが、相手の声を聞いて納得し、辻堂の内へ「はる」を招じ入れる。しかし男が油断して眠っている間に、女房と「はる」は姿を消してしまう。麓の寺に駆け込んだ男が、長老や弟子、その他の人々の助けを借り、女房を探したところ、引き裂かれた死体が、大木の上にかけられていた。無念さのあまり切腹しようとする男を長老が教え諭したので、男はその場で出家し、妻の後世を弔って一生を終えたというのが、おおよそのあらすじである。

妻と赤ん坊の命を犠牲にすることを「仏の御慈悲」と位置づける、冷酷な論理を用いてまで、読み手を唱導に導く様、「斯かる憂目に遭ふことも、

却つて仏の御慈悲にこそ。」という結末の一条とあいまって、怪異が仏道に専心するための契機として位置づけられている様、ひいては仏教的色彩の濃厚な様が、ここでもうかがわれるのである。

以上の事柄から、『諸国百物語』における仏教帰依による罪業・苦悩の消滅を扱った話は、『曾呂利物語』のそれに比し、唱導・仏教的要素を受け継ぎつつも、それがより希薄になっているという結論が、導き出されるのである。

三―二・救済を得られない章群

(一)・仏事・祈祷・経

『諸国百物語』における、仏教・僧侶によって、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得る章群は、『曾呂利物語』のそれに比し、教訓・唱導色が希薄であり、怪異現象が仏道に専念する契機として位置づけられている話が見受けられない反面、仏教の怪異への対抗・防衛手段としての側面が強調されている話や、著名人を扱うことで読者の興味を惹こうとする意匠のこらされた話が見受けられることは、先に述べた。

ついで『諸国百物語』、『曾呂利物語』における、念仏・经文・加持・僧侶ないしは仏の功力によっても、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得られない②の章群の読解を進め、その特徴を比較し、考察を加えてゆきたい。

【表2】【表3】に見るように、この章群は(D) 仏事・祈祷・経が、怪異を退散させる根本的な解決策にならない話、(E) 寺という「聖域」が怪異を根本的に退散させられない話、(F) 僧侶が怪異を退散させられない話という、三つの話型に細分化することが可能であると考えられる。

これらの事柄を考慮に入れ、本章段では『諸国百物語』、『曾呂利物語』における、仏事・祈祷・経が怪異を退散させる根本的な解決策にならない章群――②――(D)――を扱ってゆく。

まずは「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」においても言及をした、『諸国百物語』巻一ノ四「松浦伊予が家にばけ物すむ事」を例に挙げる。前述のように『曾呂利物語』巻二ノ三「怨念深きものの魂

迷ひありく事」を典故とする(18) 本編は、化け物の出来する家に住む夫婦が、様々の怪異に悩まされるというのが、おおよその物語展開であり、典拠のそれを比較的忠実に踏襲している。

しかしながら「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」でも述べたように、これら二話は結末部を異にしている。

すなわち、「怨念深き者の魂迷ひありく事」の夫婦が、

夫婦の者は魂を消すのみならず、しばし物ぐるはしくなりけるとぞ。と、しばらくの間、恐怖に起因する精神的錯乱を起こしているのみなのに対し、「松浦伊予が家にばけ物すむ事」の夫婦は、

ふう婦をどろき気をうしなひ、ふう婦ともに物ぐるはしくなりて死にけると也。

と、怪異が引き起こす恐怖の為、落命するに至っているのである。

なお、これらの二話においては、

なにともせんかたなく、此うへは仏事祈祷より外のこと有るまじとて、さまざま祈りければ、まことに仏神のきどくありて、その次の日はきたらず。「もはや来たること有るまじ」と、いひもはてぬに、こくうより、「五度にはかぎるまじ」とよばはる。

「松浦伊予が家にばけ物すむ事」

此の上は御念仏ごとより外の事は有るまじとて、さまざまの祈りをぞ初めける。真に神明仏陀の納受有る故か、其の次の日は来らざり。「すべてのばけ物こゝに来る事五たびなり、此の上は何事もあらじ。」といひもはてぬに、虚空より女の声にて、「五たびには限り候はじ。」と呼ばはりける。

「怨念深き者の魂迷ひありく事」

といった描写に見るように、主人公夫婦が怪異に対して仏事祈祷を試みるという構図は、ともに共通している。

しかしながら、このような仏事祈祷は共に、一時的な怪異退散の効果しかもたらないという設定に加え、のみならず、「松浦伊予が家にばけ物すむ事」の主人公が、怪異現象によって命を奪われたという設定は、「怨念深き者の魂迷ひありく事」に比し、仏事の験のなさ、無力さを一層際だたせていると言える。

これと同様のことは——【表2】における②——(F)の残りの三話——

『諸国百物語』巻三ノ五「安部宗兵衛が妻の怨霊の事」、巻四ノ十七「熊本

主里しゆりが下女げにょきくが亡魂ぼうこんの事」、そして卷三ノ十七「渡部新五郎わたなべしんごが娘若宮わかみやの児におもひそめし事」にもあてはまる。

初めに「安部宗兵衛が妻の怨霊の事」——「第四章 「後妻うち」の系譜」にて詳述を進めるため、ここでは仏事と怪異との関連ならびに、梗概のみを記す——を例に挙げる。

夫たる宗兵衛に邪険にされ、怨みの言葉を残して死んだ妻は、その後亡霊となり、宗兵衛の許を訪う。同衾していた女を引き裂き殺した亡霊は、明晩も参上するとの言葉を残して姿を消す。驚いた宗兵衛は「貴僧きそう高僧かうそうをたのみ、大だいはんにやをよみきたうを」するが、夜半の頃に亡霊はいつの間にか宗兵衛の背後に忍び寄り、その身を二つに引き裂き、辺りの下女をけり殺し、自らは天井を破り虚空に上がったというのが、おおよそのあらすじである。

また「熊本主里が下女げにょきくが亡魂の事」のあらすじは、次のようなものである。熊本主里は人使いの荒い、不信心者であった。ある時食膳の中に針が入っていたことに激怒した主里は、下女のきくをその犯人と決めつける。慈悲を乞うきくを、主里は様々な拷問で責め苛む。ついにきくは、この怨みは主里一代ではおさまらないこと、七代までは怨むことを言い、舌を噛み切つて死ぬ。その三日後、きくの亡霊は主里のもとに現れ、恨み言を口にしたので、主里はやがて狂死してしまう。それからきくの亡霊は、代々の当主を取り殺してゆく。四代目の主里もきくの亡霊の祟りによって狂死し、「四代があいだ、いろ／＼ときたういのりをせられけれども、そのしるしもな」かつたという。

このように、これら二話からは、冷酷で悪辣な人間から、理不尽な形で死に至らしめられた死者の怨念の前には、仏事祈禱は全く無力であるという様。ひいては、仏事は怪異の恐ろしさ、凄絶さを際立たせるための舞台装置としての役割を担っている様うかがわれるのである。

ついで「渡部新五郎が娘若宮の児におもひそめし事」——「第五章 「執心」譚の系譜」にて詳細なより読解を進める為、ここでは梗概と、仏事祈禱との関連性という観点からのみ、考察を加える——を、取り上げる。

「社僧しやそうの児ちこ」に恋慕の情を抱いた娘が、相手の冷淡さ故に焦がれ死にをするも、「しうしん」の激しいあまりに大蛇となり、遂には児を取り殺すというのが、本編のおおよその展開である。

そして娘の死後、児がその「しうしん」に取りつかれゆく過程には、以下のような描写がある。

そのゝちかの児ちこまたわづらひつき、いろ／＼とかんびやうすれどもし

るしもなし。(中略)父母ふしぎにおもひ、ものゝひまよりのぞきみれば、大きな蛇とむかいるて物がたりしける。父母これを見てなげきかなしび、僧山ぶしをたのみかぢきたうをしけれども、そのしるしもなく、つゐにむなしくなりければ、このように、本編においても「しうしん」という、強く異様な感情に起因する怪異の前にあつては、仏事祈祷の類は全く験がない様が、うかがわれるのである。

以上の事柄から、『諸国百物語』における、仏事・祈祷・経が、怪異を退散させる根本的な解決策にならない話——【表2】に見る②——(D)の章群——では、怪異に対して仏事や祈祷の効果が全くといていいほどなく、どころか仏事祈祷は怪異に翻弄される人々の無力さを強調すべく位置づけられているという結論が、導き出されるのである。

つづいて『曾呂利物語』における、仏事・祈祷・経が、怪異を退散させる根本的な解決策にならない話——【表3】に見る②——(D)の三話——のうち、『曾呂利物語』における仏教の位置づけをより顕著に現していると思われる二話を取り上げ、考察を加えてゆきたい。

このうちの二話である「怨念深き者の魂迷ひありく事」の主人公が、怪異に翻弄されてこそいるものの、命までは奪われていないことから、仏事祈祷の無力さが、本編を典拠とする『諸国百物語』巻一ノ四「松浦伊予が家にばけ物すむ事」に比して希薄であることは、先に述べた。

ついで巻四ノ九「耳きれうん市が事」を取り上げる。信濃国善光寺の中にある比丘尼寺に、うん市という座頭が出入りをしていた。半年ほど来訪せずには後立ち寄ったところ、けいじゆんという弟子比丘尼——実は三十日程前に死んでいた——に、彼女の寮に招き入れられる。そのうちに食べ物もなくなり、迷惑のあまりにようよう寮を抜け出したうん市は、そこで初めて、けいじゆんが既に死んでいたことを知らされる。寺中で行った、怨念を払う百万遍の念仏修行のため、うん市は一度は怨念から逃れ得るのだが、帰国途中「いかにも身の毛よだち、あとより取り付かるゝやうに」覚えたうん市は、ある寺に寄つて長老に助力を求め、経緯を知った「有験」の僧侶たちは、うん市の身体に尊勝陀羅尼を書き付ける。そうこうしていとけいじゆんがやって来、うん市を見つけて「噫可愛や座頭は石になりける。」と撫で直し、耳に少し陀羅尼の書き足らぬところを見つけ「茲にう

ん市が切れ残りたる。」と云って、耳を引き千切って帰っていったというのが、おおよそのあらすじである。

百万遍の念仏修行のため、けいじゆんの亡霊が「念仏の功力に因りて、ひた寝入りに寝入り性体もなかりければ」という有様になる点。陀羅尼のために、亡霊の目にはうん市の姿が「石」となつて映じている点などから、仏教の法力が怨霊の前には全くの無力ではない様が、ここからはうかがわれるのである。

以上の事柄から、『曾呂利物語』における、仏事・祈祷・経が、怪異を退散させる根本的な解決策にならない章群においては、仏教の功力が怪異に対して果たす役割が全くの無ではない、あるいは『諸国百物語』に比し、仏事の験のなさがさほど強調されてはいないという傾向が、見出されるのである。

そして、これらの事象を考慮すると『曾呂利物語』、『諸国百物語』における、仏事・祈祷・経が、怪異を退散させる根本的な解決策にならない章群からは、

①『諸国百物語』においては、理不尽な形で死に追いやられた死者の怨念の前では、仏事祈祷は全きまでに無力である。

②『曾呂利物語』においては、仏教の験力は、怨霊の前では全くの無力ではない。

といった文芸的意匠が、導き出されるのである。

(二)．万能の「聖域」としての寺

ついで『諸国百物語』における、寺という「聖域」が怪異を根本的に退散させられない話——【表2】に見る②——(E)の二話——の読解を進めてゆく。

初めに、巻一ノ十二「駿河の国美穂が崎女の亡魂の事」を取り上げる。なお、本編に関しては「第五章 「執心」譚の系譜」において、「執心」譚としての観点から読解を進める為、ここでは梗概と、怪異に対する仏教的なもの効力について記してゆく。

——海を泳いで男の許に通っていた女が、男の背信の為に命を落とす。しかし女の亡魂は男を取り殺し、それから後もその「しうしん」は消えず、周囲に様々の怪異を引き起こした、というのがおおよその概略である。

このような物語展開、さらには、

この亡魂ぼうこんのしうしん今にのこりけるにや、清見寺きよみでらに火事くはじゆけば、美穂みほも
かならず焼やけ、美穂みほに火事くはじゆけば、清見寺きよみでらもかならずやくると也。是れ
よりして今も美穂みほに火事くはじあれば清見寺きよみでらに柴しばたき、清見寺きよみでらに火事くはじあれば、

美穂みほにはかやをもやして、たがいに火事くはじのまねびをする也。

といった、仏教の聖域である筈の寺が女の「しうしん」に侵犯されている描写。そしてその対応策として仏事祈祷の類を用いず、火事の真似ごとをして亡魂の目を欺くという、極めて原始的な方法を用いている描写からは、怪異に対して仏教が劣位に置かれている様が、うかがわれるのである。

ついで、巻四ノ八「土佐とさの国にて女の執心くちしん蛇へびになりし事」を取り上げる。——土佐の国に狩猟を生業として世を渡る人がいた。その女房というのが極めて嫉妬深く、男が狩りに出るにもついて回る有様だった。男はあまりのうるささに、ついてきた女を刺し殺した。すると近くの大木の根から蛇があらわれ、男の首に巻き付いた。男が高野山へ出向くと、不動坂の中程で蛇は首から離れた。安堵した男が、高野に百日あまり滞在し、もう変事はなかりうと下山したところ、不動坂の中程で件の蛇にまつわりつかれた。修行の旅に出ることを決意した男は、大津の浦で乗合舟に乗るが、その舟は沖の中程で動かなくなる。男が首の蛇を人々に見せ、異変はこのせいであろうと一部始終を懺悔したところ、人々は驚きかつ責めたので、男は舟から身を投げて死んだ。その時蛇は首を離れ、大津の方に泳いでゆき、舟も無事に目的地についたというのが、おおよそのあらすじである。

この「土佐の国にて女の執心蛇へびになりし事」は、その後半部を平仮名本『因果物語』巻一ノ一「執心ふかき女の、蛇へびに成たる事」に依拠する（19）。

もつとも、「執心ふかき女の、蛇に成たる事」においては、殺害されるのは男の旅先での浮気相手であり、殺害の場所が沖にこぎ出した舟の上であるなど、「土佐の国にて女の執心蛇へびになりし事」との設定上の相違点が幾つか見受けられる。

しかしながら、高野山の持つ「女人結界けっかい」の力が、男の身に降りかかった怪異を、根本的に退散させるには至らないという構図は「土佐の国にて女の執心蛇へびになりし事」、「執心ふかき女の、蛇に成たる事」ともに共通している。

こうした事柄からは、「女の執心」の前にあつては、寺の持つ霊的な力が根本的な意味をなさないという設定が、強調されている様がうかがわれ

る。

なお、前述してきた、仏教の象徴ともいうべき寺が、亡魂の執心を根本的には退散させられないという傾向を有する章群は『曾呂利物語』には見受けられない。

以上、本章段においては、『諸国百物語』、『曾呂利物語』における、寺という「聖域」が怪異を根本的に退散させられない話を取り上げてきた。結果、これらの章群には、

① 『諸国百物語』において、寺という仏教の聖域は、怪異に起因する業を背負った人間を、根本的に救済するに至ってはいない。

② 『諸国百物語』においては、寺そのものが怪異に侵犯されている話も見受けられる。

といった意匠が見出され、これらの事柄から『諸国百物語』における前述の章群においては、『曾呂利物語』に比し、仏教の怪異に対する抵抗力が、より一層低下をしている様を提示しているという結論が、導き出されるのである。

(三)．怪異を退散させられない僧侶

『諸国百物語』における、寺という「聖域」が怪異を退散させられない章群——【表2】に見る②——(E)——からは、仏教的なもの無力量がより強調され、結果として怪異に起因する脅威が増大していることは、先に述べた。

つづく本章段では『諸国百物語』、『曾呂利物語』における、僧侶が怪異を退散させられない話——【表2】【表3】に見る②——(F)——を取り上げてゆく。

先ず『諸国百物語』におけるこれら四話——【表2】に見る②——(F)——のうち、『諸国百物語』における僧侶の有り様を顕著に示していると考えられる三話を扱ってゆく。

はじめに、巻一ノ十七「本能寺七兵衛が妻の幽霊の事」を例として挙げる。京都本能寺に医学を能くする僧侶がいた。檀家に七兵衛という者がいたが、その女房が死病にかかった。末期の三日前に件の僧侶が女房を見舞うと「髪の毛、上へはへのぼり、貌は朱のごとくあかくなりて、おそろしき事云ふばかりなし。」といった有様を呈している。驚いた僧侶が寺へ帰ったところ、件の女房は三日後に死に、遺骸は本能寺に安置された。それから三日目の夜半に、裏口から人の足音が聞こえた。件の僧侶が兄弟そろって用心していたところ、台所の下人の大声が響いた。兄弟の僧侶がわけを問うと、七兵衛の内儀が来て、水を飲ませると言った由、あまりの恐ろし

さのため、そこに水があるので飲めといったところ、水舟からかいげで水を飲んでいたが、その後は知らぬ由を語った。不思議に思えば、水の流れた痕があり、かいげも捨て置かれていたというのが、おおよそのあらずじである。

すなわち、「本能寺七兵衛が妻の幽霊の事」におけるこの僧侶は、末期の女房の凄まじい姿を目の当たりにし、何もせずに「おどろき帰」っているのである。法力を用いて怪異に抵抗しようという、僧侶としての使命感が、自己保存本能にとって代わられている様子がうかがわれる。

前述してきた『諸国百物語』、『曾呂利物語』における有名無名の僧侶たちが、験力を用いて怪異を退ける、ないしは鎮めている章群——【表2】

【表3】の①—(B)—とは、対照的である。

このように、怪異に相対した僧侶が臆し、無力さを露呈する様は、巻三ノ六「ばけ物に骨をぬかれし人の事」にも見受けられる。——京都七条が原の墓所にばけ物が出るという話があったので、若者たちが集まり、そのうちの一人が件の墓所へ夜半時分に出かけた。すると、八十歳ほどの老人——白髪で背丈は八尺ばかり、顔はすすけ、目は手のひらに一つあり、前歯二本を剥き出すという姿——が、若者めがけて追いかけてきた。男は近くの寺に逃げ込み、僧侶は男を長持にかくまった。そこへ件の化け物がやって来、寺をつくづくと見て帰る風であった。しかし件の長持のあたりから、骨を噛むような音がして、うめき声が聞こえたが、僧侶は恐ろしさのあまり、屈んで座っていた。やがて化け物が帰ったようであったので、僧侶が長持のふたを開けたところ、若者は骨を抜かれ、皮だけになっていったというのが、「ばけ物に骨をぬかれし人の事」の、おおよそのあらずじである。

ここでもまた、化け物を目の当たりにした僧侶は「あまりのをそろしさに、かぐみてゐ」るだけである。さらには、経文を唱えて男を怪異から守るどころか、長持にかくまうという原始的な手段を取るのが関の山、という僧侶の姿とがあいまって、怪異に相対した僧侶の無力さ、臆病さが、ここからも伝わってくるのである。ひいてはこのような僧侶の姿は、作品に登場する化け物の脅威を、一層高めているといえよう。

つづいて巻二ノ四「仙台にて侍の死霊の事」を取り上げる。

「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり——『曾呂利物語』との比較を中心に——」において言及したように、本編は棺の中から蘇った死骸が、傍らで眠っている僧侶たちを次々に殺してゆく話である。

前述の二話とは異なり、『曾呂利物語』巻二ノ六「将棋倒しの事」を典拠とすることが明らかになっている(20)。「仙台にて侍の死霊の事」のあらずじは典拠に忠実なものであり、怪異を目の当たりにした僧侶二人が、二人の僧おどろき台所へにげ入り、

ふたり 二人の僧あまり恐ろしさに、息も立てず居たりけるが、次第に近づき
 ければ、逃ぐるともなく走るともなく、庫裏へ倒れ入りぬ。
 「将棋倒しの事」

と、驚愕や恐怖にかられ、その場から逃走する箇所も共通している様うかがわれる。

さらに「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり——『曾呂利物語』との比較を中心に——」で述べたように、「仙台にて侍の死霊の事」の末尾には、「棺もものごとくにして有りけれども死人はなし。ふしぎともなかくたぐひなき事也。」という、典拠にはない遺骸消失の怪異が、新たに付加されているのである。

そして死体消失というこの現象は、本来ならば法力を以て怪異と対すべき筈の僧侶の無力さとあいまって、作品に漂う恐怖感を増大させる効果を有しているといえよう。

以上の事柄から、『諸国百物語』における、僧侶が怪異を退散させられない章群——【表2】の②——(F)——は、怪異に相対した僧侶の無力さ、臆病さを描くと同時に、僧侶たちのそうした姿が、作品の有する恐怖感はいやまず効果を挙げているという結論が、導き出されるのである。

三—三・僧侶が醜態をさらす章群

『諸国百物語』における、仏教・僧侶によっても、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得られない章群は、怪異の前にあつては仏事祈祷は殆ど意味をなさず、僧侶も無力さを呈するばかりであり、このような有様を描くことで、話の有する怪異の色合いをより強調していること。『曾呂利物語』の同章群においては、『諸国百物語』ほど仏事祈祷の無力さが強調されていないことは、先に述べた。

ついで、『諸国百物語』、『曾呂利物語』における、僧侶が醜態をさらす章群——【表2】【表3】に見る③——の読解を進め、その特徴を比較し、考察を加えてゆきたい。

まずは『諸国百物語』における、僧侶が醜態をさらす章群——【表2】に見る③の四話——を取り上げる。

このうちの二話、卷一ノ三「河内の国 關峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」は、『曾呂利物語』卷二ノ七「天狗の鼻つまみの事」を出典とする(21)。本編については「第七章 「天狗」譚の系譜——『諸国百物語』と『狗

張子』——」において、「天狗」譚という観点から詳細な読解を進める為、ここでは梗概と仏教色との関連を記すにとどめ置くが、己の心の強靱さを鼻にかけた僧侶・道珍が、天狗にその高慢を罰せられ、臆病になるというのが、「河内の国關峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」の、おおよそのあらずじであり、典拠とされる「天狗の鼻つまみの事」にもおおむね忠実なものである。

しかしながら前述した小澤氏は、これら二話の比較を通じ、「河内の国關峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」の結末においては、「天狗の鼻つまみの事」に見られる「何事なにじごとによらず、よろづ高慢かうまんなるものわざわひに逢あへることこれに限かぎるべからず。」という教訓が削除されていることを指摘している（22）。

『諸国百物語』の作品が『曾呂利物語』のそれに比し、教訓色が希薄になつていくという傾向は、ここでも見出されるのである。

ついで、卷一ノ十三「越前えちぜんの国永平寺の新発意しんぱちが事」の読解を進める。——越前の国永平寺に美僧がおり、ある時都へのぼった。その帰り道、僧侶の美貌を見た同宿の女旅人が、夜更けに閨に忍んでくる。件の女と契りを交わした美僧であるが、あくる朝女が六十すぎの見苦しい巫女と知つて興醒めする。あまりに執拗につき従つて来る女にうんざりした美僧は道中、舟から女を水底に突き落として殺す。かくして永平寺に帰り着いた美僧を、たけ十丈ばかりの大蛇が襲うが、美僧の家に代々伝わる吉光の脇差の靈威によつて、難を逃れる。だが師匠が美僧をたぶらかして脇差を取り替えたので、僧侶は大蛇に食い殺されてしまう。美僧は師匠のために命を失つたのだと言つて、人々は師匠を嘲つたというのが、「越前の国永平寺新発意の事」のおおよそのあらすじである。

『曾呂利物語』卷二ノ八「越前えちぜん国白鬼女はくきぢぢよの由来ゆらいの事」を出典とする（23）本編は、典拠のあらずじをほぼ忠実に踏襲しているが、結末の一条を異にする。以下に当該箇所を挙げる。

このわきざしをかへけるゆへに、そのゝちくだんの大だいじや又来たりて、
 新発意しんぱちをやすくと引きさき／＼くひころしけると也。此新発意しんぱち師匠しやう匠やう
 へにいのちをうしなひけるとて、みな人師匠しやう匠やうをあざけりける。

「越前の国永平寺の新発意が事」
 いろ／＼云いひてよしみつに換かへて取りたりけるに、大蛇だいじや思おもいの儘まに寮れう

へ押入り、彼の僧を引き裂きてやがて食ひてげり。それより彼の所はくきぢよといふは、此のいはれとぞ申し侍る。

「越前国白鬼女の由来の事」
傍線部からうかがわれるように、地名由来説話から、僧侶の物品に対する執着に起因する醜態へと、物語の眼目は変貌を遂げているのである。

そして、これに類似したことは、卷三ノ十四「豊後の国西迎寺の長老金に
しう心のこす事」にもあてはまる。

本編については「第五章 「執心」譚の系譜」において詳述する為、ここではその梗概と、僧侶の露呈する醜態を記すにとどめ置くが、死んだ僧侶が棺から這い出し、庭の一隅を指し示す、そこを弟子たちが掘ったところ、金子千両の詰まった美しい壺が出てきたというのが、本編のおおよそのあらすじである。

さては此かねにしうしんをのこされけるゆへとて、みな人ひばうしけると也。

という結末の一条からは、「豊後の国西迎寺の長老金にしう心のこす事」の眼目が、僧侶の金銭に対する執着という醜態であることがうかがわれるのである。

ついで卷五ノ八「狸廿五のぼさつの来迎をせし事」を取り上げる。山奥の堂に住まいする僧侶がおり、その留守中を狙っては狸が食べ物を取っていった。ある時僧侶は、餅と偽って、狸に焼けた石を与える。大火傷をした狸は逃げ帰る。ある夜、僧侶の夢枕に如来が立ち、僧侶に火定に入ると、そうすれば自分は来迎し、西方へすくい取ることを告げる。目覚めた僧侶は、自分が火定に入って往生する日の人々に告げて回る。火定の当日、僧侶が薪の上にといたところ、西方から菩薩たちが光を放ってやって来る。人々が有り難がり、薪に火をかけたので、僧侶は焼死した。その間に仏たちが笑い声をたてたので、人々が驚き見たところ、古狸たちが山へ逃げていった。件の焼け石を食わされた狸が、仕返しをしたのだということである。

前述の二話と異なり、僧侶を非難する直接的な表現は、作品中には見受けられない。しかしながら、

そのまにくだんの仏たちはみな／＼すがたをあらはし、一どにとつとわらひけるを、人々おどろき見れば、ふる狸ども二三千びきほど山へにげ入りけると也。かのやけ石のためきあだをなしけると也。

「狸廿五のぼさつの来迎をせし事」
に見る、たぬきたちの嘲笑、「かのやけ石のためきあだをなしけると也。」

という一条からは、たぬきに焼石を食わせるといふ残酷ないたずらをする。そしてたぬきの「来迎」のお告げを鵜呑みにし、焼死することたぬきに報復されてしまった——そうした僧侶の愚かさが、間接的に伝わってくるといえよう。

以上、前述の章群からは、教訓的色彩こそ影を潜めているものの、僧侶の高慢さ、貪欲さ、愚かさに起因する醜態が眼目として描かれているという結論が導き出されるのである。

『諸国百物語』が単なる怪談集ではなく、怪異を通じて人間の醜悪な側面を描くという、高度な文芸的意匠を備えていることがうかがわれよう。

つづいて、『曾呂利物語』における僧侶が醜態をさらす三話——【表3】に見る③——の読解を進めてゆく。

このうちの二話——「天狗の鼻つまみの事」、「越前国白鬼女の由来の事」——については、『諸国百物語』の典拠となる段階で、教訓的表現が削除されている点、地名由来説話という物語の眼目が変貌を遂げている点を、それぞれ述べてきた。

『諸国百物語』の同章群に比し、僧侶の醜態に対する批判が希薄である様、教訓的要素が濃厚である様がうかがわれよう。

ついで卷三ノ七「山居さんきよの事こと」を取り上げる。京の山奥の庵で暮らしている僧侶の許を、ある時友人が訪れる。その夜、人が亡くなったという知らせが届き、日頃の約束の通り、遺骸を取り置いて欲しい由を告げられる。僧侶は友人に、いかに恐ろしいことがあっても、音をたてずにいて欲しいと言ひ、庵を後にする。やがて、一人残された友人のところへ「絵ゑに書かける鬼おにの形かたちしたる者もの」がやって来、僧侶の寝所へと入ってゆく。寝所からはしばらくの間「物食ものくふ音おと」がする。やがて件の鬼は姿を消す。不思議に思つた友人が、僧侶の寝所を覗くと、人の死骸が山のように積んであつた。鬼はこれを食べつていたのだと思つていると、夜明けに僧侶が帰つてきたので、友人は一部始終を語つた。僧侶は、そういつたことはいつもあることだ、と言ひ、素知らぬ風で友人をもてなした。夜やってきた鬼の姿をした者は、僧侶であつたのだらうというのが、おおよそのあらすじである。

よく是れを案あんずるに、何時いつの程ほどにか人ひとを食くひ習ならひ、其その罪果つみはたして一つ
の鬼おにとなれり。 「山居さんきよの事」

傍線部の表現からうかがわれる、鬼への変貌が人を食うという悪業に起因する因果的な結果であるという思想は、仏教的色彩の濃厚なものといえよう。

以上の事柄から、『曾呂利物語』における僧侶が醜態をさらす章群——【表3】に見る③——には、教訓的・仏教的色彩が濃厚であり、『諸国百物語』のような、怪異を契機に人間の醜悪さを描くといった傾向は見受けられないことがうかがわれるのである。

以上、本章段においては、『諸国百物語』、『曾呂利物語』における、僧侶が醜態をさらす章群——【表2】【表3】に見る③——を取り上げてきた。その結果、

① 『諸国百物語』における、僧侶が醜態をさらす章群は、僧侶らの負の側面がより強調されるか、ないしは主題となっているものの、教訓的色彩は希薄である。

② 『曾呂利物語』における、僧侶が醜態をさらす章群は、僧侶らの負の側面は『諸国百物語』のそれに比して希薄であり、代わりに仏教的色彩が濃厚となっている。

といった傾向がうかがわれ、『諸国百物語』の唱導的色彩が『曾呂利物語』に比べてその度合いを減じているという結論が、導き出されるのである。

三―四・僧侶が世俗から害される章群

『曾呂利物語』における、僧侶が醜態をさらす章群からは、教訓的・仏教的色彩が伝わってくることに。

対する『諸国百物語』の同章群からは、教訓や仏教的思想はさほど見られず、僧侶の醜態が眼目として描かれていること、それによって怪異が人間の醜悪さを暴露する契機になる効果をあげていることは、先に述べた。

ついで僧侶が人間からの害に対して、劣位に立たされる章群を取り上げ、考察を加えてゆく。

なお、この章群は、『諸国百物語』には見受けられず、『曾呂利物語』に一話収録されているのみである。『曾呂利物語』巻五ノ五「因果懺悔いんぐわさんげの事」——【表3】——に見る④——がそれに該当する。

旅の僧侶が山中で山賊に遭遇し、辛くも難を逃れたものの、その日に宿を取った家が山賊の住まい。慌てて逃げ出した僧侶が、次に宿を取った家では、密夫と女房とが共謀して、夫を殺害する場面を目の当たりにする。密夫と女房に殺されかけた僧侶は、機転を利かせて二人を返り討ちにし、山中の古宮で夜明かしをすることになる。そこへ、密夫と女房に殺された夫の亡霊がやって来、僧侶に菩提を弔って欲しい由を告げる。かくて僧侶は諸国行脚を思いとどまり、都のほとりに庵をかまえ、道心堅固の僧侶として一生を終えた、というのがおおよそのあらすじである。

僧侶が遭遇した災難や怪異が、仏道に専念する契機として位置づけられ

ている点や「真まことに仰あやぎ尊たふとむべきは仏ほとけの御誓おんちかひなり。」という結末の一条からは、仏教・唱導的色彩の濃厚な様子がうかがわれるのである。

以上の事柄から、『曾呂利物語』における僧侶が人間からの害に対して、劣位に立たされる章群は、『諸国百物語』と比較した際の『曾呂利物語』における仏教的思想の濃厚さを、より強調しているという結論が導き出されるのである。

三一五・まとめ

以上、第三章では『諸国百物語』における念仏・経文・加持・僧侶ないしは仏の功力によって、人間が怪異に相對している章群、ないしは僧侶を主人公にした章群などの読解。

ならびに『諸国百物語』がその典拠として負うところが多い『曾呂利物語』における仏教の位置づけとの比較を通じ、怪異に対する仏教の役割、唱導的色彩に考察を加え、『曾呂利物語』との文学的特質の違いを明確にすることを試みてきた。

結果、これらの章群は、①仏教によって、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得る章群、②仏教によっても、怪異の被害者ないしは亡霊が救済を得られない章群、③僧侶が醜態をさらす章群、④僧侶が人間からの被害に遭遇する章群の四つに大別され、さらに①の章群は(A)経・念仏・加持の功德を扱った話、(B)僧侶の法力・功德・機転を扱った話、(C)仏教帰依による罪業・苦悩の消滅を扱った話の三パターンに、②の章群は(D)仏事・祈祷・経が、怪異を退散させる根本的な解決策にならない話、(E)寺という「聖域」が怪異を根本的に退散させられない話、(F)僧侶が怪異を退散させられない話という、三つの話型に細分化されうる。

そしてこの①―(A)、(B)、(C)の章群からは、
①『曾呂利物語』においては、仏教の功力を通じて、唱導的・教訓的要素を強調している。

②『諸国百物語』においては、仏教の怪異に対する防衛的・対抗的側面をそれぞれ強調している。

③『諸国百物語』においては、怪異を通じて、それを引き起こした人間の行為、ないしは心情の負の側面を描くことに、より力点を置いている。

④『諸国百物語』においては、僧侶・修行者の法力が、怪異・災いへの対抗・防衛手段である話が目立つ。

⑤『諸国百物語』における、僧侶の法力・功德・機転を扱った章群は、著名人を登場させ、その人物が験力を以て怪異に対抗する様を描いて読者の興味を惹くものと、『曾呂利物語』を出典とする、無名の僧侶の活躍を通じて、仏教的・教訓的要素を描くものとに大別される。

⑥『曾呂利物語』においては、怪異を仏教繁栄ないしは仏道に入る契機として位置づけるといふ傾向が見受けられる。

といった特質が見受けられ、『諸国百物語』は『曾呂利物語』の仏教的色彩を継承しつつも、必ずしもそれが『曾呂利物語』のようには濃厚ではないこと、物語の有する娯楽色が増していることがうかがわれるのである。

さらに②―(D)、(E)、(F)の章群からは、

①『諸国百物語』において、妖怪や死者の怨嗟の前にあつては、仏事祈祷は無力である。

②『曾呂利物語』において、怪異に対する仏教の抗力の劣位性は、『諸国百物語』程に強調されていない。

③『諸国百物語』において、寺という仏教の聖域は、怪異に起因する業を背負った人間を、根本的に救済するに至つてはいない。

④『諸国百物語』においては、寺そのものが怪異に侵犯されている話がある。

⑤『諸国百物語』において、怪異に相對した僧侶の無力さ、臆病さを描いた作品は、僧侶たちのそうした姿が、物語の有する恐怖感をいやます効果を挙げている。

といった特徴が見受けられ、これらの事柄から『諸国百物語』における前述の章群においては、『曾呂利物語』に比し、仏教の怪異に対する抵抗力が、より一層低下をしている様、それに反比例する形で怪異の脅威を強調している様を提示しているのである。

そして③の僧侶が醜態を晒す章群からは、

①『諸国百物語』における、これらの章群は、僧侶らの負の側面がより強調されるか、ないしは主題となつているものの、教訓的色彩は希薄である。

②『曾呂利物語』における、これらの章群は、僧侶らの負の側面は『諸国百物語』のそれに比して希薄であり、代わりに仏教的色彩が濃厚となっている。

といった傾向がうかがわれ、『諸国百物語』の唱導的色彩が『曾呂利物語』に比べてその度合いを減じているといふ結論が、ここからも導き出されるのである。

また、僧侶が人間からの被害に遭遇する章群④においては、

①『諸国百物語』にはこのパターンの話は収録されておらず、物語展開という観点から見ても『曾呂利物語』の仏教的・唱導的色彩の濃厚さを強調している。

といった事柄がうかがわれるのである。

以上の点から、『諸国百物語』における仏教・僧侶を扱った章群においては、『曾呂利物語』に比して仏教的・教訓的色彩が希薄となつており、それに反比例する形で、その怪異のもたらす脅威、ならびに娯楽性がより強調されているといふ結論が、導き出されるのである。

- (1) 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)〔初出〕、『諸国百物語』成立の背景(『長野県短大紀要』第二十八号、一九七三・十二)〕
- (2) 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」(『大妻女子大学大学院文学研究科論集』第二号、一九九二・三)
- (3) 『諸国百物語』の典拠探索は、太刀川清氏による「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)〔初出〕、『諸国百物語』成立の背景(『長野県短大紀要』第二十八号、一九七三・十二)〕に始まる。加えて現在では、堤邦彦氏「近世説話の一視覚―唱導から文芸への軌跡―」(内田保廣氏他編『近世文学の研究と資料―虚構の空間―』、三弥井書店、一九八八・十二)、高田衛氏他編『叢書江戸文庫2 百物語怪談集成』(図書刊行会、一九八七・七)における太刀川氏の「解題」及び、小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」(註(2)前掲)、江本裕氏の「延宝期の仮名草子『諸国百物語』序説」(高田衛氏編『西鶴と浮世草子研究 特集・怪異』第二号、笠間書院、二〇〇七・十一)などの研究により、『諸国百物語』はうち二十六話を『曾呂利物語』に、各三話を『宿直草』(『御伽物語』)、『沙石集』に、二話を平仮名本『因果物語』に、各一話を片仮名本『因果物語』、『剪燈新話』、『本朝神社考』に依っていることが明らかになっている。
- (4) 註(2)前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」
- (5) 池田彌三郎氏「人を指す幽霊」(『日本の幽霊』中央公論社、一九七四・八)
- (6) 註(3)前掲 堤邦彦氏「近世説話の一視覚―唱導から文芸への軌跡―」
- (7) 中里隆憲氏「蟹満寺説話と南山城」(日本霊異記研究会編『日本霊異記の世界』、三弥井書店、一九八二・六)
- (8) 黒沢平三氏「蟹満寺縁起の源流とその成立―民話の伝説化―」(『国語と国文学』第四十五巻第九号、一九六八・九)
- (9) 近世においては、寛文八年(一六六八)の『一休はなし』をはじめ、寛文十二年(一六七二)の『一休閑東咄』など、一休宗純を題材にした仮名草子が刊行されている。また一休自身にも康正二年(一四五六)の『自戒集』、翌年の『一休骸骨』、文明十二年(一四八〇)の『狂雲集』といった著作がある。三好修一郎氏は『日本奇談逸話伝説大事典』(志村有弘氏・松本寧至氏編、勉誠社、一九九四・二)の「一休」の項において、一休の「人口に膾炙した頓知頓才や風狂の逸話」は、江戸時代に入って『一休骸骨』、『狂雲集』などを素材にしたものであると述べてい

る。

(10) 西田直樹氏は『「仮名書き絵入り往生要集」の成立と展開 研究篇・資料篇』(西田直樹氏編著、和泉書院、二〇〇一・四)において、近世期には寛和元年(九八五)に書かれた源信の『往生要集』をもとにした、寛文三年(一六六三)の『往生要集』、寛文三年から寛文八年(一六六八)頃の刊行とみられる『絵入往生要集』、寛文十一年(一六七一)の『多入往生要集』などが出版されたこと、また「寺院において僧侶が、

家においては主人が、しつけの一環として読んで聞かせていたと考えられる。」僧侶以外の世俗の人々の需要も多かったと考えられている。と述べており、源信の名がその著作とともに近世期の人々に流布していたものであった様子がわかる。また源信自身も『今昔物語集』や『発心集』といった説話集に登場しており、高橋貢氏は『日本奇談逸話伝説大事典』(註(9)前掲)の「源信」の項において、「源信話でもっとも著名な話」として源信とその母の母子愛を扱った『今昔物語』巻十五「源信僧都ノ母ノ尼、往生セル語」を挙げ、「源信の魅力はどこにあるのか」というと、源信は名聞利養に関心なく、貴族頭門に迎合せず、徳をみがき人格をたたえて庶民救済を第一としたこと、及び源信の人格には人間味豊かな愛情が通っていることにある。」と述べている。

(11) 註(3)前掲 江本裕氏「延宝期の仮名草子『諸国百物語』序説」
(12) 渡辺守邦氏は「晴明伝承の展開——『安倍晴明物語』を軸として——」(『国語と国文学』第五十八巻第十一号、一九八一・十一)において清明の名は「花山天皇の讓位出家を天象に勘えて察知したこと(『大鏡』)や、道長に贈られた早瓜に毒気あるを占った話(『撰集抄』巻八、『古今著聞集』巻七等)、あるいは智興内供の病いを大山府君の法を修して癒した際の三井寺鳴不動の由来譚(『宝物集』中巻、『発心集』巻六等)など、多くの説話の主として知られる。」ことを述べている。また渡辺氏は「清明伝承の成立——『簗簗抄』の「由来」の章を中心に——」(『国語と国文学』第六十一巻第二号、一九八四・二)において『簗簗抄』(成立年不詳)によって「原型を提供」された寛文二年(一六六二)の『安倍晴明物語』が、清明の物語を文芸の世界に入れ、古浄瑠璃『しのだづま』の成立へと展開していったことを述べている。

(13) 註(1)前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百物語』と『諸国百物語』」

(14) 註(2)前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(15) 中村博保氏「三 「吉備津の釜」の構想」(『上田秋成の研究』、ペリかん社、一九九九・四)「初出：「吉備津の釜の構想」(『近世文芸』第七号、一九六二・三)」

(16) 註(1)前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百

物語』と『諸国百物語』

(17) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百物語』と『諸国百物語』」

(18) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百物語』と『諸国百物語』」

(19) 註(2) 前掲 小澤江美子「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(20) 註(3) 前掲 太刀川清氏「解題」

(21) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百物語』と『諸国百物語』」

(22) 小澤江美子氏は「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」(註(2) 前掲)において、『曾呂利物語』では巻二ノ七「天狗の鼻つまみの事」をはじめとし、その末尾に「教訓を付す話」は、「全体みづかみの二十パーセントを占める」が、『諸国百物語』では、巻一ノ九「京みやう

東洞院ひがしのとういんかたわ車くるまの事」、巻二ノ八「魔王まわう女むすめにばけて出家しやうの往生わうじやうを妨げんとせし事」といった「全体みづかみの二パーセント」で、「しかもその色合いろあひいは薄うすくなっている。」ことを指摘している。

(23) 註(1) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百物語』と『諸国百物語』」

以下、平仮名本『因果物語』本文引用は全て朝倉治彦氏編『仮名草子集成』第四卷(東京堂出版、一九八三・十一)に、『元享釈書』は『国史大系第31巻 日本高僧伝要文抄・元享釈書』(黒板勝美氏・国史大系編集会編、吉川弘文館、一九六五・六)に、『古今著聞集』は『日本古典文学大系84 古今著聞集』(永積安明氏校注、岩波書店、一九六六・三)に、『今昔物語集』は『日本古典文学大系222〜26 今昔物語集一〜五』(山田孝雄氏他校注、岩波書店、一九五九〜一九六三)に、『沙石集』は『沙石集』巻七・八(室町通鯉山町、小嶋弥左衛門、一六四七年刊、早稲田大学中央図書館蔵)に、『本朝法華験記』は『日本思想大系7 『往生伝 法華験記』(井上光貞氏他校注、岩波書店、一九七四・九)に依る。

【表1】『諸国百物語』における仏教・僧侶を扱った章群の比率と『曾呂利物語』との比較

	仏教・僧侶を扱った作品群	①仏教によって、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得る作品群	②仏教によっても、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得られない作品群	③僧侶が醜態をさらす作品群	④僧侶が世俗から害される作品群
『諸国百物語』	26/100 (26%)	13/100 (13%)	9/100 (9%)	4/100 (4%)	/
『曾呂利物語』	15/41 (37%)	7/41 (17%)	4/41 (10%)	3/41 (7%)	1/41 (3%)

* 仏教・僧侶を扱った話/所収話数

* カッコ内は割合 (小数点第一位以下四捨五入)

【表2】『諸国百物語』における仏教・僧侶を扱った章群の分類

	巻次	怪異の正体	怪異と仏教・僧侶との関係	
①念仏・経文・加持・僧侶ないしは仏の功力によって、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得る章群	一ノ八	亡霊(女)	先妻の亡霊を法花経が退ける。	
	二ノ十	毒蛇	念仏で毒蛇が改心する。	
	四ノ十二	大蛇	大蛇を法花経が退ける。	
	四ノ十四	女の執念	女の執念が法花経で消滅する。	
	五ノ七	三本杉の霊	三本杉の霊(最終的に女の姿を取る)が加持で退散する。	
	五ノ十九	生霊(女)	生霊の正体を法花経が明らかにする。	
	(B) 僧侶の法力・功德・機転を扱った話	一ノ十	亡霊(若衆)	亡霊に見込まれた僧侶が、死者の菩提をとむらう。
		二ノ八	魔王(女)	僧侶が仏果と機転により、往生を妨げに來た魔王(当初は女の姿を取る)を退ける。
		二ノ二十	死人	死人の異変が聖人の教訓・経で鎮まる。
三ノ九		蛇	僧・欽朱が毒気のある瓜を加持する。	
	三ノ十九	艶文の執心	一休が艶文の文主の執念を鎮める。	

	四ノ二	羅刹女	源信が羅刹女を成仏させる。
(C) 仏教帰依による罪業・苦悩の消滅を扱った話	二ノ三	ろくろ首	ろくろ首である女が、仏道に帰依することで往生する。
②念仏・経文・加持・僧侶ないしは仏の功力によっても、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得られない章群			
(D) 仏事・折禱・経が、怪異を退散させる根本的な解決策にならない話	一ノ四	ばげ物 (女)	仏事折禱で、ばげ物 (女の姿を取る) は一時的な退散をするも、結局は被害者を取り殺す。
	三ノ五	怨霊 (女)	僧侶たちによる大般若経の読経をもとせず、被害者を引き裂いて殺す。
	三ノ十七	蛇 (女の化身)	僧・山伏が加持折禱をするも、女の化身である大蛇を退散させられない。
	四ノ十七	亡魂 (女)	折禱折りの験がなく、四代にわたって当主が亡魂に取り殺される。
(E) 寺という「聖域」が怪異を根本的に退散させられない話	一ノ十二	亡魂 (女)	亡魂の祟りにより、寺が火事になる。
	四ノ八	女の執心	女の執念の化身である蛇に追われた男が高野山に逃げ込むが、一時的な避難に終わる。
(F) 僧侶が怪異を退散させられない話	一ノ十七	幽霊 (女)	死人の異変・亡霊の出現に、僧侶が的陣に対処出来ない。
	二ノ四	死霊 (男)	死人に同僚の僧たちが殺されるのを見た二人の僧侶は、恐怖のあまり逃げ出す。
	三ノ六	ばげ物 (異形の老人)	化け物に追われた男を、僧侶が長持にかぐまうが、化け物に対面すると恐怖のあまり何も出来なくなる。
	三ノ十一	国の権現	病魔退散の折禱をしていた高僧が、妨害に来た権現 (当初は女の姿を取る) に敵り殺される。
③僧侶が醜態をさらす章群	一ノ三	天狗	慢心した僧侶が天狗に脅かされ、臆病になる。
	一ノ十三	大蛇 (女の化身)	弟子の勘差しを横取りした師匠のため、弟子は大蛇から身を守れず殺される。人々は師匠をあざける。
	三ノ十四	死人 (僧侶)	寺の長老が金に執心を持つあまり、死後

		棺から這い出し、金のありかを示す。 人々は長老を非難する。
五ノ八	狸	狸にいたずらをした僧侶がその報復に あいい、狸が化けた菩薩を本物と信じ、その 来迎をあてにして自ら焼死する。

【表3】『曾呂利物語』における仏教・僧侶を扱った章群の分類

	巻次	怪異の正体	怪異と仏教・僧侶との関係
①念仏・経文・加持・僧侶ないしは仏の功力によって、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得る章群			
(A) 経・念仏・加持の功德を扱った話	四ノ五	死人(女)	悪人の死後の異変が、僧侶の引導で収まる。
(B) 僧侶の法力・功德・機転を扱った話	一ノ三	女の妄念	往生の妨害に来た女(正体は鬼神)を、僧侶が功德・機転により退ける。
	二ノ一	稚児・鬼・犬(地蔵の化身)	地蔵を信心している僧侶が、その化身である稚児・鬼・犬によって、信心のほどを試され、信仰を厚くする。
	二ノ五	亡霊(少年)	亡霊に見込まれた僧侶が、死者の菩提をとむらう。
	四ノ四	化物	旅の僧が機転により、化物を退治する。
(C) 仏教帰依による罪業・苦悩の消滅を扱った話	一ノ二	女の妄念	己の妄念が異形の姿(首のみ)となっていることを知った女は、その身を恥じ、出家して後世を祈る。
	四ノ六	化物(女)	山中の辻堂で、出産した女房を化け物(下女の姿を取る)に殺された男が、寺の長老の教訓により出家して道心堅固の僧となり、妻の菩提を弔う。
②念仏・経文・加持・僧侶ないしは仏の功力によっても、怪異の被害者ないしは亡霊・妖怪が救済を得られない章群			
(D) 仏事・祈祷・経が、怪異を退散させる根本的な解決策にならない話	一ノ六	亡霊(女)	北の方の嫉妬により殺された妾の亡霊に、折念祈祷の効果がない。
	二ノ三	怨念深き者	家に取り憑いた化物(女の姿を取る)を

	(女)	退散させようと念仏を始めるが、一時的な効果しかない。	
	四ノ九	亡霊 (女)	亡霊が、被害者の体に書かれた陀羅尼の隙間を見つけ、耳を引きちぎる。
(E) 寺という「聖域」が怪異を根本的に退散させられない話	/		
(F) 僧侶が怪異を退散させられない話	二ノ六	死人 (男)	葬礼の前夜、死人に同僚の僧たちが殺されるのを見た二人の僧侶は、恐怖のあまり逃げ出す。
③僧侶が醜態をさらす章群	二ノ七	天狗	慢心した僧侶が天狗に脅かされ、臆病になる。
	二ノ八	大蛇 (女の化身)	弟子の脇差しを横取りした師匠のため、弟子は大蛇から身を守れず殺される。
	三ノ七	鬼 (僧侶)	山居の僧侶が鬼となり、死人を食べる。
④僧侶が世俗から害される章群	五ノ五	山賊・女・密夫	旅の僧侶が山賊に襲われ、逃亡先の家では女房とその密夫に殺されかける。

四・「後妻うち」の系譜

四―一・「後妻うち」――『諸国百物語』以前

先の章段にて言及したように、『曾呂利物語』に文学的特質の多くを依拠していながらも、本編中の仏教・僧侶を扱った章群においては、『曾呂利物語』に比して仏教的・教訓的色彩が希薄となっており、それに反比例する形で、その怪異のもたらす脅威、ならびに娯楽性がより強調されていることが明らかとなった、『諸国百物語』。

本章ではそこで、『諸国百物語』のさらなる文芸的特質および、近世怪異小説史の中の位置づけを明らかにする為に、そこに収録されている「後妻うち」を扱った話を取り上げる。

後に詳述するように、『諸国百物語』に収録されている「後妻うち」を扱った話は、他の近世初期～中期怪異小説群に比してその数が多く、一つの章群を形成していると言っても過言ではない。

本章段では『諸国百物語』における、これらの「後妻うち」を扱った話を取り上げ、先行作品群ならびに、寛文六年（一六六六）に刊行された『伽婢子』の続編である『狗張子』（1）の刊行年たる元禄五年（一六九二）に至るまでの近世怪異小説（2）に収録された「後妻うち」を扱った話や典拠との比較を通じ、読解を進めてゆく。

そして「後妻うち」という側面から、『諸国百物語』の新たな特性、文芸的価値、ならびに近世怪異小説における「後妻うち」の一潮流を見出すことを、その目的としたい。

初めに、本稿における「後妻うち」の定義について述べる。

堤邦彦氏は「後妻うち」を「離別された前妻のとりまきが、あらかじめ予告したうえで後妻の実家を襲う。その際、男たちは手を出さず、また物だけを壊して人は傷付けない。」という「平安期から鎌倉期にあらわれる」風習と述べている（3）。

歴史小説家の永井路子氏もまた「後妻うち」について「先妻が新しい妻または愛人の所になぐりこみをかけるといふ習慣」であり「平安時代からよくあった。」ことであると言い、さらには「非常識な暴力行為というよりも、むしろ、一種の正当性のある復讐行為と見なされていたらしい。」と述べている（4）。

こうした両者の考証からは、「後妻うち」が、前妻が後妻ないしは愛人に対して行う、正当性のある暴力行為であり、平安時代から鎌倉時代にかけての慣習であったことががわかれるのである。

しかしながら、天和二年（一六八二）に刊行された、浅井了意の手による中国故事説話集『新語園』における「後妻うち」は、これらとは少しく趣を異にする。

例えば巻二ノ九「妬妻雷撃トサイライゲキ 五国故事」(5)は、夫・王延翰の愛妾数十人を、様々の惨たらしい手段で殺害した、博陵氏の娘である本妻・崔氏が、雷に撃たれて死ぬ話である。そして本編における崔氏は「其性、妬悍オカミケンクク」「残忍ザシニン人物として設定されているのである。極めて否定的な評価を与えられる。そしてこのような、いわば「悪人」が雷に撃たれて死ぬ話は、『新語園』中に散見される。

巻五ノ五十五「不孝婦遇ノ雷震ニ 稽神録」(6)は、幼いころ戦で生き別れた父親が、老いて貧窮した有様で訪ねてきたのを、嘲笑して追い出した娘——歐陽氏の妻となっている——が雷によって惨死する話である。

また、巻五ノ五十六「売ウリテ魚膏ギヨカウ 受ウク神罰シンハツ」(7)は、魚の膏を胡麻油に混ぜて売っていた油売りが神の怒りを買ひ、雷によって死ぬ話であるし、巻五ノ五十七「蛟龍藏カクル 指シ甲カウニ」(8)は、罪科を犯した蛟龍が、名僧・道宣の小指の爪の中に隠れていたものの、天帝から罰として、雷に撃たれて死ぬ話である。

さらに前述の『狗張子』、寛文元年(一六六一)に刊行された片仮名本『因果物語』中にも、同様の話は見受けられる。

『狗張子』巻四ノ十「不孝ふかうの子雷いかづちにうたる」は、母親に食事を与えることを拒んだ長男夫婦が雷に撃たれて死に、家が絶えてしまうという話であるし、片仮名本『因果物語』中巻五ノ一「二桝フクマスヲ用者モチユルモノ、雷ライニ掴ツル、事付地獄ヂゴクニ落ル事」は、二桝を用いて商いをしていた後家が、雷撃にあって死ぬという話である。

そして西田耕三は、『鑑草』の雷撃震死について、「上帝」「天帝」の意志、「天意」であり、「天罰」である。」と述べている(9)。

以上の事柄から、『新語園』に収録されている中国故事説話における「後妻うち」は、「天罰」の対象となる「悪行」であり、道徳的にも容認されないうものとして位置づけられている傾向が、うかがわれるのである。

ついで『新語園』に収録されている「後妻うち」を扱った話は、巻二ノ二十九「媚娘殺ヒメノコロス 柳葬英リウサウエンエイ」、巻二ノ三十「織オリ錦字詩キンジノシ」唐書武后紀織錦璇璣図(10)である。しかしながらこれら二話は、先に挙げた「後妻うち」の作品群とは、少しく趣を異にする。

前者は前妻・媚娘が後妻・柳薺英を刺殺し、その屍を凌辱したことによって、夫・陸希声は流罪に処せられ、媚娘は斬首され、一族が亡びたという話である。

これに対し後者は、本妻・蘇氏が妾・趙陽台を鞭打って辱めを与えるものの、やがてはその妬心を改めることで、夫・竇滔との仲も睦まじいものに戻るとい話である。

以上の事柄から、『新語園』に見る中国故事説話において、「後妻うち」はやはり、道徳的のみならず、社会的にも容認されない「罪」であり、「後妻うち」を引き起こす妬心を改めなければ、夫の心を取り戻すことは出来ず、どころか、一族の滅亡につながるものとして設定されている様が、うかがわれるのである。

日本の「後妻うち」が、平安時代から鎌倉時代にかけての「正当性」を有する慣習であったことは、およそ対照的であり、双方の「後妻うち」に共通しているのは、前妻の後妻もしくは妾に対する暴力行為であること、生き身の人間による行為であることの二点であると言えよう。

しかしながら、井上泰至氏は、山東京伝の『骨董集』の一節「かゝれば近むかしの怪談草紙などに、うはなり打を生りやう死りやうのしわざとせるは、これらのうたひいできてのちのつくり事なるべし。」を引き合いに出し、この一節が「先妻が霊となって後妻に復讐する文学上のパターン」としての「後妻打ち」の嚆矢を『葵上』に求める文脈で語られている」ことを述べている（111）。

また、『諸国百物語』巻一ノ八「後妻うちの事付タリ法花経の功力」にお

いては、後妻の首をとって殺害する前妻の亡霊が、巻四ノ十四「下総の国平六左衛門が親の腫物の事」（目録の題名は「死霊の後妻うち付タリ法花経にて成仏の事」）においては、夫の寵愛していた下女を絞め殺す本妻が、巻五ノ十六「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうちの事」では前妻の「しうしん」が、後妻を取り殺す様が、それぞれ書かれている。

さらには、小松和彦氏が「典型的なうわなり打ち」との評価を加えている（12）巻二ノ九「豊後の国何がしの女ばう死骸を漆にて塗りたる事」において、前妻の亡霊が後妻の首をねじ切って殺害する様が書かれているのである。

本稿ではそこで、日本の平安期から鎌倉期に見受けられたような、社会的な慣習としての「後妻うち」や、『新語園』の中国故事説話に見る、社会的、道徳的な「罪」としての「後妻うち」ではなく、井上氏が言うところの「先妻が霊となって後妻に復讐する文学上のパターン」としての「後妻打ち」

(13)に着目する。

かつ、前述した『諸国百物語』における題名に「後妻うち」が冠せられている作品及び、先学から「典型的なうわなり打ち」(14)との指摘がなされている作品は、前妻の死霊ないしは生霊が後妻を殺すという筋立てになっていること、あるいは題名に「死霊」と記されていることを考慮し、「後妻うち」を「前妻ないしは本妻の霊による、後妻あるいは妾の抹殺・排除を意図した行為」と定義づける。

以上の事柄をふまえ、近世怪異小説における「後妻うち」の在り様について、考察を加えてゆきたい。

【表1】は、近世怪異小説を『狗張子』刊行までの間で取り上げ、それぞれの作品において「後妻うち」を題材とした話が扱われている割合を表したものである。

片仮名本『因果物語』を例にとると、所収説話187話のうち6話が「後妻うち」を扱った話であり、全体の3.2パーセントを占めている。

このようにして各々の作品を見てゆくと、『諸国百物語』が8パーセントと、「後妻うち」を扱っている話の割合が最も高いことがうかがわれる。前述のように、『諸国百物語』においては、「後妻うち」を扱った話が一つの章群を形成しており、「後妻うち」というテーマが他の近世怪奇小説に比し、重要視されていたと言えよう。

さらに、「後妻うち」が章題に明記されている作品が、軒並み0パーセントであるのに対し、『諸国百物語』のみが3パーセントとなっている。このことから、章題に「後妻うち」という語が冠せられている話が収録されているのは、『諸国百物語』の特徴である様うかがわれるのである。

ついで、これらの「後妻うち」を扱った章群の読解を進めてゆくが、その前に「後妻うち」の「ルール」に関して、少しく言及をしたい。

池田彌三郎氏は「後妻打ち」の原動力である「うわなり妬み」——先妻の後妻に対する嫉妬——に言及した際「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」と、「後妻うち」の傾向について述べている(15)。

また、堤邦彦氏は『諸国百物語』巻二ノ九「豊後の国何がしの女ばう死骸を漆にて塗りたる事」を取り上げ「男に死滅の返報をもたらす女霊の恐怖が新時代の主題となって、人々の怪異観を形成した経緯は、日本怪談史の特筆すべきことがら」と評し、「後妻うち」の話のルールに破綻が生じている由を指摘している(16)。以上の事柄から、十七、八世紀に入るまで、「後妻うち」に見る妻の怨嗟の矛先は夫には向かわず、後妻に向かうものであるとされてきた様うかがわれるのである。

これら両氏の指摘をふまえ、本稿では池田氏の「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」(17)を「後妻うち」の「ルール」として定義づけてゆく。

【表2】は、近世怪異小説(『諸国百物語』を除く)における「後妻う

ち」を扱った話の、巻次、章題、概略をそれぞれ記したものである。本章段ではこれらの作品群のうち、『諸国百物語』以前の怪異小説における「後妻うち」を扱った話を取り上げ、先に述べた「後妻うち」の「ルー」も視野に入れつつ、その特質に考察を加えてゆく。

先ず、【表2】の最初に「後妻うち」を扱った話として登場する、片仮名本『因果物語』を取り上げる。

先学から「因果応報のことわりを身のまわりに起きた靈験・利生のかずかずを引いて説明する筆法」が「江戸の怪談文芸に大きな影響を及ぼした。」（18）、『新御伽婢子』四八話のうち、一話が片仮名本『因果物語』所収の話と類似しており、おそらく典拠として「であろうと思われる」（19）、「片仮名本・平仮名本『因果物語』は、ともに広く後続文芸の典拠となった。」（20）、「正三ならびに周辺の人々が体験した世俗の幽霊咄を題材に、人の心の罪障性を戒める」（21）といった、その唱導性ならびに後続文芸への影響への指摘がなされている、片仮名本『因果物語』の「後妻うち」として、初めに取り上げるのは上巻六「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、

取殺事付下女ヲ取殺事」ノ一である。以下にそのあらすじを述べる。江戸

浅草、海雲寺に全春という僧侶がおり、彼は幼くして実母に別れ、やがて

継母が迎えられるに至った。ある時、継母が「紙帳」の中で伏していると、

実母の亡霊がやって来、継母の髪を抜いて、「紙帳」から引きずり出した。

継母が起き上がり、しばし組み合うと亡霊は失せたものの、その後継母は病気になった。やがて枕元に実母の亡霊がやって来、継母の首を絞め、遂には取り殺したという。

堤氏は「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ一を「この世に残した愛児を気遣うあまりに継母の存在を容認できない母幽霊の哀れな情にからめて語られる場合」（22）として、比較的好意的な評価を与えている。

しかしながら、本編における実母の亡霊の胸中には、「愛児への気遣い」と、それが為に継母を取り殺すという冷酷さが同居している。それゆえ「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ一は、一個の心に慈愛と無情さが混在するという人間の複雑さ、ならびに、それに起因する薄気味悪さをも表出していると言えよう。

続く「後妻うち」を扱った話は、上巻六「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、

取殺事付下女ヲ取殺事」ノ二である。——奥州でとある女が死に、人々

が遺体を棺に入れたところ、棺から死人が手を出す。人々が驚き怯えていると、下女の悲鳴が聞こえる。下女の首は引き抜かれてなくなっており、

人々が棺の中を検めると、「死人、彼ノ女ノ頸ヲ抱。喰付テ居タリ。」とい

う有様になっており、それは「日比妬シ念力ノ作処」であつたというのが、本編のおおよそのあらすじである。

しかしながら、堤氏によつて「なんとも酸鼻な修羅場の目撃譚」(23)と評される、「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ二において、件の下女が女の夫の愛妾であつたという直接の描写はない。前述の堤氏も「それほどまでに「妬ミシ念力」が何を意味するのか、簡略な説教・話材集の本文は多くを語っていない」(24)と、本編について言及している。

ここで、同じ片仮名本『因果物語』より、中巻三十五「幽霊、刀ヲ借テ人ヲ切事」——詳細な読解は後述する——の、とある表現を抜粋する。

「幽霊、刀ヲ借テ人ヲ切事」は、浄土寺の前妻の幽霊が、施主に脇差を借りて、後妻の首を切り落とす話である。そして本編には「其方故ニ。日比ノ遺恨トゲタリ」という描写が見受けられるのである。

さらに、片仮名本『因果物語』上巻五「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ——「第六章 「斬首」の系譜」にて詳述する為、梗概を記すにとどめる——は、手代に命じて妾を殺害させ、首を持参させた本妻が、それに食いつくという凄惨な話である。そして本編においても、「我等頃、如何斗カ。嗔恚ヲ燃。」という本妻の台詞が見受けられるのである。

このように、前述の「幽霊、刀ヲ借テ人ヲ切事」、「妬深女死シテ、男ヲ取殺ス事付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一において、夫の情愛を奪われた女性の、後妻もしくは愛妾に対する怒り、怨念に「日比」「頃」という形容が冠せられていること。「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ二においてもまた「日比妬シ念力ノ作処也。」といった表現がなされていること。そして、本妻の妾への怨嗟が主題となっている、「妬深女死シテ、男ヲ取殺ス事付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一と同様、「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ二においても、作品名に「嫉(あるいは妬)深女、死シテ」という表現が使われていることから、件の下女は夫の妾であつた可能性、ならびに夫の「日比」からの不実が「後妻うち」を

発動させたという可能性が、示唆されていると言えよう。

以上の事柄から、「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ二は「後妻うち」を主題とした作品であるという結論が、導き出されるのである。

ついで上巻六「嫉深女、死シテ後ニ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ三を取り上げる。江戸に住まう何某の女房は、下女を女房にしておくならば崇るであろうと言いついて病死する。しかしながら夫は前妻の遺言を聞かず、件の下女を妻にしたところ、前妻の亡霊がやって来、後妻の髪をむしった。後妻は泣き喚いたが周囲の人々には見えず、やがて髪は一筋も無くなり、後妻も終には取り殺されたというのが、本編のおおよそのあらすじである。

堤氏は「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ三を「無慈悲な再婚を引き金に荒ぶる怨魂が発動」(25)した話として位置づけている。

このように、本編は夫の破約が原因で「後妻うち」が発動するというパターンのお話なのであるが、前妻の亡霊の目標は、あくまでも後妻の抹殺なのであり、夫はその復讐の視野には入っていないのである。

続いて、上巻十一「女生霊、夫ニ怨ヲ作事」ノ一の読解を進める。――高橋甚太夫という足軽が、妻を離縁した。妻はその後、別の男と結婚した。それから甚太夫が後妻を迎えると、前妻が現れ、後妻の首を絞めるので、妻を持つことが叶わない。甚太夫が前妻に謝罪をしたところ、前妻は甚太夫を恨んではないと言った。安堵した甚太夫が後妻を呼ぶと、前妻は窓から家に入り、棟に乗って後妻の首を絞めた為、とうとう甚太夫は一人身でいることを余儀なくされたというのが、本編のおおよそのあらすじである。

また、

女房ノ処エ行テ。様々、侘言シケレバ。我今思様ナル。(中略)能仕合

ト成間。更ニ違恨ナシ、ト、云。悦ビ皈テ。女房ヲ呼バ。本ノ女房ノ

頭、窓ヨリ入テ。棟ニ乗テ。首ヲシメケル故ニ。

といったこれらの描写に見る、抑圧されていた前妻の怨みの凄まじさ、それに起因する「後妻うち」の執拗さ。そしてそれが契機となって「女房ヲ持事

叶ズ。終ニ、独居也。」という不本意な人生を強いられた夫の姿からは、「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」といった(26)、前述の「後妻うち」の「ルール」に破綻が生じている様子がうかがわれるのである。

続く「後妻うち」を扱った話は、中巻二十三「幽霊来テ、子ヲ産事付亡母、

子ヲ憐ム事」ノ二である。摂州大坂の近所で、母を亡くした子の許にその亡霊がやって来、髪を結うことが三年に及んだ。ある時やって来た前妻の亡霊は、後妻の舌を抜いてしまった。後妻は様々に養生して回復した後は、夫と離別して余所へ行ったというのが、本編の展開である。

三年もの間、残された愛児の髪を結び続けるという、母親らしい細やかな情愛と、継母の「舌ヲ貫ケル」という無慈悲さが、一個の心の中に同居するという設定は、前述の「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ一に通底するものがあると言えよう。

そして、「幽霊、刀ヲ借テ人ヲ切事」は、前述のように、前妻の幽霊が、脇差を借りて後妻の首を切り落とす話である。このような物語展開、ならびに「其方死セバ、別ノ女房。持間敷、ト、約束アル処ニ。頓テ、女房ヲ求ラル。」といった前妻の亡霊の台詞からは、本編が前述した堤氏言うところの「無慈悲な再婚を引き金に荒ぶる怨魂が発動」(27)した話であること、しかしながらその「怨魂」の標的はあくまでも後妻のみであることが、うかがわれよう。

以上の事柄より、片仮名本『因果物語』における、「後妻うち」を扱った話からは、

- ① 「後妻うち」の「ルール」に、数少ないとはいえ、破綻の兆候がある。
- ② 子への細やかな情愛と、継母への容赦ない冷酷さとが、前妻の中に同居している話が収録されている。
- ③ 夫の破約が「後妻うち」を発動させる契機となった話が収録されている。

このような、「後妻うち」を扱った話に見る、後妻への容赦ない残酷さ、夫の破約に起因する不実さといった、負の感情挿入は「人の心の罪障性を戒める」(28)といった、片仮名本『因果物語』の役割を果たすことに、大いなる助力をしていると言えよう。

ついで先学から「御伽の咄」の集成としての「近世怪異小説の大きな一源流」(29)、「寛文期にあつては仏教臭・教訓臭の薄れた娯楽志向の世俗系怪異小説」(30)といった、その文芸的意義や文芸性について高い評価を付与されている『曾呂利物語』——寛文三年(一六六三)に刊行——の、

「後妻うち」を扱った話を取り上げる。巻四ノ七「女の妄念怖ろしき事」が、それである。近江の佐保山というところに住まう男には、本妻と妾がいた。本妻は常々妾を憎んでいたが、ある時妾が廁に行つたところ、大蛇

が出現した。妾が恐れているうちに蛇は姿を消したが、それから本妻は重い病にかかった。本妻の末期、男は妾のところに行ったが、この由を聞いて本妻の許に戻った。しかし本妻は、男に長年の怨みを忘れぬことを言い、男が飲ませた水その顔に吐きかけ、死んでしまう。それから本妻の亡霊は妾の許へゆき、その首をねじ切って殺した。妾には二人の子がいたが、これも程なくして死んでしまったので、男は嘆き悲しみ、死んでしまった――本編のあらすじはこのようなものである。

前妻の死霊による「後妻うち」から精神的打撃を受け、それによって命を縮めてしまった夫の姿が書かれていると言えよう。また、

・ある時妾雪隠に居ければ、たけ一丈許りなる大蛇前に来りければ、

・「我は只今身まかりぬ。此の年月の怨み、生々世々忘れ難く候。」

とて、男の飲ませける水を顔にざつと吐き掛け、齒がみをして終ひ

空しくなる。

・片時も過ぎざるに、妾の所へ忍び、首をねぢ切り、消すが如くに

失せぬ。

といった描写からは、夫の破滅につながるどころのものとなる、抑圧され、蓄積され続けてきた本妻の怨嗟がうかがわれるのである。

このように、押さえつけられ、それにもない蓄積されてきた本妻の怨み、それに起因する「後妻うち」の凄惨さ。そして「後妻うち」の間接的な影響による、夫の破滅といった要素は、前述した「女生霊、夫二怨ヲ作事」における、「後妻うち」のルール破綻に、通底するものがあると言えよう。

また、「女の妄念怖ろしき事」の本妻は、妾の葬儀の際にその首を手提げ、橋のもとに佇むという凄惨なその姿を、乳母から「あら浅まし御姿や。」と評されているように、決して肯定的な描かれ方はしていない。「後妻うち」を行った者に否定的な形容が冠せられるという本編の特質には、注視すべきであろう。

さらに本編は「総領一人残りけるが、髻を切り高野山にとり籠り、父母の後世をぞ弔ひける。」といった、唱導的色彩の強い結末を有しているのである。

以上の事柄より、『曾呂利物語』における「後妻うち」を扱った話からは、

① 「後妻うち」の「ルール」に、数少ないとはいえ、「破綻」の兆候がある。
 ② 「後妻うち」を遂げた本妻に、肯定的な描写が冠せられていない。
 ③ 結末に唱導的色彩が濃厚である。

といった特質が見受けられ、前述の小澤氏から「仏教臭・教訓臭の薄れた娯楽志向の世俗系怪異小説」と評せられる『曾呂利物語』ではあるものの(31)、本編からは比較的濃厚な、唱導色が見受けられると言えよう。

ついで、先学から『曾呂利物語』やその他の御伽の咄に胚胎した説話が、『とのゐ草』に於いていかに文芸的な成長を遂げて居るか(32)、「奇異なるものを見つめる感覚が、ありきたりな怪談の域を超えていると同時に、そこに新たな表現の工夫が加味され、独特の世界を持つことができた例」(33)といった、その高度な文芸性に対する評価、ならびに「宗教哲学に根ざす教化布宣の目的性をはじめから用意されていない」(34)という、脱唱導的色彩への言及が付与されている、『宿直草』(『御伽物語』)中の、「後妻うち」を扱った話の読解を進める。

初めに、巻三ノ十「ゆうれいの方人の事」を取り上げる。——ある浮気な男が、召使の女と深い仲になった。嫉妬深い性格の妻はこれを快く思わず、夫婦仲は次第に険悪なものとなり、夫の薄情さゆえに、妻はやがて病となった。妻のいまわの際に二人は和解し、夫は妻の「自分が死んだならば似つかわしい人と一緒にあって欲しい。全くそれに恨みはない。ただ、今の妾には暇を出して欲しい」という遺言を守れることを誓う。しかし妻の死後、夫は件の妾を本妻に直してしまった。それを恨みに思った前妻の亡霊は、肝試しの為に墓所にやって来た男に頼み、自分が生前住んでいた家の門に貼ってある、牛王の札を剥がしてもらおう。そして前妻の亡霊は、後妻の首を絞めて殺した。後に札を剥がしてやった男は、夫婦喧嘩の勢いで離別した妻にこのことを言いふらされ、「幽霊のかたうど」として、仕置きを受けたということとだというのが、本編のおおよそのあらすじである。

そしてこの「ゆうれいの方人の事」において、「後妻うち」を行った前妻には「めざましきまなまねたし。」といった否定的形容が冠せられており、こうした特質は前述の「女の妄念怖ろしき事」に通底していると言えよう。さらに「ゆうれいの方人の事」では、「後妻うち」に関わった者——ただし夫ではない——が「幽霊のかたうど」として破滅している様も、特質の一つとして注視すべきであろう。

また「ゆうれいの方人の事」は、

二人の中そむき／＼になりては、子孫までも恥をのこす。匹夫匹婦も

それ、義をたがふべからず。

といった、夫婦の反目が子子孫孫にまでもたらす恥、そしてそれを戒める一条で締めくくられており、そこには比較的濃厚な、教訓的色彩を見出すこと

が出来ると言えよう。

ついで、卷三ノ十二「幽霊読経にかびし事」の読解を進める。――
摂津の国の内瀬という所で農夫の妻が死んだが、夫はその七日目に、また別の妻を迎えた。世間はそれをそしつたが、果たせるかな、嫁いできた後妻にはすぐに、前妻の亡霊が取りつき、昼夜を問わず、物狂おしい有様となった。気の毒に思った人が牛王札を貸したところ、その間は前妻の亡霊はやって来ない。しかし貸した人の家に行き、そのことをなじる。貸した人は驚き、札を取り返した。今の妻は心強くは言うが、気もうつろになってしまった。そこで親しい人が夫に「死んで七日目に新しい妻を迎え、しかもろくに弔いもない。あなたの過ちではないのか」と意見すると、男は「もつともなことです」と言い、急いで菩提寺に行き、経を詠んで回向してもらった。その夜から亡霊はこなくなり、妻も本性に戻ったということである。

本編における「笑止ぶりにおもふ人」が夫に「二月堂の牛王」を貸したところ、その間亡霊はやってこなくなったものの、

かしたる家に行、「いかで牛王をかしたるぞ」とうらむ。この人大に驚きてこれをとりかへす。

といった描写からは、「後妻うち」に関わった者にもその災いが及ぶという、前述の「ゆうれいの方人の事」に通底する特質が見出されると言えよう。

さらに、「幽霊読経にかびし事」という、仏教の力を主題とするかのような作品名とあいまった、

浄土真宗なりしが、観無量寿経をよみて念仏廻向す。まことに仏力ふしぎにして、猛火転じて清涼風となりしや。其夜より幽霊きたらず。

妻も本性になれり。あらそはれぬ事にあらずや。

という、仏教の功德が一連の怪異を解決してしまう物語展開、そしてその功德を称える描写からは、決して希薄とは言い難い唱導的色彩がうかがわれよう。

以上の事柄より、『宿直草』（『御伽物語』）における「後妻うち」を扱った話からは、

①「後妻うち」に関わった夫以外の人間に災いが及ぶ。
②濃厚な教訓的・仏教的色彩が見出される。

といった特質が見受けられ、前述の「宗教哲学に根ざす教化布宣の目的性」がはじめから用意されていない（35）といった先学の言及は、必ずしもこれらの話には当てはまらないといった結論が、導き出されるのである。

以上、本章段では、『諸国百物語』以前の怪異小説における「後妻うち」

を扱った話を取り上げ、「後妻うち」の「ルール」の破綻という事柄をも視野に入れつつ、その特質に考察を加えてきた。

結果、考察を加えた【表2】における計九話の作品群のうち、夫が「後妻うち」の影響を被る話は、片仮名本『因果物語』上巻十一「女生霊、夫二怨ヲ作事」ノ一、『曾呂利物語』巻四ノ七「女の妄念怖ろしき事」だけであり、数の上でもさほど多いとは言えない。

のみならず、これら二話においては、「後妻うち」が夫に間接的な形で不幸、ないしは死をもたらしているものの、前妻の怨念もしくは暴力行為の矛先が、直接夫に向かっている様は書かれていない為、「後妻うち」の「ルール」の破綻の度合いも、それほど顕著ではないのである。

以上の事柄から、『諸国百物語』以前の近世怪異小説における「後妻うち」を扱った章群は、「後妻うち」の「ルール」から比較的逸脱していないものであるという結論が、導き出されるのである。

前述の【表2】に続く【表3】は『諸国百物語』における「後妻うち」を扱った話の、巻次、章題、概略をそれぞれ記したものである。以上の事柄をふまえた上で、これらの作品群を「後妻うち」の「ルール」という観点から、読解を進めてゆきたい。

四―二・『諸国百物語』の「後妻うち」

(一)．章題に「後妻うち」と書かれた章群

前述したように「後妻うち」には、「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」(36)という「ルール」がある。そして『諸国百物語』以前の近世怪異小説における「後妻うち」を扱った話は、おおむねこの「ルール」に忠実なものであり、夫に前妻の怨念の矛先が直接的に向けられるという話は見いだされなかった――こうした事柄をふまえ、本稿では【表3】にあげた、『諸国百物語』における「後妻うち」を扱った話を読み解いてゆく。

そして本章段においては、これらの「後妻うち」を扱った話のうち、章題に「後妻うち」と冠せられているものを取り上げてゆきたい。

初めに「第三章 『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」において少しく言及をした、巻一ノ八「後妻^{うはなり}うちの事付タリ法花^{ほけぎやう}経の功力^{くりき}」の読解を、今度は「後妻うち」という観点から進めてゆく。――武蔵の国・秩父に住む大山半之丞は、出産で妻を亡くした為、後妻を迎えた。ところが半之丞は夜な夜な前妻の亡霊におびやかされ、偶然出会った旅の僧侶から、このままではその命が危ないことを告げられる。僧侶は半之丞の体に法花経を書き、彼はその功力で祟りから逃れることが出来た。しかし前妻の生前か

ら彼女を「てうぶく」していた後妻は、亡霊に首をとられて殺されてしまうというのが、本編のあらすじである。

旅の僧侶の半之丞に対する「其方は女の物のけ付きてたゞりをなす人なり。御身のちをわらんことほどちかし」という言葉、前妻の亡霊の「さてもなんじが父をとりころさんとおもひしに、いづくへおち行きつらん。」という言葉からは、前妻の怨念の矛先が夫たる半之丞に向かっていた様子がうかがわれよう。

この様に、夫をその殺害対象にしていた前妻の亡霊ではあるが、法花経の効力の為、半之丞の姿を目にすることが叶わない。すると、後妻の首を「ひつさげかへ」った亡霊は、

今は是れまでなり。年月のほんもうをとげたり。われ生世のうちより、此女われをてうぶくせしゆへに、われしゝてもほむらのたへがたかりしに、今かくいのちをとりたる事のうれしや
と言ひ、塚の内に消えてしまふ。前妻の怨念は夫にも及んでいるものの、後妻を殺害した時点で、彼女の目的は達せられているのである。

前妻の怨念は夫に向かわないという、「後妻うち」の「ルール」に逸脱の兆候が見られはするものの、本編における亡霊の本意はあくまでも、後妻の殺害なのである。

また、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」は、「後妻うち」が、妻としての地位を篡奪したのみならず、生前から己に対し「てうぶく」という形でその身を害そうとした後妻への、前妻の「復讐」といった側面をも備えていることにも、注視すべきであろう。

ついで、巻四ノ十四「下総の国平六左衛門が親の腫物の事」(目録の題名は「死霊の後妻うち付タリ法花経にて成仏の事」——こちらも「第三章『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」において少しく言及をしている——)を取り上げる。本編もまた、本妻の怨念が夫に向かう話ではある。

下総の国に住む平六左衛門という男の父親が、召使いの女に手をつけた。本妻は嫉妬深い女であったので、件の下女を絞め殺した。それから三日もたたぬうち、父親の右肩に腫れ物が出来、程なくして本妻も死んだ。すると男の左肩に腫れ物が出来、両肩の腫れ物が「こちらをむけ」と間断なく父親を責める。結果、旅僧の法花経誦経によって父親の腫れ物が平癒するというのが、本編のあらすじである。

生前、嫉妬のあまり下女を絞め殺した本妻は、その死後は夫の左肩の腫れ物となり、「こちむけ／＼」と夫を呼ばう。そして夫が返事をせずにいると「しめころすやうにてたへがたく候ふ」程の苦痛を与え、その身を苛む。本妻の怨念が夫に向かつており、かつ害を為している様が見受けられるのであるが、最終的に夫は、法花経の効力により事なきを得ているのである。

ここでも「後妻うち」の「ルール」からの逸脱が見られはするものの、夫が命を奪われるまでには至っておらず、本妻の殺害の対象となったのは、夫の愛妾のみなのである。

さらに、下女を絞殺した本妻についてあるが、「よになきりんきふかき女」との描写を加えられている。「後妻うち」を行った人間に対するこうした否定的描写は、前述した『曾呂利物語』巻四ノ七「女の妄念怖ろしき事」や、『宿直草』(『御伽物語』)巻三ノ十「ゆうれいの方人の事」に通底するものがあると見えよう。

『諸国百物語』巻五ノ十六「松まつざか屋ぢんだゆふ甚太夫によが女むすめばううはなりうちの事」もまた、その章題に「後妻うち」が冠せられている話である。

京に松ざか屋甚太夫という者がいたが、その女房は極めて嫉妬深く、甚太夫が外出をすれば人をやって後を付けさせるといふ有様であった。彼はこれをうるさく思い、女房に暇を出した。そののち、とある裕福な後家の、見目形麗しい養女を後妻として迎えたが、程なく件の後妻が懐妊する。ある夜、「白きかたびらにしろき帯をびをして、かみをさばきほそまゆをして」という出で立ちの女が後妻の産所を訪れ、にこにこ笑ったかと思ふと、後妻をきつと睨んだ。後妻は驚きのあまり意識を失ってしまった。それから一月ほど後、件の女は後妻が寝ているところへ姿を現し、うらみごとを言つて姿を消す。後妻はそれから病気になる、やがて死んでしまう。前妻の「しうしん」がやって来たということである。

前述の二話とは異なり、本編では前妻の怨念は夫に向かつていないし、害を及ぼしてもいない。

「いっぞやははじめて御めにかゝり候ふ。さてもうらめしき御人や、うらみを申しにまいりたり」という前妻の「しうしん」が発した言葉からもうかがわれるように、怨念・復讐の対象はあくまでも後妻なのである。

そして、「松ざか屋甚太夫が女むすめばううはなりうちの事」においてもまた、「後妻うち」を行った前妻に対しては「此内儀ないぎりんきふかき女によばうにて、甚太夫ぢんだゆふほかへいづれば人をつけてあるかせける。甚太夫ぢんだゆふあまりうるさくおもひて、いとまをいだしける。」といった、否定的な描写が冠せられているのである。

以上、本章段においては『諸国百物語』における、「後妻うち」を扱った話のうち、その章題に「後妻うち」と冠せられている作品を扱ってきた。結果、これらの章群からは、

①「後妻うち」の「ルール」に、度合いが希薄であるとはいえ、破綻の兆候がある。

②「後妻うち」を遂げた本妻に、嫉妬に起因する否定的描写が冠せられてい

る。

③前妻の夫に対する怨嗟は、仏教の効力で解決が叶う程度のものである。といった特質が見受けられるのである。

(二)・激化してゆく「ルール破綻」

先の章段においては『諸国百物語』の「後妻うち」を扱った話のうち、題名に「後妻うち」が冠せられている話の読解を進めてきた。

その結果、これらの話には、「後妻うち」の有様のみならず、前妻の亡霊の怨念・暴力行為の矛先が夫に向かっている様が描かれており、その度合いこそ未だ希薄——仏教の効力で解決が叶う程に——ではあるものの、夫には前妻の怨嗟は向かわないという、「後妻うち」の「ルール」に破綻をきたしていることが明らかになった。

以上の事柄をふまえ、本章段においては【表3】に示した、さらなる「後妻うち」を扱った話——典拠が明らかとなっていないもの——の読解を進めてゆく。

先に少しく言及をした、『諸国百物語』巻二ノ九「豊後の国何がしの女によばう死骸しがいを漆うるしにて塗りたる事」は、その章題に「後妻うち」と記されてこそいないものの、小松和彦氏が「典型的なうわなり打ち」との評を加えている作品（37）である。以下にそのあらすじを述べてゆく。

豊後の国に仲の良い夫婦がおり、夫は常々、妻が自分に先立つたならば、再縁はしないことを口にしていた。妻は風邪のために死んでしまうが、臨終の際に「自分が死んだら遺骸の腹を裂き、米を詰めて表面を漆で塗り固め、鉦鼓を持たせて持仏堂に安置し、朝夕念仏を唱えて欲しい」と言い残す。男は亡妻の遺言通りに遺骸を安置したものの、二年後に後妻を迎える。男が外出したある夜、後妻の許へ、鉦鼓の音と共に真っ黒な女がやって来る。女は自分の来訪を夫に語ったならば、後妻の命はないと言い、帰ってゆく。翌日、後妻は夫に昨夜の出来事を話すが、夫は狐の仕業であろうといい、相手にしない。それから四、五日後の、夫が外出している夜、件の女はふたたび後妻の許を訪れて破約を責め、後妻の首をねじ切って殺す。夫が帰宅して持仏堂を開けたところ、漆塗りの前妻の遺骸の前には、後妻の首があった。夫が「さて／＼なんぢはひきやうものかな」と遺骸を罵り、それを仏壇から引き下ろすと、前妻は喉笛に食いついて夫を殺したという。

本編において、前妻の亡霊が後妻を殺害したのは、

・「それがしがまいるることかまへて夫にかたり給ふな。もしもかたり給ふものならば、御身のいのちは有るまじ」

・「あらなさけなや。いぜんそれがしがまいること夫にかたり給ふな

と申せしに、はやくもかたり給ふこと、かへすド、もうらめしや」という言葉からもうかがわれるように、後妻の破約の為である。長島弘明氏もまた、この後妻が「言うなタブーの禁忌」を犯していることを指摘している（38）。

前述の『諸国百物語』巻五ノ十六「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうちの事」の「さてもうらめしき御人や、うらみを申しにまいたり」という前妻の「しうしん」の言葉に見るような、前妻であることに起因する後妻への怨嗟は、直接的には描かれていないのである。

また、本編における夫の落命も、破約に起因するものである。

前述の長島氏は「言葉の咎とがというか、男が約束を破る。後妻をもたないよと言ったのが嫉妬の種になる」と、高田衛は「二度と妻を持たないという男の誓いが、この女の拘束力を引き出した」と本編について述べており（39）、夫が再縁をしないという誓いを破った為に、前妻から報復を受けたことを指摘している。

以上の事柄からうかがわれるように、本編は夫、そして後妻が、前妻との破約の報いとして命を奪われる話である。

前述した「後妻うちの事付タリ法花経の功力」とは異なり、後妻を殺害しただけでは前妻の復讐の意志が消えていないこと、さらには、夫の命を救済するための手段として仏教の効力が登場しないことからもうかがわれるように、「後妻うち」の「ルール」の逸脱の度合いが、その激しさをいや増していると言えよう。

ついで「第三章 『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」において、仏事と怪異との関連という点から考察を加えた、巻三ノ五「安部宗兵衛あべそうびやうへ

が妻の怨霊おんりやうの事」の読解を進めてゆく。本編もまた、「後妻うち」のルール破綻が描かれている話である。――豊前の国に住む安部宗兵衛は、日頃から女房に辛く当たり、食べ物も与えなかつた。ために女房は病気になったが、宗兵衛は薬を与えるどころか、いよいよ辛く当たつたので、女房は死んでしまふ。いまわの際、女房は宗兵衛に長年の恨み、そしていつかはそれを思い知らせることを言い残すが、宗兵衛はその死骸を山に捨て、葬儀すらしなかつた。それから七日目の夜半、「こしよりしもはちしをにそまり、たけなるかみをさばき、かほはろくしやうのごとく、かねくろくつけ、すゞのごとくなるまなこを見ひらき、口は鰐わにのごとくにて」という姿の亡霊となった女房

は、宗兵衛の寝間を訪う。そして、宗兵衛の「そばにねたる女によばう」を引き裂き殺した亡霊は、明晩も参上し、長年の恨みを申し上げる由を告げ、姿を

消す。宗兵衛は僧侶たちを頼み、大般若経を読み、祈祷をさせる。が、翌日の夜半の頃に亡霊は宗兵衛のもとに出現し、その身を二つに引き裂き、下女たちをけり殺し、自らは天井を破り虚空に上がったというのが、おおよそのあらすじである。

宗兵衛は、妻がそれが為に病死してしまふような邪険な仕打ちを加え、その遺骸を「山にすて、とぶらひをもせざりしが」という有様であった程、妻に対する情愛が極めて薄い人物として設定されている。

そんな宗兵衛であるから、妻が死んで「七日目の夜半のころ」に、己の寝間に引き入れ、そばに寝かせている「女ばう」というのは、彼の愛妾の類である可能性が高い。

また本妻の亡霊が「宗^そびやうへがそばにねたる女^{にょ}ばうを七つ八つにひきさき、したをぬきふところへ入れ」という凄惨なやり方で件の「女ばう」を殺害したのも、後日宗兵衛の許を訪れた際、「あたりにもたる下女どもをけころし」たのも、生前に夫から全く顧みられなかった自分の立場を思い、夫の寵愛を受けている女への、怨念を発露させた結果と考えられよう。前述した卷一ノ八「後妻うちの事付タリ法花経の功力」のように、「後妻うち」が夫の愛妾への復讐も兼ねている様が、ここからも見受けられるのである。

このように凄惨な「後妻うち」を果たした前妻の亡霊ではあるが、彼女の復讐はそれだけにとどまらない。

- ・すでにまつごと云ふとき、宗兵へにむかつて、とし月つらかりしうらみをいひ、「いつの世にかはわすれ申さん。やがておもひ知り給へ」とて、あひはてけるが、
- ・「もはやかへり候ふ。また明晩まいり、とし月のうらみ申さん」とて、けすがごとくにうせにけり。

これらの言葉からもうかがわれるように、本妻の怨念は常に宗兵衛に向いており、その本意は、己の身を死に追いやるほどまで害した、宗兵衛への報復なのである。

そして本妻の復讐を恐れた宗兵衛は「貴僧^{きそうかうそう}高僧をたのみ、大^{だい}はんにやをよみきたうをし、あくる夜は弓てつほうを口々にかまへ、ようがいしてまちければ」という対応を取る。だがこうした措置も空しく、宗兵衛は本妻の亡霊によつて「ふたつにひきさき」殺されてしまうのである。本妻の怨嗟の前においては、仏教の効力が意味をなさないものとして設定されている様うかがわれよう。

これらの事柄は、前述の「後妻うちの事付タリ法花経の功力」における前妻の亡霊が、夫に怨念を抱いてはいるものの、後妻を殺害した時点で「今は是れまでなり。年月のほんもうをとげたり。」と、復讐行為を止めている点、また、前妻の怨念から夫が身を守る手段として、仏教が効果を挙げている点とは、おおよそ対照的である。

このように、「安部宗兵衛が妻の怨霊の事」からは、前妻の怨念は夫には向かわない、夫は無事という「後妻うち」の「ルール」破綻が、その度合いを増している様子がわかれるのである。

つづく、巻五ノ十四「栗田左衛門介が女ばう死して相撲を取りに来たる事」——「第三章『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」にて、近世社会における前妻・後妻の互いに向けた感情を知る事例という観点の事例として取り上げた——は、一見するとユーモラスであるが、その実は薄暗いものを内包した作品である。以下にそのあらすじを述べる。

加州に栗田左衛門介という侍がいた。その妻は大そうな美人であったが、労咳のため死んでしまった。左衛門は悲しみのあまり三年間は妻帯せずだったが、親類のすすめにより後妻を迎える。左衛門が不在のある夜、後妻のものと前妻の亡霊が訪れる。己がこの家の主人であることを主張した亡霊は、後妻に家を出るよう命じる。帰宅した左衛門に後妻は暇を乞うが、左衛門は相手は亡霊なのだからと、暇を出そうとしない。その後、左衛門の留守の夜に邸を訪なつた亡霊は、後妻が未だ邸にいることを責め、後妻は亡霊が執心深くこの世に迷い出たことを責める。すると前妻の亡霊は、自分が勝つたなら後妻が邸を出ること、負けたならば邸にはやって来ないことを条件に、後妻に相撲を挑む。その後、左衛門が留守になると、亡霊が相撲を挑みにやつて来ることは五度に及んだ。後妻はこれを辛いことと思ひ、病みついて死んでしまった。夫も後に出家したという。

「相撲」で正妻の座を決めるといふのは、荒っぽくはあるが、率直でユーモラスな選択であるように見える。

少なくとも、前述の「豊後の国何がしの女ばう死骸を漆にて塗りたる事」における前妻の亡霊が、自分の来訪を夫に告げたなら殺す由を一方的に後妻に云い、それを破つたからといって、後妻の首をねじ切って殺害した有様や、「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうちの事」における前妻の「しうしん」が、嫉妬に起因する理不尽な恨みを後妻に一方的に述べ、ついには命まで奪うという様に比した場合、「われは此家のあるじにて候ふ」と己の素性を後妻に述べ、後妻に「そのはうさまは今此世にましまさぬ御身のよし。なにとてさやうにしうしんふかくまよい給ふぞ。とく／＼かへり給へ」と叱責される。「ぜひ／＼御帰りなく候はゞ相撲をとり候ひて、そのはうまけ給はゞかえり給へ。それがしまけ候はゞかさねてまいるまじ」と勝負の手段と己の意図を明確に述べている本編の前妻の振る舞いは余程、公正で道理を弁えたもののように見えるのである。

しかしながら「その／＼ち左ゑもんるすなればきたりてすもふをとる事五たび也。内儀はこれを物うき事に思ひ、しだいにやせおとろへてわずらいつき給へば、ほどなくむなしくなり給ふ。」というその後の物語展開からは、

一見公正な申し出をしたように見える前妻の亡霊が、その実、不条理で執拗な怨念を抱いていた様うかがわれる。

そして夫たる左丞も、後妻の死後「かなしみて野べのおくりをいとなひつゝかきをきしたゝめ、内儀ないぎのおやにおくり、その身は出家し、しよこくしゆぎやうに出でけると也。」という有様になっている。直接前妻の怨念を被ったわけではないけれども、「後妻うち」をきっかけとして、俗世での安穩とした生活を絶ち切られてしまう夫の姿が、ここでは表出されているのである。

以上、本章段における「後妻うち」を扱った話からは、前妻ないしは本妻の亡霊の怨嗟が、妾ないしは後妻に対するのと同等に夫に対しても向けられているか、「後妻うち」をきっかけとして夫が破滅の憂き目を見るかという展開になっており、「後妻うち」の「ルール」破綻の度合いが、より顕著となつていくことが明らかになった。

これらの事柄を考慮に入れ、次の章段では「後妻うち」を扱った話の、さらなる読解を進めてゆきたい。

(三)．典拠との比較を通じて

先の章段においては、『諸国百物語』の「後妻うち」を扱った話の中で、「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」(40)という「後妻うち」の「ルール」破綻が、より顕著となつている様について、考察を加えてきた。

続いての「後妻うち」を扱った話、『諸国百物語』巻三ノ七「まよひの物にぐわつどう二月堂の牛王ごわうにをそれし事」もまた、「後妻うち」の「ルール」に破綻が見られる話である。以下にそのあらすじを述べる。――ある墓所の塚が、夜中に三度ずつ燃え上がり、「人こいしや／＼」と女の声が響く。そこで三人の若者たちがこれを見届けようとして、夜半に件の塚を訪れる。中でも剛胆な一人が塚に腰を下ろすと、塚からは腕が生じ、腰を締められる。残りの二人はこれを見、逃げ帰ってしまう。若者が誰何すると、塚の主は、自分が鍛冶屋の女房であった由、隣家の女に毒殺された由、そして夫は自分の死後三七日も経たないのに、隣家の女と夫婦となり、女が「おもひのまゝなるふるまい」をしている由を告げる。亡霊はそのことを無念に思い、夜ごとに夫婦の門口を訪なうが、二月堂の牛王札が貼つてあるため、中に入ることが出来ない由を打ち明け、札を剥がしてほしいと若者に懇願する。不憫に思った若者が、亡霊の言うとおりにすると、急に黒雲が舞い下がり、光が鍛冶屋の家に入ったかと思うと、「わつ」という声が二声した。そのまま亡霊は鍛冶屋夫婦の首を持って来ると、若者に長年の執念が晴れた由を告げ、その札とし

て黄金十枚の入った袋を与える。若者はその金で卒塔婆をたてかえ、亡魂を懇ろに弔ったところ、その後塚に異変は起きなかったという。

これまで扱ってきた作品とは異なり、本編は先学によって、塚が夜毎に燃え上がり、その不可解な現象の原因を明らかにするべく、若者が塚に出かけるという前半部、そして塚の主の願いの成就に助力をした若者が、亡霊から礼をもらおうという結末部は『曾呂利物語』巻三ノ三「蓮臺野にて化物に逢ふ事」に依拠し、塚の主である亡霊の素生、その怨嗟の理由が明らかとなる

後半部は、平仮名本『因果物語』巻二ノ一「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」に依拠するものであるとして、その典拠の指摘がなされている（41）。

本稿ではそこで、「後妻うち」の「ルール」という観点からだけでなく、「後妻うち」の場面の典拠となっている、「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」と本編の比較も考慮に入れ、作品の読解を進めてゆきたい。

ついで「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」のあらすじを紹介する。――濃州から尾州名古屋へ帰る牢人が、日暮れにくり舟に乗って川を渡ろうとすると、女の声でしきりに呼びかけられた。牢人が声の方へ行くと、足を上にして逆さまに立っている女がいた。牢人が恐ろしさを堪えて誰何すると、女は、自分が庄屋の内に使われていた者で、不慮の妬みにより非分の死を遂げた。敵をとるため、くり舟を渡して欲しいことを告げる。牢人が女を舟に乗せて岸を渡し、帰ろうとすると、女は庄屋の家をそここに牛王の札が貼ってあり、このままでは中に入れないので、札を剥がして欲しいと言う。牢人が仕方なく女の言う通りにすると、女は家の中に入り、中から騒ぎが聞こえた。次の夜、女は牢人の家にやって来、昨夜敵をとったので、今は真様になった由、恩を報ずるため、この後は牢人の守りとなる由を告げ、姿を消す。牢人が、庄屋の女房が急死したのは件の女のためであると思い、詳細を尋ねたところ、女は庄屋の妾であった。そして女房はこれを妬んでおり、夫が湯治に出かけている際に、下男を頼んで妾を井戸に突き落として殺し、世には妾は身投げをしたのだ、と披露したという。そして湯治場にいた件の庄屋に、飛脚をたてて妾の死を告げたところ、庄屋は、妾が身投げをしたのは彼女自身のせいであると言い、湯治をして帰った。

このように、典拠である「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」は、嫉妬の為に夫の愛妾を殺害した本妻に、その愛妾の亡霊が復讐する話である。対する「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」は、隣家の女に毒殺された挙句、妻の座を篡奪された女の亡霊が、件の後妻に報復する話である。

典拠における正妻は、妬心が募るあまり妾を謀殺した悪人という面を備えており、その為に妾の亡霊に命を奪われるのであるが、「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」における本妻は、生前は後妻に妻の座と命を奪われ

た被害者であり、死後は復讐の正当性を有する人物として設定されている。典拠に比し、前妻の正当性が強調されているのみならず、典拠にはない「後妻うち」の構図が挿入されている様がうかがわれよう。

そして本編においてもまた、前述の「後妻うちの事付タリ法花経の功力」のように、「後妻うち」が、己の身を害した——ないしはその実害の度合いがいや増し、殺害の領域にまで達した——後妻への復讐をも兼ねていると言えよう。

さらに、「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」において、妾を寵愛していた筈の庄屋は、彼女の不審な死を「身を投て死けるハ、をのれが愚痴の科よ、とて、さのミ、おとろきもせず」に湯治を続ける冷淡な人物であるが、亡霊の祟りを被つてもいないし、怨嗟の対象となってもいない。

対する「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」においては、前妻を毒殺した後妻と夫婦になった夫は、後妻とともに、前妻の亡霊から、首を取られて殺されているのである。

典拠に比し、「後妻うち」の「ルール」の破綻がその度合いを増している様が、ここからもうかがわれるのである。

続いての『諸国百物語』における「後妻うち」を扱った話は、巻四ノ一「端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」である。——端井弥三郎という「文武

二道のさぶらひ」が、ある夜清洲から犬山へ出かけた。中途に川があつたので、渡し守を呼ぶが、眠っていて返事がない。そこへ川上から、火炎を吹く逆さまの女がやって来る。弥三郎が誰何すると、女は自分が川向かいの屋村の庄屋の女房である由、夫と妾が共謀して自分を絞め殺し、死体を川上に逆さに埋めた由、敵をとるためにこの川を渡して欲しい由を告げる。弥三郎が女を対岸に渡してやると、女は屋村へ飛び去る。弥三郎が庄屋の家の様子を見ることができると、妾の首を下げた女が現れ、弥三郎に礼を言って消える。翌朝弥三郎は、屋村の庄屋が新しく迎えた女房が、首を引き抜かれたことを聞く。不思議に思った弥三郎が主君に一部始終を申し上げ、川上を掘らせたところ、逆さに埋められた女の死骸があつた。件の庄屋は主君の命によって成敗されたというのが、本編のおおよそのあらすじである。

この「端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」も、前述の「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」と同様に、「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」を典拠としている（42）。

そして、前述の「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」と、その典拠である「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」の関係に見るように、典拠に比し、本妻が復讐の正当性を有する人物として設定されていること、「後

妻うち」の構図が挿入されていること。そしてその「後妻うち」が、己の命を奪った夫の愛妾への復讐も兼ねていることが、うかがわれるのである。

また、典拠である「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」の庄屋は、女房の死を「をのれが愚痴ぐちの科とがよ」と評し、驚く様子も見せないという冷淡な人物ではあるが、下女殺害に直接的な関与はしていない。また、下女の怨嗟、それに起因する祟りを被ってもいない。

対する「端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」の庄屋は、妾と共謀して本妻を絞め殺しており、典拠に比してその悪辣さが強調されている様子がうかがわれよう。そして前妻の亡霊によって殺害されることは免れたものの、一連の出来事に不審を抱いた主人公・弥三郎の進言によってその罪が明らかとなり、弥三郎の主君である「備後びんごどの」から成敗されている。夫は本妻の亡霊によって殺害されることこそ免れたものの、「後妻うち」が原因となってその命を奪われているのである。

以上、本章段においては『諸国百物語』の「後妻うち」を扱った作品を取り上げ、「後妻うち」の「ルール」という観点、あるいは典拠との比較という観点から、その読解を進めてきた。

結果、これらの話においては、

①前妻ないしは本妻の亡霊の怨嗟が、妾ないしは後妻に対するのと同様、あるいはそれ以上に夫に対しても向けられており、「後妻うち」のルールの破綻の度合いが顕著となっている。

②「後妻うち」が、己の命を奪った妾ないしは後妻への復讐をも兼ねている。

③典拠に比し、前妻ないしは本妻の亡霊の有する「後妻うち」の正当性が、より強調されている。

といった事柄が、明らかとなったのである。

四―三・「後妻うち」――『諸国百物語』以後

以上、本稿においては、『諸国百物語』以前の近世怪異小説における「後妻うち」を扱った話、あるいはその典拠との比較を念頭に置きながら、『諸国百物語』における「後妻うち」を扱った話の読解を進めてきた。

結果【表4】に見るように、『諸国百物語』における「後妻うち」を扱った話においては――「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」(43) 筈なのだが――妻の怨念が夫にも向かっている話は、八話中五話であり、その過半数を占めていること。

「後妻うち」が何らかの形で夫の身に影響をもたらしている話は、巻五ノ十六「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうちの事」以外、全てであることが、明らかとなった。

以上の事柄から、『諸国百物語』の「後妻うち」を扱った話においては、先妻の亡霊は夫に怨嗟の矛先を向けられないという「後妻うち」の「ルール」の破綻が顕著であるという結論が、導き出されるのである。

しかしながら『諸国百物語』には、こうした「後妻うち」の「ルール」が全きまでに破綻し、新たな話型を創出している様も見受けられるのである。以下に挙げる巻二ノ十五「西江伊予の女にょばうの執心の事」がそれである。

江州沢山に、西江伊予という者がいた。三年ほど知行所に籠って若い女たちを寵愛していたが、本妻は嫉妬心が深かったのでこれを怒るあまり、病となって死んでしまった。本妻はまた、常日頃から「自分がもし死んだならば、一日か二日の後に伊予殿を迎えに来るだろう。そうでなければ世人は、自分を嘲り笑うことであろう」と言い、白い薬を鏡の下に入れ、「自分が死ぬ間際になったなら、この薬を与えて欲しい」とも言っていたので、遺言通りに薬が与えられた。伊予は知行所から戻り、葬儀をねんごろに執り行ったが、屋鳴りが甚だしかったので、人はこれを恐れた。その三日後、伊予はかわやで、目の玉を練り抜かれて殺されていた。妾の子が跡をついだものの、屋鳴りは相変わらず激しかったので、子は本妻を弁財天として祭ったところ、何事も起こらなくなったというのが、おおよそのあらすじである。

本編において、夫は妻以外の女を寵愛しており、妻はこれを妬ましく思う為に死に、亡霊となるという、「後妻うち」の萌芽は見られるもの、前妻の亡霊によって命を奪われたのは夫のみとなっている。

・ われとしごろのほむらいづくへかゆくべき。もしあひはてなば、一日二日があひだには伊予いよどのをむかへに来るべし。

・ 人々おどろきかわやの戸をひらきてみれば、伊予いよがまなこ玉たまをほりぬきてころしをきける。

先に掲げた本妻の怨みの言葉、そして後に続く夫の凄惨な死に様からは、前妻の怨嗟・暴力行為の及ぶ先が夫であり、妾には直接及んでいないという本編の展開、そして先に述べた「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」(44)という「後妻うち」の「ルール」の、全きまでの破綻が見られるのである。

このように『諸国百物語』においては「後妻うち」のルールの破綻がその度合いをいや増し、そうした傾向が、従来の怪異小説には見られない、新たな話型を創出につながった様が、ここからはうかがわれよう。

こうした事柄を考慮に入れ、本章段では『狗張子』刊行の元禄五年に至るまでの近世怪異小説における「後妻うち」を扱った話——【表2】参照——について、考察を加えてゆきたい。

初めに天和三年(一六八三)に成立した『新御伽婢子』における「後妻うち」を扱った話を取り上げる。

先学から「最近の話としてその面白さを味わってもらい、かつ、教訓のよすがにしたかった」(45)、「民話的怪異小説として成立した」が「名所記的な性格と見聞記的な性格」を持ち、「新しさ」がそこにあった(46)、「読むための怪異談を志向し、怪異性を高めるための積極的な改変を見る」(47)といった、本作品の有する様々な文芸的意匠について指摘をされている、『新御伽婢子』の「後妻うち」の当該話は、巻三ノ三「死し後の嫉し妬つと」である。

——河州のある富裕人の妻が、長患いの末に死んだ。寺で葬礼を行ったところ、その夜亡者が棺から出て、周囲の灯火を消して回った。そうこうしているうちに明け方となり、死者の夫が召使の「りん」に用があったので名を呼んだところ、返事がない。訝って寝所を検めたところ、「りん」の首は無くなっており、棺の中の亡者がこれを引き抜いていた。夫が「りん」に目をかけていることへの妬心に起因する病ゆえに死んでもなお、死後に恨みを報じたというのが、そのおおよそのあらすじである。

そして本編は、「四——「後妻うち」——『諸国百物語』以前」において考察を加えた、片仮名本『因果物語』上巻六「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ二を典拠としている(48)。

なお、本編と「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ二の相違点に関しては、当麻春仁氏によって詳細な比較がなされており、当麻氏は「一番の相違は、死人が棺桶から手を出すくだりを死体が棺桶から出て動きまわるとしたことであろう。」と述べ、「怪異性を高め、読者を引き付けるための描写と考える。」と、こうした改変について評価を与えている(49)。

しかしながら、「死後嫉妬」に「後妻うち」の「ルール」破綻という観点から考察を加えた場合、妻の怨嗟はあくまでも夫の愛妾のみに向けられていることから、そこに破綻の兆候は見受けられないと言えよう。

さらに、妻の怨念が夫の寵愛する下女にのみ向けられているというのは、典拠とされる「嫉深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ二も同様である。

そのような点を考慮に入れると「死後嫉妬」は、「男に死滅の返報をもたらず女霊の恐怖」(50)を十分に描き切るといふ水準に未だ達しておらず、かつ『諸国百物語』以前の「後妻うち」を扱った章群の規矩を脱する作品ではないという様が、うかがわれるのである。

そして、こうした事柄からは、「読むための怪異談を志向し、怪異性を高めるための積極的な改変を見せる。」(51)筈の『新御伽婢子』にしては、「死後嫉妬」はやや意匠を欠く話であると言えよう。

ついで貞享四年(一六八七)に刊行された『御伽比丘尼』(『諸国新百物語』(52))における「後妻うち」を扱った話に考察を加えてゆく。

『諸国百物語』は文字通りの怪談集であった。『百物語』は笑話を含む

雑和集で、「咄本」として分類されているものである。したがって『諸国新百物語』の内容は、自ずとこの両者にかかわるものであることはいうまでもない。」(53)と、前述の太刀川氏から、本編の「怪談集」ならびに「咄本」としての性質について指摘をなされている『御伽比丘尼』(『諸国新百物語』)。その当該話は、卷二ノ三「恨うらみに消きへし露つゆの命いのち付むく葎らがのべの女鬼おに」である。——上京に何某民部という色好みの男がおり、家に妾を置いていた。民部の本妻は甚だ嫉妬深かったので、妾の存在に恨み憤り、夫に埋火や熱湯を打ちかけては、これを罵った。こうした本妻を持って余した夫は彼女を親里へ帰したが、女はやがて狂死した。それより四、五日のち、夫と妾も病死し、その家は亡びたという。

こうした、埋火や熱湯を夫にかけるといふ狂態、「恨うらめしの夫おつとや」といふ言葉に見るような、本妻が「愧おそ迄しまにのゝしる」矛先は全て夫であり、妾が直接害を蒙っている様は見受けられない。

また、本妻の狂死の後、妾や夫が病死した——本編に明記こそされていないが、本妻の怨嗟によるものだろう——という設定からも、本妻の怨みや諸々の負の激情の主な対象は、夫として位置づけられている様が見受けられるのである。

前述の『諸国百物語』に見た、「後妻うち」の「ルール」破綻が、ここでもうかがわれよう。

以上、本章段では『諸国百物語』以後から『狗張子』刊行の元禄五年(一六九二)に至るまでの近世怪異小説における「後妻うち」を扱った話を取り上げ、その読解を進めてきた。

結果、『諸国百物語』以後の怪異小説における「後妻うち」を扱った話は、その数もさほど多くはなく、「後妻うち」の「ルール」破綻が少しく見受けられるものの、その度合いは『諸国百物語』のそれに比してさほど大きいものではないという結論が、導き出されるのである。

四―四・まとめ

以上、本章においては、『諸国百物語』のさらなる文芸的特質および、近世怪異小説史の中の位置づけを明らかにする為に、そこに収録されている「後妻うち」を扱った話、ならびに先行の近世怪異小説、そして『伽婢子』の続編であるところの『狗張子』に収録された「後妻うち」を扱った話や典拠との比較を通じ、読解を進めてきた。

結果、『諸国百物語』以前の近世怪異小説における「後妻うち」を扱った章群——片仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』、『宿直草』(『御伽物語』)——

—には、前妻の怨念もしくは暴力行為の矛先が、直接夫に向かっている様は書かれていない為、「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」(54)という、「後妻うち」の「ルール」からの逸脱は、さほど顕著ではないこと。

そして、『諸国百物語』における「後妻うち」を扱った話には、

① 作品名に「後妻うち」が冠せられている話が、八話中三話を占めており、こうした特質は『諸国百物語』以前・以後の近世怪異小説いずれにも、見受けられない。

② 「後妻うち」が、己の命を奪った妾ないしは後妻への復讐をも兼ねている話が、八話中三話を占めており、こうした話型は『諸国百物語』以前・以後の近世初期怪異小説の「後妻うち」を扱った話には、見受けられないものである。

③ 「後妻うち」を遂げた本妻に、嫉妬に起因する否定的描写が冠せられているものが、四分の一を占めている。

④ 「後妻うち」の動機が復讐であり、かつ典拠が判明している話の場合、典拠に比し、前妻ないしは本妻の亡霊の有する「後妻うち」の正当性が、より強調されている。

⑤ 前妻ないしは本妻の亡霊の怨嗟が、妾ないしは後妻に対するのと同等、あるいはそれ以上に夫に対しても向けられている話が、八話中五話であり、さらには、「後妻うち」が夫のその後の運命に影響をもたらしている話は、巻五ノ十六「松ざか屋甚太夫が女ばうちはなりうちの事」以外、全てであり、「後妻うち」の「ルール」の破綻の度合いが顕著となっている。

⑥ 「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」(55)という「ルール」の、全きまでの破綻が見られる話が、収録されている為、「後妻うち」の「ルール」の破綻がその度合いをいや増し、そうした傾向が、従来の怪異小説には見られない、新たな話型を創出につながっている。

という特質が見受けられることが、明らかとなった。

これらの事柄からは、「後妻うち」という一つのテーマが、『諸国百物語』においては重要視され——「後妻うち」を扱った話の収録比率の高さ、「後妻うち」と作品名に冠せられている話の登場といった特徴が、その証左となる——、それが為に「後妻うち」に己の命を奪った妾ないしは後妻への復讐をも兼ねさせる、あるいは「後妻うち」の「ルール」破綻の度合いを甚だしいものにするといった、種々の文芸的意匠がそこに賦与されてきた様、ひいてはそれが、「後妻うち」の「ルール」が全きまでに破綻し、妻の怨嗟が夫にのみ向かうという、新たな話型の創出につながった様が、うかがわれるのである。

対する、『諸国百物語』以後の怪異小説における「後妻うち」を扱った話は、『新御伽婢子』、『御伽比丘尼』(『諸国新百物語』)にそれぞれ一話ずつの収録となっており、その数もさほど多くはなく、「ルール」破綻が少しく見受けられはするものの、その度合いは『諸国百物語』のそれに比してさほど

大きいものではないこと。

また、「後妻うち」が己の命を奪った後妻もしくは愛妾、夫への復讐も兼ねているといった話型、「後妻うち」の「ルール」が全きまでに破綻している話型も見受けられず、全体として『諸国百物語』以前の「後妻うち」の規矩を大きく逸脱した話は見受けられないことが判明した。

以上の事柄から、『諸国百物語』における「後妻うち」を扱った話は、その特質のバリエーション、「ルール」破綻の度合いといった観点から見ても、『諸国百物語』以前、以後の怪異小説における「後妻うち」を扱った話と比し、高い文芸的水準が維持されているという結論が、導き出されるのである。

註

(1) 富士昭雄氏は「伽婢子と狗張子」(『国語と国文学』第四十八巻第十号、一九七一・十)において、「ときぼうち」も「いぬはりこ」も子供のための魔除けを兼ねた玩具であつて、いずれも童幼に読み易く、蒙を啓き、警戒に役立つという寓意を持った題名である」ことを指摘し、『伽婢子』と『狗張子』が「正編続編の関係をなしている」ことを述べている。

(2) 本稿では『諸国百物語』に見る「後妻うち」の、近世怪異小説における位置づけを考察するため、小澤江美子氏が「延宝期の怪異小説考——曾呂利物語」から『諸国百物語』へ(『大妻女子大学大学院文学研究科論集』第二号、一九九二・三)で「『諸国百物語』刊行の延宝五年」までの「近世初期の怪異小説」として挙げている『奇異雑談集』、片仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』、『伽婢子』、『宿直草』(『御伽物語』)に、片仮名本『因果物語』以前の成立が見込まれる平仮名本『因果物語』。ならびに太刀川清氏が「序章 百物語と伽婢子」(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)「初出…「怪談会から怪異小説へ」(『国語国文研究』第二十四号、一九六三・二)において「伽婢子」と「百物語」、この書名をもつ作品は膨大な数の怪異小説からするとごく僅かなものにすぎないが、これほど近世の怪異小説を意義づけたものもなかった」由を指摘していることを鑑み、これらの「伽婢子」や「百物語」が作品名に冠せられている怪異小説を取り上げた。しかしながら、江本裕氏によって「第一部 仮名草子」四「了意怪異談の素材と方法」(『近世前期小説の研究』、若草書房、二〇〇〇・六)「初出…「了意怪異談の素材と方法」(『近世文芸 研究と評論』第二号、一九七二・五)において「零本で、巻七のみ」と指摘される『続伽婢子』に関しては、所収比率が完全には網羅出来ない為、取り上げなかった。なお、『狗張子』は『伽婢子』と「正編続編の関係」にあるという富士氏の指摘——註(1)前掲「伽婢子と狗張子」——を鑑み、ここに掲載した。

(3) 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」(一柳廣孝氏、吉田司雄氏編著『幻想文学、近代の魔界へ』ナイトメア叢

書2、二〇〇六・五)

(4) 永井路子氏「頼朝の死を廻って」(『新装版 悪霊列伝』、角川書店、一九九八・九)

(5) 『五国故事』(宋・闕名)の巻下「偽閩王氏」を出典とする。「其妾ヲ捕テ、室ノ内ニ推コメ、械木ニ繋ギ縛テ、錐ヲ以テ刺テ死者ノ、八十人ナリ、」といった、典拠の条には見られない妻の残酷行為が加えられている様。典拠に見る「木掌」を用いた折檻の描写が「又置木掌掴人」から「又、木掌ヲ造リテ、妾力頬、背、臀ヲ擱テ、曳裂、其ノ

アラケナキ事ト諭ナシ、」といった風に、より詳細になっていたりと、妻の残忍苛烈さを強調する傾向が見受けられる。また、典拠では雷撃で死ぬのは博陵氏であるが、本編では妻——博陵氏の娘——となっており、原話が妬婦を雷撃によって罰するという因果応報譚に変貌している様がうかがわれる。

(6) 『稽神録』(宋・徐鉉)の巻ノ一「歐陽氏」を典拠とする。欧陽氏の妻が老父を拒絶するくだりが、原話では「妻見其貧陋不悦拒絶之」となっているのに対し、本編では「年老曲マリ貧陋ニシテ、藍縷ヲ綴リタル状ノ、憔悴(筆者註…「憔悴」は右側に「セウスイ」、左側に「ヤセヲトロヘ」の振り仮名あり。)セルヲ悦ビズシテ、曰、是レ、我カ

父ニハ非ス、人ヲ誑カシ欺キテ、老後ノ養ナヒヲ求ムル者ノナリ、其、門前ニモ居ヘカラス、疾追出タセ、ト云テ、入り去ル、」と、妻の酷薄さを強調する描写が挿入されている。また、欧陽氏の妻が雷撃によって殺されるという設定は、「不孝婦遇ニ雷震」稽神録、「欧陽氏」ともに共通しているが、前者には「手足抜テ皮ニ連ナリ、黒ク薫リテ、

髪、皆、焦レ、擊裂テ死シタル其ノ形チ、煨ノ如シ、」といった、妻の醜骸の描写が加わっている。これらの事柄から、本編は原話に比し、雷撃の天罰としての側面が、より強調される形をとっている。

(7) 『稽神録』(宋・徐鉉)の巻ノ一「廬山賣油者」を典拠とする。原話に比較的忠実な話である。

(8) 『劉賓客嘉話録』(唐・韋絢)。『太平広記』(北宋・李昉等編)の巻三百九十三に、「出嘉話録」として、「僧道宣」が収録されている。

- (9) 西田耕三氏「雷撃震死の説話」(『熊本大学文学部論叢』第六十三号、一九九九・三)
- (10) 『唐書武后紀織錦璇璣図』、『池北偶談』(清・王士禎)の巻十五に類話と見られる「朱淑貞璇璣図」が収録されている。
- (11) 井上泰至氏「吉備津の釜」——「後妻打ち」からの乖離——(『上智大学国文学論集』第二十、一九八七・一)
- (12) 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「(鼎談)江戸の怪異譚と西鶴」(高田衛氏他編『西鶴と浮世草子研究 特集・怪異』第二号、笠間書院、二〇〇七・十一)
- (13) 註(11) 前掲 井上泰至氏「吉備津の釜」——「後妻打ち」からの乖離——
- (14) 註(12) 前掲 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「(鼎談)江戸の怪異譚と西鶴」
- (15) 池田彌三郎氏「人を目指す幽霊」(『日本の幽霊』、中央公論新社、一九七四・八)。
- (16) 註(3) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」
- (17) 註(15) 前掲 池田彌三郎氏「人を目指す幽霊」
- (18) 註(3) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」
- (19) 堤邦彦氏「特集・安土桃山ルネッサンス 地方資料の発掘——雑談、夜話の原風景」(『国文学』第五十一巻第十一号、二〇〇六・十)
- (20) 当麻晴仁氏『新御伽婢子』考——片仮名本『因果物語』との関係——(『青山語文』第二十二号、一九九二・三)
- (21) 中嶋隆氏「第四章 因果物語」(末木文美士氏他執筆、岩波講座 日本文学と仏教 第二巻『因果』、岩波書店、一九九四・一)
- (22) 註(3) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」
- (23) 註(3) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」
- (24) 註(3) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」
- (25) 註(3) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」
- (26) 註(15) 前掲 池田彌三郎氏「人を目指す幽霊」
- (27) 註(3) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」
- (28) 註(3) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」
- (29) 頼原退蔵氏「近世怪異小説の「源流」(『国語国文』第八巻第四号、

- (30) 註(2) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」
- (31) 註(2) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」
- (32) 註(29) 前掲 穎原退蔵氏「近世怪異小説の一流流」
- (33) 田川邦子氏「怪談『とのゐ草』論」(『文教大学女子短大部研究紀要』第二十三集、一九七九・十二)
- (34) 堤邦彦氏 第三部「第三章 江戸時代人は何を怖れたか」―「怪異との共棲―『宿直草』に萌すもの―」(『江戸の怪異譚』、ぺりかん社、二〇〇四・十一)「初出…「怪異との共棲―江戸時代人は何を怖れたか―」(『伝承文学研究』第五十号、二〇〇〇・五)」
- (35) 註(34) 前掲 堤邦彦氏・第三部「第三章 江戸時代人は何を怖れたか」―「怪異との共棲―『宿直草』に萌すもの―」
- (36) 註(15) 前掲 池田彌三郎氏「人を目指す幽霊」
- (37) 註(12) 前掲 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「(鼎談)江戸の怪異譚と西鶴」
- (38) 註(12) 前掲 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「(鼎談)江戸の怪異譚と西鶴」
- (39) 註(12) 前掲 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「(鼎談)江戸の怪異譚と西鶴」
- (40) 註(15) 前掲 池田彌三郎氏「人を目指す幽霊」
- (41) 註(2) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」
- (42) 堤邦彦氏は「近世説話の一視覚―唱導から文芸への軌跡―」(内田保廣氏他編『近世文学の研究と資料―虚構の空間―』、三弥井書店、一九八八・十二)において、「唱導説話として成立した逆女譚は、平仮名本『因果物語』巻二の一を生みさらに後続の怪異小説に素材を提供する。」ことを述べ、『諸国百物語』巻四ノ一「端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」が「最も早い時期の影響作である」由を指摘している。
- また当麻晴仁氏は『新御伽婢子』考―片仮名本『因果物語』との関係―(註(20) 前掲)において、『諸国百物語』巻四の一が平仮名本巻二の一を「利用」していることを述べている。
- (43) 註(15) 前掲 池田彌三郎氏「人を目指す幽霊」
- (44) 註(15) 前掲 池田彌三郎氏「人を目指す幽霊」
- (45) 湯沢賢之助氏『新御伽婢子』解説(『古典文庫第四四一冊 新御伽婢子』、一九八三・六)

- (46) 太刀川清氏「第七章 浮世草子の伽婢子」第一節『新御伽婢子』(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)〔初出…『新御伽婢子』の位置』(『国語国文研究』第六十一号、一九七九・二)〕
- (47) 註(20) 前掲 当麻晴仁氏『新御伽婢子』考——片仮名本『因果物語』との関係——
- (48) 註(20) 前掲 当麻晴仁氏『新御伽婢子』考——片仮名本『因果物語』との関係——
- (49) 註(20) 前掲 当麻晴仁氏『新御伽婢子』考——片仮名本『因果物語』との関係——
- (50) 註(3) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」
- (51) 註(20) 前掲 当麻晴仁氏『新御伽婢子』考——片仮名本『因果物語』との関係——
- (52) 太刀川清氏は「第三章 浮世草子の百物語」第一節『諸国新百物語』(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)〔初出…『諸国新百物語』と『御伽比丘尼』』(『長野県短大紀要』第三十三号、一九七八・十二)〕において『諸国新百物語』は貞享四年二月刊行の西村本『御伽比丘尼』(江戸新革屋町 西村半兵衛・京三条通 西村市郎右衛門版)の改題本であった。由を指摘している。従って、本稿では底本として貞享四年刊行の国会図書館蔵本を用いている、西村本小説研究会編『西村本小説全集 下巻』(勉誠社、一九八五・七)をテキストとした。
- (53) 註(52) 前掲 太刀川清氏「第三章 浮世草子の百物語」第一節『諸国新百物語』
- (54) 註(15) 前掲 池田彌三郎氏「人を目指す幽霊」
- (55) 註(15) 前掲 池田彌三郎氏「人を目指す幽霊」

以下、片仮名本『因果物語』本文引用は全て朝倉治彦氏編『仮名草子集成』第四卷(東京堂出版、一九八三・十一)に、『稽神録』は常熟老报刊・沈秋衣主編、常熟市档案馆編『叢書集成新編』第八十二卷(扬州市、广陵书社、二〇〇七)に、『五国故事』は馬俊良編『龍威秘書 2 集』(石門)、大西山房、嘉慶元年(一七九六)刊、早稲田大学中央図書館蔵)に、『諸国新百物語』、『御伽比丘尼』(『諸国新百物語』)は西村本小説研究会編『西村本小説全集 下巻』(勉誠社、一九八五・七)に、『新御伽婢子』は湯沢賢之助氏編『古典文庫第四四一冊 新御伽婢子』(古典文庫、一九八三・六)に、『新語園』は花田富二夫氏他編『仮名草子集成』第四十卷(東京堂出版、二〇〇六・九)、花田富二夫氏他編『仮名草子集成』第四十一卷(東京堂出版、二〇〇七・二)に、『太平広記』は李昉等編『太平広記(500巻)』(北京、人民文学出版社、一九五九)に、『池北偶談』は『池北偶談 卷1—26』(蘇州、

文粹堂、康熙四十年（一七〇一）序、早稲田大学中央図書館蔵）、『劉賓客嘉話録』は『五朝小説 16』（「出版地不明」、「出版者不明」、「出版年不明」、早稲田大学中央図書館蔵）に拠る。

【表1】近世初期～中期怪異小説における「後妻うち」を扱った話の割合

作品	章題	説話中
『奇異雑談集』 (写本)	0/39 (0%)	0/39 (0%)
片仮名本 『因果物語』	0/77 (0%)	6/187 (3.2%)
平仮名本 『因果物語』	0/85 (0%)	0/85 (0%)
『曾呂利物語』	0/41 (0%)	1/41 (2.4%)
『伽婢子』	0/68 (0%)	0/68 (0%)
『宿直草』(『御伽物語』)	0/68 (0%)	2/68 (2.9%)
『諸国百物語』	3/100 (3%)	8/100 (8%)
『新御伽婢子』	0/48 (0%)	1/48 (2.1%)
『百物語評判』	0/42 (0%)	0/42 (0%)
『御伽比丘尼』 (『諸国新百物語』)	0/22 (0%)	1/22 (4.5%)
『狗張子』	0/45 (0%)	0/45 (0%)

* 「後妻うち」を扱った話/所収話数

* カッコ内は割合 (小数点第一位以下四捨五入)

【表2】近世初期～中期怪異小説における「後妻うち」を扱った話の巻次・題名(『諸国百物語』を除く)

作品	巻章	章題	概略
『奇異雑談集』 (写本)			
片仮名本 『因果物語』	上巻六ノ一	「妬深女、死シテ後ノ女房ヲ、取 殺事付下女ヲ取殺事」	前妻の亡霊が、後妻を取り殺す。
	上巻六ノ二	「妬深女、死シテ後ノ女房ヲ、取 殺事付下女ヲ取殺事」	嫉妬深い女性がその死後、日頃か ら妬んでいた下女の首を引き抜 き、棺の中でそれに食い付いてい る。
	上巻六ノ三	「妬深女、死シテ後ノ女房ヲ、取 殺事付下女ヲ取殺事」	前妻の亡霊が、後妻の髪を抜き取 り、ついには取り殺す。
	上巻十一ノ 一	「女生霊、夫ニ怨ヲ作事」	前妻の生霊が、後妻の首を絞める。

平仮名本 『因果物語』	中巻二十三 ノ二	「幽霊来子、子ヲ産事付亡母、子ヲ憐ム事」	前妻の亡霊が、後妻の舌を抜く。
	中巻三十五	「幽霊、刀ヲ借テ人ヲ切事」	前妻の亡霊が、後妻の首を切り落とす。
『曾呂利物語』	巻四ノ七	「女の妄念怖ろしき事」	本妻の亡霊が、妾の首をねじ切つて殺す。
	『伽婢子』		
『宿直草』 〔御伽物語〕	巻三ノ十	「ゆうれいの方人の事」	前妻の幽霊が、後妻の首を絞めて殺す。
	巻三ノ十二	「幽霊詭経にうかびし事」	前妻の幽霊が後妻に取り憑き、後妻が錯乱する。
『新御伽婢子』	巻三ノ三	「死後嫉妬」	前妻の亡霊が、夫が目をかけていた召使の首を引き抜いて殺す。
『百物語評判』			
『御伽比丘尼』 〔諸国新百物語〕	巻二ノ三	「恨に消し露の命付雀がのべの女鬼」	嫉妬ゆえに狂死した本妻の死後、夫とその妾も病死する。
『狗張子』			

【表3】『諸国百物語』における「後妻うち」を扱った話の巻次・題名・概略

章巻	章題	概略
巻一ノ八	「後妻うちの事付タリ法花経の功力」	前妻の亡霊が、生前已を「てうぶく」していた後妻を、首をとって殺す。
巻二ノ九	「豊後の国何がしの女ばう死骸を漆にて塗りたる事」	前妻の亡霊が、後妻の首をねじ切つて殺す。
巻三ノ五	「安部宗兵衛が妻の怨霊の事」	本妻の怨霊が、夫の「そばにねたる女ばう」を引き裂き、舌を抜いて殺す。
巻三ノ七	「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」	前妻の亡霊が、已を毒殺した後妻を、首をとって殺す。
巻四ノ一	「端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」	本妻の幽霊が、夫と共謀して已を殺した妾を、首をとって殺す。
巻四ノ十四	「下総の国平六左衛門が親の腫物の事」(目録題:「死後の後妻う	本妻が、夫の寵愛していた下女を絞め殺す。

	ち付タリ法花経にて成仏の事」)	
巻五ノ十四	「栗田左衛門介が女ぼう死して相撲を取りに来たる事」	前妻の亡霊が、後妻に相撲を挑み、ついには取り殺してしまう。
巻五ノ十六	「松坂屋甚太夫が女ぼうういはなりうちの事」	前妻の「しうしん」が、後妻を殺す。

【表4】『諸国百物語』の「後妻うち」を扱った話における、夫たちの結末

妻の祟り・報復の対象とはならず、無事である。	巻五ノ十六
妻の祟り・報復の対象となるが、仏教の功力で難を逃れる。	巻一ノ八、巻四ノ十四
妻に殺害される。	巻二ノ九、巻三ノ五、巻三ノ七
妻に殺害されないが、「後妻うち」がきっかけで破滅する。	巻四ノ一
妻に殺害されないが、「後妻うち」がきっかけで出家する。	巻五ノ十四

五―一・「執心」譚――『諸国百物語』以前

先の章において考察を加えたように、本編における「後妻」うちを扱った話の所収率が、他の近世怪異小説に比して高いことから、「後妻うち」が作品における重要テーマの一つとなっており、さらには「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」(1)という「後妻うち」のルール破綻に激化が見られ、ひいてはそれが、「後妻うち」のルールが全きまでに破綻し、妻の怨嗟が夫にのみ向かうといった、あるいは、「後妻うち」に己の命を奪った妾ないしは後妻への復讐をも兼ねさせるといった、新たな話型の創出につながっているという特質を備えた、『諸国百物語』。

本章ではこのような文芸的特質を有する『諸国百物語』の、さらなる文芸的特質および、近世怪異小説史の中の位置づけを明らかにする為に、「後妻うち」を扱った話と同様、その所収比率が高い「執心」ないしは「しうしん」を、怪異の主体として位置づけている話を取り上げ、他の近世初期中期怪異小説における、同じ題材を扱った話との比較を進めてゆく。

小澤江美子氏がその論中において、「後続の怪異小説に大きな影響を及ぼした。」とする、『因果物語』、『曾呂利物語』、『伽婢子』(2)。ならびに、これらの「作品の影響を受けて」版行されたとされる、『諸国百物語』、『宿直草』(『御伽物語』(3)。これらに加えて、小澤氏が「近世初期の怪異小説」として定義づける『奇異雑談集』(4)。太刀川清氏が「近世の怪異小説を意義づけた」と指摘する、「伽婢子」と「百物語」が書名に冠せられた作品群(5)。

これらの近世怪異小説にも『諸国百物語』同様、「執心」あるいは「しうしん」を扱った話は散見されるものの、『諸国百物語』に比してもその数は多くはなく、一つの章群を形成しているとは言い難い。

本稿ではそこで、『諸国百物語』における、これらの「執心」を扱った話を取り上げ、近世怪異小説に収録されている「執心」を扱った話や典拠との比較、ならびに仏教的色彩と娯楽色の変遷とを通じ、その読解を進めてゆく。そして近世怪異小説における「執心」の一潮流を見出すこと、ならびに「執心」という側面から、『諸国百物語』の新たな特性、文芸的価値を見つけることを、その目的としたい。

初めに、『諸国百物語』以前の近世初期から、それ以後の中期までの怪異小説における「執心」譚――作品名に「執心」あるいは「しう心」「しうしん」という言葉が冠せられている話。また作品中に「執心」ないしは「しう心」「しうしん」といった言葉が登場し、それが怪異の原因として位置づけられている話。こうした章群を、本稿では「執心」譚として定義づける――について、考察を加えてゆく。

【表1】は、『諸国百物語』を始め、『狗張子』の刊行された元禄五年（一六九二）に至るまでの、先の章段で述べた、主だった近世怪異小説を取り上げ、各々の作品において、「執心」譚が収録されている割合を示したものである。

寛永頃の成立とらしい『奇異雑談集』（写本）を例にとると、「執心」譚の収録されている割合は、章題39話のうちでは0話であるが、所収説話39話のうちでは3話であり、その7・7パーセントを占めている（小数点第一以下は四捨五入とした）。

このようにして【表1】に掲載されたそれぞれの作品を見てゆくと、『諸国百物語』と他の近世怪異小説とを比した際、「執心」譚の所収率が、『諸国百物語』においては、章題に対しては11パーセント、説話中に対しては19パーセントとなっている様子がわかる。

さらには、他の近世怪異小説における、「執心」譚の所収比率が、章題に対する比率・説話に対する比率ともに10パーセント以下であることから、『諸国百物語』における、これらの章群の所収比率の高さがうかがわれるのである。

以上の事柄をふまえると、先の章段で述べたように、『諸国百物語』においては、「執心」譚という主題が、他の近世怪異小説に比べ、重要視されていると言えるだろう。

ついで、【表1】に掲載された近世怪異小説のうち、『諸国百物語』以前の作品に収録されている「執心」譚の読解を進め、それぞれの特質を明らかにしてゆきたい。

【表2】は【表1】に掲載した近世怪異小説（『諸国百物語』を除く）における「執心」譚の、作品名・巻次・章題・概略を、それぞれ記したものである。

先ず【表2】の最初に掲載されている、『奇異雑談集』（写本）における「執心」譚について、考察を加えてゆく。

先学から「中世唱導者の口吻を色濃くとどめる」（6）、「仏教臭の強い」（7）と、その唱導・教化的色彩を指摘されているのみならず、「後続の怪異小説に多くの素材を与えた点で研究者の目をあつめ、唱導から文芸への分岐に位置付けられてきた。」（8）というように、作品が有する文芸性について言及され、唱導という規矩に留まっていなかったことについても述べられている『奇異雑談集』（写本）。

そこに収録されている「執心」譚として、初めに取り上げるのは上巻ノ

四「古堂フルダウの天井テンジヤウに、女ハツメを磔ハツケに、かけをく事」である。以下にそのあらすじ

を述べる。――中国地方を旅する僧侶がいた。山中の古堂で夜明かしをする事になったある夜、松明をふりたてた男がやって来る。男は堂の天井に上り、罵りながら何かを打ちすすえる風である。その合間に、女の許しを乞う声が聞こえる。男が立ち去って後、不審に思った僧侶が天井に上ると、そこ

には女が磔にかけられていた。僧侶が事情を尋ねると女は、先刻の男が己に

「外夫」の疑いをかけ、共にいた男を殺害して首をとり、そこに置いた由を言い、僧に助けを乞う。僧侶は女の縄を切り、様々の介抱をしてから、一里ほど先にあるという北の里に、彼女を送り届ける。女の家では、その家族が、女はすでに殺されたと思ひ、中陰の念仏を唱えていた。涙にむせぶ両親は僧侶をあつくもてなし、里に留まる事を提案するが、僧侶は修行者であるが故に、これを断る。僧侶が里を出立する日、もとの美しい姿に回復した女は、心ばかりの礼である、邪魔になれば途中で捨てても構わないと言い、「小つづら」を手渡す。しばらく行くうちに、つづらの重さに耐えかねた僧侶が、蓋

を取って中を見ると、そこには「かの天井テンシヤウに有つる首」があつた。腐臭がひどかつたので僧侶はそれを谷に投げ捨て、場を立ち去る。女はやはり「外夫」をしていたのであり、そのために磔にかけられるという憂き目を見たにも拘らず、男に執心を抱いて、首を持ってきたのである。

堤邦彦氏によつて「女人罪障思想をベース」にした奇談であり、「首を盗み出す行為の異常なさまを白日のもとにさらし、歪んだ情愛のかたちへ女人の悪業・執心」というオーソドックスな宗教言語の解釈を与える書きぶり」であり「唱導性、教化性の発露」(9)を認めることが出来ると評されている。

かつ、

・奇異ノ儀キイギにあらず、といへども、女人の(1)しうしんあくごうしうしんあくごうを、かたる

・さてハ、外夫一定也、磔ハツケに、かけられ、うきめをみるにも、こりず、

外男を、(2)しうしんして、首クビをとりて、きたりたり

あさましき、(3)あくごう、しうしんや、と、かへつて、にくめバ、

じひりやく無ムになるものなり

といった、傍線部(1)、(3)に見るような、「しうしん」を「あくごう」と同列の、罪深いものとして位置づけるのみならず、「しうしん」という言葉に、女人の恋情に起因した異常な行為に対する、宗教的解釈を付与している本編は、なるほど『奇異雑談集』の大きな特質の一つである、唱導色を体現しているように見受けられる。

しかしながら同時に、その「しうしん」が、一人の男との恋情の成就の為には、もう一人の男——この場合は夫——に背信を働くという、「裏切り」を内包する側面をも有している本編は、前述の堤氏が指摘するところの「唱導と奇談文芸の近世的な交流のきざしを想察させる注目すべき行き方」(10)

との評価を、裏付けているとも言えよう。

ついで上巻ノ八「戸津坂本にて、女人僧を逐て、ともに瀬田の橋に身をな

げ、大蛇になりし事」を取り上げる。なお、あらすじは以下の通りである。

ある曹洞宗の僧侶で四十歳ばかりの者が、坂本の戸津にやってきて、そこで一夏の間、法談を述べることになった。そこで僧侶は年三十余りの婦人と心安くなるのだが、見苦しい事があったので、人々はこれを噂した。僧侶は後悔し、婦人と疎遠になろうとしたが、相手が許さなかった。ある時、婦人が来ていない折を見計らい、僧侶は逐電を試みるのだが、婦人はこれに気付き、衣や髪も乱れ、凄まじい姿になるのも構わず、僧を追ってきた。逃げ切れなれなれと思つた僧侶は、瀬田の橋の中ほどから水中に飛び降りたが、婦人は些かも躊躇うことなく、僧の後を追つた。見物人が水底を見やると、婦人は大蛇となつて、僧侶にまといついていたということである。

女人の、しうしん、たちまちに蛇となる事、まのあたり、ミシ也

ここでも、女の男に対する常軌を逸した情愛が「しうしん」と呼ばれている様。またそれは、人を蛇身に変えてしまう程、醜悪で罪深いものとして位置づけられている様（11）がうかがわれるのである。

しかしながら本編においては先に「ちくてむ」という背信行為を試みたのは男であり、その「ちくてむ」も、

内儀に、とりいり、ちいん、はなはだ、すきたり 見ぐるしき事あるゆ

へに、人、これを、さたす 僧こうくはいして、めいわくす、うとまん

と、すれども、婦人ゆるさゝるゆへに、うときことを、えず

といった己の好色に起因しているにも関わらず、世間体を気にするが為という、身勝手な行動が理由になつているのである。

高田衛氏は本編について「すくなくとも、毎夜の女の側からの通婚を、男の側がなぜ怖れなくてはならないか、ひとつの理由がこの話で示されている。女の側が主導する過剰な通婚は、女による男の全的な領有につながり、男の側の社会的な「死」をもたらすのである。」と述べている（12）。

「ちくてむ」という行為はなるほど、男の側から見れば、女性の領有からの逃走であり自己防衛の為の手段であるかもしれない。しかしながら、件の内儀に先に「とりい」ったのが僧侶であることを考えたなら、男に対して周囲の目もはばからずに情愛を手向け続けた女から見ればやはり、「ちくてむ」は男の「裏切り」としての要素が濃厚な行為であろう。

それ故本編においては、「しうしん」を有し、それを発動させて異形となるのは女であるが、発動させる契機を作つたのは「裏切り」を働いた男であると言えよう。

続く「執心」譚は、上巻ノ十一「越中^{エチウ}にて、両妻死^{フタメシ}して蛇^{ジャ}になりて、夫^{フツト}の両の手にまとふ事」である。

越中の山里に一人の男がおり、二人の妻を寵愛していた。しかし二人の妻は嫉妬が甚だしく、常に罵りそしり、ややもするといさかいをし、叫ぶこともあった。あるいは尖った割り木で打ち合ったり、燃えくいの火で焼き合ったり、掴み合ったり、噛み合ったりなどしていたのだが、ついには共に死んでしまった。だが二人の妻の執心は変じて二つの蛇となり、夫の両手に巻き付き、その頭を肩に置いた。そして蛇が舌で夫の頬をつつくので、つかれた夫はそちらを向く。するともう一方の蛇が反対から夫の頬をつつく。そうしたことが間断なく続くので、夫は精力が尽きて死んでしまった。夫が死ぬと二匹の蛇も消えた、というのが本編のおおよそのあらすじである。

東寺所縁僧の関与が推測される『奇異雑談集』の成立事情(13)を考慮に入れた堤氏により「巷間の唱導話材による結構をそなえたものとしても不思議はない」と評されるのみならず(14)、「二女の執心が蛇と化して男を巻く」という『立山曼荼羅』や熊野比丘尼の絵解きした『観心十界図』にみられる両婦地獄(二妻狂図^{ふためくるい})と「想を同じくする話」との指摘を受ける(15)本編もまた、濃厚な仏教・唱導的色彩を備えたものであると言えよう。

両妻^メのしうしん^{ヘン}変し、両蛇^{フタツノジャ}に現じ、夫の両手^{ノテ}に、まとふ

さらには、本編においても「しうしん」は死後も人を蛇に変えてしまう程罪深いものである様、女の男に対する異様な情愛に起因するものである様、うかがわれるのである。

また、本編において「しうしん」が発動する契機となったのは、両妻に惑うという男の不実さ——女の側から見た際には、己の心への「裏切り」——であると言えよう。

以上の事柄から、『奇異雑談集』における「執心」は、

- ① 女性から男性に向けられた、異常な情愛である。
- ② それを抱いた人を蛇に変じてしまう程、あるいは「あくごう」と並び称される程、罪深いものである。
- ③ 「裏切り」と密接な関係にある。
- ④ その感情を抱いた女が、醜悪な蛇身と化す傾向がある。

といった特徴を備えていると言えよう。

さらには、『奇異雑談集』における「執心」譚として、本章段で取り上げた三話のうち二話、そして『奇異雑談集』それ自体の唱導話材としての側面が先学から指摘されていることを考慮に入れると、『奇異雑談集』における「執心」譚は、女人罪障思想をその根底に内包する、唱導的色彩の強い作品であり、娯楽性に溢れた「読み物」としての性質は未だ濃厚ではないという結論が、導き出されるのである。

ついで、万治頃の刊行と推定される、平仮名本『因果物語』における「執心」譚、ならびに仏教的色彩に考察を加えてゆく。

先学から「因果の理法をうたいながらも、はるかに文芸意識のまさる作柄となつている」、「片仮名本『因果物語』の法席との親縁性に比べると、平仮名本の方は話の筋立てや文脈上の情趣を重んずる」(16)、「娯楽作品としての読物を前提とする」(17)、「片仮名本・平仮名本『因果物語』は、ともに広く後続文芸の典拠となつた」(18)といった、その文芸性、娯楽性ならびに後続文芸への影響に関する評価を受けている、平仮名本『因果物語』。その第一の「執心」譚は、巻一ノ一「執心ふかき女の、蛇へびに成たる事」である。

本編に関しては、「第三章 『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」において少しく言及したが、ここでは改めて、そのあらずじ、ならびに「執心」譚という観点から、考察を加えてゆきたい。

——駿河国府中院内町、狐崎の男が信濃に逗留した際、土地の女と契りを交わす。やがて男は本妻のいる駿河に帰るのだが、信濃の女はさまざまの姿でそれを追ってくる。女への対処に困った男は、ある時、三保の松原を見せようと言ひ、舟で女を沖合に連れ出し、海につきはめて殺す。すると同時に女は蛇になり、男の腰にまつわりつく。困り果てた男は、女人結界の山である高野山に逃れようとする。すると不動坂で件の蛇が離れた為、嬉しく思つた男は高野山で三年を過ごすが、不動坂を越えるともとのように蛇がまとわりついてくる。仕方なく故郷へ帰ろうとした男であるが、近江矢橋の沖合で、舟が動かなくなつたために真実が発覚し、乗り合わせた人々から海につきはめられたというのが、「執心ふかき女の、蛇に成たる事」のおおよそのあらずじである。

「夫うれしくおもひ、三年の間、山に居ゐて、今ハ、さりとも執心しゅうしんもきれん、と、思ひ」という描写に見るように、本編においても「執心」という言葉は——先の『奇異雑談集』(写本)に見たように——女性の男性に対する、常軌を逸脱した恋情を指す語として用いられている様、その感情を抱いた者が蛇になる様。そして本国に正式の妻がいるにも関わらず、もう一人の女と契りを交わす、果てはその女の処遇に困り、殺害を試みようとする男の「裏切り」と、密接な関係がある様がうかがわれるのである。

本編は片仮名本『因果物語』上巻五「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付オタミフカキアンナシ女死シテ蛇ト為ヘビ、男ヲ卷事マクコ」ノ二、三と内容が一致することが、江本裕氏フシナシによつて指摘されている(19)。

しかしながら、「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ卷事」ノ二、三においては、高野山で三年を過ごした後、再び不動坂に

て蛇に巻きつかれた男が、「権誉上人」の功力によって蛇を消滅させてもらうという形で話が結ばれているのに対し、「執心ふかき女の、蛇に成たる事」においては、ひとたび女の執心を背負った男には、根本的な救済が訪れることはないという物語展開がなされていることから、唱導的色彩の弱体化が見受けられると言えよう。

また坂巻甲太氏は、本編の主人公の「信濃で単に女房を求めたのではなく、「語らひてわりなく契る」という契りの深さ」、対する「自分を捨てて故郷へ帰った男に対する女の愛憎が執念に転じて男の跡を追う」という、二人の「抜きさしならぬ関係」が「具体的に述べ」られていくことに着目し、「平仮名本の編著者である了意は、片仮名本の簡略な文章を可能なかぎりふくらませている。」由、ひいては「了意が目ざした方向は、読み物として仕立てるといって、読者を予想したものであった。」(20) 由を指摘し、「執心ふかき女の、蛇に成たる事」の「読み物」としての方向性に言及しているのである。

さらに坂巻氏は「しかるに平仮名本は「非分の所為三年の間に報けり」と、あたかも教誨を示す如き口吻で結びとしながら、一篇の主旨はその「怪異性」、読み物としての「形象性」「教訓性」を示すにあつたのである。」(21)と述べ、「執心ふかき女の、蛇に成たる事」が教訓性を有しつつも、それが「読み物」としての範疇に留まっていることをも、指摘しているのである。

以上の事柄からは、平仮名本『因果物語』における「執心」譚が——唱導性、教訓性からは全きまでに脱却し切れてはいないもの——前述した唱導色溢れる『奇異雑談集』(写本)とは一線を画した、「読み物」としての側面を備えている様子がわかれるのである。

続いての「執心」譚は卷二ノ三「金に執心を残して、蛇に成たる事」である。——小田原のある寺の住職が死して後、大きな蛇がやって来、棟木に居座ることがあった。弟子たちがこの蛇を殺し捨てても、同じ大きさの蛇が後から後からやって来、やはり棟木に居座る。ある人が、この蛇は先住の化身であり、きつと棟木に金を隠して置かれたのだろう、御覧なさいと言うのでその通りにしたところ、そこには黄金五両があった。すぐさまこの金をとってねんごろに弔ったところ、蛇は来なくなったというのが、おおよそのあらすじである。

前述の章群と異なり、本編においては「執心」という言葉は、僧侶の金銭に対する執着を表すのに使われている為、「執心」という感情が、女性の男性に対する常軌を逸した恋情を指すものとは限らない様、さらにはこの種の「執心」は、ねんごろな仏事供養によって払拭出来る様が見受けられるのである。

ついで卷二ノ十九「金かねに執心しゅうしんせし僧そう、幽霊ゆうれいに成て来りし事」を取り上げる。以下にそのあらすじを述べる。

勢州桑名に仏眼院という真言宗の寺があり、その住職が寛永十八年に死去した。その後住職の幽霊がやって来、面蔵の古い枕を眺めていることが三十日に及んだ。ある人が、枕を見つめているのは何か謂れがあるのだらうと言い、紙を破ったところ、金子五両があった。そこでこの金子で住職をねんごろに弔ったところ、幽霊は来なくなったという。

このように本編においても「執心」という言葉は——前述の「金に執心を残して、蛇に成たる事」に見たように——僧侶の金銭に対する執着を表すのに使われており、かつ、仏事供養での滅消が可能な感情として位置づけられているのである。

さらに本編においては「執心」を抱いた僧侶は、蛇にこそなっていないものの、死後幽霊となり、「かの幽霊を、よく／＼ミれハ、影の薄うすく成時もあり、又正ただしき時もあり」という魁偉な有様を呈しているという設定は、僧侶が死後、蛇というおぞましい姿に身を転じる、「金に執心を残して、蛇に成たる事」と共通するものがあると言えよう。

続いての「執心」譚は、卷三ノ二十一「夫婦死して、二つの蛇へびと成し事」である。

江戸吉祥寺の下、溜池、大堤の傍に浄土寺があった。ある時件の池を埋めていたところ、石塔卵塔場にある五輪の中に、白い蛇が二匹、絡み合っていた。見る間に蛇は大きくなり、一尺七、八寸程になった。これを引き離したところ、絡み合うことが三度に及んだ。寺の住職が出て来て蛇をとり、水舟に入れて置き、人々に見せ、この亡者は今に生きていと言った。しかしながら人々は、自分が弔って畜生道へ落としたことを嘲った。件の亡者の娘は十七八であったが、これら二匹の蛇を貰い受けて帰ったという。亡者は前田半之丞という人であり、六年以前に熱病で死んでいた。それから六年目に、女房も同じ病で死んでいたというのが、本編のおおよそのあらすじである。

「夫婦死して、二つの蛇と成し事」においては、生前のこの夫婦がどのような間柄であったかは明記されていないのだが、その物語展開から察するに、互いが互いに浅ましく、常軌を逸した執着を抱いていたであろうことは推察される。

そして、

・ 諸人あざけりて、いはく、(1) 我弔われとがらひて、ちく生道なまぢへおとしたるこ

とをバしらで、利口する房主の浅ましや、恥をしらぬや、とぞ、申合けり

・まことに、懸念無量劫といへり、夫婦の(2)執心のこりて、(3)死してのちまでも、猶かくのことし、生々流転の業つきする事あるへ

からず、あはれなりし事共なり、よき知識あらば、と、思ひ侍へり

(4)世の人の為、心ざしを改ためんとして、見聞きし事を、筆にとゞめて、のこすもの也

といった傍線部(2)の表現に見るように、ここでも「執心」という言葉は、異性に対する常軌を逸した感情を示す語として使われている。なお、夫婦の化身である蛇が互いに絡まり合っている様を見ると、異性に「執心」を抱くのは必ずしも女性だけではないということがわかれよう。

さらに、優れた「知識」がいなかった為、死後も夫婦が醜悪な運命をたどるといふ、傍線部(1)、(3)に見る表現を繰り返すこと、傍線部(4)に見るような教誨的な結びを描くことで、唱導的色彩をも作品に挿入している様が、見受けられるのである。

ついで巻四ノ一「恋ゆへころされて、其女につきける事」の読解を進めてゆく。――伊勢の国に住むある牢人には、美しい一人娘がいた。牢人に召し使われる者で、猪之介という男がこの娘に恋慕の情を抱き、様々に言いかけたが娘はなびかなかった。それ故、猪之介は病となり、病勢が募る中、その本心を朋輩の下女に吐露する。やがて猪之介の想いは主の牢人の知るところとなり、怒った牢人によって、猪之介は首をはねられてしまう。その夜から娘の前には猪之介の亡霊が現れるようになり、この為に娘も病となって、やがて死んだというのが、おおよそのあらすじである。

・それがしのわづらひハ、別の事にあらず、かうノ、おもひそめたる事、かなはずして、やまひと成たり(中略)執心ふかく、まよひなば、むすめ子の御身も、おもふやうにハ、あるべからず、

・執心ふかく、おもひ入けるこそ、おそろしけれ

これらの傍線部からうかがわれるように、本編において「執心」は、異性に抱く異常な情念であり、かつ「執心」が募ることはおそろしいことであるとして、否定的に位置づけられている様が、見受けられるのである。

以上の事柄から、平仮名本『因果物語』における「執心」譚からは、

① その感情を抱いた者が蛇となる傾向がある。

② 女性の「執心」は男性に対して発動するが、男性の「執心」は主に金銭

に対して発動する。

③ 僧侶と隠し金との密接な関係がうかがわれる。

④ 隠し金に「執心」を抱いた亡霊は、ねんごろな供養によって初めて成仏出来る。

⑤ 異性への異常な情念を意味する。

といった特質が見受けられるのである。以上の事柄を考慮すると、平仮名本『因果物語』における「執心」譚は、隠し金に対する「執心」が、ねんごろな仏事供養によつて消滅する、作品に教誨的口吻が見られるといった様からうかがわれるように、唱導的側面を有してはいる。

しかしながら、内容の一致する話に比した際の、仏教的功德の弱体化、それに反比例するかのような、「読み物」としての水準の高度化もまた、散見することが出来るのである。

ついで、『宿直草』（『御伽物語』）における「執心」譚を取り上げてゆく。「第四章」「後妻うち」の系譜」でも述べたように、先学からその高度な文芸性（22）、ならびに脱唱導的色彩（23）についての言及がなされている、『宿直草』（『御伽物語』）の第一の「執心」譚は、巻四ノ七「七人の子の中も女に心ゆるすまじき事」である。

ある人が娘を持つており、娘に小便をさせるたび、飼犬に「掃除をなさい。この娘はお前の妻だぞ」とふざけていると、犬はそれを本気にし、娘が長じると縁談を全て壊してしまう。仕方がないので、親たちは山奥に家を作り、娘と犬とをそこで夫婦にさせた。ある時、山伏が娘たちの住む小屋の近くを通った。娘に横恋慕した山伏は犬を殺し、犬の不在を嘆いていた娘と夫婦となり、子を七人までもうけた。しかし山伏がある夜、犬を殺したことを語ったところ、女はこれを恨んで、山伏を殺したということである。

此犬おもひいれしなり。ころすとも又執心やむ事なし。

このように、本編においては、女に対する犬の異常な恋情を「執心」と呼んでいる様があるが、前記の作品群とは少しく趣を異にするが、異性に対する常軌を逸した恋情を「執心」と呼ぶ用例に該当すると言ってもいいだろう。

娘にかたれば、あへてなげく色もなし。「我に似たるちくしやうにこ

そ」と、途ばなれたる山に家をつくり、犬もろともつかはしけり。

しかしながら、女は犬を「我に似たるちくしやうにこそ」と称し、厭う風でもない。また、山伏が犬を殺したがため、犬が帰ってこなくなつた折は「女れいならずなげ」にいてること、真実を打ち明けられた際、山伏を殺していることから、犬の「執心」を嫌っておらず、情愛に似た感情を抱

いていた様がうかがわれる。

本編においては、異性に対する異常な恋情であるところの「執心」が、拒まれることなく受容されていると言えるだろう。「執心」を否定的に描くことの多かった、前述の『奇異雑談集』、平仮名本『因果物語』とは、一線を画する設定である。

続いての「執心」譚は、巻五ノ四「そがのゆうれいの事」である。以下にその概略を述べる。

諸国を廻る修行者が、曾我十郎裕成、大磯の虎の亡霊の住まいに立ち寄り、菩提を弔うことを依頼される。その際、十郎は自分がやがては修羅の巷を出て、小田原の城主に生まれ変わる由、そこで僧侶と会う由を言い、証拠の品として目貫を渡す。明くる年の秋に僧侶が小田原に行くと、若君が生まれたが、左手が明かずに両親が嘆いている由を聞かされる。そこで僧侶が件の目貫を取り出して若君に見せると、左手を開いた。そこには件の目貫があつて、それは僧侶が持ってきたものと一対であつたという。

ついにすけつねをうち、年比としごほのほいをとげつつ、身はその時にむなし

くなれど、こんばくはまだきえもせで、そのつみ、すらにかんじ、執心しつしん

いまさらのこる世の、御僧にまで見まえまいらせさふらふぞや。

このように本編においては、敵討ちという「年比のほい」が、罪や「執心」という負の感情につながっていく様が描かれているのだ。

それ故、本編における「執心」は、異性に対する常軌を逸したそれではなく、本意を遂げるといふ、それ自体は美しく発露したであろう行為が、罪深いものになっていった様を表す言葉として使われていると言えよう。

以上の事柄から、『宿直草』(『御伽物語』)における「執心」とは、

① 異性に対する異常な恋情のみを示す言葉ではなく、長年抱き続けた願いを指す言葉としても使われており、意味の複雑化が見受けられる。

② 「執心」を抱くのは男性である。

③ 女人罪障性の希薄化が見られる。

という特質を備えている様子がうかがわれるのである。

これらの事象をふまえると、『宿直草』(『御伽物語』)の「執心」譚は、前述の章群における「執心」譚に比し、教化・教訓性からの脱却が進んでおり、かつより高度な文芸性、物語性を有した「読み物」であるという結論が、導き出されるのである。

五―二・『諸国百物語』の「執心」譚

(一)．正式の婚姻関係にない男女間において

以上、先の章段においては『諸国百物語』以前の近世怪異小説における「執心」譚、ならびにこれらの作品群に見る仏教的色彩や娯楽色の変遷を取り上げ、それに考察を加えてきた。

その結果、女性の「執心」は男性に対する常軌を逸した恋情であり、男性との「裏切り」と密接な関係にあること。対する男性――主に僧侶――の「執心」は、己の隠し金に対する異常な執着であり、その感情を抱いた者は、死後異形の存在と化すこと。しかしながらこの種類の「執心」は、供養によって払拭可能であること。そして男女を問わず、「執心」を抱いた者はその身がおぞましい蛇身となることといった、主だった傾向が明らかとなった。

さらには、『奇異雑談集』、平仮名本『因果物語』、『宿直草』(『御伽物語』)といった、『諸国百物語』以前の近世怪異小説が、成立年代が下るにつれ、その唱導ならびに教訓的色彩が希薄となつてゆき、文芸性や物語性を有した「読み物」としての結構をいや増してゆく過程についても、考察を加えてきた。

これらの事柄をふまえ、本章段では『諸国百物語』における「執心」譚に対して読解を進める。そして、前述した近世怪異小説における仏教色、娯楽色の変遷が『諸国百物語』において、どのような形で結実をみるのかを模索することを、その目的としたい。

初めに、巻一ノ十二「駿河するがの国美穂みほが崎女さきの亡魂ばうこんの事」を取り上げる。

なお、本編に関しては「第三章 『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」で、仏教がその作品中で果たす役割という観点から読解を加えた為、ここではあらず及び「執心」譚としての観点からの考察を記す。

駿河の国、清見寺に住む男が、美穂が崎の女と契りを交わしていた。女は美穂から清見まで、海を泳いで、男のもとに通っていた。男は清見寺に目印の灯火をつけて待っていたが、ある時、毎晩通って来る女が、実は人間ではないのではと恐ろしくなった。こう思った男が灯火を消したため、その火を目印に泳いできた女は方角がわからず、溺死してしまった。その後女の亡魂は男をとり殺すが、執心は今も残っていると見えて、清見寺に火事があると、美穂にもかならず火事になり、美穂に火事があると、清見寺にも火事が起こるようになった。このため、今も美穂に火事があれば清見寺で柴をたき、清見寺で火事があれば、美穂ではかやを燃やして、互いに火事の真似事をするという。

堤邦彦氏によつて「通う女の靈異が怪異小説に姿をあらわした比較的古い例」(24)であると言及されている本編は、先学からその主題が「通う女」であるとみなされていた様が、うかがわれる。

そして堤氏は本編に「湖を泳ぎ渡る女の悲恋物語」の事例である(25)として、女の側に比較的好意的な評価を付与している風だが、この説には

些かの疑問を感じる。

本章段ではそこで、女の「しうしん」が発動するに至った過程、「しうしん」および女の位置づけに着目することで、堤氏の説に、新たな解釈を加えてゆきたい。

そのぼうこん色々ときわりをなして、つゝに男をとりころしけり。この亡魂のしうしん今にのこりけるにや、清見寺に火事ゆけば、美穂も

かならず焼、美穂に火事ゆけば、清見寺もかならずやくると也。

このように本編においては、女の過剰な情念を「しうしん」と呼び、その情念は「女による男の全的な領有」ならびに「男の側の社会的な「死」(26)を恐れるあまりとは言え、かつては恋仲にあつた己を殺害するという「裏切り」行為をはたらいた男に向けられ、それをとり殺すに至った男に対して発動している。

すなわち本編においては、正式の婚姻関係にこそないものの、かつては互いに恋情を抱いていた筈の男の「裏切り」が、女の「執心」を発動させる契機となつていると言えるだろう。しかもその矛先は男の死後、仏教の象徴とも云うべき寺にまで及んでいるのである。

さらに寺はその怪異を退けることが出来ておらず、本編中において、仏教は女の執心よりも劣つたものとして位置付けられている様子がうかがわれるのである。先の章段で述べた、僧侶の金銭に対する「執心」が、仏事供養で抹消されている様とは、およそ対照的である。

つまり「駿河の国美穂が崎女の亡魂の事」は、「しうしん」というエキセントリックな激情を抱いた女が、「裏切り」をはたらいた男を取り殺し、のみならず、仏教の功力をも凌駕した、負の力を発揮するという凄惨な物語であり、「悲恋物語」とは一線を画していると言えよう。

前述の「駿河の国美穂が崎女の亡魂の事」のように、正式の婚姻関係こそ結んではいないものの、ひとたびは互いに恋情を抱いていた男女が、男の「裏切り」によつて女がすさまじいまでの「執心」を発動させて破局を迎えるといった話は、『諸国百物語』において、他にも見受けられる。巻二

ノ一「遠江の国見付の宿御前の執心の事」が、それであり、以下にそのあらすじを述べる。

京から東国に下る旅人が、遠江の国見付の宿に泊まつたところ、その夜更けに隣の座敷から、女が小唄をうたっているのが聞こえた。その声に惹かれた男は、明りの灯っていない隣の座敷に忍び行き、日本国中のあらゆる神の名にかけて女を妻にするといい、契りを交わす。夜が明けて件の女の顔を見たところ、醜い御前であつたので、驚いた男は宿の主に暇乞いもせず逃げ出した。東国に下つたならば追つて来るだろうと思つた旅人が、都へと引き返したところ、天竜の渡しで、件の御前が追いかけてくるのを

見た。男は仕方なく御前を切り殺し、船頭に遺体を川に流すよう頼んだ。やがて男が磯崎の宿に宿をとったところ、夜半ばかりに門をひどく叩く者がある。主人が出て見ると、様子が常の人ではない、すさまじい出で立ちの女が、この宿に泊まっている都人に会いたいという。驚いた主人は、この宿に客はいないと言い、旅人を蔵にかくまった。すると件の女は門をけやぶり内に入り、やがて蔵の中からあつという声が聞こえた。夜明けに蔵を見たところ、男は二つ三つに引き裂かれていたという。

『曾呂利物語』卷三ノ四 「色好みなる男見ぬ恋に手を執る事」(27)

出典とする本編は、あらすじはその出典をほぼ忠実に踏襲したものである。

しかしながら、「色好みなる男見ぬ恋に手を執る事」は、その題名にも本文中にも「執心」という語は使われていないにも関わらず、本編は題名に「執心」という言葉が冠せられている。

こうした事柄から、本編は出典に比し、一度とは言え契りを交わした男に対する、女の異常な恋情であるところの「執心」の恐ろしさをその主題に、あるいは怪異の正体として位置づけようとしている様が、うかがわれるのである。

さらに前述の高田氏は、「色好みなる男見ぬ恋に手を執る事」に登場する女が「警女」であることに着目し、そこに「通常の「女」一般の与件を切り捨て、ことさらに「女」を怪物化しようとする設定」、「巫女に特有な呪力を付加することによって、その姿はいっそうグロテスクな混沌として表わされる」ことを見出している(28)。

そして「色好みなる男見ぬ恋に手を執る事」を典拠とする「遠江の国見付の宿御前の執心の事」もまた、文字こそ違えど登場する女性を「御前」と位置づけているので、出典に見る「女」の怪物化ならびに「グロテスクな混沌」としての表象は、受け継がれていると言ってもいいだろう。

結果、「執心」の恐ろしさ、凄惨さ、「女」の怪物化ならびに「グロテスクな混沌」としての表象を取り込んだ本編は、典拠に比し、その恐怖とおぞましさの度合いをいや増しているという結論が導き出されるのである。

なお「遠江の国見付の宿御前の執心の事」もまた、「執心」の発動の原因は、かつては互いに恋情を抱いていた筈の男の「裏切り」——しかも先に恋情を吐露したのは男である——となっている。

続いて、卷二ノ十七「紀伊の国にてある人の妾死して執心来たりし事」を取り上げる。女の「執心」と男の「裏切り」が見受けられる本編のあらすじは、以下のようなものである。

紀伊の国松坂の城を預かる何某がいたが、妾を置いて、夜毎に路地口から通わせていた。件の女は木履をはいて通っていたのだが、数年程経って

病にかかり、遂に死んでしまった。その後何某が妾のことを思い出し、眠られずにいると、夜更けに件の女が常のように、木履をはき路地口からやってきた足音がした。訝った何某が様子を見ると、髪をさばきやせ衰えた妾が、今しも座敷へ入ろうとしていた。何某が叱責したところ、妾は座敷へあがり、何某の顔を凝視した。何某が刀で切りはらったところ、何処へともなく消えてしまったが、それから何某も病にかかつて死んだということである。

このように本編もまた、男性に対する女性の、異常なまでの恋情を「執心」と評し、怪異の正体として位置づけている話である。しかしながら本編においては「執心」の発動の契機は、前述のような章群と異なり、男の裏切りではなく恋情となっている。

そのうち何がしは、この女とし月かたりし事どもおもひ出し、夜もねられずあかしみたる所へ、さよふけかたにくだんの女いつものごとく木履をはき路地口よりきたるあしおとしければ、

男の恋情に呼応するかの様にやって来る女ではあるが、しかしその想いは美しく発露していない。

かの女やせおとろへかみをさばき、路地口より座敷へいらんとす。何がし見て、「さて／＼ひきやうものかな」としかりければ（中略）どん帳のうちへそのまゝはいる所を、何がし刀をぬきてきりはらいければ、すなわち、異形の出で立ちの亡霊となってやってきた女は、男から「ひきやうもの」という評価と、刀で切り払われるという処遇しか受けていないのである。

しかしながら、男の恋慕に呼応するかのようにはやって来た女へのこうした処遇は、女の側から見ればやはり、男の裏切り行為であらうし、「そのうち何がしもわづらひつきて死けると也。」といった結末の一条からは、男の裏切りに対して女が下した罰の証左としての色合いを感じざるを得ないのである。

ついで、卷三ノ四「江州白井助三郎が娘の執心大蛇になりし事」を取り上げる。――江州喜多の郡のある村に、高橋新五郎、白井介三郎という二人の百姓がおり、高橋には五歳の男の子が、白井には三歳の娘がそれぞれいた。後々夫婦にしようといいなづけの盃を交わさせたのだが、男の子が十歳になった頃に高橋が病没し、それから次第に身代が衰えていった。すると白井は約束を違えて、隣の在所の裕福な百姓と縁組をして、いよいよ祝言の日となった。娘はこれを道ならぬことと思ひ、下女に言付けをして、男とともに駆け落ちをした。しかし頼りにするところもないので、途方にくれた二人は、淵に身を投げて心中することになったが、男だ

け助かつてしまう。その頃、男の母は石山の観音に通っていたのだが、ある時瀬田の橋のほとりで十四五の娘の泣いているのに出会った。娘の不幸な身の上を不憫に思った母は、息子と夫婦にすることにした。やがて二人の間には男の子が生まれ、三歳になった折、ふとした偶然から妻が丈一丈あまりの大蛇になっていてのを見てしまう。夫が事情を聞くと、妻は、自分は今五郎の娘であり、貴方と添い遂げたい執心のあまりこうして様子を變えていたのだが、今はこれまでと言って姿を消した。それから子どもが母を恋しがるので、夫は子を連れて池に行き、乳を飲ませてもらっていたが、ある時妻は大蛇の姿となって現れ、紅の舌を振りまわし、子を飲もうとしたので、それから子は母を恋しがらなくなった。夫はこれを辛いことと思ひ、親子共に池に身を投げて死んだというのが、本編の概略である。

われはそのむかしの新五郎（ママ）がむすめ也。そのはうさまにそひ申たきしうしん、死してもはれやらず。今また女にさまをかへ、としごろあひなれ申したり。

引用箇所からもうかがわれるように、本編における「しうしん」は、女性の男性に対する強い情愛という意味で使われているのである。

しかしながら前述した『宿直草』（『御伽物語』）の巻五ノ四「そがのゆれいの事」における、敵討ちという「年比のほい」が美しく発露せず、執心という成仏を妨げる感情につながっているのと同様、本編に見る、幼馴染に添い遂げたいという一途な女心もまた、肯定的な形での発露はせず、醜悪な蛇身と化す契機となっているのである。

さらに、本編における女性の「しうしん」が否定的に描かれているのは、蛇と化した母を、それでも慕う子を夫が池へと連れて行った際、

此たびは池のうちより大蛇（だいじや）のすがたとなり、あらわれいで、くれなひの舌をふりまはし、此子をのまんとしてうせければ、
という魁偉な様相。それを見て絶望した夫と子の自殺という悲惨な結末からも見受けられるであろう。

続く「執心」譚は、巻三ノ十七「渡部新五郎（わたなべしん）が娘若宮（わかみや）の児（ちご）におもひそめし事」である。

若宮の稚児に恋慕の想いを抱いた娘が、両親の仲介もあって相手と情を交わすものの、その冷淡さゆえに焦れ死にをし、死後その執念は蛇となつて稚児をとり殺す。そして稚児の遺骸を葬ろうとすると、棺のうちには大蛇がおり、稚児の死体にまとわりついていたので、そのまま葬った。また後に親が娘の遺骨を検めたところ、骨は小さな蛇になっていたというのが、おおよそのあらすじである。

そして本編は、弘安六年（一一八三）に成立した『沙石集』巻七ノ二「愛執（アイシユ）

ニ依テ蛇ト成事」(29)を典拠とする。

そして本編においてもまた、女性の男性に対する、異常なまでの情愛が執心という語で示されているのである。しかしながら「かのむすめのしうしんつるに児をとりころしける事、おそろしき事ども也。」という文末からうかがわれるように、執心は恐怖の対象として否定的に、あるいは怪異の原因としても位置づけられている。

なお、典拠たる「愛執ニ依テ蛇ト成事」に見る、
・サレバ執着愛念ホドニ恐ルベキ事ナシ。生死ノ久ク流転ノヤミガタキ。只此愛欲ノ所致ナリ。

・仏神ニモ祈念シ。聖教ノ対治ヲタツネテテ(原文ママ)。此愛念ヲタチ。此情欲ヲヤメテ。眞実ニ解脱ノ門ニ入り。自性清浄ノ躰ヲ見ルベシ。

という、愛欲を諸悪の根源であるとしてこれを断ち、ならびに仏法に帰依する由を奨励するという、唱導的、教訓的な個所が、「渡部新五郎が娘若宮の児におもひそめし事」において削除されていることから、前述のように本編が「話を話として楽しむための娯楽本位の怪異小説となっている」(30)様のみならず、執心がもたらす恐怖をより強調しようという様も見受けられると言えるだろう。

ついで、巻三ノ十九「艶書のしうしん鬼となりし事」をとりあげる。なお、本編に関しては「第三章『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」にて、仏教の功德ならびに僧侶の靈験譚という観点から読解を進めた為、本章段においてはその梗概と、「執心」譚という観点からの考察を記すのみとする。

「艶書のしうしん鬼となりし事」は、恋文に積もった送り主たちの「しう心」が引き起こした怪異を、諸国修行中の一休が読経によって鎮めるというのを、そのおおよその物語展開とする。

方々よりこの児をこひしのびよせたる文をへんじもせずして、えんの下へなげ入れ／＼をきたる。その文主のしう心どもつもりて、夜な／＼

児のふところにかよひ、すなわち鬼となりける也。

このように、本編における「しう心」もまた、人が人に対して寄せる恋情を指す語となっている。

しかしそれが美しく発動していないのは、積もり積もった「文主どもの

しう心」が鬼と化している様、ひいては作品名からもうかがわれるように、本編における怪異の原因が「しうしん」として位置づけられている様からもうかがわれるのである。

なお、本編においても執心が発動して怪異の原因となる契機は、冷淡さ、あるいは恋情に対する無関心といった、男の側の不実——これも文主の想いに対する「裏切り」行為ではある——であるとして設定されており、こうした事柄は、前述の章群に見る、男の「裏切り」が恋する女の執心を発動させるきっかけとなるというパターンに、通じるものがあると言えるだろう。

さらに、本編は「一休きうこの文ふみどもをとり出だし、つみかさねてやきはらい経きんをよみしめし給へば、それよりのちはなにのしきいもなかりしと也。」という仏教の功德に依拠する形で幕を閉じてこそいるものの、そこに教訓・唱導的言辞は見受けられない。

よって、ここでは希薄になる教化・教訓的色彩のみならず、仏教が人外を鎮める為の手段ないしは道具として機能している様が、うかがわれるのである。

ついで巻四ノ五「牡丹堂ぼたんどう女のしうしんの事」をとりあげる。そのあらすじは、以下のようなものである。——もろこしに牡丹堂という所があり、人が死んだならその遺骸を棺に入れ、周囲に牡丹の花を描き、件の堂に安置するのが習わしであった。妻に先立たれたある男が、夜毎に牡丹堂に行き、念仏を唱えていたのだが、そんなある夜、首に鉦をかけた若い女が念仏を唱えながらやって来た。訝しく思った男が理由を問うと、女は己が夫に先立たれたのだと語った。それから二人は夜毎に会うようになり、やがて契りを交わした。後に女は男の住まいにやって来、夜共に酒盛りなどをするようになった。そんな二人の様を隣人が覗き見たところ、男は女のしやれこうべと向かい合い、酒盛りをしていた。夜が明けると隣人は、そのことを男に語った。男はその夜件の女の来訪を待ち、その姿をよくよく見ると、それはやはりしやれこうべであった。恐ろしくなった男は、三年の間物忌みをして引き籠っていたが、三年後のある日、気晴らしにと小鳥を捕りに出かけ、牡丹堂に入り込んでしまった。訝しく思った下男たちが重ねてある棺を見ると、血のついていているものがあつた。中では女のしやれこうべが、件の男の首をくわえていた。

本編は『剪燈新話』巻二ノ四「牡丹燈記」(31)の「翻案説話」であり(32)、『奇異雑談集』(写本)下巻ノ十四「牡丹燈記」(33)、『伽婢子』巻三ノ三「牡丹燈籠」(34)をその類話とする。

富士昭雄氏は「牡丹燈記」の後半部ついて「原文では崇りをなす幽霊を魏法師の呪術では調伏し得ず、四明山頂の鉄冠道人の力を借りて、厳しく罰してもらおうという報応を、かなりの紙幅を費して叙べる。」、さらには「懲悪の応報譚」が「原話の後半においてかなり重点を占める」(35)と述べている。このように「牡丹燈記」は鉄冠道人の法力譚であり、彼の手による応報譚という側面を多分に有しているのである。

このことは『剪灯新話』所収の怪異談を仮名交り文に翻する試み(36)である、「牡丹灯記」にもあてはまる。

さらに、前述の富士氏は「牡丹灯籠」について、「新之丞の奇怪な女難の顛末を浪漫的な筆致で写している。」「『剪灯新話』『余話』のごとき艶情溢れる伝奇小説」を翻案した『伽婢子』を代表する一編(37)と述べている。

以上の事柄から、「牡丹灯籠」は、恐ろしさのみならず、艶麗さと浪漫的香気をその特質とした作品であることがうかがわれるのである。

対する、「血のついた柩の中で女の髑髏が男の首をくわえていたという強烈な印象的な説話」(38)と評される「牡丹堂女のしうしんの事」には、道人による亡霊たちへの厳罰も、「牡丹灯籠」に見る浪漫的香気も見受けられない。

凄惨な結末を特徴とする本編からは、「牡丹堂女のしうしんの事」というその題名、「かの女のしうしん三ねんすぎたれどもつゐに男をとりけると也。」という結末の一条より、たとえ三年がかりであっても男を取り殺さずにはおかない女の偏愛が「しうしん」の正体として位置づけられている様、そして怪異の主体ならびに話のテーマが執心となっている様。

さらには、そのような「しうしん」の前には、「物いみ」という仏教的手段は卑小な対処療法に過ぎない様が、うかがわれるのである。

また、男の側からしてみれば、三年の「物いみ」は、女を亡霊と知ったが為に「物すぐく」思い、自己防衛を企図したからであるうが、かつては「たがいにあさからぬちぎり」を交わした女にとっては、男のこのような行為はやはり「裏切り」の色彩が濃厚なものとして映じよう。

以上の事柄から、本編における「しうしん」発動の契機もまた、男の「裏切り」行為であるという結論が導き出されるのである。

続く「執心」譚は、巻四ノ十九「龍宮りうぐうの乙姫をとひめい五十嵐がらしへい平右衛門へいが子にしう心せし事」である。以下にそのあらすじを述べる。――上坂本の五十嵐平右衛門には一人の息子がいたが、見目形が優れていたもので、人々は執心をかけ、なにかと出入りが多かった。為に親は気の毒に思い、比叡山にやって学問をさせていた。ある時息子が気晴らしにと、辛崎のひとつ松の元に座り、音楽の遊びをしていたところ、どこからともなく十五六ほどの美しい娘がやって来た。娘は息子に、自分はこのあたりの者で、いつもこの松の下にやって来ている、あの北から出る舟を御覧なさいと言って、息子

を案内してゆく。息子がついて行くと、海の傍で件の娘が彼にすがりつき、たちまち身を大蛇に変じ、相手を七まといにまとい、海に飛び込んだという。

このように本編においてもまた、女性の男性に対する異常なまでの恋情が「しう心」という語で呼ばれ、怪異の正体として位置づけられている様うかがわれるのである。

だが前述の章群と些か趣を異にするのは、本編における男性には、女性に対して不実であったとか冷淡であったとかいう落ち度はなく、強いて言えば、その美貌が怪異を発動させる契機となった点。そして、女性が男に対する異常な恋情ゆえに蛇身に変じたのではなく、題名からもうかがわれるように、その正体が「蛇身の女神」(39)である「竜宮の乙姫」であった点と言えよう。

『奇異雑談集』(写本)上巻ノ八「戸津坂本にて、女人僧を逐て、ともに瀬田の橋に身をなげ、大蛇になりし事」を始めとする前述の章群においては、女性は「女が性を通して、男を他界へと引きずりこむ」為(40)、あるいは常軌を逸した恋情の為にその身を蛇身へと転じるという設定がなされていた。

しかしながら「竜宮の乙姫五十嵐平右衛門が子にしう心せし事」においては、女性が蛇と化すのではなく、蛇が美女と化していたと設定づけられており、このことは、女性は常軌を逸した恋情につき動かされて男を領有せんが為に執心を発動させるのではなく、女性そのものが執心の化身であるという思想を示していると言えるだろう。

以上、本章段においては、女性の常軌を逸した恋情が男の領有を試み、それを破滅に追いやらざるを得ない話を取り上げてきた。しかしながら、『諸国百物語』における「執心」譚には、男性が女性に対して異常な恋情を抱き、その領有を果たす話が二話収録されている。巻二ノ十二「遠江の

国堀越ほりこしと云ふ人嫁よめに執心しうしんせし事」が第一の当該話であり、以下に概略を述べる。

遠江の国に堀越某という人がおり、十六歳で息子をもうけたが、その息子が十六歳の時に嫁を迎えた。件の嫁は見目形もよく、機転の働く女であったが、堀越は彼女に対しては、ろくにも言わない。周囲が訝り、嫁が気に入らないのかと云ったところ、夫婦の間さえよければ別のことはないと答えた。やがて堀越は病にかかり、次第に重くなったが、嫁の見舞いは固辞していた。しかし堀越が臨終になるに及んで、嫁は堀越の手足をさすり、姑は次の間にいて少しくくつろいでいたところ、堀越は蛇となって、嫁を三まといにまとい、足許からは水が出、屋敷は淵となって、嫁と共に沈んだという。

本編もまた、異性に対する道ならぬ、あるいは常軌を逸した恋情を「執

心」と呼んでいる話である。

しかしながら本編において男性が女性に抱く「執心」は、前述の章群の中で女性たちが男に示していたような、あからさまな、なりふり構わぬものではない。

このよめみめかたちうるはしく、よろづさいかくなる女なれども、堀越ほりこしはあふても物もしかどいはず、さしうつむきてあけるほどに、みな人ふしんして、「此よめ御きに入申さぬにや」ととへば、「いや、ふう

ふのあいださへよくは、別べつのことあらじ」と云ふて（中略）しだいにわづらひおもくなりければ、婦よめも、「御見まいにまいらん」との給へば、

「見ぐるしき病人の床ゆかへかならずむよう也」とて、あたりへよせつけず。

このように堀越は、己の道ならぬ恋情であるところの「執念」を隠すことに終始しており、自らの身を蛇に変じ「よめを三まといま」という形でそれを発露させるのは、いまわの際になってからである。女の「裏切り」ではなく、生命力が弱るとともに弱まった自制心が、堀越の「執心」を発動させたと言えよう。

前述の高田氏は、僧侶を領有することに執心を燃やし、水中でその身を蛇と化して望みを遂げた女が登場する、「戸津坂本にて、女人僧を逐て、ともに瀬田の橋に身をなげ、大蛇になりし事」について、「すくなくとも、毎夜の女の側からの通婚を、男の側がなぜ怖れなくてはならないか、ひとつの理由がこの話で示されている。女の側が主導する過剰な通婚は、女による男の全的な領有につながり、男の側の社会的な「死」をもたらすのである。「曹洞の僧をどこまでも領有しよう」と追いつめ、水中でついにわが物とした女が、蛇体であったのは、女が性を通して、男を他界へ引きずりこむことのしるしなのである。」と述べている（41）。

そして、本編と「戸津坂本にて、女人僧を逐て、ともに瀬田の橋に身をなげ、大蛇になりし事」とを比した際、異性に対する過剰な「執心」を抱いた人間が登場し、最終的には己の「執心」の対象であるところの異性を、蛇体と変じて水中で領有するという構図は共通している。

しかしながら、「戸津坂本にて、女人僧を逐て、ともに瀬田の橋に身をなげ、大蛇になりし事」においては、以下のような描写が見受けられる。

婦人フシ、そのまゝ、はしりゆく、急キツに、はしるゆへに、藺金剛イコンガウ、やかて、やぶれて、はたしに、なりて、はしりゆく

一回ヒトむすぶ、おひは、きれて、おち、かたびらの、もすそハ、風フにふ

かれて、うしろへ、ひるかへる

かしらハ、紙筋カミヨリ（筆者註…「紙筋」は右側に「カミヨリ」、左側に「スチ」の振り仮名あり。）きれて、髪カミなく、みだれて、うしろに、よこに、なびく、いのちを、すてゝ、はしりゆく

坂本地下中サカモトヂゲを、はしりすぎ、浜ハマにゆく、見る人おとろき、おそる、あるいはおひみる

僧に「執心」を抱いた女が、その「執心」や、それに起因する狂態を衆目に晒すこと、ひいてはそれによって社会から異端視されることを厭わず、文字通り「命がけ」で相手を領有しようとする様がかがわれる。

対する、本編の主人公たる堀越がその死の間際まで自己の「執心」を抑制し、隠し続けたという事からは、己に女を「全的な領有」状態に置くことにより、女の側に「社会的な「死」をもたらず力が内在していること、ひいてはそれが社会的には容認されないこと、自滅につながることを、本能的に怖れたが為と解釈出来るだろう。

女は自己の「執心」の発露を怖れず、男はそれを忌避するのである。

そして、この「執心」の発露の仕方は、本編を読み物として高度なものとしていえると言えよう。

また、「遠江の国堀越と云ふ人婦に執心せし事」の冒頭は、次のようなものである。

遠江の国ほりこしに堀越の何がしと云ふ人有りけるが、年十六にして男子なんしを一人もうけゝるが、ほどなく此子十六才になりければ、妻をよびむかへける。そのとき堀越ほりこしは三十歳にてありしと也。

若くして父親となり、かつ三十歳にして舅となつた男の、嫁に対する隠れた恋情の度合いがいや増す叙述である。

この切ない隠れた恋情は読者の共感につながるものであるが、しかしそれは堀越の浅ましくも怖ろしい蛇身化によって裏切られ、共感共感は嫌悪嫌悪に変わるのである。すなわち本編からは、読者の主人公への共感を裏切り、嫌悪と恐ろしさでもつて幕を閉じるといふ手法がかがわれると言えよう。

ついで、巻五ノ六「紀州和歌山松本屋久兵衛が女によばうの事」を取り上げる。本編は「第六章 「斬首」の系譜」において詳述する為、ここではその概略と、「しう心」といふ言葉の意味だけを記しておく。――継娘が継母の夫に見初められ、継母はこの不倫な関係に対する世間の非難に耐えかねて死んでしまう。そしてその葬儀の夜に怪異が出来するというのがおおよそのあらすじであるが、本編においては、「しう心」といふ言葉が、

まゝむすめ有りしが、せいじんしてよきみめかたちなりければ、此入りむこしう心してわりなくちぎりける。

という文脈で使われており、ここでもまた「しう心」が、男性の女性に対する道ならぬ恋情を意味する様、そしてこの「しう心」こそが、後の怨霊の発動の契機として位置づけられている様が、うかがわれるのである。

以上、『諸国百物語』における正式の婚姻関係にない異性に対する異常な恋情としての「執心」譚からは、

- ① 女の執心の発動の原因は、男の裏切りや冷淡さといった負の要素である。
- ② 執心が怪異の正体であることが明記されている話が多い。
- ③ 執心はその対象を破滅させずにはおかない。
- ④ 女性は己の執心の発露を憚らないが、男性はそれを抑制する傾向が見受けられる。

という特徴が見いだされるのである。

さらに、これらの章群からは、

- ① 仏教が執心よりも劣位に位置付けられている。
- ② 仏教が人外を鎮める為の手段として機能している。
- ③ 仏教的手段は怪異に対する卑小な対処療法にしか過ぎない。
- ④ 原拠に見る唱導的、教訓的な個所が削除されている。

といった仏教ならびに教訓性が果たす様相も見受けられ、そこからは仏教の威徳の卑小化、教化・教訓性の希薄化といった傾向もうかがわれると言えよう。

さらには、これらの章群における仏教の功德の一貫性のなさ——ある物語では怪異よりも劣位に位置づけられ、またある物語では怪異を鎮める手段として機能している——といった側面からは、『諸国百物語』において、もはや仏教は、「読み物」としての娯楽性を高める為の道具と化しているという結論が、導き出されるのである。

(二)．「後妻うち」との緊密さ

このように『諸国百物語』における「執心」譚、ならびに仏教・娯楽色の変遷の読解を進めてゆくと、女性の執心が男性に対してエキセントリックに発動するのではなく、己の妻としての地位を、結果的には篡奪した女性に向けられる話が見出される。

その作品名からもうかがわれるように、「うはなりうち」——この場合は前妻による後妻の殺害——を主題の一つとした、巻五ノ十六「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうちの事」がそれである。

「第四章 「後妻うち」の系譜」において言及したように、本稿では「後

妻うち」を解釈する際、井上泰至氏が言うところの「先妻が霊となって後妻に復讐する文学上のパターンとしての「後妻打ち」(42)に着目する。

かつ、前述した『諸国百物語』における題名に「後妻うち」が冠せられている作品及び、先学から「典型的なうわなり打ち」(43)との指摘がなされている話は、前妻の死霊ないしは生霊が後妻を殺すという筋立てになっていること、あるいは題名に「死霊」と記されていることを考慮し、「後妻うち」を「前妻ないしは本妻の霊による、後妻あるいは妾の抹殺・排除を意図した行為」と定義づける。

本章段ではこれらのことを念頭に置き、「後妻うち」に起因する「執心」譚について言及してゆきたいと考える。

初めに、「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうちの事」を例に挙げる。なお、本編に関しては「第四章 「後妻うち」の系譜」にて、そのあらすじと「後妻うち」という観点からの読解を記したが為、本章段においては、その梗概を記し、かつ「執心」譚という視点からの考察を加えてゆくに留めるとする。

「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうちの事」は、嫉妬深き故に夫・甚太夫から暇を出された前妻の「しうしん」が、後妻を取り殺してしまう話である。

ついで本編における、前妻の「しうしん」の言葉を以下に引用する。

「いっぞやははじめて御めにかゝり候ふ。さてもうらめしき御人や、うらみを申しにまいりたり」

こうした前妻の「しうしん」の言葉からは、彼女の本意が、自分から夫と、妻という地位を篡奪した(と当人は思っている)後妻に「うらみ」を告げることである様子がうかがわれる。

そして以上の事柄からは、「うらみ」と「しうしん」の密接な関わり、あるいは本編における「しうしん」が前妻の後妻に対する「うらみ」そのものである可能性。さらにまた「それよりおいち(筆者註・本編における後妻の名)わづらひつきて、つゐにあひはてけると也。はじめの女ばうのしうしんきたりけると也。」といった表現からは、「しうしん」を怪異の正体として位置づけている様が見受けられるのである。

ついで、題名に「後妻うち」という言葉こそ冠せられていないものの、これもまた一種の「後妻うち」に起因する「執心」譚であると見なされる話に対し、考察を加えてゆく。巻五ノ十四「栗田左衛門介が女ばう死して相撲を取りに来たる事」が、それである。本編は前述の「松ざか屋甚太夫が女ばうはなりうちの事」と同様、「第四章 「後妻うち」の系譜」において、あらすじと「後妻うち」という観点からの考察を加えた為、本章段においては、その梗概ならびに「執心」譚としての観点からの読解のみを記す。――前妻の亡霊が後妻に、負けたならば邸を出ることを条件に、相撲での勝負を挑

む。後妻はその為に衰弱して死に、夫も後には出家したというのが、本編の概略である。

ここで、前妻の亡霊が初めて後妻の許に姿を現した際のやりとりに着目したい。

内儀ないぎきゝて、「さやうの事もぞんじ候はで、ちかきころこれへゑんにつ

き参り候ふ。御はらだちは御尤おんよしにて候ふ。」

後妻のこのような言葉からは、前妻の己に対する怒りを当然のものとして、容認する態度がうかがわれる。

堤邦彦氏言うところの「後妻うわなり」に崇る「前妻こなみ」の霊象のすさまじさを記した古代・平安の物語の伝統と法則に大きく左右された結果（44）を、本編の後妻が認めているのである。

しかしながら、前妻がこの世のものではないと知ってからの後妻の態度には、ある変化が見受けられるのだ。以下に当該箇所を抜粋する。

そのはうさまは今此世にましまさぬ御身のよし。なにとてさやうに

生者が死者の彷徨をなじるこうした態度は、前述の、死んだ妾を恋い慕っているながら、ひとたびその亡霊が現れたとなると、亡霊を卑怯者と罵る男が登場する、「紀伊の国にてある人の妾死して執心来たりし事」に通底するものがあると言えよう。

さらには「しうしんふかくまよい給ふぞ。」という後妻の言葉からは、死者は執心に囚われるとこの世に迷い出る――すなわち、前述の「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうちの事」に見たような、執心が怪異の主体であるという設定、ならびに物事に対する執着としての執心を抱くことの、罪深さがうかがわれるのである。

また「栗田左衛門介が女ばう死して相撲を取りに来たる事」は、前妻の亡霊により後妻を亡くした夫が「その身は出家し、しよこくしゆぎやうに出でけると也。」といった、仏教色の見受けられる結末となっている。

しかしながら、そこには教訓的言辞や、前述の『奇異雑談集』に見た唱導的言辞は見受けられず、こうした事柄からもやはり、『諸国百物語』における唱導・教化色の希薄化が、うかがわれると言えよう。

次の「執心」譚の事例は、巻三ノ七「まよひの物二月堂にぐわつどうの牛王ごわうにをそれし事」である。本編もまた、前述の「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうちの事」、「栗田左衛門介が女ばう死して相撲を取りに来たる事」と同様に、「第四章 「後妻うち」の系譜」において考察を加えた為、本章段においては梗概ならびに「執心」譚としての観点からの読解のみを記す。

隣家の女に毒殺され、その女と夫とが程なくして夫婦になったことを無

念に思った前妻の亡霊が、その墓所を訪れた若者の助けを借り、夫と後妻に復讐を果たすというのが、「まよひの物二月堂の午王にをそれし事」の概略であり、本編はその前半部、ならびに亡霊を助けた若者が礼をもらう結末部を『曾呂利物語』巻三ノ三「蓮臺野にて化物に逢ふ事」に依拠し、塚の主である亡霊の素生、その怨嗟の理由が明らかとなる後半部は平仮名本『因果物語』巻二ノ一「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」に依拠している（45）。

ここで、亡霊が怨嗟を発露させた理由が含まれている、「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」の概略に——「第四章 「後妻うち」の系譜」にて取り上げたものの——少しく言及する。

嫉妬の為に己を殺害した本妻に、「或牢人」の助けを借りた愛妾の亡霊が、復讐を果たすというのが、「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」の概略である。

このように、被害者、そして加害者となる女性の地位関係の差異こそある——「まよひの物二月堂の午王にをそれし事」は前妻と後妻、「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」は愛妾と本妻である——ものの、本編も典拠も、不当に殺害された女の亡霊が、犯人である女の亡霊に報復する話であるという点は共通していると言えよう。

にもかかわらず、本編と典拠には、復讐を果たした後の亡霊の言動に、一つの違いがある。以下に当該箇所を抜粋する。

くだんのおとこにむかつて、「さて／＼とし月のしうしん、御かげゆへにはらしかたじけなく候ふ」とて、袋をひとつとり出し、「是れは心ざしの御礼也。心はづかしく候ふ」とて、けすがごとくにうせにけり。

「まよひの物二月堂の午王にをそれし事」

昨夜、おもふ敵をとりて、今ハ真さまに成て、身のくるしミを、のがれたり、ひとへに、大恩浅からず、今よりのちハ、御身の守りとなり、

自然の事のあらん時、必らず、御用に立て、此御恩ほうじ奉るへし、とて、かきけすことく、うせにけり

「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」

このように、本編に見る「しうしん」という言葉は、典拠には登場しないのである。典拠に比し、執心を怪異の原動力とする色彩が濃厚となっていると

言えよう。

さらには前述の「さて／＼とし月のしうしん、御かげゆへにはらしかた
じけなく候ふ」といった亡霊の言葉に加え「おもへば／＼むねんさに夜な
＼門ぐちまではゆけども（中略）かようにしうしんのやみにまよひ候ふ也。」
といった表現を考慮すると、本編における執心は、前述の「松ざか屋甚太夫
が女ばううはなりうちの事」と同様、「うらみ」と密接な関係がある、ない
しは後妻ならびに夫に向けられた執心それ自体が、己を殺害したことに起因
する「うらみ」である可能性が見受けられるのである。

さらに本編においては、「午王」の札が加害者を――復讐の正当性を有す
る――被害者の亡霊から守護している様、ねんごろな供養で亡霊を弔い成仏
させる様が表出されている。

ある場面では神仏が悪人を守護し、またある場面では被害者を救済する
といった、このような神仏の功德の一貫性のなさは、典拠たる「妬て殺せし
女、主の女房をとり殺す事」には、見出されないものである。

このような事柄からは、前述のように、神仏が話の娯楽性を高めるため
の手段として用いられている様が、より濃厚となっていると言えよう。

続いての「執心」譚である、巻五ノ十八「大森彦五郎せしむひごが女ばう死しての

ち双六すしろうくをうちに來たる事」は、これまでに本章段で取り上げてきた章群とは
些か趣を異にし、執心がその対象を破滅させずに終わる話ではある。

しかしながら本編は、執心の持つ意味の多様性を示唆する好例と考えら
れる上、前妻の死後に夫が後妻を迎えるという、一見すると「後妻うち」の
要素を備えていると解釈されかねない話であるので、ここに掲載する。なお、
あらずじは以下の通りである。――丹波のかめ山に、大森彦五郎という、
三百石取りの侍がいた。彼の女房は隠れない美人であったが、出産がもとで
死んでしまった。この女房に七歳の時から召し使われていた腰元がおり、彼
女は悲しみのあまり、七日のうちに自害をすと言ったのを、周囲はようよ
うなだめた。そうこうするうちに三年が過ぎたので、彦五郎は一門から勧め
られ、後妻を迎えた。件の後妻は道理をわきまえた人であり、最初の妻を持
仏堂にまつり、毎日回向をしていた。最初の妻は双六が好きであったので、
死んでから後もその「しうしん」が残っており、夜な夜なやって来ては腰元
と双六をうつことが、三年に及んでいたのだった。ある時腰元が、このよう
に夜な夜ないらっしゃる事が知れたなら、周囲は妬みにいらっしゃったと思
うでしょう、今より後はいらっしゃるなと言ったところ、最初の妻は得心し、
帰って行った。そのことを知らされた夫婦は双六盤を拵え、最初の妻の墓前
に供え、ねんごろにとむらったという。

はじめの内儀ないぎぞんじやうのとき、かのこしもととつねぐすご六をすきてうたれしが、あひはてられても、そのしうしんのこりけるにや、よな／＼きたりてこしもと／＼すご六をうつ事、三年におよべり。この引用個所から見受けられる「しうしん」は、その意味こそ、物事に対する執着であるものの、人に迷惑をさほど及ぼさない、からつとした陽気さに富む「しうしん」であるように見受けられる。そこからはいくばくの微笑まじさが感じ取れると言っても過言ではなからう。

・今は又かほりの女ぢよらうも候へば、もしもかやうに夜よな／＼御出で候ふ事しれ申候はゞ、ねたみにきたり給ふかとおもひ給ふべし。
・まことにそのはうが申すごとく、此すご六にしうしんをのこしたるとは人もいふまじ。
とは人もいふまじ。

しかしながらこれらの腰元、前妻の、「ねたみにきたり給ふかとおもひ給ふべし。」「此すご六にしうしんをのこしたるとは人もいふまじ。」「という言葉葉を鑑みると、先刻のいつそ微笑ましくさえある、陽気な執心に、後妻への妬み、恨みといった陰惨で暗い色彩が付与されてしまう。

物事——この場合は「双六」である——に対する無邪気な執心が、前妻の意図とは関係なく、周囲からは「後妻うち」に起因する、恨みを帯びた執心として解釈されかねないという構図が、ここからはうかがわれるのである。また「大森彦五郎が女ばう死してのち双六をうちに來たる事」は「すご六ばんをこしらへ、かの内儀ないぎの墓はかのまへにそなへてねんごろにとぶらひ給ひけると也。」という、仏教の功德に依拠した形で話が結ばれているが、そこに直接的な教訓的・唱導的言辭は見受けられない。以上の事柄により、本編からも、希薄となる教化・教訓的色彩が、見受けられると言えよう。

以上、『諸国百物語』における「後妻うち」譚と「執心」譚を兼ね備えた話からは、

- ① 前妻の後妻に対する執心を怪異の正体とする傾向が強い。
 - ② 執心とうらみとの密接な関係がある。
 - ③ 執心はその対象を破滅させずにおかないといった傾向が顕著である。といった特徴が見受けられるのである。さらにこれらの章群からは、
- ① 教訓的言辭が表出されていないことにより、唱導・教訓色の希薄化がうかがわれる。
 - ② 神仏が悪人を守護する場面と、仏教的な供養が被害者を救済するといった場面が一つの話に収録されるという、神仏の功德の一貫性のなさがある。
- といった、仏教的・教訓的色彩の特質をも見出すことが出来るのである。

以上、本稿においては『諸国百物語』中の、正式の婚姻関係にない異性に対する異常な恋情としての「執心」譚、ならびに「後妻うち」に起因する「執心」譚を取り上げてきた。

結果、前者は執心と男の裏切りとが、後者は執心と前妻または正妻の、後妻ないしは妾に対するうらみとが、それぞれ密接な関係にあること。ならびに仏教・教化的色彩が希薄となっており、仏教の功德の一貫性のなさが作品中に見受けられることが、明らかとなった。

本章段ではこれらの事柄をふまえ、正式の婚姻関係にある異性に対する――妻の夫に対するものが主である――「執心」譚を取り上げ、これらの作品群が執心にどのような感情を付与しているのかについて、考察を進めてゆきたい。

第一の事例として取り上げるのは、巻二ノ十五「西江伊予の女ぼうの執心の事」――「第四章 「後妻うち」の系譜」にて「後妻うち」という観点からの読解と、そのあらすじを記した為、ここでは梗概ならびに「執心」譚という観点からの考察を記すにとどめ置く――である。

嫉妬深い本妻が、夫が愛妾たちを寵愛するのに怒るあまり憤死し、その死から三日後に、眼玉を繰り抜くという惨たらしい形で、夫を殺害する。それから後も件の家には様々の怪異があったというのが、その概略である。

本編の題名が「西江伊予の女ぼう執心の事」とあることから、本編は妻の執心が主題であり、怪異の原因として設定されている様が見受けられる。だがそれと同時に、本編における執心は、妻の夫に対する妬心と、密接な関係にあると言っても良いだろう。

以上、深い妬心を抱いた妻の執心が夫に向けられている話を取り上げたが、『諸国百物語』におけるこの種の話には類話がある。以下にそれを紹介する。巻四ノ八「土佐の国にて女の執心蛇くちなわになりし事」がそれであり、以下にその梗概と「執心」譚という観点からの読解――「第三章 『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」にて、そのあらすじを記し、仏教の功德という視点から考察を加えた為――を述べる。

嫉妬深い妻に辟易した夫がこれを殺害すると、妻の「執心」が蛇となり、夫の首にまといつく。夫は高野山に行き、不動坂にていったんは蛇から逃れるものの、百日後に下山する際も蛇はまだ不動坂におり、再度夫の首にまきつく。修行の為に関東へ向かおうとした夫が乗合舟に乗ると、舟は動かなくなってしまう。夫が全てを懺悔し、海に身を投げたというのが、本編の梗概である。

「第三章 『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」にて言及し

たように、「土佐の国にて女の執心蛇になりし事」は、前述した平仮名本『因果物語』巻一ノ一「執心ふかき女の、蛇へびに成たる事」を典拠とする(46)。

「土佐の国にて女の執心蛇になりし事」と「執心ふかき女の、蛇に成たる事」との細かな相違点に関しては「第三章 『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」にて記した為、ここでは省略するが、本章段では両者の主題の変遷という観点から、考察を加えてゆく。

前述の坂巻氏は、「執心ふかき女の、蛇に成たる事」を「宿業の深さを首尾照応という形で示した」「女の怨みに代って男を制裁したのは船中の人々であったが、これはそのまま読者の共感―懲悪―を意味していた。」と評し、その主題が男の、深い契りを交わした女に対する不実さ、悪辣さに起因する因果応報譚であることを述べている(47)。

対する「土佐の国にて女の執心蛇になりし事」は、

此をんなかくれなきりんきふかきものにて、男かりにいづるにもついであるきける。男あまりのうるさゝにあるときかり獺にいでけるに、かの女ばうあとよりれいのごとくついて来たる所をとつてひきよせさしころしければ、

といった記述からもうかがわれるように、男性に嫌悪感をもよおさせる程の女の領有欲、執心は、常軌を逸したものととして描かれている。

そして、契りを交わした女の処遇に窮した男が相手を騙して殺害する「執心ふかき女の、蛇に成たる事」とは異なり、本編では男にはさしたる落ち度はなく、女の異常なまでの領有欲に嫌気がさしたが為に、相手を殺害したという設定になっているのである。

以上の事柄から本編は、男の狡猾さと悪辣さが目につく典拠に比し、女の妬心、そして夫への執心のすさまじさとその理不尽さが際立つ物語展開となっているという結論が導き出されるのである。

さらに本編は、典拠たる「執心ふかき女の、蛇に成たる事」に見たように、

男うれしくおもひ、高野かうやに百日あまりとうりうして、もはやべつぎもあるまじきとおもひ、山をげかうしければ、ふどう坂の中ほどにてか

の蛇へびなまわくさむらのうちよりはひ出でて、また男のくびにまといつく。

といった物語展開となっており、そこからは仏教の功德を有する寺という聖域が、女の怨念を根本的に退散させる力を有しておらず、一時的な避難場所としての機能しか有していないことが、うかがわれるのである。

続いての「執心」譚は、巻四ノ十三「嶋津藤四郎しまづとうが女にばうの幽霊の事」である。以下にそのあらすじを述べる。――尾張の国に嶋津藤四郎とい

う謡の名手がおり、伊勢の津に住む久庵という、庭作りをよくする者とは、無二の親友であった。長月も中旬の頃に、久庵が藤四郎を訪れ、二人は蚊帳の中で話をしていた。ややあって藤四郎は寝てしまい、久庵のみ起きていると、年頃は四十ばかりで、丈ほどの髪をさばき、かねぐるをつけ、白い帷子を着た女が、なつかしげに蚊帳の内を見やっていた。女を藤四郎の妾であろうと思つた久庵が見て見ぬふりをしていたところ、女は夜明けとともに帰って行つた。翌日も同様のことが起こつたので、耐えかねた久庵が藤四郎にこれこれと語つたところ、藤四郎は、件の女は自分がかつて京からつれて来、三年添い遂げた妻であること、あるとき風邪がもとで死んでしまつたが、その執心が残つており、折々やつて来ることを語つた。驚いた久庵は、急に暇乞いをして伊勢に帰つたという。

前述の「紀伊の国にてある人の妾死して執心来りし事」は妾、「栗田左衛門介が女ばう死して相撲を取りに来たる事」においては前妻、本編においては妻という違いこそあるものの、これら三編はともに、死者が生者の許を来訪する話である。

しかしながら、「紀伊の国にてある人の妾死して執心来りし事」では「さて／＼ひきやうものかな」、「栗田左衛門介が女ばう死して相撲を取りに来たる事」では「しうしんふかくまよい給ふぞ」といった風に、前述の二話における死者は、この世に迷い出ることを容認されてはいない。

だが、対する「嶋津藤四郎が女ばうの幽霊の事」では、それより国もとへつれてかへり三とせそひたる女にて候ふが、あるとき風のこゝちにてあいはて申し候ふが、そのしうしんのこり申し候ふが、をり／＼きたり申す也

という夫の言葉、あるいは蚊帳の内を見やる亡霊に特に拘泥しないその態度からもうかがわれるように、妻の亡霊の来訪ならびに執心は、その対象たる夫から、決して拒絶されていないのである。

以上の事柄から、本編は執心がその対象によつて容認されている数少ない例となりうるだろう。

しかしながら本編は、異形の亡霊の来訪を淡々と受け入れる夫のその後について、薄気味悪い余韻を、読者にもたらしていると言えよう。

また、夫から夜毎来訪する女の正体を亡霊と聞かされた後の久庵の「おどろき、今二三日もとうりうせんとおもひしが、にわかにいとまごひしていせへかへられけると也。」という態度からも、亡霊の来訪は、状況を客観視することの出来る久庵にとつては、決して容認することが出来ないものであつた様うかがわれる。そして久庵のこの嫌悪感ならびに忌避感はそのまま、傍観者たる読者の共感につながつていったと言つても過言ではないだろう。

以上の事柄から、『諸国百物語』における、妻の夫に対する「執心」譚からは、

① 妬心と執心が密接な関係にある。

- ② 妻の妬心が夫に向けられている。
- ③ 妻の執心は夫を死という形で破滅させずにはおかない。といった主だった特徴が見いだされるのである。さらにこれらの章群からは、
- ① 仏教の功德を有する寺という聖域が、女の怨念を根本的に退散させる力を有していない。
- ② 寺は怨念からの一時的な避難場所としての機能しか有していない。といった仏教の果たす側面も見受けられるのである。

(四)・金銭への執着

以上、先の章段においては、正式の婚姻関係にある異性に対する「執心」譚を取り上げてきた。

結果、これらの章群からは、妬心と執心とが密接な関係にある様、妻の執心が夫に向かう話が大半であり、その暗く激しい情念は夫を破滅させずにはおかない様。

さらには妻のこのような執心の前にあつては、寺という仏教に守護された聖域が、一時的な避難場所としての機能しか有していない様が、明らかとなった。

続く本章段では、こうした感情とは無縁の、金銭に対する「執心」譚を取り上げ、その読解を進めてゆきたい。

初めに、卷三ノ十四「豊後の国西迎寺の長老金にしう心のこす事」を――第三章『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ――において、僧侶の晒す醜態という観点から少しく考察を加えたものの、本章段においては「執心」譚という観点から読解を進める――提示する。

豊後の国西迎寺の長老が病にかかり、自分が死んだならば七日間は遺骸をそのまま置き、その後火葬にせよとの遺言を残し、死ぬ。弟子たちが遺言通りに遺骸を棺に入れておいたところ、三日目の夜半に、長老が棺から縁先へ這い出し、庭の北西の隅を指差す。それを見ていた弟子は恐ろしくなり、台所へ逃げ込む。翌日の夜も同じ事が起きたので、弟子たちが件の庭の北西の隅を掘ったところ、金子千両の入った美しい壺が出てきた。長老の振る舞いは、この金に執心を残していたためであったのだと、人々は長老を誹謗したというのが、おおよそのあらすじである。

本編における執心という語は、前述の平仮名本『因果物語』卷二ノ三「金に執心を残して、蛇に成たる事」、卷二ノ十九「金に執心せし僧、幽霊に成て来りし事」に見るように、僧侶の隠し金に対する執着という意味で使わ

れている。

このように、金に対する執着ゆえに僧侶が異形と化すという話は、古くから仏教色の濃厚な説話に散見される。

例えば弘仁十三年（八二二）の成立が推定される『日本霊異記』中巻第三十八「慳貪けんどんに因りて、大蛇をろちと成る縁」は、隠し置いた三十貫の銭を守るため、その死後大蛇に生まれ変わった僧侶の話であるし、平安時代末期の成立と見込まれる『今昔物語集』巻第二十「奈良ノ馬庭ノ山寺ノ僧、依邪見ジヤンニヨリテ

受蛇身クチナハノミヲウケタルコト語第二十四」は、この話を基としている（48）。

この他にも、隠し金に未練を抱いた無空律師が、死後に蛇と化すという話は、『今昔物語集』巻第十四「為救無空律師枇杷ノ大臣ホクエヲウツセルコト写法花語第一」、寛和年間（九八五〜九八七）の成立と推測される『日本往生極楽記』第七（49）、長久年間（一〇四〇〜一〇四四）に執筆された『本朝法華験記』の巻上・第七「無空律師」として収録されているのである（50）。さらにこれらの話における、

その銭を取りて誦經ずきやうを爲し、善を修し、福を贈りき。

「慳貪に因りて、大蛇と成る縁」

其銭ソノヲ以テ、忽オホキナルニ大寺モテユキニ持行テ、誦經ジユキヤウニ行テ、師オコナヒノ罪報ヲ訪トブラフ。

「奈良ノ馬庭ノ山寺ノ僧、依邪見受蛇身語第二十四」

大臣カヘリ、京ニ返テ、忽オホキナルニ、此ノ銭ヲ以テ法花経一部ヲ書写シヨシヤクヤウ供養シ給テ、其後ソノノチ、程マカヒヲ経テ、大臣ノ夢ニ、彼ノ律師ホフゲン法眼アザヤカ、鮮ニシテニシテ（中略）大臣ムカヒニ向テ云ク、「我ワレ、君ノ恩徳オンドクニ依テ蛇道ジャダウヲ免ルマヌカ、事コトヲ得テ、年来トシゴロノ念佛リキノ力ニ依テ、今、極楽ゴクラクニ参レル也」

「為救無空律師枇杷大臣写法花語第一」

・我われ伏藏の銭貨あるをもて、度はからずして蛇くわなはの身を受けたり。願ねがはくは、その銭をもて法花経を書写すべしといへり。

・大臣忽ちに法花経一部を書写供養せしめ了りぬ。他日夢みらく、律師法服鮮明にして、顔の色悦懌えつえきなり。香炉を持ちて来りて、大臣に謂ひて曰く、吾相府われしやうふの恩をもて、邪道を免るることを得たり。今極楽に詣るなりといへり。

『日本往生極楽記』第七

・我伏藏われの銭貨あるをもて、度らずして蛇くちなはの身を受けたり。願はくはその銭をもて法華経を書写すべしといへり。

・大臣忽ちに法華経一部を書写供養せしめ畢りぬ。他日夢みらく、律師衣服鮮明にして、顔の色悦懌えつえきなり。手に香炉を持ちて来りて、大臣に語りて曰く、吾相府しやうふの恩をもて、蛇道を免るることを得たり。今極楽に詣るなりといへり。

「無空律師」

といった描写からもうかがわれるように「僧侶が隠し金への未練ゆえに異形と化す―周囲からねんごろな供養を受ける」という、一連の流れが見出されるのである。

そしてこの事は、前述の小澤氏によって「唱導を目的とする仏教系怪異小説」(51)と評された『因果物語』にもあてはまる。

先に取り上げた、「金に執心を残して、蛇に成たる事」は、隠し金に執着を抱いた僧侶がその死後蛇になるものの「即、此かねをとりて、念比ねんごらに、とふらひけれハ、蛇二たび来らす、と」といった様を呈しているし、これも隠し金に執着を持つ僧侶が、死後幽霊となつてやつて来る、「金に執心せし僧、幽霊に成て来りし事」もまた「すなハち、此金子をもつて、よく／＼とふらひけれハ、それより、二たひ来らず」という展開を見ている。「僧侶が隠し金への未練ゆえに異形と化す―周囲からねんごろな供養を受ける」といった一連の流れは、ここでも見受けられるのである。

しかしながらこれらの話に比し、「豊後の国西迎寺の長老金にしう心のこす事」は、さては此かねにしうしんをのこされけるゆへとて、みな人ひばうしけると也。

という、僧侶に対する極めて批判的な結末で幕を閉じており、「僧侶が隠し金への未練ゆえに異形と化す―周囲からねんごろな供養を受ける」といった流れは見受けられないのである。

隠し金を用いた供養で僧侶が極楽浄土に赴くという、「為救無空律師毗
把大臣写法花語第一」や『日本往生極楽記』第七とは、一線を画した結末
であり、このことから「豊後の国西迎寺の長老金にしう心のこす事」にお
いては、唱導的色彩のみならず、死後に異形と化した僧侶への憐みや敬意
もまた、希薄になっていると言えよう。

さらには「僧侶が隠し金への未練ゆえに異形と化す―周囲からねんごろ
な供養を受ける」といった従来の説話集、あるいは仏教色の濃厚な怪異小
説に見る展開を断ち切り、痛烈な批判のみをそこに挿入するという話型は、
本編の娯楽性ならびに文芸化を推し進める、画期的な手法と言っても過言
ではなからう。

ついで、巻五ノ十五「伊勢津にて金の執心ひかり物となりし事」をとり
あげる。――伊勢の津、家城村に化け物が住むという家があり、三十年ほ
ど空家になっていた。かつての家の主は頓病で死に、その為に空家になっ
ているのだという。件の家からは男女が言い争っている声が聞こえていた。
ある時京からの旅人がこの話を聞き、自分が今宵件の家に行って化け物を
見届けようと言った。人々は止めたが、旅人は孝行者で、十一の年から両
親を養うためにほうぼう稼ぎ歩いてきたが、貧しく、しかし物に慣れた人
であったので、その夜、件の家に出向いた。すると子の刻ほどに、井戸か
ら鞠ほどの大きさの火が二つ出て来た。それから白髪の老人夫婦が現れ、
旅人に言うには、自分たちはこの家の主であり、頓病で死んでしまったが、
この井戸の中にたくさんの金銀を入れておいた。この金に執心を残すあま
り成仏出来ずにいることは、三十年に渡っている。あとを弔って欲しいけ
れども、この家には恐れて寄りつく人もいない。貴方は孝行者であるので、
金銀を与えようとのことであった。旅人は喜んで金銀を引き上げ、老夫婦
をねんごろに弔ったので、その後は怪異も起こらなかった。そして旅人は
都へ帰り、両親を養ったというのが、本編のあらすじである。

此かねにしうしんをのこしける故うかみかね六どのちまたにまよふ
事、すでに三十ねんにあまれり。

このように本編からも、前述の「豊後の国西迎寺の長老金にしう心のこす
事」に見たような、執心という語が金銭への異様な執着として用いられて
いる様、ならびに、「栗田左衛門介が女ばう死して相撲を取りに来たる事」
に類似した、物事に対する執着としての執心を抱くことの罪深さ、それが
怪異の主体となりうるという様が見受けられるのである。

なお、「伊勢津にて金の執心ひかり物となりし事」において、金銭に執心
を抱くのは女性だけではなく、「老人ふうふ」となっていることから、金
に執心を抱くのは主に男性であるという、『諸国百物語』や平仮名本『因果
物語』に通底する傾向がうかがわれると言えよう。

以上の事柄から、『諸国百物語』における金に対する「執心」譚からは、
① 金銭に執着を抱くのは男性という傾向がある。

- ② 金銭に執着を抱くことは肯定的には描かれていない。
- ③ 金銭に執着を抱く者は異形の姿となる。
- といった事象がうかがわれるのである。
- さらにこれらの章群からは、
- ① 「僧侶が隠し金への未練ゆえに異形と化す―周囲からねんごろな供養を受ける」といった従来の説話集、あるいは仏教色の濃厚な怪異小説に見る展開が見受けられない。
- ② 代って、金銭への執着を抱くあまり異形と化した僧侶に痛烈な批判のみをそこに挿入するという話型が成立している。
- といった特質が見受けられ、これらの事柄は、『諸国百物語』の娯楽性ならびに文芸化をいや増す、画期的な文芸手法であるという結論が、導き出されるのである。

五―三・「執心」譚――『諸国百物語』以後

以上、本稿においては『諸国百物語』を中心に据え、それ以前の怪異小説における「執心」譚、ならびに『諸国百物語』における「執心」譚を扱ってきた。

本章段ではこれらの章群の特質を念頭に置き、『諸国百物語』以後から『狗張子』刊行の元禄五年（一六九二）に至るまでの近世怪異小説における「執心」譚――【表2】参照――について、考察を加えてゆきたい。

初めに、貞享三年（一六八六）に刊行された『百物語評判』における「執心」譚を取り上げる。渡辺守邦氏によって「和漢儒仏にわたる博識を動員して、もろもろの怪奇を論評した書」（52）と評される本作品の「執心」譚は、卷二ノ五「うぶめの事附幽霊の事」――第二章『諸国百物語』における怪異と人との関わり――において、「うぶめ」の描写の事例として少しく引用したものの、本章段では「執心」譚という観点から考察を加える――である。以下に当該箇所を引用する。

世に語り伝ふるうぶめと申す物こそ心得候はね。其の物語に云へるは、
 産の上にて身罷りたりし女、其の執心此の者となれり

こうした事柄からは、執心という語が物事に対する、エキセントリックな執着として用いられている様。さらに『百物語評判』以前に流布していた物語本や世評においては、「うぶめ」という一個の怪異の正体が、執心であるとして解釈されていた様がうかがわれるのである。前述の『諸国百物語』に見た、執心を怪異の正体として明記する傾向に、類似するものがあると言えよう。

以上の事柄を考慮すると、『百物語評判』における「執心」譚からは、太

刀川清氏が言うところの「世間で噂する怪説異聞を評判する」(53)、ないしは前述の渡辺氏が述べたような「もろもろの怪奇を論評」する(54)といった『百物語評判』そのものに相通じる側面が、見受けられるのである。

ついで『御伽比丘尼』(『諸国新百物語』)に収録された「執心」譚を取り上げる。

『御伽比丘尼』に関しては、前述の太刀川氏により、その解題本『諸国新百物語』の序文「それが中には艶なるあり、哀れなるあり、をかしきあり、怪しきあり、恐ろしきあり、これかれ証拠正しき咄を抜書して、咄百に満たずといへども改めず。」を引き合いに出され、この序文が「内容」を体現している由を指摘されている(55)。こうした本作品の、第一の「執

心」譚は、卷三ノ三「執心しゅうしんのふかき桑名くわなの海付うみリ悪あくを捨する善七」である。

——都から東国へ赴く夫に執心を抱くあまり、女の魂がその身を離れ、後を追う。そのことを知った女は我が身を恥じ怖れ出家し、夫もまたそれにならったというのが、本編のおおよそのあらすじである。

このように、本編における執心は、女性の男性に対するエキセントリックなまでの恋情として位置づけられている様子がわかれるのである。

また、太刀川清氏が「「煩惱即菩提なり」の話」、「離魂記」の翻案であるが、原話に見られない仏教的な解釈をしている。」と指摘(56)するように、本編からは濃厚な仏教的色彩も見受けられるのである。

さらに太刀川氏は「『諸国新百物語』二十二話には仏道信仰の説話が八話もある」と『諸国新百物語』における仏教的説話の所収率の高さ、そこからうかがえる唱導色の濃さについても言及している(57)。

続く「執心」譚は、卷四ノ四「虚うその皮かはかぶる姿すがたの僧付越中白山のさた」である。以下にそのあらすじを述べる。——伊勢の松坂に裕福な商人があり、美しい一人娘がいたが、ある時ふとした病で亡くなってしまふ。父母がこれを嘆き悲しんで一周忌の追善を迎えていたところ、とある僧侶が、件の娘の亡霊と、越中の白山で出会ったと言い、その証拠として娘の執心が残る着物の片袖を持参する。父母が着物を検めたところ、片袖が無くなっていたので、悲しみを新たにした夫婦は、僧侶に幾ばくかの黄金を手渡す。しかしこれをいぶかった店の手代が僧侶の後をつけてゆくと、僧侶はかつて娘の腰元をつとめていた女の夫であった。女は件の家を追い出される際、片袖を密かに引きちぎり、夫婦でこのような謀はかりごとを企んだのであった。

このように本編は、貧しさゆえに、幽霊譚を利用した悪計を企んだ夫婦の話であり、前述してきた近世怪異小説とは少しく趣を異にすると見えよう。

なお本編において執心という語は「是こそ自^{みづか}が心に入て。日比^{ごろひさう}秘蔵し

ける執心^{しゅうしん}つよく残りて。」という文脈で使われており、物事に対する執着という意味が、そこからは見出されるのである。

さらに本編は、前述の『奇異雑談集』（写本）に見受けられるような、

かるがゆへに、越中^{エッチウ}ハ地獄道^{ヂゴクダウ}なり、と、いへり

上巻ノ一「五条^{アシタル}の足軽、京にて死^シするに、越中^{エッチウ}にて、人これにあふ事」

越中^{エッチウ}の国にハ、地獄道^{ヂゴクダウ}、ちくしやうだうあり

上巻ノ十九「越中^{エッチウ}にて、人馬^{ムマ}になるに、尊勝^{ソンセウ}陀羅尼^{ダラニ}きどくありし事」といった、越中の地獄伝承を利用した、滑稽なべてんの話であり、こうした側面からは、仏教は話の娯楽性を高める為の道具として機能しており、唱導性はうかがわれないのである。

これらのことを鑑みると、『御伽比丘尼』（『諸国新百物語』における「執心」譚は、必ずしも唱導性一辺倒の話ではない。「それが中には艶なるあり、哀れなるあり、をかしきあり、怪しきあり、恐ろしきあり」といった、前述したその解題本『諸国新百物語』の序文を、如実に体現している章群であると言えよう。

以上、本章段においては『諸国百物語』以降、元禄五年に至るまでの主だった怪異小説を取り上げ、そこに収録されている「執心」譚、ならびにそこに見受けられる唱導、娯楽性の変貌について、考察を加えてきた。

結果、これらの「執心」譚においては、執心という語の意味こそ『諸国百物語』やそれ以前の怪異小説に見たものと同じであるものの、話に様々の要素——仏教による救済で、執心による男女の破滅を防ぐ、「怪異」と思われていた事象の正体を人為的なものとする——を加えることで、従前の怪異小説にはない、新たな話型が成立している様。

そして、仏教を娯楽的読み物としての結構を高めるための手段として用いている様こそ見受けられるものの、前述の『奇異雑談集』のような、唱導のみを本質とした作品は最早見受けられない様が、うかがわれるのである。

五―四・まとめ

以上、近世怪異小説における「執心」譚を取り上げ、その特質ならびに、それらとの比較に起因する『諸国百物語』の「執心」譚の特質、仏教的要

素と娯楽性の変遷について、考察を加えてきた。

結果、『諸国百物語』以前の「執心」譚では、女性が抱く執心は、主にエキセントリックな恋情であり、男性にたいして発動すること、ならびに女性の蛇身化と密接な関わりがあること。そして男性——主に僧侶——が抱く執心は、金に対してであること。そして女性——主に僧侶——が抱く執心は、金に対してであること。

ならびに「執心」譚が収録されている作品集の成立年代が下るにつれ、そこに見受けられる唱導・教訓的要素は希薄となり、代わって文芸性や物語性を有する「読み物」としての結構がいや増してゆくことが判明した。

対する『諸国百物語』における「執心」譚では、前述の話型が見受けられはするものの、

①女性の蛇身化の割合はさほど高くはなく、代わりに女性の男性への執心が、異常な恋情だけではなく、相手を死という形で破滅させかねない妬みや、恨みを内包している場合がある。

②女性の、恨みや妬心を内包した執心の発動の契機は、男の裏切りや冷淡さである。

③「後妻うち」譚と「執心」譚の要素がミックスされている話型も存在し、こうした作品群において前妻や本妻の執心は、後妻ないしは妾に向けられる。

④僧侶が隠し金に執着を抱く話に、従来の話型では見られなかった——巻三ノ十四「豊後の国西迎寺の長老金にしう心のこす事」に見たように——僧侶への批判精神が描かれている。

といった、従来の近世怪異小説では見受けられなかった、新しい物語パターンが成立していることが、明らかとなった。

また、

①仏教的手段やその功德を有する筈の寺院が、怪異に対する対処療法なしは一時的な逃避手段としてしか機能していない。

②仏教が、ある作品では怪異を鎮める為の手段としての機能を果たしておきながら、別の作品では怪異よりも劣位におかれている。ないしは神仏が加害者を守護する場面と、仏教的な供養が被害者を救済するといった場面が一つの話に収録されるといった、仏教の功力の一貫性のなさが見受けられる。

というこれらの特質からは、『諸国百物語』において、もはや仏教は、「読み物」としての娯楽性、ならびに結構を高める為の手段と化している様うかがわれるのである。

『諸国百物語』以前の近世怪異小説に見た、仏教の威徳の卑小化、教化・教訓性の希薄化、それに伴う文芸・物語性の高まりといった傾向が、新たな要素を交えつつ、より高度な段階へと至っていると見えよう。

そしてこれらの事柄は、高田衛氏による「古い話を使うけれども、その中に新しい要素（中略）新しい恐怖のスタイルがどんどん入ってくる」（58）という見解を裏付ける結果となった。

『諸国百物語』の特性ならびに文芸的意匠の一つは、このような手法にあり、『諸国百物語』以前の近世怪異小説に見た唱導・教訓性の希薄化、文芸・物語性ならびに娯楽性の水準は、『諸国百物語』において頂点に達したと言っても過言ではないだろう。

さらに、『諸国百物語』以降の怪異小説における「執心」譚は、物語展開に新たな要素が挿入されてこそのもの、執心という語の意味それ自体は『諸国百物語』ほどバリエーションに富んでおらず、そこに裏切りや妬心、うらみといった、何らかの感情が付加されるという深みもさして見受けられないのである。

また、『諸国百物語』以降の怪異小説の「執心」譚に見る、仏教を娯楽的要素を高める為の手段として用いる傾向、それとは逆の唱導的側面といった事柄は、『諸国百物語』以前の近世怪異小説、ならびに『諸国百物語』の「執心」譚において既に胚胎しているものであり、殊更に新しい要素ではない。

こうしたことから、『諸国百物語』に収録されている「執心」譚は、近世怪異小説の潮流の中で、ひとときわ高い水準を維持し続けているとも言える。

註

- (1) 池田彌三郎氏「人を目指す幽霊」(『日本の幽霊』、中央公論社、一九七四・八)
- (2) 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」(『大妻女子大学院文学研究科論集』第二号、一九九二・三)
- (3) 註(2)前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」
- (4) 註(2)前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」
- (5) 太刀川清氏「序章 百物語と伽婢子」(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)「初出…「怪談会から怪異小説へ」(『国語国文研究』第二十四号、一九六三・二)」。しかしながら、太刀川氏によって「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百物語』と『諸国百物語』」(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)「初出…『諸国百物語』成立の背景」(『長野県短大紀要』第二十八号、一九七三・十二)において「雑話集」と指摘される「百物語」。さらには江本裕氏によって「第一部 仮名草子」四「了意怪異談の素材と方法」(『近世前期小説の研究』、若草書房、二〇〇〇・六)「初出…「了意怪異談の素材と方法」(『近世文芸 研究と評論』第二号、一九七二・五)」において「零本で、巻七のみ」と指摘される『続伽婢子』に関しては、所収比率が完全には網羅出来ない為、取り上げなかった。なお、『狗張子』に関しては、「伽婢子と狗張子」(『国語と国文学』第四十八巻第十号、一九七

一・十)における、『伽婢子』と「正編続編」の関係にあるという富士昭雄の指摘を受け、ここに掲載した。

- (6) 堤邦彦氏「怪異——近世怪異小説と仏教——」(伊藤博之氏他編、仏教文学講座 第五卷『物語・日記・随筆』勉誠社、一九九六・四)
- (7) 註(2)前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」
- (8) 堤邦彦氏「唱導の「物語」——近世奇談文芸への展開」(『江戸文学』第二十二号、二〇〇一・一二)
- (9) 堤邦彦氏「生首をいとおしむ女——偏愛奇談の時代」(東アジア怪異学会編『怪異学の技法』、京都・臨川書店、二〇〇三・十一)
- (10) 註(9)前掲 堤邦彦氏「生首をいとおしむ女——偏愛奇談の時代」
- (11) 高田衛氏は「蛇女の説話と民俗——近世を泳ぎ超える女たち」(『女と蛇 表徴の江戸文学誌』、筑摩書房、一九九九・一)〔初出…「近世淫女説話の一展開」(『文学』第五十三号、一九八五・七)〕において「近世説話の中にあらわれる「蛇」は、しばしば、不死や混沌やエロスのなるもの、なかならずく「鬼」のおぞましいイメージと脈絡」するとして、蛇の負の要素について言及している。
- (12) 註(11)前掲 高田衛氏「蛇女の説話と民俗——近世を泳ぎ超える女たち」
- (13) 富士昭雄氏「『奇異雑談集』の成立」(『駒沢国文』第九号、一九七二・五)
- (14) 堤邦彦氏「近世説話の一視覚——唱導から文芸への軌跡——」(内田保廣他編『近世文学の研究と資料——虚構の空間——』、三弥井書店、一九八八・十二)
- (15) 註(14)前掲 堤邦彦氏「近世説話の一視覚——唱導から文芸への軌跡——」
- (16) 堤邦彦氏「第一章 近世の説話——仏教怪異譚の系譜」(時代別日本文学史事典編集委員会編『時代別日本文学史事典 近世編』、東京堂出版、一九九七・六)
- (17) 江本裕氏「第一部 仮名草子」(『因果物語』における鈴木正三)〔『近世前期小説の研究』、若草書房、二〇〇〇・六)〔初出…『因果物語』をめぐる諸問題——片仮名本検討を通して——』(『大妻国文』第十一号、一九七八・三)〕
- (18) 中嶋隆氏「第四章 因果物語」(末木文美士氏他執筆、岩波講座 日本文学と仏教 第二卷『因果』、岩波書店、一九九四・一)
- (19) 註(17)前掲 江本裕氏「第一部 仮名草子」(『因果物語』における鈴木正三)
- (20) 坂卷甲太氏「第二部 『伽婢子』へ至る道程」(第二章 『因果物語』片仮名本と平仮名本 その一)(『新典社研究叢書35』浅井了意 怪異小説の研究』一九九〇・六)〔初出…「了意怪異小説試論(その二)」

―近世怪異小説論の基礎稿として―(『就実語文』創刊号、一九八〇・十一)

(21) 註(20) 前掲 坂卷甲太氏「第二部 『伽婢子』へ至る道程」第二章 『因果物語』片仮名本と平仮名本 その一

(22) 穎原退蔵氏は「近世怪異小説の一流流」(『国語国文』第八卷第四号、一九三八・四)において『曾呂利物語』やその他の御伽の咄に胚胎した説話が、『とのゐ草』に於いていかに文藝的な成長を遂げて居るか」と、『宿直草』(『御伽物語』)の有する文芸性について言及しており、田川邦子氏はまた「怪談『とのゐ草』論」(『文教大学女子短大部研究紀要』第二十三集、一九七九・十二)において「奇異なるものを見つめる感覚が、ありきたりな怪談の域を超えていると同時に、そこに新たな表現の工夫が加味され、独特の世界を持つことができた例」として、『宿直草』(『御伽物語』)の高度な文芸的世界観について述べている。

(23) 堤邦彦氏は第三部「第三章 江戸時代人は何を怖れたか」―「怪異との共棲―『宿直草』に萌すもの―」(『江戸の怪異譚』、ペリカん社、二〇〇四・十一)「初出：『怪異との共棲―江戸時代人は何を怖れたか―』(『伝承文学研究』第五十号、二〇〇〇・五)」において、『宿直草』(『御伽物語』)には「宗教哲学に根ざす教化布宣の目的性をはじめから用意されていない」ことを述べている。

(24) 註(9) 前掲 堤邦彦氏「生首をいとおしむ女―偏愛奇談の時代」

(25) 註(9) 前掲 堤邦彦氏「生首をいとおしむ女―偏愛奇談の時代」

(26) 註(11) 前掲 高田衛氏「蛇女の説話と民俗―近世を泳ぎ超える女たち」

(27) 註(5) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』

(28) 註(11) 前掲 高田衛氏「蛇女の説話と民俗―近世を泳ぎ超える女たち」

(29) 註(2) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(30) 註(2) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(31) 『剪燈新話』(明・瞿佑)の卷二ノ四「牡丹燈記」。美女・麗卿の亡霊に魅入られ、落命するに至った喬生が、その死後、麗卿と共に亡霊となって土地の人々に災いを為していたところを、鉄冠道人の法術によって罰せられ、地獄へ送られてゆくという話である。なお、巻四ノ

五「牡丹堂女のしうしんの事」と、「牡丹燈記」の設定、物語展開上の

相違点に関しては、「第六章 斬首の系譜」において後述する。

(32) 太刀川清氏は「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』(註(5) 前掲)において、「牡丹堂女のしうしんの事」(巻四)は、『剪燈新話』の「牡丹燈記」(巻二)に拠ったものである由、「その説話の核心部分だけを採って一話を構成」している由を述べている。しかしながら本稿では、太刀川氏が巻四ノ五「牡丹堂女のしうしんの事」を「牡丹燈記」の「翻案説話」と述べている由に着目し、比較の為此ここに提示した。

(33) 『奇異雑談集』(写本) 下巻(朝倉治彦氏、深沢秋男氏編『仮名草子集成』第二十一巻、東京堂出版、一九九八・三)には「新渡に、剪燈新話といふ書あり、奇異なる物語を、あつめたる書也、今、二三ヶ条を取て、こゝに、のするなり」との記述がある。また渡辺守邦氏は「第三章 近世怪異小説」(末木文美士氏執筆、岩波講座 日本文学と仏教 第二巻『因果』、岩波書店、一九九四・一)において『剪燈新話』所収の怪異談を仮名交り文に翻する試み」として『奇異雑談集』に『剪燈新話』(明・瞿佑)の巻一ノ四「金風釵記」(揚州の富人・呉防禦の娘・興娘は、恋人の興哥を思うあまり焦がれ死にしよう。その後、呉防禦の許に身を寄せていた興哥は、ある夜忍んで来た妹娘・慶娘と結ばれ、やがて駆け落ちをする。一年後、呉防禦の許に戻った興哥は、駆け落ちのことを詫びるが、呉防禦は、慶娘は病床に伏したきりである由を告げる。そして興娘の霊が慶娘に乗り移っていたという事実が明らかになり、興娘の希望により、興哥は慶娘と結婚するという話。

『奇異雑談集』(写本)には下巻ノ十三「金風釵記」として収録されている。下巻ノ十三「金風釵記」の物語展開は、原話のそれをほぼ忠実に踏襲している。しかしながら、慶娘が興哥の許に忍んで来た夜、興哥が驚いてこれを拒もうとした際の慶娘の台詞が、原話では「汝乃チ深夜ニ於テ我ヲ誘イテ此ニ至ル。将ニ何ヲカ為セント欲ス。我將ニ之ヲ訴ヘント。」といった、些か脅迫めいたものであるのに対し、巻ノ十三「金風釵記」においては「我、此家のうちを、よく、しつて、忍びきたれハ、人しらし、父母も、また、しるべからず。心をやすんじ、悠々として、まくらを、ならべん」といった穏やかなものに変わっている。作品冒頭に「金風釵」についての説明があるなど、細かな改変が幾つか見受けられる。巻二ノ四「牡丹燈記」(あらすじは註(32))

前掲。『奇異雑談集』(写本)には下巻ノ十四「牡丹燈記」として収録

されている。両者の設定、物語展開上の相違点に関しては、「第六章 斬首の系譜」において後述する。）、巻三ノ三「申陽洞記」（隴西の李徳逢が、申陽洞記に住む猿の妖怪を退治し、美女と富を得るという話。両者の設定、物語展開上の相違点に関しては、「第七章 「天狗」譚の系譜——『諸国百物語』と『狗張子』——」において後述する。）が所収されていることを述べている。本稿では典拠、類話との比較を通じて作品の考察を行う為、『諸国百物語』巻四ノ五「牡丹堂女のしうしんの事」と典拠を同じくする「牡丹灯籠」を取り上げることにした。

(34) 宇佐美喜三八氏は「伽婢子に於ける翻案について」（『和歌史に関する研究』、若竹出版、一九五二・十一）「初出……伽婢子に於ける翻案について」（『国語と国文学』第十二巻第三号、一九三五・三）において、『伽婢子』巻三ノ三「牡丹灯籠」が『剪燈新話』巻二ノ四「牡丹燈記」に「依拠」していることを述べている。五条京極に住まう萩原新之丞が、二階堂政宣の娘・弥子の亡霊に魅入られ、落命してしまう。その死後、二人の亡霊が都の人々に災いをなしたので、一族の者たちが仏事を営んだところ、怪異は収まったというのが、「牡丹灯籠」のおよそのあらすじである。本稿では典拠、類話との比較を通じて作品の考察を行う為、『諸国百物語』巻四ノ五「牡丹堂女のしうしんの事」と典拠を同じくする「牡丹灯籠」を取り上げることにした。なお、「牡丹灯籠」と、「牡丹燈記」の設定、物語展開上の相違点に関しては、「第六章 斬首の系譜」において後述する。

(35) 註(5) 前掲 富士昭雄氏「伽婢子と狗張子」

(36) 註(33) 前掲 渡辺守邦氏「第三章 近世怪異小説」

(37) 註(5) 前掲 富士昭雄氏「伽婢子と狗張子」

(38) 註(5) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百物語』と『諸国百物語』」

(39) 高田衛氏は「地獄絵の中の〈女〉と〈蛇〉——近世的通念における否定的なるもの」（『女と蛇 表徴の江戸文学誌』、筑摩書房、一九九九・一）において元禄四年（一六九一）刊の『北条時頼記』（浮世草子）の挿絵を引き合いに出し、描かれた弁財天が「蛇体の女神であるがゆえに、挿絵は女房姿の着物の裾に蛇体をはっきり描いている」ことを指摘し、巻四ノ十九「龍宮の乙姫五十嵐平右衛門が子にしう心せし事」も前者とは「基本的に同じイメージ」であると述べている。

(40) 註(11) 前掲 高田衛氏「蛇女の説話と民俗——近世を泳ぎ超える女たち」

(41) 註(11) 前掲 高田衛氏「蛇女の説話と民俗——近世を泳ぎ超える女たち」

(42) 井上泰至氏「吉備津の釜」——「後妻打ち」からの乖離——（『上智大学国文論集』第二十、一九八七・一）

(43) 小松和彦氏は「（鼎談）江戸の怪異譚と西鶴」（高田衛氏他編『西

において、『諸国百物語』巻二ノ九「豊後の国何がしの女によばう死骸しがいを漆うるしにて塗たる事」を「典型的なうわなり打ち」と評している。

(44) 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」
 (一柳廣孝氏、吉田司雄氏編著『幻想文学、近代の魔界へ』ナイトメ
 ア叢書2、二〇〇六・五)

(45) 註(2) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物
 語』から『諸国百物語』へ」

(46) 註(2) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物
 語』から『諸国百物語』へ」

(47) 註(20) 前掲 坂卷甲太氏「第二部 『伽婢子』へ至る道程」
 「第二章 『因果物語』片仮名本と平仮名本 その一」

(48) 『新編日本古典文学全集10 日本霊異記』(中田祝夫氏校注、小
 学館、一九九五・九) 頭注

(49) 註(48) 掲載 中田祝男氏校注『新編日本古典文学全集10 日
 本霊異記』頭注

(50) 『新編日本古典文学全集35 今昔物語集①』(全四冊)(馬淵和夫
 氏他校注、小学館、一九九九・四) 頭注

(51) 註(2) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物
 語』から『諸国百物語』へ」

(52) 註(33) 前掲 渡辺守邦氏「第三章 近世怪異小説」

(53) 註(5) 前掲 太刀川清氏『『諸国百物語』成立の背景」

(54) 註(33) 前掲 渡辺守邦氏「第三章 近世怪異小説」

(55) 太刀川清氏「第三章 浮世草子の百物語」第一節『諸国新百物語』
 (『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)(『諸国新百物語』
 と『御伽比丘尼』)(『長野県短大紀要』第三十号、一九七五・十二)」

(56) 註(55) 前掲 太刀川清氏「第三章 浮世草子の百物語」第一
 節『諸国新百物語』。なお、「離魂記」(唐・陳元祐)のあらすじは、
 以下の通りである。——清河の役人・張鎰の娘・倩娘は類まれな美
 しきの女性であり、張鎰の甥・王宙は幼い頃から聡明で、容姿端麗で
 あった。張鎰はいずれ二人を夫婦にする心算でいた。しかしある時、
 天子の後宮の女官を選ぶ者が倩娘を求め、張鎰はこれを許してしまう。
 これを深く恨み悲しんだ王宙は、官職に就くことを口実に、都に上る
 ことにした。その旅の途上、倩娘は王宙を追って来、胸の内の慕情を
 吐露する。喜んだ王宙は倩娘を船に隠し、蜀に至った。五年の歳月が
 経ち、子どもも生まれたが、倩娘がいつも郷里の父母のことを思っ
 ては悲しむので、王宙は倩娘を伴って張鎰の許へと帰り、これまでのこ
 とを詫びた。すると張鎰は「娘は病で部屋で寝ているのだから、どう
 してそのような嘘を云うのか」と答えた。王宙が、舟の中を見るよう

にと云うと、張鎰は大変驚き、人をやつて様子を見せると、果たして
倩娘は舟中におり、父の安否を問うた。部屋の中にいる、もう一人の
倩娘はこれを聞くと、喜んで起き、化粧をして着替え、何も言わない。
出て行って互いに迎え合うと、二人はびったりと重なって一つの体と
なり、その着物まで皆重なったという。対する卷三ノ三「執心のふか
き桑名の海付り悪を捨る善七」においては、「みる内にふたつのかたち。
ひとつに合して。只ひとりの娘とそなれりける。」ことを、娘は「あな
浅まし（中略）恥かしくもおそろしの罪のほどや」と嘆き悲しみ、男
は「人の執のおどろ／＼しきをまのまへに見」て「世をいとふ心」が
強くなり、共に出家している。「離魂」を仏道に入る契機として位置づ
けている様子がうかがわれよう。

(57) 註(55) 前掲 太刀川清氏『諸国新百物語』と『御伽比丘尼』
(58) 註(43) 前掲 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「(鼎談)江
戸の怪異譚と西鶴」

以下、『剪燈新話』本文引用は全て『剪燈新話句解』一・二卷（京
都、林正五郎、慶安元年（一六四八）刊、早稲田大学中央図書館蔵）
に、『日本往生極楽記』は日本思想大系7『往生伝 法華験記』（井上
光貞氏他校注、岩波書店、一九七四・九）に、『日本靈異記』は『日
本古典文学大系70 日本靈異記』（遠藤嘉基氏他校注、岩波書店、
一九六七・八）に、『本朝法華験記』は日本思想大系7『往生伝 法
華験記』（前掲）に、『離魂記』は常熟老报刊・沈秋农主編、常熟市档
案館編『叢書集成新編』第八十二卷（扬州市、广陵书社、二〇〇七）
に拠る。

【表1】近世初期～中期怪異小説における「執心」譚の割合

作品	章題	説話中
『奇異雑談集』 (写本)	0/39 (0%)	3/39 (7.7%)
片仮名本 『因果物語』	0/77 (0%)	0/187 (0%)
平仮名本 『因果物語』	3/85 (3.5%)	5/85 (5.9%)
『曾呂利物語』	0/41 (0%)	0/41 (0%)
『伽婢子』	0/68 (0%)	0/68 (0%)
『宿直草』(『御伽物語』)	0/68 (0%)	2/68 (2.9%)
『諸国百物語』	11/100 (11%)	19/100 (19%)
『新御伽婢子』	0/48 (0%)	0/48 (0%)
『百物語評判』	0/42 (0%)	1/42 (2.4%)
『御伽比丘尼』 (『諸国新百物語』)	1/22 (4.5%)	2/22 (9%)
『狗張子』	0/45 (0%)	0/45 (0%)

* 「執心」譚を扱った話/所収話数

* カッコ内は割合 (小数点第一位以下四捨五入)

【表2】近世初期～中期怪異小説における「執心」譚の巻次・章題・概略

作品	巻次	章題	概略
『奇異雑談集』 (写本)	上巻ノ四	「古堂の天井に、女を磔に、 かけをく事」	「外夫」をしていた女が、その 腐首に執心を抱く。
	上巻ノ八	「戸津坂本にて、女人僧を 逐て、ともに頼田の橋に身 をなげ、大蛇になりし事」	僧侶に執心を抱いた女が水底に 沈み、その身を蛇身と変じて、 僧侶の身にまきつく。
	上巻ノ十一	「越中にて、両妻死して蛇 になりて、夫の両の手にま とふ事」	二人の妻の執心が、その死後大 蛇に変じ、夫の両手にまといつ く。
片仮名本 『因果物語』			
平仮名本 『因果物語』	巻一ノ一	「執心ふかき女の、蛇に成 たる事」	男に執心を抱いた女が、その死 後蛇となり、男の腰にまといつ く。

『曾呂和物語』	卷二ノ三	「金に執心を残して、蛇に成たる事」	隠し金に執心を残した僧侶が、その死後蛇となって金の在り処を訪れる。	
	卷二ノ十九	「金に執心せし僧、幽霊に成て来りし事」	隠し金に執心を残した僧侶が、その死後亡霊となって金の在り処を訪れる。	
	卷三ノ二十二	「夫婦死して、二つの蛇と成し事」	執心を残した夫婦が、その死後蛇となり、絡まりあっていた。	
『御伽物語』	卷四ノ一	「恋ゆへころされて、其女につきける事」	主君の娘に恋慕の情を抱いた男が、それ故に成敗されるものの、亡霊となって娘を取り殺す。	
	『伽婢子』			
	『宿直草』 『御伽物語』	卷四ノ七 卷五ノ四	「七人の子の中も女に心ゆるすまじき事」 「そがのゆうれいの事」	飼い犬が飼い主の娘に執心を抱き、夫婦となる。 昔我十郎裕成の亡霊が、敵討ちに起因する執心のため、成仏できずにいる。
『新御伽婢子』				
『御伽比丘尼』 『諸国新百物語』	『百物語評判』	卷二ノ五	「うぶめの事附幽霊の事」	うぶめという妖怪は、出産の為に死んだ女性で、その執心ゆえになるものだという一条がある。
	卷三ノ三	「執心のふかき桑名の海付り悪を捨つる善七」	遠方に行く夫に執心を抱くあまり、女の魂がその身を離れ、後を追う。	
	卷四ノ四	「虚の皮かぶる姿の僧付越 中山のさた」	僧侶が、亡くなった伊勢の松坂の娘の亡霊と、越中の白山で出会ったと言い、その証拠として娘の執心が残る着物の片袖を持参する。	
『狗張子』				

【表3】『諸国百物語』における「執心」譚の巻次・章題・概略

巻次	章題	概略
巻一ノ十二	「駿河の国美穂が嫡女の亡魂の事」	男の裏切り故に殺された女の亡魂が男を取り殺すものの、その後も執心が残っているため、土地に様々の怪異が起こる。
巻二ノ一	「遠江の国見付の宿御前の執心の事」	一夜契りを交わした男の裏切り故に殺された御前の亡霊が、男を惨殺する。
巻二ノ十二	「遠江の国堀越と云人嫁に執心せし事」	舅が嫁に執心を抱くあまり病氣になり、いまわの際に蛇となった舅は嫁にまといつき、共に水底に沈む。
巻二ノ十五	「西江伊予の女ぼうの執心の事」	妾たちを寵愛する夫に怒りを抱いていた本妻の亡霊が、その死後夫を惨殺する。
巻二ノ十七	「紀伊の国にてある人の妾死して執心来りし事」	妾の執心がその死後も男の許を訪れるものの、男に「単怙者」と叱責され、切り払われる。
巻三ノ四	「江州白井助三郎が娘の執心大蛇になりし事」	幼馴染と添い遂げたいあまり、死んだ女の執心が蛇となる。
巻三ノ七	「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」	後妻に殺された前妻の亡霊が、敵である後妻と夫を殺害し、その執心を晴らす。
巻三ノ十四	「豊後の国西迎寺の長老金にしよう心のこす事」	隠し金に執心を残した僧侶が、その死後棺から這い出し、金の在り処を指さす。
巻三ノ十七	「渡部新五郎が娘若宮の尻におもひそめし事」	稚児に恋慕の情を抱くも、相手の冷淡故に病死した娘の執心が、相手を取り殺す。
巻三ノ十九	「艶書のしうしん鬼となりし事」	美貌の稚児に寄せた恋文の文主たちの執心が積もり、鬼となる。
巻四ノ五	「牡丹堂女のしうしんの事」	女の亡霊の執心が、男を取り殺す。
巻四ノ八	「土佐の国にて女の執心蛇になりし事」	嫉妬深い女が夫に殺された後、蛇となって相手の首にまといつく。
巻四ノ十三	「嶋津藤四郎が女ぼうの幽霊の事」	病死した妻の執心が残り、それが夫の評を訪れる。
巻四ノ十九	「龍宮の乙姫五十嵐平右衛門が子にしう心せし事」	龍宮の乙姫が、容貌が優れて美しい五十嵐平右衛門の息子に執心を抱き、大蛇となって息子にまといつき、海に飛び入る。
巻五ノ六	「紀州和歌山松本屋久兵衛が女ぼうの事」	松本屋久兵衛の死後、その妻に入り婿がやって来るものの、継娘に執心を抱く。
巻五ノ十四	「栗田左衛門介が女ぼう死して相撲を取りに来たる事」	前妻の亡霊が後妻の許に「しうしんぶかくまよい」出て、相撲の勝負を挑む。

巻五ノ十五	「伊勢津にて金の執心ひかり物となりし事」	井戸の中に隠し金を入れ置いた老夫婦の亡霊が、金に執心を抱くあまり、成仏できない。
巻五ノ十六	「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうち」	前妻の執心が、後妻を取り殺す。
巻五ノ十八	「大森彦五郎が女ばう死てのち双六をうちに来事」	双六に執心を残した前妻の亡霊が、三年に渡って腰元の所へ双六をうちにくる。

【表4】『諸国百物語』における「執心」譚の分類

正式の婚姻関係にない異性に対する異常な恋情としての「執心」	巻一ノ十二	「駿河の国美穂が嫡女の亡魂の事」
	巻二ノ一	「遠江の国見付の宿御前の執心の事」
	巻二ノ十二	「遠江の国堀越と云人嫁に執心せし事」
	巻二ノ十七	「紀伊の国にてある人の妾死して執心来りし事」
	巻三ノ四	「江州白石助三郎が娘の執心大蛇になりし事」
	巻三ノ十七	「渡部新五郎が娘若宮の尻におもひそめし事」
	巻三ノ十九	「鮎書のしうしん鬼となりし事」
	巻四ノ五	「牡丹堂女のしうしんの事」
	巻四ノ十九	「龍宮の乙姫五十嵐平右衛門が子にしう心せし事」
	巻五ノ六	「紀州和歌山松本屋久兵衛が女ばうの事」
	巻三ノ七	「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」
	巻五ノ十四	「栗田左衛門介が女ばう死して相撲を取りに来たる事」
	巻五ノ十六	「松ざか屋甚太夫が女ばううはなりうちの事」
妻の夫に対する「執心」	巻二ノ十五	「西江伊予の女ばうの執心の事」
	巻四ノ八	「土佐の国にて女の執心蛇になりし事」
	巻四ノ十三	「嶋津藤四郎が女ばうの幽霊の事」
金銭に対する「執心」	巻三ノ十四	「豊後の国西迎寺の長老金にしう心のごす事」
	巻五ノ十五	「伊勢津にて金の執心ひかり物となりし事」
その他の「執心」	巻五ノ十八	「大森彦五郎が女ばう死してのち双六をうちに来事」

六―一・斬首・首を持ち去る話――『諸国百物語』以前

先の章段にて言及したように、『諸国百物語』における「執心」譚の所収率が、他の近世怪異小説に比して高いことから、「執心」譚が一つの章群を形成しているという点。

そして、『諸国百物語』以前の近世怪異小説における「執心」譚を比較検討した結果、これらの章群はその成立年代が下るにつれ、そこに見受けられる唱導的要素は希薄となり、代わって文芸性や物語性を有する「読み物」としての構造がいや増してゆくという点、さらに『諸国百物語』において、それ以前の近世怪異小説に見た唱導・教訓性の希薄化、文芸・創造性ならびに娯楽性の水準は最高潮に達しているという点。

なお、『諸国百物語』以降の近世怪異小説における「執心」譚は、新しい物語的要素が少しく見受けられはするものの、『諸国百物語』のように「執心」という言葉の意味に多様なバリエーションがなく、仏教的要素の希薄化という傾向も、『諸国百物語』においてすでに胚胎しているという点。

以上の事柄から、近世怪異小説における「執心」譚の文芸的、創造的水準は、『諸国百物語』のそれを頂点としているという、結論が導き出されたのである。

本章段では、このような文芸的特質を有する『諸国百物語』の、さらなる特質および、近世怪異小説史における位置づけを明らかにするべく、『諸国百物語』において、「執心」譚と同様にその所収比率が高く――小松和彦は「幽霊が生首を持っていく場面がすごく多い」と、『諸国百物語』について指摘を加えている――(1)、かつ重要な主題の一つと推察される、斬首・首を持ち去る話を取り上げてゆく。

さらには、こうした『諸国百物語』における、幽霊や妖怪が他者を斬首する、ないしはその首を持ち去る話に加え、人間が同様の振る舞いをする話も取り上げ、他の近世怪異小説に収録されている(2)、斬首・首を持ち去る描写が見られる章群、典拠との比較を試みる。

そして、斬首・首を持ち去るといふ行動の意味、その背後にある意図を考察してゆくことを通じ、『諸国百物語』の新たな特質、文芸的価値、ならびに創造性、近世怪異小説における、斬首・首を持ち去る話の一潮流を見出すことを、その目的としたい。

初めに、『諸国百物語』以前の近世怪異小説における、首を切断して殺害する・首を持ち去る描写の登場する話を提示し、その特徴について考察を加えてゆく。

【表1】は、『諸国百物語』を始め、『伽婢子』と「正編続編」の関係にあると目される『狗張子』(3)が成立した元禄五年までの主だった近世怪

異小説を取り上げ、各々の作品において、斬首する・首を持ち去る話が収録されている割合を示したものである。

万治頃の刊行が推定される、片仮名本『因果物語』を例にとると、所収説話187話のうち、斬首する・首を持ち去る話は4話であり、全体の2.1パーセントを占めている。

なお、この斬首する・首を持ち去るといった行為が幽霊・妖怪変化によってなされているものは、そのうちの2話であり、全体に占める比率は1.1パーセント、人間のよってなされているものも2話であり、これも全体に占める比率は1.1パーセントであることがわかるのである（小数点第一以下は四捨五入とした）。

このようにして【表1】に掲載されたそれぞれの作品を見てゆくと、『諸国百物語』と他の近世怪異小説とを比した際、斬首する・首を持ち去る話の所収率が、『諸国百物語』においては11パーセントとなっている様子がわかる。

この数値は、所収率が12.2パーセントである『曾呂利物語』の次に高い。

さらには、他の近世怪異小説における、斬首する・首を持ち去る話の所収比率が10パーセント以下であることから、『諸国百物語』におけるこれらの章群の所収比率の高さがうかがわれる。

また、『諸国百物語』においては、斬首する・首を持ち去る行為が、妖怪・幽霊によるものである話が9パーセントとなっており、この数値は【表1】に掲載した近世初期怪異小説における、これらの章群の所収比率のなかで、もっとも高いものである。

以上の事柄をふまえると、先に述べたように、『諸国百物語』においては、幽霊ないしは妖怪変化が、斬首する・首を持ち去るというテーマが、他の近世怪異小説に比べ、重要視されていると言えよう。

ついで、【表1】に掲載された近世怪異小説のうち、斬首する・首を持ち去る話の読解を進め、それぞれの特質を明らかにしてゆきたい。

【表2】は【表1】に掲載した近世怪異小説（『諸国百物語』を除く）における、斬首する・首を持ち去る話の、巻次・章題・概略を、それぞれ記したものである。

本章段では先ず【表2】の最初に掲載されている、寛永頃の成立と思しい『奇異雑談集』（写本）について考察を加えてゆく。

「第五章 「執心」譚の系譜」においても言及したように、先学からその唱導・教化的色彩（4）、ならびに文芸性（5）について指摘がなされてきた、『奇異雑談集』（写本）に収録されている、斬首する・首を持ち去る話は一話のみである。上巻ノ四「古堂フルダウの天井テンジヤウに、女メウを磔ハツケに、かけをく事」がそれに該当する。

なお、本編に対しては「第五章 「執心」譚の系譜」においてそのあら

すじを掲載し、かつ「執心」譚という観点から考察を加えてきたので、本章段ではそのおおよその梗概を記すにとどめおく。

「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」は、姦通を犯し、磔という形で夫からの折檻を受けながらも、なおも間男の切断された腐首に異様な執着を示す女の話である。

この「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」の類話であると推察がなされる話は、先学によって指摘がされており、『宿直草』（『御伽物語』）巻二ノ五「三人しなド、勇ある事」、『諸国百物語』巻二ノ五「六端の源七ま男せし女をたすけたる事」、『万世百物語』巻一「独身の羽黒詣」が、それに該当する（6）。

物語展開における幾つかの類似点こそ見受けられはするものの、主題を異にするこれらの作品群については、後の章段でまとめて詳述する。

ついで寛文元年（一六六一）に刊行された、片仮名本『因果物語』に収録されている、斬首する・首を持ち去る話について、考察を加えてゆく。

「第四章 「後妻うち」の系譜」にても述べたように、先学からその後続の文芸作品への影響、唱導性、ならびにその語り口や筆法（7）についての高い評価がなされている、片仮名本『因果物語』の当該話は、以下の四話である。

「第四章 「後妻うち」の系譜」において少しく言及した、中巻三十五「幽霊、刀ヲ借テ人ヲ切事」は、浄土寺の長老の前妻の幽霊が、施主に脇

差を借りて後妻の首を切り落とす話である。「其方故ニ。日比ノ遺恨トゲタリ」という前妻の台詞からは、彼女の後妻に対する、常日頃の怨念がうかがわれよう。

そして、前妻の幽霊による後妻への殺害といった設定といい、その根底に見られる前妻の怨嗟といい、「幽霊、刀ヲ借テ人ヲ切事」における首を切るという行為は、「後妻うち」（8）がその目的であると言っているといえよう。

ついで、「第四章 「後妻うち」の系譜」にて少しく概略のみを取り上げた、上巻五「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ卷事」

ノ一の読解を進めてゆく。

以下にそのあらすじを紹介する。――越後国大沼郡の代官・吉田作兵衛は、信濃善光寺の人間であつて、妻子をそこに置いていた。だがある時、本妻の召し使っていた下女が出奔した。これは作兵衛が、件の女を大沼に呼び寄せたが為であった。これを知った本妻は狂乱の体に陥り、その恨みが高じて重病となった。今わの時に本妻は、手代の武兵衛に、大沼の妾を殺害し、自らの命があるうちに、それを一目見せてくれと頼む。本妻の依頼を果たした武兵衛が妾の首を取り、本妻に事情を話したところ、本妻は

喜色を露わにした後、件の首に食いつき、その髪の毛を引きかなぐる。その姿を浅ましいと感じた武兵衛は、首を奪い取り捨てて、宿所へと帰る。その後、本妻は氣力が衰え、遂に死んでしまう。しかしながら本妻の妄念は大沼へと向かい、作兵衛の首を執拗に絞めるといふ行動に出る。作兵衛は本妻の怨念を鎮めるべく、様々な弔いをし、祈りをもしたがその験はなかった。寝所をあちこちに変えてみたものの、結局本妻の亡霊は、作兵衛より先にそこに行き、出現するという有様であった。作兵衛はやがて病みついて死ぬが、その子どもは未だ、越前にいるということだ。

本編においては、
願ハ、大沼ノ手掛ヲ殺シテ。首ヲ持来。自ラ存命ノ内ニ。一目見セ

テ給ヘカシ。

という言葉に見るように、妾に直接手を下したのは本妻ではなく、彼女の意向を受けた、手代という生身の人間である。

こうした事柄を考慮に入れると、「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一は、本稿における「後妻うち」(9)の定義からは外れる作品となってしまう。

しかしながら、自らが妾殺害という行為に及んでいないにせよ、手代にそれを依頼したということは、本妻は「妾の抹殺・排除」という意図を有してはいたのである。

そして妾の首を手にした本妻は、
彼首ヲ引寄、氣色替、其儘喰付。髪ノ毛ヲ拽カナクル有サマ。中々。

怖布軀也。

という、高田衛氏をして「嫉妬に狂った本妻のケタはずれの狂態と残忍さは、まさに妄執の鬼の行為」と言わしめた(10)凄惨な姿を晒す。この本妻の狂気と紙一重の醜態は、堤邦彦氏言うところの「一人の心の罪障性を戒める」(11)効果を、充分に有していると言えよう。

また、こうした描写からは、妾の首に対する、本妻の異様な執着——妾への怒り、嫉妬に起因するものなのであるうが——が見受けられるのだ。妾の首を、につくき妾その人と同一視している感もうかがわれる。

本妻の異様な行動を見かねた手代は、
夫ハ余ニ浅マシキ。御事也、ト、云テ。首ヲ奪取捨テ、宿処へ皈ヌ。

と、妾の首を奪い、それを捨ててしまう。その結果、本妻は「其後、女房氣色。

次第ニ衰へ。終ニ死ス。」という運命を辿っており、憎しみの根源である

笥の妾の首を奪われると同時に、生きる気力もまた喪失してしまったことがうかがわれる。ここでもまた、夫の愛を奪った妾の首に対する、異様な執着が表出されていると言えよう。

ここで少しく、「第四章 「後妻うち」の系譜」にて取り上げた、『曾呂利物語』巻四ノ七「女の妄念怖ろしき事」について言及をする。

本編は、本妻の亡霊が妾の首をねじ切って殺害し、だがその後も彼女の怨念は妾の子二人にまで及び、その死を目の当たりにした夫もまた、悲嘆のあまり死んでしまうという凄惨な話である。

そしてこの「女の妄念怖ろしき事」には、以下のような描写が見受けられる。

片時も過ぎざるに、妾の所へ忍び、首をねぢ切り、消すが如くに失せ

ぬ。さて力およばず、妾の葬礼を致しけり。其の時件の首を手提げ、

橋のありける所に立ちてゐたり。

宮田登氏はこの場面を「離れた女の首と胴体が接近して一体になろうとするのだから、女の幽霊が両者を離してしまふことを意図しているのである。」(12)と評している。

すなわち、「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一において、手代をして妾の首を取らしめ、それに食らい付くという狂態を晒した本妻は、妾の首がその胴体と一体になることを阻害しているとも言えよう。

さらに前述の宮田氏は、近世初期には「女の首の霊的な力が怪異を起こすという民俗信仰があった」由を述べてもいる(13)。

こうした事柄を考慮に入れると、「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一の本妻は、妾の首と胴体とが再び一体になることを妨害しているのみならず、首を略奪すること、そこに宿る「女の霊的な力」をも、奪おうとしたと考えられるのである。

なお、「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一には——「第四章 「後妻うち」の系譜」にても少しく言及したように——本妻の手代に対する「我等頃、如何斗力。嗔恚ヲ燃。」という台詞が見受けられる。

この台詞は前述した、「幽霊、刀ヲ借テ人ヲ切事」における前妻の亡霊の、「其方故ニ。日比ノ遺恨トゲタリ」という台詞に、類似したものであると言えよう。

そして、「第四章 「後妻うち」の系譜」にても少しく取り上げた、上

卷六「妬深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ二において

もまた、本妻の亡霊が下女の首を引き抜くという凄惨な行為に対し、「日比

妬シ念力ノ作処也。」といった表現がなされている。

このように、これら三話においては、夫の情愛を奪われた女性の、後妻もしくは愛妾に対する激しい怒りや恨みが見受けられ、かつその怨念に「日比」「頃」という形容が冠せられているのである。

以上の事柄から、「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一は、厳密な意味での「後妻うち」の物語ではないにせよ、その色彩が濃厚な作品と言うことが出来るのである。

ついで、前述の「妬深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」

ノ二を例に挙げる。「第四章「後妻うち」の系譜」にても言及した本編は、女の遺骸が下女の首を引き抜き、その首に食らい付いていたのだが、それは「日比妬シ念力ノ作処」であったという、なんとも酸鼻な話である。

そして「第四章「後妻うち」の系譜」において考察を加えたように(14)、本編もまた、「後妻うち」をその主題とした話である。それ故、女の遺骸が下女の首を引き抜いたという行為には、「後妻うち」という意図が込められていると推察されるのである。

そして下女の首に食らい付くという、遺骸の異様な執念からは、前述の宮田氏言う所の「離れた女の首と胴体が接近して一体になるうとする」のを阻害する、そして「女の首の霊的な力」(15)を奪おうとする意図もまた、うかがわれるのである。

続く、片仮名本『因果物語』における、斬首する・首を持ち去る話は、

中巻七「鳩来、御剣ヲ守居事付神前ノ刀ニテ、化物ヲ切事」ノ二であり、前述の三話とは少しく趣を異にする。――下野国・蜷川生まれの香丸清兵衛は、十歳の頃、その伯母に下女一人と共に預け置かれる。しかしながらこの下女は、伯母の気に入る人間ではなく、たびたび奉公先を逃げ出していたのだが、やがて行方知れずになり、結局は庭の隅の長持の下で「化者」

となっていた。そんな彼女を、周囲は嫌悪し、「八幡」に籠めてあった刀で

切り、首を落として殺す。だがその結果、件の「化者」は「霊」となって人々を取り殺したというのが、「鳩来、御剣ヲ守居事付神前ノ刀ニテ、化物ヲ切事」ノ二のおおよそのあらすじである。

ここでは首を切るといふ行為が、刀の靈威をかり、「化者」を退治するという目的に基づいたものであると言えよう。
そして本編における、

・彼女、伯母ノ氣ニ違テ。父ノ方へ皈。教訓シテ、亦伯母ノ方へ。返ス
事、四五度也。其後、亦走り出テ、行末ナシ。

・庭ノ角ニ、長持アリ。(中略)長持ヲ取逃見バ。彼下女、板ノ様ニ成テ居タリ。

・扱モ悪ヤツカナ、ト、云テ、切ニキレズ。

・加様ノ化者ヲバ。神社エ籠タル。刀ニテ切、ト、云人アリ。

といった描写からは、件の下女が素行も悪辣であり、それ故に異様な外貌を有した存在と化してしまったという、否定的な設定が見受けられるのである。

しかしながら、生きながら「化者」となった素行不良の下女であり、それ故に「八幡」といふ聖域に納められている刀で成敗されるという最期を迎えつつも、その死後彼女は「靈」となり、周囲を取り殺している。

すなわち、本編における「化者」の成敗は表面的なものに過ぎず、怪異の人間に対する最終的な優位性が、ここでは表出されているのである。

以上の事柄より、片仮名本『因果物語』における、斬首する・首を持ち去る話からは、

①「後妻うち」の色彩が濃厚な話の所収比率が高い。

②斬首する・首を持ち去るといふ行為の主体が幽霊である話が半数を占めており、そうした行為は幽霊が生前に抱いていた怨嗟の発露であり、凄惨な結末である。

といった特質がうかがわれるのである。

さらには、これらの章群に見る、憎い相手を斬首する、ないしはその首を持ち去るといふ行為を働いた人間の残酷さ、醜悪さは「人の心の罪障性を戒める」(16)といった片仮名本『因果物語』の特質を、おのずと強調する効果を上げていると言えよう。

ついで平仮名本『因果物語』における、斬首する・首を持ち去る話について、考察を加えてゆく。

先学からその文芸性や物語性、娯楽性、ならびに後続の文芸に対する影響に高評価を賦与されている(17)平仮名本『因果物語』。そこに収録されている第一の、斬首する・首を持ち去る話は、巻一ノ八「妾を妬て、夫に

怨をなしける、女房の事」であり、本編は前述した上巻五「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一と、内容が一致する話である（18）。

そして本編には、「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一同様、本妻の妾に対する異様な嗔恚、それに起因すると目される、妾の首への異様な執着が描かれているのである。

また、妾の首に齧り付くという本妻の異常な行動の根底には、「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一の項において述べたように、妾の首と胴体とが再度一体になることを妨害しようとする、本妻の意図をも内包していると考えられるのである（19）。

さらに前述の高田氏は、片仮名本『因果物語』上巻五「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ二、三に見る、女性の蛇身化を引き合いに出し、上巻五「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一に見る「深夜に男の首をしめ、あるいは男がどこへ逃げて先まわりしてその場に出現するという執念ぶかき」は、前述の二話の「蛇女に共通する」ものがあると述べている（20）。

そしてこの「蛇女」さながらの執念は、「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一と内容が一致するとされる、「妾を妬て、夫に怨をなしける、女房の事」に共通するところのものであると考えられるのである。

また高田氏は、「妾を妬て、夫に怨をなしける、女房の事」の挿絵に着目し「じだんだを踏みながら女の生首にかぶりつく、上級武士の妻と思われる女性が描かれている。思いなしか女性の髪も、生首の女の髪も、蛇のようなのたうっているかのようだ。」（21）と指摘してもいる。

以上の事柄から、「妾を妬て、夫に怨をなしける、女房の事」における本妻の背後には「蛇」の面影が濃厚であり、髪を蛇さながらにふり乱したその本妻が、死してなお、それに負けじと髪を蛇のようにならうと回らせた妾の首に食い付くという構図は、「蛇女」の呪力を背景にした、力と力のぶつかり合いであると言いうことが出来る。

そしてその背後には、前述の宮田氏言うところの「女の首の霊的な力」（22）を奪おうとする、本妻のさらなる意図も、見え隠れするのである。

すなわち「妾を妬て、夫に怨をなしける、女房の事」は、典拠とする「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一に見る、広義の意味での「後妻うち」の構図を忠実に踏襲しつつも、そこに「蛇女」の呪力を絡めるといふ、より怪異性のいや増した物語であると言いうことが出来る。

続いての、斬首する・首を持ち去る話である、巻四ノ一「恋ゆへころされて、其女につきける事」、巻六ノ四「非分にころされて、怨をなしける事」

二話は、これまでに述べてきた話と、少しく趣の違う章群である。

「恋ゆへころされて、其女につきける事」は、伊勢の国のかとりという所に住まう牢人・浅原七右衛門の下人が、主君である七右衛門の娘に恋心を抱いたが故に、そして、「非分にころされて、怨をなしける事」は、主君である伊駒讃岐守に冷遇され、無奉公になった山口彦十郎という侍が、その行為故に女房子どもともに斬首の憂き目に遭うという話である。

しかしながら、

その夜より、かのむすめの目に、猪之介がばうれい、あらハれみえて、おそろしき事かぎりなし（中略）此ゆへに、娘もわづらひつきて、いくほとなく、むなしくなりけり

「恋ゆへころされて、其女につきける事」

・其後は、あれ／＼、彦十郎よ、我は、殿とのの仰せによりてこそ、打たれ、ゆるし給へ／＼、と、いふて、手をあはせ、あがきて、七日といふに、死しにけり

・そのうち、彦十郎がばうれい、（中略）家中かちうの傍輩はうばいの目に、ミゆる事、たび／＼也、これに行あふ人ハ、そのまゝ、ふるひつき、わづらひ出してほどなく、死するもの十四五人に及べり

・讃岐守も、よこしまなる心出来て、いくほどなく、身上はてけり、山口がばうこんのうらみなり、と、諸人申合けり

「非分にころされて、怨をなしける事」という本編の描写からもうかがわれるように、主君から不当な「罰」としての斬首を言い渡された者は亡霊と化し、己を死に追いやった者たちに、報復を果たしているのである。

すなわち、これら二話における、斬首という行為は、身分が上の者が下位の者に加える「罰」としての色彩が強く、同時に亡霊の怨嗟を発動させる契機となっているという特質を有していると言えよう。

また卷二ノ十七「仏法を、あしくすゝめて、罰ばちあたりし事」は、濃州八屋に住まう、関山派の「邪見放逸じやけんほういつ」な長老の遺骸を火車が棄損し、その手、足、そして首を引き千切り、木の枝にかけおくという話である。邪な人間に対し、異界の存在が「罰」を与えたという設定がうかがわれる。

以上の事柄から、平仮名本『因果物語』における、斬首や首を持ち去る話は、

- ① 「罰」という意味合いが込められた話の所収比率が高い。
- ② 斬首する・首を持ち去るという行為の主体が、人間である話が多い。
- ③ 人間から課せられた「罰」は不当なものが多く、怨霊の発動する契機とな

っている。

④ 怪異の人間に対する優位性が描かれている。

といった特質を有していることがうかがえる。

しかしながら、これらの章群に見る、斬首する・その首を持ち去るという行為の目的は、身分が上の者から下の者、ないしは立場が優位にあるものから劣位の者に対する「罰」というパターンが目立ち、そのバリエーションはさして多くはない。

以上の事柄から、前述のように、先学からその文芸意識について高評価を賦与されてきた(23)平仮名本『因果物語』ではあるが、斬首する・首を持ち去る話においては、その文芸性が遺憾なく発揮されているとは言い難いという結論が、導き出されるのである。

ついで、寛文三年(一六六三)に刊行された『曾呂利物語』に収録されている、斬首する・首を持ち去る話の読解を進めてゆく。

「第四章 「後妻うち」の系譜」でも言及したように、先学から近世怪異小説中に占める大きな役割、ならびにその娯楽性(24)についての指摘がなされてきた『曾呂利物語』における、斬首する・首を持ち去る話の第一の事例は、巻一ノ一「板垣の三郎高名の事」である。

そして本編もまた、前述の「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」見たような、異界の存在による「罰」を扱った話なのである。

なお、本編に関しては「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」において言及を加えた為、ここではおおよその概略と考察を加えるに留めておく。――主命を受け、魔所として名高い社に出向いた「隠れなき

勇者」の板垣三郎は、件の社にて「へぎ一枚」を踏み破ったため、変化の物の怒りを買ひ、首をとられて落命してしまうというのが、巻一ノ一「板垣の三郎高名の事」のあらすじである。

太刀川清氏は本編について、「すなわち板垣の非業の最期はこのへぎ板一枚(これは多分神慮にかかわるものであったであろうが)を傲慢にも踏み割ったその報いによるものである。」と述べている(25)。

すなわち、「板垣の三郎高名の事」が、己の武勇を頼むあまり慢心し、異界の存在に敬意を払うことを忘れた人間が、怪異からの「罰」として、首をとられる話である様うかがわれよう。

本編はまた『諸国百物語』巻一ノ一「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」の典拠となっており(26)、このことについては『諸国百物語』の項で、再度言及する。

そして、続いで斬首する・首を持ち去る話、巻三ノ二「離魂と云ふ病

ひの事」もまた、『諸国百物語』巻一ノ十一「出羽の国杉山兵部が妻かげの

煩の事」の典拠となっている話である（27）。

ある夜、出羽国の何某の女房が二人に増えた。両者は姿形がそっくりであり、二人を別々の所に分けて色々の詮索をしたけれども、誰にもどちらが本物であるか区別がつかない。そこへある者が「一人の体に疑わしい所がある」と言ったので、人々はその女房の首を刎ねたが、疑いようもなく人間であった。そこでもう一人の女房の首を刎ねたところ、これもまた同じ人間であった。遺骸を数日置いていたが、別に変わった様子も見られなかった。ある人はこれを評して「離魂という病だ」と言ったというのが、本編のおおよそのあらすじである。

首を切るという行為が人間によってであり、かつその目的が「変化の物」退治という設定からは、前述した「鳩来、御剣ヲ守居事付神前ノ刀ニテ、化物ヲ切事」ノ二に通底する側面がうかがわれよう。

なお、「鳩来、御剣ヲ守居事付神前ノ刀ニテ、化物ヲ切事」ノ二では「化者」の首を落としたものの、その霊が人々を取り殺したという結果になっているが、巻三ノ二「離魂と云ふ病ひの事」もこの話と同様、「変化の物」と判じた妻の首を打ち落としてはいるものの、果たしてどちらの妻が本物であったかは、最後までわからずに終わっている。

人間が異界の存在を退治しようとする試みは失敗に終わるといふ傾向、ひいては怪異の人間に対する優位性を強調するといふ傾向が、これら二話には共通していると言えよう。

また『曾呂利物語』巻三ノ四「色好みなる男見ぬ恋に手を執る事」は、瞽女を妻にすると誓い、一夜を共にしながら、結局はその醜貌を嫌って逃げ出し、挙句は馬方に頼んで件の女を殺害させた商人を、瞽女の亡霊が「彼の男其の身寸々に裂けて、首は見えずなりにけり。」という凄惨な骸にしてしまう話である。この話における、斬首する・首を持ち去るといふ行為には、復讐という意図が込められていると言えよう。

続いての作品、巻四ノ七「女の妄念怖ろしき事」も、「第四章 「後妻うち」の系譜」や、本章の「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」ノ一の項で前述したように、女性の執念の恐ろしさ、凄惨さを扱った話である。そして、「女の妄念怖ろしき事」における、本妻が妾の首を持ち去るといふ行為には、「後妻うち」といふ意図のみならず、本妻が「女の首の霊的な力」を我が物とし、かつ「離れた女の首と胴体が接

近して一体になろうとする」のを「離してしまおう」(28)意図が込められていることを、ここで再確認しておく。

巻五ノ五「因果懺悔の事」は、旅の僧侶が、宿をかりた家の妻の密夫に殺されかかり、その首を打ち落とすとという話である。この話における、斬首するという行為には、正当防衛の色彩が濃厚であると言えよう。

以上の事柄から、『曾呂利物語』における、斬首する・首を持ち去るという話には、

- ① 斬首する・首を持ち去るという行為の主体は、妖怪ないしは幽霊といった「異界の存在」が中心である。
- ② 「異界の存在」による、斬首する・首を持ち去るという行為は、人間の傲慢さ、ないしは不実さへの「罰」及び復讐であり、残酷な結末である。
- ③ 怪異の人間に対する優位性が描かれている。

といった特質が見受けられるのである。

そして、これらの章群に見る、斬首する・その首を持ち去るという行為の意図は、怪異からの罰であったり復讐であったり「後妻うち」であったり、ないしは人間の手による「化け物」退治であったり、正当防衛であったりと、かなりのバリエーションに富んでいる。前述の平仮名本『因果物語』における、斬首する・その首を持ち去るという行為の意図が、「罰」というパターン一辺倒であったのとは、おおよそ対照的である。

以上の事柄から、『曾呂利物語』における、斬首する・首を持ち去る話からは、『曾呂利物語』の特質の一つである娯楽性(29)を継承している様が見受けられるのである。

ついで、寛文六年(一六六六)に刊行された『伽婢子』における、斬首する・首を持ち去る話について、考察を加えてゆく。

『伽婢子』には、先学から「和歌、和文脈、或いは狂歌、神仙、軍事、医学など、和・漢・仏をはじめ、諸々の思想や学問が組み込まれているのである。」(30)、「浅井了意は翻案する時に、その背景となるべき時代、場所の選択にかなり注意を払っている」(31)、「物語文学の伝統である浪漫的精神によつて、原話は日本的に換骨奪胎せられ」ている(32)などと、そこに組み込まれた種々の思想・知識、そして翻案手法に関して、高い評価が賦与されている。

しかしながらこのような評価にも拘らず、『伽婢子』における、斬首する・首を持ち去るという行為の目的は、それほど多様なものではない。

巻六ノ六「死^{しする}難^{なんにせんてう}先兆」は、主君・細川右京大夫勝元の罪科を押し付け

られた家人・磯谷甚七が斬首される話であり、巻十ノ三「祈^{いのり}て幽霊^{ゆうれい}に契^{ちぎ}る」は主君・上杉憲政の娘・弥子に恋心を抱き「文ひとつまひらせ」た家人・白石半内が、その行為ゆえに「ひそかにくびをはねられ」という話であ

る。

すなわち、これら二話においては共に、主君が家臣に「罰」として斬首を課す様が描かれているのである。

また巻八ノ二「邪神を責殺」じやしん せめころすは、鹿島明神が配下の神に云いつけ、災いをなす大蛇を討ちとらせ、その首を持って来させる話である。

以上の事柄から、『伽婢子』における、斬首する・首を持ち去るといふ話には、

①「罰」としての色彩が濃厚な作品が多く所収されている。

②斬首する・首を持ち去るといふ行為の主体が、人間である話が多い。

といった特質が見受けられる。

また、これらの章群に見る、斬首する・その首を持ち去るといふ行為の目的は、身分が上の者から下の者、ないしは立場が優位にあるものから劣位の者に対する「罰」といふ展開が目立つ。

こうした傾向は、編著者が同じである由を先学から指摘されている（33）平坂名本『因果物語』の手法の踏襲であると見受けられる。

また、『伽婢子』における、斬首する・首を持ち去る話は、目的のバリエーションこそ少ないものの、『伽婢子』の特質の一つである「勸懲・因果応報の理」（34）は、その魅力を生かしていると言えよう。

ついで、延宝五年（一六七七）に版行された『宿直草』（『御伽物語』）における、斬首する・首を持ち去る話を取り上げる。

「第四章 「後妻うち」の系譜」、第五章 「執心」譚の系譜」において言及したように、その高度な文芸性（35）、ならびに脱唱導的色彩（36）についての言及が先学からなされている、『宿直草』（『御伽物語』）。

その中の第一の当該話は、前述した「因果懺悔の事」後半との類似性が指摘される（37）巻一ノ二「七命ほろびしむんぐはの事」である。――

――旅の僧侶が狩人の家に宿をかりたところ、その妻の密夫が狩人を殺し、僧侶にその死骸を埋める穴を掘らせ、そして僧侶を殺そうとするのだが、それと察した僧侶が密夫の首を打ち落とすというのが、本編のおおよそのあらすじである。

典拠たる「因果懺悔の事」同様、本編もまた、斬首といふ行為には、正当防衛の色彩が濃厚であると言えよう。

続く巻二ノ五「三人しなド、勇ある事」は前述の『奇異雑談集』（写本）上巻ノ四「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」との類似性が指摘される話である（38）。

妻が間男をしたことを知った夫が、間男を殺し、宮の拝殿の天井に縛めた妻にその首を抱かせる。妻は肝試しにやってきた男たちに助け出されるものの、そうして親里に帰るさ、拝殿に間男の生首を忘れて来たことに気

付き、男にそれをとってきてもらおうというのが、おおよそのあらすじである。

不義密通の仕置き^にの為、夫に縛められた女が、それでもなお間男の首に執着を抱くという設定は「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」に共通していると言えよう。

続いての話は、巻五ノ三「仁光坊にくはうぼうといふ火の事」である。美男の僧侶に道ならぬ恋情を抱いた人妻が、その思いをはねつけられた腹いせに、僧侶が己に艶書を送ってきたとの偽りを夫に申し伝える。怒った夫は僧侶を斬首するというのが、おおよそのあらすじである。

以上の事柄から、『宿直草』(『御伽物語』)における、斬首する・首を持ち去るといふ話には、

① 斬首する・首を持ち去るといふ行為の主体が人間である。

② 女性が不倫な恋情を抱くという描写、女一人をめぐって男同士が対立するという構図が、三話に通底している。

といった特質が見受けられるのである。

また、『宿直草』(『御伽物語』)中の、斬首する・首を持ち去るといふ行為の理由は、「七命ほろびしゐんぐはの事」では正当防衛、「三人しなぐゝ勇ある事」では間男への愛執、「仁光坊といふ火の事」では、不倫な恋心を抱いたという濡れ衣を着せられた僧侶への「罰」となっており、そのバリエーションもまた、作品中における対人関係に劣らず、物語的情趣に富んだものとなっている。『宿直草』(『御伽物語』)の特質の一つである、「奇異なるものを見つめる感覚が、ありきたりな怪談の域を超えていると同時に、そこに新たな表現の工夫が加味され、独特の世界を持つことができた例」(39)の発露と言えよう。

以上の事柄から、『諸国百物語』以前の近世怪異小説における、斬首する・首を持ち去るといふ描写の含まれた物語は、その行為の主体が人間であるか、幽霊や妖怪といった「異界の存在」であるか。また、そうした行為が、怨嗟や処罰意識の発露といった結末であるのか、ないしはそのような行為が「異界の存在」が活動を始める契機となっているのかという視点からの大別が可能であるといった、特徴を備えていること。

そして、片仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』においては「異界の存在」が斬首する・首を持ち去るといふ行為の主体であり、そうした行為が話の結末になっているという傾向が見受けられること。

また、平仮名本『因果物語』、『宿直草』(『御伽物語』)、『奇異雑談集』(写本)、『伽婢子』では、斬首する・首を持ち去るといふ行為の主体が人間であることが多く、とりわけ先の二作品ではそうした行為が怪異の発動の契機になっているという傾向が、見受けられるのである。

(一) 怪異からの「罰」

『諸国百物語』以前の近世怪異小説における、斬首する・首を持ち去るという行為に込められた意図は、『奇異雑談集』(写本)においては間男への執心。片仮名本『因果物語』においては「後妻うち」。平仮名本『因果物語』、『伽婢子』においては人間の人間に対する「罰」といった傾向を有している様。

『曾呂利物語』においては、幽霊や妖怪といった「異界の存在」による、斬首する・首を持ち去るといった行為が目立ち、それらは人間の傲慢さ、ないしは不実さへの「罰」及び復讐といった色彩が濃厚である様。『宿直草』(『御伽物語』)においては首を切断して殺害する・首を持ち去るという描写の登場する話の根底に、不倫な恋情を抱いた女性一人をめぐって男二人が対立するという構図が見られる様。

さらには片仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』においては幽霊や妖怪が、斬首する・首を持ち去るといった行為の主体であり、そうした行為が話の結末になっている傾向が見受けられる様。

対する、平仮名本『因果物語』、『宿直草』(『御伽物語』)、『伽婢子』では、斬首する・首を持ち去るといった行為の主体が人間であることが多く、とりわけ先の二作品ではそうした行為が怪異の発動の契機になっているという傾向が見受けられることが、明らかとなった。

本章段ではこれらの事柄をふまえ、【表3】に巻次・章題・概略を掲載した、『諸国百物語』における斬首する・首を持ち去るといふ描写の登場する話をとりあげ、その根底にある意図に考察を加えてゆきたい。

初めに『諸国百物語』巻一ノ一「駿河するがの国板垣いたがきの三郎へんげの物に命をとられし事」を取り上げる。なお、本編については「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」において、典拠たる『曾呂利物語』巻一ノ一「板垣の三郎高名の事」(40)との比較を通じ、怪異と人との関連性に考察を加えるという観点から読解を進め、ならびにあらすじも掲載してきた。

本章段ではそこで、「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」のおおよその概略、ならびに斬首する・首を持ち去るといふ観点から、再度考察を加えてゆきたい。

主君・儀本の命を受け、「ぶゆうのほまれある人」で「大かうの人」でもある家臣・板垣の三郎が、魔所として名高い浅間の社に出向いたところ、其処で一つ目の鬼と遭遇する。その場は事なきを得たものの、結局三郎は「へんげの物」たちからの報復を逃れ得ず、首だけを縁の上に落とされるという無残な最期を迎える――というのが、本編のおおよその概略である。

また、「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」は、主人公が魔所に肝試しに出かけ、そこで怪異に遭遇し、最終的に妖怪たちから首をとられてしまうという、典拠たる「板垣の三郎高名の事」の、おおまかな構図を踏襲している。

それゆえ「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」も、怪異がその領域に踏み込み、それに挑んだ人間に「罰」として首をとる話であると解釈されるのである。

続く巻二ノ十八「小笠原殿家に大坊主ばけ物の事」もまた、怪異が己に挑んだ人間に対し、「罰」を与える話である。

慶長年中、小笠原の何某の内儀が、四十四、五歳の折に疱瘡にかかった。事は重大であるので、小笠原殿たちは病間の隣の間控え、薬の相談などをしてきたのだが、その時女房たちが病間から、怖ろしいことがある、と言つて駆け出して来た。小笠原殿が様子を見ると、屏風の上から「まつくろなる大ぼうず」が内儀を見て笑っていた。小笠原殿が抜刀して切りはらつたところ、その姿は消えた。翌日の夜も、件の坊主は屏風の上から顔を出した。小笠原殿が坊主を叱責すると、坊主は内儀を引つつかみ、天井を蹴破つて虚空に上がるうとした。伺候していた侍たちが内儀にとりつき引き止めようとしたが、坊主は内儀を引き上げようとする。その勢いで内儀の身体を二つに裂いた坊主は、その首をとって帰つていった。それから一年余りは、家中で様々の「すさまじき事」が出来たというのが、おおよそのあらすじである。

ここで着目したのは「大ぼうず」の行動である。以下に当該箇所を引用する。

「なに物なればかやうにへんげをなしけるぞ」と、しかり給へば、かのぼうず、内儀をひつつかみ天井をけやぶりてあがる所を、(中略)このいきをいにて御内儀をふたつにひきさき、くびをばとつてかへりけると也。

それまでは屏風の上から小笠原殿や内儀を見ているだけであつた「大ぼうず」であるが、小笠原殿がそれを叱つたところ、内儀を引つつかむという暴力的な行動に出、あげく首を持ち去つてしまうのである。

すなわち「小笠原殿家に大坊主ばけ物の事」は、怪異が、己に挑みかかった人間に対し、「罰」を与える意図を込めて首を引き抜く話であると言えよう。

続く巻三ノ二十「賭づくをして我が子の首を切られし事」も、怪異を恐れぬ人間に、「罰」が下る話である。しかしながら本編は、前述の二話と少しく趣を異にする。

紀州のある里で侍五、六人が集まり、話をしていた。そのついでに、里

から半みちばかり行つたところに宮があり、その前に川がある。件の川には折々死人が流れ着くので、今夜この川に行き、死人の指を切り取つて来た者には互いの腰の物をやろう、という賭づくをした。誰も行くという者はなかつたが、その中の「よくふかきをくびやうもの」が名乗り出た。件の侍は家に帰り、女房に先刻の経緯と、「むねふるいてなか／＼ゆかれ」ないことを語つた。女房は自分が指を切つて来ると言い、二歳になる子を背負つて、件の場に出向いた。橋の下に女の死骸があつたので、その指を二本切り取つて懐に入れ、帰路につこうとしたところ、森の中から「足もとをみよ／＼」という声がかつた。恐ろしく思つた女がその通りにすると、「ちいさきつと」に何かが包まれてあり、殊のほか重かつた。女房は、これは神仏が自分を憐れんで授けてくださった福であると思ひ、つとを取つて帰つた。その頃夫は夜着を被つて震えていたのだが、屋根の上から二十人ほどの人間が踏みならすような足音がし、「なにとてなんぢはかけしたる所へゆかぬぞ」と呼ばわつた。そこへ女房が帰り、表の戸を開けたので、夫は「ばけ物」がやってきたのだと、目を回してしまった。女房が言葉をかけると夫は正氣に戻つたので、女房は先刻の指を夫に手渡し、「うれしき事こそあれ」と言いながら、件のつとを開いた。その中には背負つていた子の首が入つていた。女房が泣き叫びながら子を下ろしたところ、死体ばかりがあつた。女房は嘆き悲しんだが、欲深い夫は指を持つてゆき、腰の物を手に入れたというのが、おおよそのあらすじである。

卷三ノ二十「賭づくをして我が子の首を切られし事」に描かれているのは、「かけづく」を履行しようとするあまり、死体の指を切り取るという、異界の存在に対する冒瀆ともいえる振る舞いをした女が、その報いとして「ばけ物」から子の首を取られ、嘆き悲しむ羽目になる姿である。

対する夫は、欲に駆られて「かけづく」に応じたはいが、その臆病さのあまり、自分の代わりに女房に死者の指を切りに行かせる。そして「ばけ物」からは「かけづく」に応じない不実を「なにとてなんぢはかけしたる所へゆかぬぞ」と責められ、そこに女房が帰つて来たのを「ばけ物」と勘違いして卒倒してしまうという有様で、良い所が一つもない。

だがこの夫は、一見怖いもの知らずに見える女房が、「ばけ物」に子の首をとられ「なげきかなし」むという、まだしも人間らしい感情を持ち合わせているのに対し、子どもの惨死を嘆く様子を見せるところか「よくふかきものなれば、かの指ゆびをもちゆきて腰の物を取りける」という行動に出てもいる。

この男は臆病ではあるものの、それ以上に欲深く、「かけづく」に勝つ為に、女房の行為を自分の行為と偽る程に厚顔無恥でもある。子を奪われた悲しみ、怪異がもたらした恐怖も、その心の奥底までは浸透していないかのような人物として設定されているようにうかがわれる。

以上の事柄から本編は、「ばけ物」に子の首をとられるという「罰」を

与えられつつも、それを「罰」として受容していない人間が登場する。すなわち、「罰」が「罰」として成立していない話であるという結論が導き出されるのである。

これらの章群から、『諸国百物語』における、斬首する・首を持ち去るという行為の目的には、
① 怪異を怖れぬ、または怪異に挑んだ人間に対する、怪異からの報復という側面がある。
② 怪異からの「罰」を、「罰」として受容していない人間が登場する話がある。

といった特質が見受けられるのである。

(二) 消えやらぬ「執心」

先の章段では『諸国百物語』における、斬首する・首を持ち去るという行為の中に、怪異に大して恐怖心を抱かない人間、怪異に挑んだ人間に対する「罰」という意図が込められている話を扱ってきた。そして其処には、首を持ち去られる「罰」が「罰」として成立していないという傾向が見受けられることも、明らかとなった。

本章段ではそこで『諸国百物語』における、恋人の首に対する執心が主題となっている話である、巻二ノ五「六端ろくたんの源七げんしちま男をとこせし女をんなをたすけたる事」ならびに、近世怪異小説に見る本編の類話を取り上げ、これらの作品群の比較を通じて、斬首する・首を持ち去るという行為の奥に込められた意図に、さらなる考察を加えてゆきたい。

六端の源七という博打うちが、東国に下る際、森の中の宮で夜明かしをしようとした。その夜半過ぎ、年の頃三十ばかりの、大脇差を差した男がやって来て、拝殿の二階に上がった。源七が様子をうかがっていたところ、二階から女の叫び声がし、ややあって男はもと来た道を引き返して行った。源七が二階に上がったところ、二十歳ほどの美しい女が縛られ、身を傷つけられていた。女は、自分は間男をし、その科ゆえに夫に縛られて夜毎に身を苛まれているのだと言い、源七に助けを乞うた。源七は女を背負って拝殿を出たが、途中で女が忘れ物をしたと言ったので、元の場へ引き返した。女は拝殿の下から、渋紙の包みを持って出て来た。源七が女を親許へ送り届けると、喜んだ親は源七を色々もてなした。源七が暇を告げると女が礼を述べ、件の渋紙包みを取り出し、これは間男の首であるので、寺で取り置いてもらいたいと言い、金子三十両を添えて差し出した。源七は女と別れて後、首を川に投げ捨て、金子だけを取って東国へは下らず、都へ上ったという――「六端の源七ま男せし女をたすけたる事」のおおよそのあらすじは、このようなものである。

前述のように、「六端の源七ま男せし女をたすけたる事」はその類話として『奇異雑談集』（写本）上巻ノ四「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」、「宿直草」（『御伽物語』）巻二ノ五「三人しなぐゝ勇ある事」が指摘されている（41）。

そしてこれらの話に共通する要素は、以下の三点である。

①姦通をはたらいた女が、夫にその罪を責められ、宮もしくは堂の天井に、磔にされる。

②女は旅人、もしくは肝試しにやって来た若者によつて助け出され、親里に送り返される。

③女は磔という憂き目にあつてもなお、間男の首に執着している。

しかしながら、このような物語展開上の共通項が見られはするものの、これら三話は主題をそれぞれ異にする。以下に当該箇所を挙げてゆく。

初めに「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」を取り上げる。

此くびをハ、何として、もちきたりつるぞや、袖ソデに入たるにや、さて

ハ、外夫マラトコ一定也、磔ハツケに、かけられ、うきめをみるにも、こりず、外男マラトコ

を、しうしんして、首クビをとりて、きたりたり

あさましき、あくごう、しうしんや、と、かへつて、にくめバ、じひりやく無ムになるものなり

「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」

「首を盗み出すという行為の異常なさまを白日のもとにさらし、歪んだ情愛のかたちにへ女人の悪業・執心」というオースドックスな宗教言語の解釈を与える書きぶり」（42）、「救助の手を差しのべた旅僧の仏縁をも台無しにしかねない愛執に対する批判が結末に書かれ、女の業の深さと執着を戒める内容となっている。」（43）という先学の指摘に見るように、「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」は、唱導的色彩の濃厚な、女人罪障思想を主題とした話であり、本編における首を持ち去るといふ行為は、間男に対する女の異様な情愛を象徴するものであると言えよう。

ついで「三人しなぐゝ勇ある事」を取り上げる。

ああ、この三人みたり、きもふとふして、甲乙かうをっそのけぢめなし。血ちのかかり

てなまぐさきに、三雫しづくまでもとはぬまではいはず、あはてざる事しり

ぬべし。鬼おにかなきかのをんなのこゑに、よぶにまかせて天井じやうへあがる。

又しれものどやいはん。なをなまくびを取に、みちよりひとり帰るも、

大かたの血之助なり。功はとりどなれど、その勇健おなじ天晴破家もの、こぐちにもむけ、さきにもたのままし。

「三人しなぐ、勇ある事」
堤邦彦氏から『奇異雑談集』上巻第四話を模倣したとされる怪異小説の一例として提示され、磔の女を助けた旅人の勇気を主題として描く武辺咄の傾向を示している由を指摘される(44)。そして水野ゆき子氏からは「その行為は「破家者」とされるものの、評価は常に三人の男の「勇健」に与えられ、女の愛執は、物語にグロテスクな風味を付け加え、この評価を引き出すための役割しか持たされていない。」(45)との評価を賦与される、「三人しなぐ、勇ある事」。

以上の事柄から本編においては、「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」を類話としつつも、その物語展開を踏襲するにとどめている様、「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」の主題であった女人罪障思想や唱導思想は影を潜める代わりに、肝試しに出向いた三人の男たちの豪胆さを主題として扱っている様が、うかがわれるのである。

したがって、「三人しなぐ、勇ある事」における、生首を持ち去るという行為は、女の間男に対する執着に起因するものではなく、女に依頼されて「宮の拝殿」へと出向く男の「勇健」に起因するものであると言えよう。

堤氏はまた、「六端の源七ま男せし女をたすけたる事」をも「磔の女を助けた旅人の勇気を主題として描く武辺咄」として位置づけている(46)。しかしながら「六端の源七ま男せし女をたすけたる事」には、「ぶへんゆへにおもひよらぬ金をよこ取りしけるとて」といった、源七の「ぶへん」への言及はあるものの、同時に「源七身の毛もよだちおそろしくて身をちぢめるければ」、「いよ／＼おそろしくて事のやうすをうかゞひみければ」、「源七おそろしく思ひけれども」という、源七が恐怖を感じている描写も散見される。そのため本編が「勇気を主題として描く武辺咄の傾向」を示すという指摘(47)には、些かの疑問を感じる。

他方、堤氏が同じ「武辺咄」として位置づけた(48)、「三人しなぐ、勇ある事」には、このように、間男をした女を助ける男が、恐怖を感じている描写はないのである。

ここで、堤氏が「武辺咄」として挙げている、『諸国百物語』の他作品に触れてみる。巻四ノ一「端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」がそれである

(49)。

弥三郎は「文武二道のさぶらひ」として設定されており、逆女の亡霊に

遭遇した際も「刀をぬきくつろげ、「なに物なるぞ」と恐れる風もなく誰何し、逆女から「ごへんほど心がうなる人はなし。」とその振る舞いを評される人物である。

そして堤氏はこうした弥三郎の人物設定を「このような人物描写は『諸国百物語』の独創とみてよい。」と述べている(50)。

さらに堤氏は、典拠である平仮名本『因果物語』巻二ノ一「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」(51)との比較を通じ、「平仮名本の「いよ／＼おそろしかりけれとも、心を静め、こと葉をかけ」(『仮名草子集成』4)る浪人の臆病さに比すなら、本章の武勇談的側面がより一層うかび上るだろう。」と、「端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」を評している(52)。

このような弥三郎の豪胆さ、浪人の「臆病さ」、そして源七の怯えようを考慮するならば、源七は「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」の浪人同様、「臆病」の形容を冠せられる人物であると考えられる。ひいては「六端の源七ま男せし女をたすけたる事」の「武辺咄」としての側面(53)も、希薄なものになると言えよう。

そして前述のような源七の「臆病」な人物設定、のみならず「ぶへんゆへにおもひよらぬ金をよこ取しけるとて」といった、事件が解決してしまえば、その際に自分が露呈した恐怖心を棚上げし、手柄のみを吹聴するといった有様からは、前述の『諸国百物語』巻三ノ二十「賭づくをして我が子の首を切られし事」に見るような、恐怖を抱く出来事に遭遇し、その当座は恐れ怯えるものの、恐怖感が心底までは浸透しない、臆病である以上にしたたかな人物の造形が、ここでもなされているという結論が導き出されるのである。

『諸国百物語』において、恋人の首への執心が描かれている話は、他にも例がある。「第五章 「執心」譚の系譜」において前述した、巻四ノ五「牡丹堂女のしうしんの事」がそれである。

しかしながら「第五章 「執心」譚の系譜」では本編のあらずじ、類話とされる作品との主題の比較、ならびに「執心」譚という観点からの考察を記した為、本章段においては、斬首する・首を持ち去るといった話といった観点、ならびに類話との間に見受けられる相違点をさらに掘り下げるといった手法によって、本編の読解を進めてゆきたい。

——女の亡霊が契りを交わした男を、三年がかりで取り殺す。そして、件の女の棺の中では、その髑髏が男の首を啜えているというのが、本編のおおよその概略である。

この酸鼻さを特徴とする、「牡丹堂女のしうしんの事」は『剪燈新話』

卷二ノ四「牡丹燈記」の「翻案説話」とされ(54)、さらにその類話とし

ては『奇異雑談集』(写本)下卷ノ十四「牡丹燈記」(55)、ならびに『伽

婢子』卷三ノ三「牡丹燈籠」(56)が指摘されている。

しかしながら前述のように、「牡丹堂女のしうしんの事」、「牡丹燈記」、「牡丹燈籠」はともに、「牡丹燈記」に依っているとはいえ、物語上の設定、展開には幾つかの相違点が見出されるのである。そして、ここではその主たるものを提示してゆく。

第一の大きな相違点は、「牡丹堂女のしうしんの事」において「牡丹堂」と設定されているものについてである。この「牡丹堂」に関する描写を、以下に引用する。

もろこしに牡丹堂と云ふ所あり。人しすればはこにいれ、そのはこのまわりに牡丹の花をかき、かの堂にもち行きてかさねをくと也。

この描写からもうかがわれるように、本編においては「牡丹」は棺の裝飾として用いられ、そのような裝飾が施された棺が安置される堂が「牡丹堂」として設定されているのである。

しかしながら「牡丹燈記」における「双頭ノ牡丹灯」、「牡丹燈記」における「双頭の牡丹灯」、「牡丹燈籠」における「牡丹花の燈籠」といった描写からうかがわれるように、典拠や類話においては「牡丹」は燈籠の裝飾として用いられているのである。「牡丹堂女のしうしんの事」における「牡丹」の用いられ方が、独特のものである様が見受けられよう。

第二の相違点は、「牡丹堂女のしうしんの事」における「男」の死に様である。以下に本編、典拠、類話から当該箇所を引用する。

下人どもふしぎにおもひ、はこどものかさねてあるを見れば、血のつきたるはこあり。このはこうちをみければ、女のしやれかうべ、かのをとこのくびをくわへてあたりけると也。

「牡丹堂女のしうしんの事」
即ち生ガ手ヲ握リテ、柩ノ前ニ至レバ、柩惣チ自ラ開ク。之ヲ擁シテ同ニ入り、隨ヒテ即チ閉ツ。生遂ニ柩中ニ死ヌ。隣翁其ノ歸ラザルヲ怪ミテ、遠近ニ尋問ス。寺中ノ柩ヲ停ルノ室ニ至ルニ及ブ。生力衣ノ裾微シキ柩ノ外ニ露ルヲ見ル。寺僧ニ請テ之ヲ発ク。死シテ已ニ久シ。女ノ屍ト俯仰シテ内ニ臥ス。女ノ貌生ケルカ如シ(訓点は私にほ

どこした)。

「牡丹燈記」

・ 柩のふたの間より、衣キヌの裳モ、すこし出たり、是、喬生キヤウセイが裳モ、よく、みしりたり

・ 寺僧シソウに、つげて、柩ヒツギのふだを、のミを、もつて、あけて、見れば、

喬生キヤウセイ死して、うつぶきて、上にあり、女ハ、あふのきて、下にあり、女のかほバせ、いけるがごとし

「牡丹灯記」

荻原おぎはらが手を取り、門よりおくにつれてゆく。(中略)人みなおどろき行

てみるに、萩原すでに女の墓はかに引こまれ、白骨はくこつとうちかさなりて死してあり。 「牡丹灯籠」

「牡丹燈記」、「牡丹灯籠」では、亡霊に魅入られた男の死体と、女の骸が、棺の中で重なり合っているという描写がなされているのである。

また、「牡丹燈記」、「牡丹灯籠」では、女の骸は生きているかのようであったとの描写があり、女の屍は生前の美しさを保っていたという設定である。

しかしながら、「牡丹堂女のしうしんの事」においては、女の髑髏が男の首を啜えていたという凄惨な設定になっており、男の死体が、生き身の如き美女の骸と抱き合っていたという、前述の典拠・類話に見るような、怖ろしくも美しい描写とは、一線を画しているのである。

さらに、「牡丹燈記」、「牡丹灯籠」においては、男の死体が発見されるきっかけとなったのは、棺の外に衣がはみ出していたからとなっているが、「牡丹堂女のしうしんの事」では、棺に血がついていたからとなっている。「牡丹堂女のしうしんの事」における、このような設定も、結末の残虐さをより一層際立たせる描写であると言っていいたいだろう。

続いての大きな相違点は、「第五章 「執心」譚の系譜」においても言及したように、「牡丹堂女のしうしんの事」の主題が活写されているとも言える、その結末である。

「牡丹燈記」、「牡丹灯籠」、「牡丹灯籠」においては、男が女の亡霊に棺に引き込まれて殺された後も、二人の亡霊は手を携えて彷徨い出、これに出会った者は熱病にかかるといふ災いを引き起こしている。

そして「牡丹燈記」、「牡丹灯籠」において、この事態を恐れた人々は、鉄冠道人に助けを乞う。鉄冠道人は「符吏」を使役して亡霊を捕縛させる。以下にその場面を引用する。

時ヲ移サズシテ枷鎖ヲ以テ女ト生并ニ金蓮ヲ押テ俱ニ到ル。鞭箠揮扑シテ流血淋漓タリ。

「牡丹燈記」

ときをうつさず、枷鎖テガゼサリをもつて、三人ともに、ひいて、きたり

むちをもつて、うつ事ハかりなし、血チながれて、やます

「牡丹燈記」

「牡丹燈記」において、亡霊たちはこの後、鉄冠道人の裁きを受け、符吏によって地獄へ引き立てられていく。「牡丹燈記」では、鉄冠道人の呵責を受けた亡霊たちは、二度と人々に災いをもたらさないことを誓い、姿を消している。

亡霊の脅威が、鉄冠道人によって完膚無きまでに打破されている様うかがわれよう。

また、「牡丹燈籠」の結末は、

萩原が一族ぞくこれをなげきて、一千部の法華經ほけきやうをよみ、一日頓写とんしゃの經きやうを

墓はかにおさめてとふらいしかば、かさねてあらはれ出いずと也。

という「仏教色の強い回向談」(57)になっているのである。

しかしながら、「牡丹堂女のしうしんの事」は「かの女のしうしん三ねんすぎたれどもつゐに男をとりけると也。」という、亡霊の執念の凄まじさを強調する一文で締めくくられており、仏事供養による救いも、道士による裁きも描かれていない。

太刀川清氏は「牡丹堂女のしうしんの事」が「牡丹燈記」の「核心部分だけは採りあげ」ていること、それが「叙述によって強烈な印象を読者に期待するのではなくて、事の事実によってそれを期待」しようという作者の態度のあらわれであることを述べている(58)。

太刀川氏が指摘するように、典拠に見る艶麗な叙述が削除されていることはもとより、仏教や道教によって怪異の恐ろしさが取り除かれる、あるいは打破される描写も除去されている為、「牡丹堂女のしうしんの事」は、その典拠や類話に比し、凄惨さや亡霊の執念の恐ろしさが際立ち、怪異の脅威が優位を保ち続ける結末が成立していると言えよう。

そして最後の相違点は、これらの作品群の題名である。「牡丹燈記」、「牡丹燈籠」、「牡丹堂女のしうしんの事」という各々の題名からうかがわれるように、「牡丹堂女のしうしんの事」のみが作品名に「しうしん」と冠せられている。このことは、本編末尾の「かの女のしうしん三ねんすぎたれどもつゐに男をとりけると也。」という表現とあいまって、話の主題、そして男の首をとるといふ凄惨な行為の意図が、「女のしうしん」であることを、より明確に位置付けていると言えよう。

以上、本章段においては、首を切断して殺害する・首を持ち去ると言う行為の根底に、男の首への執心が存在する女たちの話を取り上げてきた。結果、いずれの話も類話、ないしは出典と思しき話が存在するものの、人物造形や主題、設定において、『諸国百物語』独特の工夫が見られるということが明らかになったのである。

(三)。「後妻うち」の為に

先の章段では『諸国百物語』において、男に執心を抱くが故に、斬首する・首を持ち去る女たちの登場する話を取り上げてきた。

結果、各々の作品も、類話ないしは出典と見られる話を有してこそいるものの、人物造形や主題、あるいはその設定において、典拠や類話には見受けられない改変がなされていることが判明した。

こうした事柄をふまえつつ、本章段では『諸国百物語』における、斬首する・首を持ち去ると言う行為の目的が「後妻うち」であるものを取り上げ――「後妻うち」という行為、ならびにその「ルール」(59)の破綻という観点から読解を進めた「第四章 「後妻うち」の系譜」とは異なり――その奥にある意図について、考察を加えてゆきたい。

初めに、巻一ノ八「後妻^{うはなり}うちの事付タリ法花^{ほけきやう}経の功力^{くりき}」を取り上げる。

――武蔵の国・秩父の大山半之丞は、妻を亡くしたため後妻を迎えた。ところが半之丞は前妻の亡霊におびやかされ、旅僧からは命が危ないことを告げられる。件の旅僧の助けで前妻の祟りから逃れることが出来た半之丞ではあるが、前妻の生前から彼女を「てうぶく」していた後妻は、亡霊に殺され、その首をとられたというのが、その概略である。

前述した『曾呂利物語』巻四ノ七「女の妄念怖ろしき事」に見たように、後妻の首を「ひつさげ」た亡霊の姿は、読者に強烈な恐怖の印象を与える効果をあげているのみならず、宮田登氏言うところの「離れた女の首と胴体が接近して一体になろうとする」ことを阻害する意図、そして「怪異を起こす」と信じられてきた「女の霊的な力」を奪うという意図(60)をも、そこに内在させていると言えよう。

そしてこの後妻が、生前から前妻を「てうぶく」していたという設定は、二人の女の「霊的な力」(61)の戦いに、一層の拍車をかけていると考えられるのである。

さらに、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」に見る、前妻の亡霊が「しばらくありて後の妻^{のち}のくびをひつさげかへりて」から、「年月のほんもうをとげたり。われ生世^{いきよ}のうちより、此女われをてうぶくせしゆへに、われしゝ

てもほむらのたへがたかりしに、今かくいのちをとりたる事のうれしや」との言葉を吐く場面からは、後妻の首をとることが「いのちをとりたる事」の、ひいては「年月」に渡る執念が成就したことの証左であると位置づけられているように、うかがわれるのである。

続いての話は、巻二ノ九「豊後の国何がしの女によばう死骸しがいを漆うるしにて塗りたる事」である。――豊後の国に仲の良い夫婦がおり、夫は妻が自分に先立ったならば、再縁はしないことを口にしていた。やがて妻は病死してしまいが、臨終の際に「遺骸を漆で塗り固め、鉦鼓を持たせて持仏堂に安置し、朝夕念仏を唱えて欲しい」と言い残す。男はその遺言を果たしたものの、二年後に後妻を迎える。男が不在のある夜、後妻の許へ、黒色こくしきの女がやつて来る。女は自分の来訪を夫に語ったならば、後妻の命はないと言い、帰ってゆく。翌日、後妻は夫に昨夜の出来事を話すが、夫は相手にしない。それから四、五日後の、夫が外出している夜、件の女は再度後妻の許を訪れて破約を責め、後妻の首をねじ切って殺す。帰宅した夫が持仏堂を開けたところ、前妻の遺骸の前には、後妻の首があった。夫が遺骸を罵り、それを仏壇から引き下ろすと、前妻は喉笛に食いついて夫を殺したというのが、おおよその概略である。

「豊後の国何がしの女ばう死骸を漆にて塗りたる事」において、前妻の亡霊が後妻の首をねじ切るという凄惨な行為に出たのは、

「いぜんそれがしがまいたりたること夫にかたり給ふなど申せしに、はやくもかたり給ふこと、かへすド、もうらめしや」と云ふよりはやくとびかゝり、本妻のくびをねぢきり、おもてをさしてかへりける。

という描写からもうかがわれるように、破約に対する報復の為である。「第四章 「後妻うち」の系譜」にて提示したように、長島弘明氏もまた、この後妻が「言うなタブの禁忌」を犯していることを指摘している（62）。

先に取り上げてきた、斬首する・首を持ち去るといふ描写の登場する章群には、見られなかった意図であると言えよう。

またその後の「夫おどろきぢぶつどうをあけてみれば、かのこくしきなる女のまへに、今の女ばうのくびあり。」という描写からは、「今の女ばうのくび」は夫の破約がこの事態を招いたことを明らかにしている様、そして破約に対する報復の証左である様、前妻の怨嗟の表明でもある様もうかがわれるのである。

さらには、本編における夫の落命もまた、破約に起因するものである。

前述の長島氏は「言葉の咎」といふか、男が約束を破る。後妻をもたないよと言ったのが嫉妬の種になる」と、高田衛氏は「二度と妻を持たないといふ男の誓いが、この女の拘束力を引き出した」と本編について述べており（63）、夫が再縁をしないといふ誓いを破ったために、前妻から報復を受けた

ことを指摘している。

以上の事柄から、「豊後の国何がしの女ばう死骸を漆にて塗りたる事」において、斬首する・首を持ち去るといふ行為には、「後妻うち」という目的、ならびに宮田氏言うところの「離れた女の首と胴体が接近して一体になるうとする」のを前妻の亡霊が妨げるといふ意図、「女の首の霊的な力」を前妻が奪う意図（64）、それ以上に破約に対する報復という意図が込められており、切断された首は破約に対する報復の証左、怨嗟の表明という役割をも果たしているといふ結論が導き出されるのである。

つづく「後妻うち」の話は、卷三ノ七「まよひの物二月堂の牛王にぐわつどうごわうにをそれし事」である。隣家の女に毒殺され、その女と夫とが程なくして夫婦になつたことを無念に思つた前妻の亡霊が、その墓所を訪れた若者の助けを借り、夫と後妻に復讐を果たすというのが、「まよひの物二月堂の牛王にぐわつどうごわうにをそれし事」の概略であり、本編はその前半と結末を『曾呂利物語』卷三ノ三「蓮臺野れんたいのにて化物ばけものに逢ふ事あ」に、後半を平仮名本『因果物語』卷二ノ一「妬ねたみて殺ころせし女、主しめの女房をとり殺す事」に、それぞれ依拠している（65）。

ここで、亡霊が怨嗟を発露させた理由が含まれている、「妬ねたみて殺ころせし女、主しめの女房をとり殺す事」の概略に――「第四章 「後妻うち」の系譜」にて取り上げたもの――少しく言及する。

嫉妬の為に己を殺害した本妻に、「或牢人あるらうにん」の助けを借りた愛妾の亡霊が、復讐を果たすというのが、「妬ねたみて殺ころせし女、主しめの女房をとり殺す事」の概略である。

以下にその復讐の場面を引用する。

かの家にゆき、牛王屋札ごわうやふだをはぎ取たり、かの幽霊ゆうれい、内に入りたり、と、

おほえて、只今まで、女共七八人居おんなならびて、綿車わたぐるまをよりてありしが、さはがしく聞ゆ

このように、「妬ねたみて殺ころせし女、主しめの女房をとり殺す事」には女の亡霊が敵の「くびをもちきたり」といふ描写はない。女は真様になつた様子を示すことで、復讐を遂げたことの証左としていのである。

また、蓮臺野の二つの塚に出来る怪異を若者が解決する「蓮臺野にて化物に逢ふ事」にも当然、亡霊が敵の首を取るといふ描写は見られない。以上の事柄から、亡霊が己を謀殺した女、不実である夫の首を取るといふ描写は、『諸国百物語』独特のものである様があがわれると言えよう。また「かぢふうふがくび」は、復讐の助力をしてくれた男に対し、亡霊

がその目的を遂げたことの証左としての役割を果たしているとも言えるのである。そしてこの描写は、「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」に比し、復讐を遂げたことがより強烈に印象づけられるという効果をあげているのである。

さらに、復讐を遂げた亡霊が男に言う「さて／＼とし月のしうしん、御かげゆへにはらしかたじけなく候ふ」という台詞からは、前述の「牡丹堂女のしうしんの事」、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」に見るような、首をとることが執念を晴らすことにつながるという設定に、通底するものがうかがわれよう。

典拠である「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」に見る亡霊の台詞が、「昨夜、おもふ敵かたきをとりて、今ハ真まさまに成て、身のくるしミを、のがれたり」であり、「しうしん」という言葉が含まれていないことを考慮したならば、「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」における、首をとるという行為と「しうしん」を晴らすことの密接な結び付きが、より強いものとしてうかがわれるのである。

なお、「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」は、今まで扱ってきた「後妻うち」が主題と見られる作品群とは少しく趣が異なり、亡霊が敵かたきの殺害こそ自らの手で行うものの、敵のいる場への侵入は第三者の手を借りて行い、かつ「さて／＼とし月のしうしん、御かげゆへにはらしかたじけなく候ふ」といった礼を、亡霊が第三者に述べるといった設定を有している。

以上の事柄から、「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」において、首を持ち去るといふ行為には、女の首と胴体が一体になるのを妨げる、ないしは「女の首の霊的な力」を奪うという意図以上に(66)、「後妻うち」といふ目的のみならず、復讐の成就をその助力してくれた人間に示すという意図、ならびに「しうしん」を晴らすという意図も、込められていると言えるだろう。

続く「後妻うち」を扱った話は、巻四ノ一「端井弥三郎幽霊を舟渡ふなはたしせし事」である。

端井弥三郎という「文武二道ぶんぶにどうのさぶらひ」が、ある夜清洲から犬山へ出かけたところ、中途の川で火炎を吹く逆さまの女と遭遇する。女は川向かいの屋村の庄屋の女房であり、夫と妾によって絞め殺され、死体を川上に逆さに埋められていたのだった。敵をとるために川を渡して欲しいと告げられた弥三郎が、女を対岸に渡してやると、女は屋村へ飛び去る。弥三郎が庄屋の家の様子をうかがっていると、妾の首を下げた女が現れ、礼を言

って消える。翌朝弥三郎は、屋村の庄屋が新しく迎えた女房が、首を引き抜かれたことを聞く。不審に思った弥三郎が主君に一部始終を申し上げ、川上を掘らせたところ、逆さに埋められた女の死骸があった。件の庄屋は主君の命によって成敗されたというのが、おおよそのあらすじである。

「端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」は、前述の「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」を典拠とする（67）。

ここでも、前述の「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」同様に、亡霊の敵である「めかけのくび」は、復讐の助力をしてくれた男に対し、己が目的を遂げたことの証左としての役割を果たしている様子がうかがわれるのである。

しかしながら、典拠である「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」には女の亡霊が敵の「くびをひつさげいで」という描写はない。女は真様になった様子を示すことで、復讐を遂げたことの証としていたのである。

以上の事柄から、「端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」においては、復讐の成就の証左としての「めかけのくび」が登場すること、「妬て殺せし女、主の女房をとり殺す事」に比し、亡霊が復讐を遂げたことが、より強烈に印象づけられるという効果をあげていると言えよう。

以上、本章段においては『諸国百物語』における、「後妻うち」を目的とした章群を扱ってきた。

結果、斬首する・首を持ち去るという行為には、

① 「後妻うち」という目的に加え、復讐の成就や「しうしん」が晴れたことを、その助力をしてくれた相手に示すというがある。

② 「後妻うち」のみならず、破約の罰、怨嗟の表明といった、種々の意図が、そこには付加されている。

といった特質が、明らかとなったのである。

（四）：「不孝・不倫」への罰

先の章段においては、『諸国百物語』中、「後妻うち」をその意図として斬首する・首を持ち去る話を取り上げ、そこに込められた更なる意図について考察を加えてきた。

結果、そこには「後妻うち」という目的に加え、復讐の成就や「しうしん」が晴れたことを、その助力をしてくれた相手に示すという意図、ならびに破約の罰、怨嗟の表明といった意図を有していることが、明らかとなったのである。

本章段ではそこで、『諸国百物語』における、さらなる、斬首する・首を持ち去る話を取り上げ、そこに込められた意図を読み解くことで、『諸国百

物語』それ自体への理解をも深めてゆきたい。

本章段では、「第五章 「執心」譚の系譜」において少しく言及した、巻五ノ六「紀州和歌山松本屋久兵衛が女にばうの事」を取り上げる。以下にそのあらすじを述べる。――紀州和歌山に、松本屋久兵衛という者がいた。富裕に暮らしていたが、ふとした煩いで死んでしまった。その後に入り婿を迎えたが、成人した美しい継娘がいたので、入り婿はこれに思いをかけ、契りを交わした。母親はこれに気付いたが、世間への外聞をはばかりて何も言わず、「あさゆふむねをこがし」ていたが、いつの頃からかこのことが世間にもれ、人々は畜生だといって嘲った。母親はこうしたことのため病みになり、死んでしまった。娘はこれを喜び、葬儀の支度をし、明け方遺骸を野辺に送るため、棺を座敷に置いていたところ、夜半の頃母親の遺骸が棺の中から立ち上がった。母親は娘と男が臥している寝間へ行き、娘のど首を食いちぎり、また棺の内へと戻った。その家も後には滅びたという。

ついで、本編における以下の描写に着目したい。

・まゝむすめ有りしが、せいじんしてよきみめかたちなりければ、(1)此入むこしう心してわりなくちぎりける。

・母これを見つけて、(2)せけんのぐはいぶんとおもひ、人にもかたらず、あさゆふむねをこがしけるが、此事いつとなく所にもかくれなく、(3)ちくしやうなりとてみな人あざけりけると也。

・母は(4)この事おもひくらし、気やみになりてあひはてけり。(5)むすめよろこび、(以下略)

・(6)むすめと男ふしたるねまにゆき、むすめがのどくびをくひちぎり、

このように、傍線部(1)、(5)の描写からは継娘の不孝、不倫な様が、傍線部(3)の描写からは彼らに対する世間の冷やかな侮蔑の眼差しが、そして傍線部(2)、(4)からは世間体をひたすら気につけ、それが為に自らの命を縮めてしまった母の姿が見受けられるのである。

これらの事柄を考慮すると、傍線部(6)に見る、母の亡霊によってもたらされるカラストロフは、継娘と婿の不倫な関係に下された「罰」であり、本編における「せけん」の「人の、ひいては読者の継娘に対する、侮蔑と嫌悪の気持ち」を代弁したものであると言えよう。

(五)。「へんげの物」退治

先の章段では、『諸国百物語』において、斬首する・首を持ち去るという行動に、道徳を侵犯した者に対する怪異からの「罰」という意図が込められた作品を、取り扱ってきた。

続いては、『諸国百物語』巻一ノ十一「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩

の事」を取り上げる。なお、本編に関しては、「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」にて、そのあらすじを掲載し、かつ、怪異と人間との関連性といった観点から考察を加えているので、本章段においてはその概略、ならびに、斬首する・首を持ち去るという行為に込められた意図という観点からの読解を記してゆきたい。

——出羽の国・杉山兵部の妻が、ある夜、二人になった。あれこれ双方を吟味していたところ、ある者が「へんげの物は両手が少し丸い」由を言ったが為、兵部は手が少しく丸い方の妻の首を打ち落とした。ところがそれは「まことの妻」であったので、残る一方を「へんげの物」と判じた兵部は、彼女が嘆き怨むのも聞かず、首を打ち落とした。しかしこの妻も「まことの妻」であった。あまりに不思議なことなので、死骸を数日置いてみたのだが、色が変わることもなかったというのが、おおよその概略である。

前述の『曾呂利物語』の項でも述べたように、「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」は、『曾呂利物語』巻三ノ二「離魂と云ふ病ひの事」を典拠とする(68)。

以上の事柄からうかがわれるように、これらの章群における、斬首する・首を持ち去るという行為に込められた意図は、ともに「へんげの物」、「変化の物」退治である。

それが為、各々の夫は自らが「へんげの物」と判じた妻の首を打ち落としてはいるものの、果たしてどちらの妻が本物であったかは、最後まで不明のままであり、主人公は妻を失ってしまうというだけに終わるという物語末尾。ならびに、この末尾からうかがわれる、人間が異界の存在を退治しようとする試みは失敗に終わり、かえって異界の存在の優位性を際立たせる効果を上げるといふ傾向は、前述の片仮名本『因果物語』中巻七「鳩来、御剣ヲ守居事付神前ノ刀ニテ、化物ヲ切事」ノ二の項で取り上げた、「化者」の首を落としたものの、件の「化者」の「霊」が、己を殺害した人々を取り殺すという物語展開に、通底するものがあると言えよう。

しかしながら、「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」において述べたように、「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」、「離魂と云ふ病ひの事」はあらすじをほぼ同じくしているが、幾つかの点において趣を異にする。

第一の点は、「離魂と云ふ病ひの事」に見る「離魂と云ふ病ひなり。」といった、物語末尾における怪異現象に対する合理的解釈が、「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」では省かれ、「かゝるふしぎも有ることにこそ。」との一条で話が終わっている点である。

人間が異界の存在を退治することは不可能であり、そうした存在がもた

らす謎は謎のままにしておくという傾向が、典拠たる「離魂と云ふ病ひの事」に比し、より強められていると言えよう。

第二の点は、兵部に首を打ち落とされる際の、二人目の妻の様子である。すなわち、「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」において、二人目の妻は首を打ち落とされる際、「さまどなげきうらみけれども」といった様子を見せ、自らの首を打ち落とそうとする、夫の兵部に抗っている。

対する、「離魂と云ふ病ひの事」には「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」のように、妻が首をはねられる際に抗ったり、夫に怨嗟を表明したりする描写は見受けられないのである。

これらの事柄から「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」における妻の悲壮な様子は、その後の「へんげの物」退治の「失敗」とあいまって、怪異に挑んだ人間の愚かさを、いっそう引き立たせる効果を上げていると言えよう。

六―三・斬首・首を持ち去る話――『諸国百物語』以後

以上、本稿においては、『諸国百物語』ならびにそれ以前の近世怪異小説における、斬首する・首を持ち去る話を取り上げ、典拠や類話との比較を通じて、その行為の目的や意図、ないしはこれらの章群が有している傾向について考察を加えてきた。

本章段ではこれらの考察をふまえ、『諸国百物語』以後から『狗張子』が成立する元禄五年までの怪異小説を取り上げ、そこに収録されている、斬首する・首を持ち去る話の読解を進めてゆきたい。

初めに、天和三年（一六八三）刊行の『新御伽婢子』に収録された、斬首する・首を持ち去る話を取り上げる。

先学からその文芸的意匠について、様々の評価を賦与されてきた『新御伽婢子』（69）における、第一の当該話は、巻二ノ四「女生首おんなのいきくび」であり、あらずじは以下の通りである。

――学問のため、関東に下ることになった京の僧侶が、自分に恋慕の情を抱くが故「頸くびを切て記念かたみに持て下り給へ」と懇願する女の首を打ち落とす。そして件の首を荷物にひそませて談林に赴くのであるが、首は腐ることもなく、事態が露見するまでの三年間、僧侶との交情を楽しんでいたという。

先学から「恋する女の執念咄」、「執着する女の怪」が怪異世界の中心点にある（70）、「一種の奇怪な純愛物語」（71）と評される本編は、前述の『奇異雑談集』（写本）上巻ノ四「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」――道ならぬ恋の相手の首に対する執心が主題――に通底するものが

あるのだが、「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」は、死んだ男の首に女が執心を抱く話であり、対する本編は、女が死して首だけとなってもなお、男に執着を抱く話である。

それ故、「女生首」においては、男女の役割が逆転しているのみならず、女の執念がよりエキセントリックになっている様、首を切断するという行為の主体が人間であり、またそうした行為が怪異を発動させる契機となっている様が見受けられるのである。

続いての話は、巻二ノ九「鴈塚昔」である。狩りや漁を生業とする侍が、ある時雄の白鴈の首を射抜いて殺した。共にいた雌の白鴈は驚いて飛び去ったが、雄の首はなくなっていた。翌年の八月、白鴈が降り立った場に向かった侍が、そこにいた鳥を射たところ、それは件の白鴈であり、羽の下に雄の首を抱え込んでいた。後悔の念に苛まれた侍は出家し、塚を築いて白鴈をねんごろに弔ったという。

このように本編においては、雌の白鴈が発露させる首への想いは、執心というより情愛に近い。かつその情愛が侍を変心せしめ、出家へと導いているのであるから、本編は首を持ち去るという行為の結果が美しいものとなっている、本稿が取り上げてきた話の中では、珍しい物語と言えよう。そして本編においてもまた、首を切断して殺害するという行為の主体が人間であり、その行為の後に物語が展開するという傾向が見受けられるのである。

続く巻三ノ三「死後姪妬」は、本妻の亡霊が棺を抜け出し、その妬心に突き動かされるあまり、日頃夫が目をかけていた召使の「りん」の首を引き抜くという、典型的な「後妻うち」の話である。

斬首する・首を持ち去るという行為が亡霊によってなされており、かつそれが結末でもあるという、『新御伽婢子』中、唯一の話でもある。

また、本妻が「りん」の首を引き抜くという行為の目的には、その「彼亡者りんがくひを引ぬきたぶさをつかミ指上唄れる眼を見ひらき生るがごとくして死居たりけるこそ浅ましけれ」という凄惨な描写から、前述した『曾呂利物語』巻四ノ七「女の妄念怖ろしき事」、平仮名本『因果物語』巻一ノ八「妾を妬て、夫に怨をなしける、女房の事」、や片仮名本『因果物語』、『諸国百物語』における「後妻うち」を扱った話に見たような、「離れた女の首と胴体が接近して一体になろうとするのだらうが、女の幽霊が両者を離してしまふ」、「女の首の霊的な力」を奪う（72）といった意図をも、見え隠れするのである。

続く巻三ノ九「血滴成ニ小蛇」のあらすじは、以下のようなものであ

る。——奥州の侍が主君の供をして都に上り、土地の娘と深い仲になる。やがて主君が都を出立する時になり、娘は東へ連れて行ってくれるよう懇願するのだが、本妻の怒りを恐れた男は、近く迎えを寄越すといい、事態を捨て置いてしまう。残された都の女は恨みの文を男に送ったので、事態が本妻に露見することをいよいよ怖れた男は、使いにかこつけて下部たちを都にやる。女を殺すことを言い含められていた下部たちは、ある川中の船ばたで手を洗おうとしていた女を背後から切り付け、首を打ち落とす。証拠の血刀を携えた下部たちが本国に戻り、刀を男に見せると、血の滴りは蛇と成って、男の首にまといついた。本妻が件の蛇を罵ると、蛇は皮一重下に潜り込み、口から火焰を噴出した。昼夜隙なく苦しめられた男は、ついに取り殺されたという。

このように、本編における首を切り落とすという行為は、男の身勝手な「保身」に起因するところのものとなっており、言えるだろう。

さらには本編においてもまた、首を切断して殺害するという行為を行うのは人間であり、そうした行為が怪異を発動させる契機となる様が見受けられるのである。

以上の事柄から、『新御伽婢子』に収録された、斬首する・首を持ち去る話からは、

① 斬首する・首を持ち去るという行為に込められた意図が、『諸国百物語』以前の怪異小説、そして『諸国百物語』には見受けられなかったものとなっている。

② 『諸国百物語』とは対照的に、首を切断するという行為の主体が、幽霊や妖怪といった異界の存在ではなく、人間である。

③ 『諸国百物語』やそれ以前の怪異小説で比較的目についたような、斬首する・首を持ち去るという行為が、「後妻うち」や復讐、怪異からの報復といった形で、物語の結末になっているという傾向は影を潜めている。

④ 斬首する・首を持ち去るという行為が、新たな怪異、ないしは物語展開を招くという傾向が、見受けられるようになりつつある。

といった特質が、見受けられるのである。

こうした、従前の怪異小説に見たような特質ないしは傾向を踏襲しつつも、新たな要素をそこに挿入するといった事柄は、「読むための怪異談を志向し、怪異性を高めるための積極的な改変を見せる」(73)といった先学の指摘を裏付けるものとなっていると言えよう。

ついで、貞享三年(一六八六)に刊行され、先学から作中における種々の知識、ならびにそこに見受けられる、怪異に対する合理的論評姿勢を指摘された(74)『百物語評判』に収録されている、斬首する・首を持ち去る描写の登場する話の読解を進めてゆく。

巻四ノ九「舟幽霊附丹波の姥が火、津の国仁光坊の事」が、それに該当する。——美男の僧侶に思いをかけた女房が、これを様々に口説くが相

手にされない。やがて僧侶が己の不義を周囲に告げることが恐れた女房は、僧を亡き者にしようと思い、自らの夫に、僧侶が不義をしかけたという讒言をする。立腹した夫は僧侶を斬罪に処し、恨みを抱いて殺された僧侶の怨念は、やがてその一族を取り殺したというのが、そのあらすじである。

本編は前述の『宿直草』（『御伽物語』巻五ノ三「仁光坊といふ火の事」と同じ題材を扱っている（75）。

本編には、「仁光坊といふ火の事」に見る、恋文やそこに託された和歌といった、艶麗で抒情的な記述こそないものの、不倫な恋情を抱いた女性に、二人の男性が巻き込まれる。そして無念の思いを抱いて斬首に処せられた僧侶の怨念が、相手の一族を殺してゆくという物語展開は、共通しているのだ。

もつとも、

かやうの事常ことつねに十人並にんなみに有ある事ことには侍はべらねども、たま／＼はある道理だうりにして、唐土もろこしの書ふみにもをり／＼見みえ侍はべる。

「舟幽霊附丹波の姥が火、津の国仁光坊の事」

もろこしの人やまとの袖、かれもこれも情のみちのあはれさは、とり／＼にこそ侍れ。ふじのけふりの空にきえて、ゆくゑなき思ひのほど、忍ぶる事のよはるわざなれ。

「仁光坊といふ火の事」

という、「舟幽霊附丹波の姥が火、津の国仁光坊の事」の最後の一条からは、『百物語評判』の特質である、怪異に対する、多様な知識を基盤とした論評——これは情趣的で軽妙な文飾が特徴の「仁光坊といふ火の事」には見られない姿勢である——が見受けられるのであるが。

次に、貞享四年（一六八七）に刊行された『御伽比丘尼』（『諸国新百物語』に収録されている、斬首する・首を持ち去る描写の登場する話を取り上げる。

太刀川清氏から、その改題本『諸国新百物語』における「怪談集」「咄本」としての性質、ならびに、その序文に見る「それが中には艶なるあり、哀れなるあり、をかしきあり、怪しきあり、恐ろしきあり」といった性質を指摘されている（76）『御伽比丘尼』（『諸国新百物語』）。その当該話は、

卷三ノ二「昔むかしながらの今井物いまみがたり付まゝは継母じやけんくわんおんの邪見ぢひ観音ぢひの慈悲」である。――

——継母に疎まれ、その下部に後ろから切り付けられ、首をとられた筈の子どもが、日頃帰依していた仏道の功德と、夢に現れた実母の助けにより難を逃れ、継母は雷に打たれて死ぬ。そして継母の讒言を受けて、子どもを追い出した父親は、前非を悔いて出家するというのが概略の本編もやはり、斬首するという行為の主体は人間であり、かつ、首を持ち去るといった行為が、継母の讒言を真に受け、実の子を疎んじていた父親を改心させる

契機となつてゐるのである。それ故、ここでも斬首するという行為が結末ではなく、新たな物語展開を招いていけると言えるだろう。

ついで、元禄五年（一六九二）に刊行され、先学からは「素朴な説話性の濃い志怪小説や雑著」を典拠としたために、『伽婢子』と比べて作品としてやや香気を欠いてゐる（77）、ないしは「有名な唱導材の使い回し」が見られ、これらを「精彩を欠く話の典型」と評されるなど（78）、その文学的香気の高さに関してはあまり評価がなされていない、『狗張子』について言及を加えてゆく。

『狗張子』における、斬首する・首を持ち去るに当たる話は四話あり、第一の話は、巻四ノ五「非道ひだうに人を殺す報むくひ」である。――周防国野上の莊に、関久兵衛尉兼元という侍がいた。ある時、関は下人夫婦の些細な過ちに言いがかりをつけ、打ち首にした。恨みを飲んで殺された夫婦の怨念はやがて、関の子どもを取り殺し、その様を見た妻も、悲しみのあまり狂死する。残された関は僧侶を招き、卒塔婆をたてて供養をしたところ、亡魂のたたりはおさまった。しかし程なく関も死に、家は絶えたという。

このように、本編においてもまた、斬首するのは人間であり、そうした行為が真の怪異を呼び込む契機となつてゐる様、さらには、前述の平仮名本『因果物語』や『伽婢子』――共に『狗張子』同様、浅井了意による編著とみなされている――に見たように、人間が人間に下す「罰」は極めて不当なものとして位置づけられてゐる様がうかがわれると言えよう。

また、巻六ノ四「亡魂ばうこんを八幡まんに鎮祭しづめまつる」は、吉川某の家人・松岡四郎左衛門は優れた武人であつたが、朋輩の讒言により、打ち首に処せられる。その後、恨みを呑んで死んだ四郎左衛門は、朋輩の親子のみならず、多くの人々を取り殺すという概略の話であるが、本編からも前述の「非道に人を殺す報」に見たような傾向は見受けられると言えよう。

ついで、巻五ノ一「今川氏真うぢざね没落ぼつらく付三浦右衛門最後さいご」を取り上げる。駿河国・今川氏真の寵臣・三浦右衛門は、武田軍に攻め入られ、駿府の城を落ち延びる主君を見捨てて、三川の高天神の城主・小笠原与八郎を頼る。与八郎ははじめ三浦右衛門を庇護して、なりゆきをうかがつていたが、氏真の劣勢を聞くと、三浦右衛門をとらえ、主君を見放した罪科を言いかけ、搔き首にして殺す。

本編は前述の二話とは異なり、斬首される側に、主君の寵愛をかさに着て贅沢三昧をする、百姓を酷使するといった、もつともな非がある話である。そして本編は、斬首された三浦右衛門が、その醜骸を野辺に晒すところまで幕を閉じてゐるのである。

以上の事柄から本編は、斬首するという行為が「罰」という意味を有しており、またそれが結末である話と言えよう。

ついで卷七ノ三「飯森が陰徳の報」を取り上げる。

飯森平助は、豊臣秀頼の侍大将である鈴木田隼人佐の盗賊奉行として精励していたが、ある時土井孫四郎という囚人を助ける。後年、流浪の身上となった平助は、土地の代官をしていた孫四郎に庇護される。しかし平助は、孫四郎がその妻の教唆により、己の命を奪おうとしていることを知って逃亡する。そのさなか、ある旅店に宿をかりた平助は、自分の来し方を思い憤激する。すると床下から忍と称する男が現れ、孫四郎に頼まれて平助の首を取りに来た由、しかし平助の話聞いて心を変えた由を語り、姿を消す。やがて戻ってきた忍びは、孫四郎の首を手にしていたという。このように本編においては、斬首する・首を持ち去るという行為の主体が人間であり、またそこには正当性のある「罰」という意図が込められている様が見受けられる。

- 以上、『狗張子』における、斬首する・首を持ち去る話からは、
- ① 斬首する・首を持ち去るという行為の主体が行為の主体が全て人間である。
 - ② 斬首する・首を持ち去るという行為の意味するところが「罰」である。
 - ③ 斬首する・首を持ち去るという行為が結末である話が、その半数を占める。

といった特質がうかがわれるのである。

このように、『狗張子』に収録されている、斬首する・首を持ち去る話には、その行為の意図するところにさしてバリエーションが多いとは言えない。かつ、それが正当なものであれ不当なものであれ、斬首する側がされる側に「罰」を下すという構図は、先に述べた『伽婢子』や平仮名本『因果物語』に通底するものがあり、新しいものであるとは言えない。

以上の事柄から、『狗張子』における、斬首する・首を持ち去る話は、『伽婢子』それ自体同様、文学作品として、和田氏が言うように「精彩に乏しい（79）」という結論が導き出されるのである。

六―四・まとめ

以上、本章段では、『諸国百物語』ならびにその成立前後の近世怪異小説における、斬首する・首を持ち去る話を取り上げ、典拠や類話との比較を通じて、その目的あるいはそこに込められた意図について、考察を加えてきた。

結果、『諸国百物語』以前の近世怪異小説における、斬首する・首を持ち去るという行為には、『奇異雑談集』（写本）では間男への執心、片仮名本『因果物語』では「後妻うち」、平仮名本『因果物語』、『伽婢子』では「罰」という意図が込められていること。

そして『曾呂利物語』では、行為の主体は妖怪ないしは幽霊といった「異界の存在」が中心であり、「異界の存在」による、斬首する・首を持ち去るという行為は、人間の傲慢さ、ないしは不実さへの「罰」及び復讐であり、残酷な結末であるということ。

さらには『宿直草』（『御伽物語』）では、斬首する・首を持ち去るといふ話の根底に、不倫な恋情を抱いた女性一人をめぐって男二人が対立するという構図が見られること。

そしてこれらの章群からは、行為の主体が「異界の存在」であり、斬首する・首を持ち去るといふ行為が結末である話。ないしは行為の主体が人間であり、その行為がさらなる物語展開を招くきっかけである話に大別される傾向のあることが、明らかとなった。

これらのことを考慮に入れると『諸国百物語』における、斬首する・首を持ち去るといふ話では、その行為に込められた意図は、「罰」「後妻うち」、復讐の成就の証左、恋人の首への執着、妖怪退治などであり、復讐の成就の証拠を除けば、意図そのものは独自性のある、真新しいものばかりではない。

しかしながら、怪異に挑んだ者、その脅威を脅かそうとした者が、「罰」として斬首される・首を持ち去られる話では、

①その典拠においては、判明している怪異から「罰」を受ける理由が明らかとなつているのに対し、本編ではそれが曖昧にされ、その為に怪異のもたらす脅威を増大する効果をあげている。

②欲深さ故に、怪異の恐怖が心底にまで浸透せず、怪異からの「罰」を「罰」として受け止めていない人間を登場させる。

といった、『諸国百物語』独自の工夫がこらされているのである。

さらには、恋人の遺骸から切り離された首に執着を示す、あるいは執念故に恋人の首をとる話では、類話とされる話が唱導説話、ないしは武辺咄としての傾向を示しているのに対し、

①『諸国百物語』に収録されている章群には、恐怖を抱く出来事に遭遇し、その当座は恐れ怯えるものの、したたかさ故に恐怖感が心底までは浸透しない、独特の人物が登場し、モチーフもまた類話と異なったものになっている。

②『諸国百物語』においては、典拠や類話に見る、仏教や道教によって怪異の恐ろしさが取り除かれる描写を挿入しないことで、話の凄惨さや亡霊の執念の恐ろしさが際立ち、それが為に怪異の脅威が優位を保ち続ける効果をあげている。

といった意匠がこらされている。

そして前妻もしくは本妻の亡霊が、後妻または妾の首をとるといった「後妻うち」の話では、

①首を持ち去るといふ行為からは、怨嗟の発露、復讐が成就した、ないしは「しうしん」が晴れたことの証左といった意味合いが見出される。

②典拠には見られない、前述のような描写を挿入することで、読者に復讐の成就をより鮮明に印象づけるといった効果をあげている。

という様が見受けられるのである。

なお、妖怪退治が目的の話においては、

①典拠に比し、怪異のもたらす謎に加えられた合理的解釈を省略することで、怪異がもたらす謎を謎のままにしておくという傾向が、より強められている。

と言えよう。

さらに『諸国百物語』以後の近世怪異小説における、斬首する・首を持ち去るという話は、そのような行為の主体が人間であり、かつ、斬首する・首を持ち去るという行為が、話の結末ではなく、さらなる物語展開を呼び込むという傾向が、高くなっているのである。

こうしたことを考慮に入れると、斬首する・首を持ち去るといった行為の主体の大半が「異界の存在」であり、その行為の全てが結末という意味を有していた『諸国百物語』はやはり、怪異の脅威を強調するため、近世怪異小説群の中でも際立つ特質を持ち続けていると言えよう。

以上の事柄をふまえると、『諸国百物語』に見る、斬首する・首を持ち去るといった行為の理由には、怪異の脅威を際立たせる為の独特の工夫がこらされていることが明らかになった。

続いてはこれらの事柄をふまえ、冒頭に引用した、小松和彦氏の「幽霊が生首を持っていく場面がすごく多い」²それはどういう意味を持っていたのだろうか」といった指摘に（80）言及する。

『諸国百物語』において、斬首する・首を持ち去る描写の登場する話は十一話収録されているのだが、このうち最も高い比率を占めるのは、五話収録されている「後妻うち」を扱った話である。

そして先に述べたように、これらの「後妻うち」には、巻一ノ八「後妻うちの事付タリ法花経の功力」、巻三ノ七「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」のように、「しうしん」を晴らすことを喜ぶ台詞が登場するものがある。

こうしたことを鑑みると、これらの「後妻うち」は、前妻の亡霊がその「しうしん」を晴らすことと、密接な関わりを持っているようにうかがわれるのである。

また『諸国百物語』には、巻二ノ五「六端の源七ま男せし女をたすけたる事」、巻四ノ五「牡丹堂女のしうしんの事」のように、男への「しうしん」故に、その首をとったり、持ち去ったりする話も、収録されている。

こうしたことを考慮に入れると、『諸国百物語』に見る、首を切断して殺害する・首を持ち去るといった行動の原動力は、不遇な死を遂げた女の、敵に対する、あるいは女の男に対する「しうしん」が主であるという結論が、導き出されるのである。

- (1) 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏（「鼎談」江戸の怪異譚と西鶴）
（高田衛氏他編『西鶴と浮世草子研究 特集・怪異』第二号、笠間書院、二〇〇七・十一）
- (2) 本稿では『諸国百物語』における、斬首する・首を持ち去る描写の登場する話と、他の近世怪異小説における素材を同じくする章群との比較の為、小澤江美子氏が「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」（『大妻女子大学大学院文学研究科論集』第二号、一九九二・三）で「近世初期の怪異小説」として位置づけている『奇異雑談集』、片仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』、『伽婢子』、『宿直草』（『御伽物語』）に、片仮名本『因果物語』以前の成立が見込まれる平仮名本『因果物語』。ならびに太刀川清氏が「序章 百物語と伽婢子」（『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一）「初出…「怪談会から怪異小説へ」（『国語国文研究』第二十四号、一九六三・二）」において「伽婢子」と「百物語」、この書名をもつ作品は膨大な数の怪異小説からするとごく僅かなものにすぎないが、これほど近世の怪異小説を意義づけたものもなかった」由を指摘していることを鑑み、これらの「伽婢子」や「百物語」が作品名に冠せられている怪異小説を取り上げた。しかしながら、江本裕氏によつて「第一部 仮名草子」四「了意怪異談の素材と方法」として（『近世前期小説の研究』、若草書房、二〇〇〇・六）「初出…「了意怪異談の素材と方法」（『近世文芸 研究と評論』第二号、一九七二・五）」において「零本で、巻七のみ」と指摘される『続伽婢子』に関しては、所収比率が完全には網羅出来ない為、取り上げなかった。なお、『狗張子』に関しては、「伽婢子と狗張子」（『国語と国文学』第四十八巻第十号、一九七一・十）における、『伽婢子』と「正編続編」の関係にあるという富士昭雄氏の指摘を受け、ここに掲載した。
- (3) 註(2)前掲 富士昭雄氏「伽婢子と狗張子」
- (4) 堤邦彦氏は「怪異―近世怪異小説と仏教―」（伊藤博之氏他編、仏教文学講座 第五巻『物語・日記・随筆』、勉誠社、一九九六・四）において、『奇異雑談集』に対し「中世唱導者の口吻を色濃くとどめる」と、小澤江美子氏は「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」（註(2)前掲）において、「仏教臭の強い」と、それぞれ言及をしている。
- (5) 堤邦彦氏は「唱導の「物語」―近世奇談文芸への展開」（『江戸文学』第二十二号、二〇〇一・二）において、『奇異雑談集』に対し「後続の怪異小説に多くの素材を与えた点で研究者の目をあつめ、唱導から文芸への分岐に位置付けられてきた。」と述べている。
- (6) 太刀川清氏は「解題」（『続百物語怪談集成』、図書刊行会、一九九三・九）において、『万世百物語』巻一「独身の羽黒詣」、『奇異雑談集』上巻ノ四「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」、『宿直草』（『御伽物語』）

卷二ノ五「三人しなぐ、勇ある事」、『諸国百物語』卷二ノ五「六端の源七ま男せし女をたすけたる事」を類話として位置づけている。また堤邦彦氏は「生首をいとおしむ女―偏愛奇談の時代」（東アジア怪異学会編『怪異学の技法』、京都・臨川書店、二〇〇三・十一）において、前述の三話を『奇異雑談集』上巻第四話を模倣したとされる怪異小説」と評している。

(7) 堤邦彦氏は「特集・安土桃山ルネッサンス 地方資料の発掘―雑談、夜話の原風景」（『国文学』第五十一巻第十一号、二〇〇六・五）において、片仮名本『因果物語』について、「因果応報のことわりを身のまわりに起きた靈験・利生のかずかずを引いて説明する筆法」が「江戸の怪談文芸に大きな影響を及ぼした。」と、片仮名本『因果物語』の事実に根ざした筆法、ならびに後続の文芸に及ぼした影響について指摘をしている。中嶋隆氏もまた「第四章 因果物語」（末木文美士氏他執筆、岩波講座 日本文学と仏教 第二巻『因果』、岩波書店、一九九四・一）において「片仮名本・平仮名本『因果物語』は、ともに広く後続文芸の典拠となった。」ことを述べている。また当麻晴仁氏は『新御伽婢子』考―片仮名本『因果物語』との関係―」（『青山語文』第二十二号、一九九二・三）において『新御伽婢子』四八話のうち、一一話が片仮名本『因果物語』所収の話と類似しており、おそらく典拠としてであろうと思われる」と、具体的な数値を算出している。さらに前述の堤氏は、「女霊の江戸怪談史―仁義なき「後妻打ち」の登場」（一柳廣孝氏、吉田司雄氏編著『幻想文学、近代の魔界へ』ナイトメア叢書2、二〇〇六・五）において、「正三ならびに周辺の人々が体験した世俗の幽霊咄を題材に、人の心の罪障性を戒める」と、ここでもまた片仮名本『因果物語』の事実性、そして唱導・教訓性の特質を評している。

(8) ここで、本稿における「後妻うち」の定義を再確認しておく。「第四章「後妻うち」の系譜」においても言及したように、井上泰至氏が「吉備津の釜」―「後妻打ち」からの乖離―」（『上智大学国文論集』第二十、一九八七・一）において、山東京伝の『骨董集』の一節「かゝれば近むかしの怪談草紙などに、うはなり打を生りやう死りやうのしわざとせるは、これらのうたひいできてのちのつくり事なるべし。」を引き合いに出し、この一節が「先妻が霊となつて後妻に復讐する文学上のパターンとしての「後妻打ち」の嚆矢を『葵上』に求める文脈で語られている。」由を述べていること。また、小松和彦氏が「鼎談」江戸の怪異譚と西鶴」（註（一）前掲）において、「典型的なうわなりうち」との評価を加えている『諸国百物語』卷二ノ九「豊後の国何がしの女ばう死骸

を漆にて塗りたる事」においては、前妻の亡霊が後妻の首をねじ切つ

て殺害する様子が書かれていること。その他、『諸国百物語』において、作品名に「後妻うち」と冠せられている物語には、前妻の亡霊もしくは執念が、後妻を取り殺す描写が見受けられること。これらの事柄を考慮に入れ、本稿では「後妻うち」を、「前妻ないしは本妻の霊による、後妻あるいは妾の抹殺・排除を意図した行為」と定義づけた。

(9) 本稿では「後妻うち」を「前妻ないしは本妻の霊による、後妻あるいは妾の抹殺・排除を意図した行為」と位置づけているので、手代という生身の人間が、本妻の妾殺害という意志を代行したに過ぎない、片仮名本『因果物語』上巻五「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ卷事」ノ一は、厳密な意味では「後妻うち」には相当しないと考えられる。

(10) 高田衛氏「地獄絵の中の〈女〉と〈蛇〉——近世的通念における否定的なもの」(『女と蛇 表徴の江戸文学誌』、筑摩書房、一九九九・一)

(11) 註(7) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」

(12) 宮田登氏「女的首」のフオークロア」(『江戸文学』第一巻第一号、一九八九・十一)

(13) 註(12) 前掲 宮田登氏「女的首」のフオークロア」

(14) 本稿の「第四章 「後妻うち」の系譜」においては、片仮名本『因果物語』中、「後妻うち」の色彩が濃厚な話——上巻五「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ卷事」ノ一、上巻六「妬深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ二、中巻三十五「幽霊、刀ヲ借テ人ヲ切事」——を引き合いに出し、そのいずれにも、前妻もしくは本妻の怨念に「日比」「頃」という形容が冠せられていること。そして、「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ卷事」ノ一、「妬深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」ノ二はともに、「後妻うち」に類する行動をとった女が「妬深女」と表現されていることを述べた。

(15) 註(12) 前掲 宮田登氏「女的首」のフオークロア」

(16) 註(7) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史——仁義なき「後妻打ち」の登場」

(17) 堤邦彦氏は「第一章 近世の説話——仏教怪異譚の系譜」(時代別日本文学史事典編集委員会編『時代別日本文学史事典 近世編』、東京堂出版、一九九七・六)において、「因果の理法をうたいながらも、はるかに文芸意識のまさる作柄となっている。」「片仮名本『因果物語』の法席との親縁性に比べると、平仮名本の方は話の筋立てや文脈上の情趣を重んずる」として、平仮名本『因果物語』の文芸性や物語性について言及をしている。また江本裕氏は「第一部 仮名草子」「三 『因果物語』における鈴木正三」(『近世前期小説の研究』、若草書房、二〇〇〇・六)「初出…『因果物語』をめぐる諸問題——片仮名本検討を通

して——」（『大妻国文』第十一号、一九七八・三）において、「娯楽作品としての読物を前提とする」と、平仮名本『因果物語』の娯楽性について述べている。さらに中嶋隆氏は「第四章 因果物語」（末木文美士氏他執筆、岩波講座 日本文学と仏教 第二巻『因果』、岩波書店、一九九四・一）において、「片仮名本・平仮名本『因果物語』は、ともに広く後続文芸の典拠となった」ことを述べている。

（18）註（17）前掲 江本裕氏「第一部 仮名草子」「三 『因果物語』における鈴木正三」

（19）本稿では、片仮名本『因果物語』上巻五「妬深女死シテ、男ヲ取殺ネタミフカキランナシ スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ卷事ヲトコ マク」ノ一に考察を加えた際、『曾呂利物語』巻四ノ七「女の妄念怖ろしき事」の、本妻の亡霊が妾の生首を持って橋の傍らに立ち尽くす場面、ならびに、この場面に對する宮田氏の「離れた女の首と胴体が接近して一体になろうとするのだろうが、女の幽霊が両者を離してしまふことを意図しているのである。」という見解（註（12）前掲 宮田登氏「女の首」のフォークロア）を引き合いに出し、本妻が妾の首を所有するという行為には、妾の首がその胴体と一体になることを阻害する意図があるという結論を導き出した。

（20）註（10）前掲 高田衛氏「地獄絵の中の〈女〉と〈蛇〉——近世的通念における否定的なもの」

（21）註（10）前掲 高田衛氏「地獄絵の中の〈女〉と〈蛇〉——近世的通念における否定的なもの」

（22）註（12）前掲 宮田登氏「女の首」のフォークロア」

（23）堤邦彦氏は「第一章 近世の説話——仏教怪異譚の系譜」（註（17）前掲）で、平仮名本『因果物語』の「文芸意識」について、高い評価を与えている。

（24）頼原退蔵氏は「近世怪異小説の一流流」（『国語国文』第八巻第四号、一九三八・四）において、『曾呂利物語』を「近世怪異小説の大きな一流流」と評している。また小澤江美子氏は「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」（註（2）前掲）において、『曾呂利物語』について「寛文期にあつては仏教臭・教訓臭の薄れた娯楽志向の世俗系怪異小説」と述べている。

（25）太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百物語』と『諸国百物語』（『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一）（初出：『諸国百物語』成立の背景」（『長野県短大紀要』第二十八号、一九七三・十二）」

（26）註（25）前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百物語』と『諸国百物語』」

- (27) 註(25) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』
- (28) 註(12) 前掲 宮田登氏「女の首」のフォークロア
- (29) 小澤江美子氏は「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」(註(2) 前掲)において、『曾呂利物語』について「寛文期にあつては仏教臭・教訓臭の薄れた娯楽志向の世俗系怪異小説」と、その娯楽性について言及している。
- (30) 花田富二夫氏『伽婢子』の意義(松田修氏他校注『新日本古典文学大系75 伽婢子』、岩波書店、二〇〇一・九)
- (31) 市古夏生氏「第一部 作品と作者」第二章『伽婢子』における状況設定(『近世初期文学と出版文化』、若草書房、一九九八・六)「初出…『伽婢子』における場の設定」(『国文白百合』第十四号、一九八三・三)
- (32) 宇佐美喜三八氏「伽婢子に於ける翻案について」(『和歌史に関する研究』、若竹出版、一九五二・十一)「初出…『伽婢子』に於ける翻案について」(『国語と国文学』第十二卷第三号、一九三五・三)
- (33) 坂卷甲太氏は「第二部 『伽婢子』へ至る道程」第一章 鈴木正三と『因果物語』(『浅井了意 怪異小説の研究』、新典社、一九九〇・六)「初出…『了意怪異小説試論』(その一)―近世怪異小説論の基礎稿として―」(『就実論叢』第十号、一九八一・二)において、平仮名十一行本の版下文字が了意の筆跡である点、平仮名本『因果物語』巻四ノ八「女死して、庭鳥に成たる事」が了意作の『堪忍記』巻七「女鑑中」五と内容を同じくする点を例に挙げ、平仮名本『因果物語』の編著者を、了意であると推定している。さらに坂卷氏は「第二部 『伽婢子』へ至る道程」第二章『因果物語』片仮名本と平仮名本 その一(『浅井了意 怪異小説の研究』、新典社、一九九〇・六)「初出…『了意怪異小説試論』(その二)―近世怪異小説論の基礎稿として―」(『就実語文』創刊号、一九八〇・十一)において、「古くから了意がその作者に擬せられてい」る、『安倍晴明物語』、『三井寺物語』と平仮名本『因果物語』巻一ノ十七「母の亡霊来りて子を生立し事」には共に「生命を祈り替える」という構想が見受けられるとしている。
- (34) 註(2) 前掲 富士昭雄氏「伽婢子と狗張子」
- (35) 頼原退蔵氏は「近世怪異小説の一流流」(註(24) 前掲)において『曾呂利物語』やその他の御伽の咄に胚胎した説話が、『とのゐ草』に於いていかに文藝的な成長を遂げて居るか」と、『宿直草』(『御伽物語』の有する文芸性について言及している。田川邦子氏は「怪談」とのゐ草』論(『文教大学女子短大部研究紀要』第二十三集、一九七九・十二)において「奇異なるものを見つめる感覚が、ありきたりな怪談の域を超えていると同時に、そこに新たな表現の工夫が加味され、独特の世界を持つことができた例」として、『宿直草』(『御伽物語』)の

高度な文芸的世界観について述べている。

- (36) 堤邦彦氏は第三部「第三章 江戸時代人は何を怖れたか」「怪異との共棲——『宿直草』に萌すもの——」(『江戸の怪異譚』、ペリカ
ン社、二〇〇四・十一)「初出…「怪異との共棲——江戸時代人は何を
怖れたか——」(『伝承文学研究』第五十号、二〇〇〇・五)」において、
『宿直草』(『御伽物語』)には「宗教哲学に根ざす教化布宣の目的性が
はじめから用意されていない」ことを述べている。

- (37) 谷脇理史氏他校注『新編日本古典文学全集64 仮名草子集』(小
学館、一九九九・九)の『御伽物語』巻一ノ二「七命ほろびしみんぐ
はの事」頭注には「本話の後半は『曾呂利物語』巻五の五「因果さん
げの事」にも、間男が夫を殺し、僧に埋めさせようとするが、僧はこ
の男を殺す話がある。」との指摘がある。

- (38) 註(6) 前掲 太刀川清氏「解題」

- (39) 註(35) 前掲 田川邦子氏「怪談『とのみ草』論」

- (40) 註(25) 前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一
節『百物語』と『諸国百物語』

- (41) 太刀川清氏は「解題」(註(6) 前掲)において、『万世百物語』
巻一「独身の羽黒詣」、『奇異雑談集』上巻ノ四「古堂の天井に、女を
磔に、かけをく事」、『宿直草』(『御伽物語』)巻二ノ五「三人しなぐ
勇ある事」、『諸国百物語』巻二ノ五「六端の源七間男せし女をたすけ
たる事」を類話として位置づけている。しかしながらここでは、本稿
において怪異小説として取り扱ってきた『奇異雑談集』、『宿直草』(『御
伽物語』)、『諸国百物語』に収録されている類話のみの読解を進めるこ
とにした。

- (42) 註(6) 前掲 堤邦彦氏「生首をいとおしむ女—偏愛奇談の時代」

- (43) 水野ゆき子氏「生首を抱く女」(『金城日本語日本文化』第八十二
号、二〇〇六・三)

- (44) 註(6) 前掲 堤邦彦氏「生首をいとおしむ女—偏愛奇談の時代」

- (45) 註(43) 前掲 水野ゆき子氏「生首を抱く女」

- (46) 註(6) 前掲 堤邦彦氏「生首をいとおしむ女—偏愛奇談の時代」

- (47) 註(6) 前掲 堤邦彦氏「生首をいとおしむ女—偏愛奇談の時代」

- (48) 註(6) 前掲 堤邦彦氏「生首をいとおしむ女—偏愛奇談の時代」

- (49) 堤氏は「近世説話の一視覚——唱導から文芸への軌跡——」(内田
保廣氏他編『近世文学の研究と資料—虚構の空間—』、三弥井書店、一
九八八・十二)において、「唱導説話の武辺咄化」の事例として、『諸
国百物語』巻四ノ一「端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」を挙げている。

- (50) 註(49) 前掲 堤邦彦氏「近世説話の一視覚——唱導から文芸
への軌跡——」

- (51) 註(49) 前掲 堤邦彦氏「近世説話の一視覚——唱導から文芸

への軌跡——」

(52) 註(49) 前掲 堤邦彦氏「近世説話の一視覚——唱導から文芸への軌跡——」

(53) 註(6) 前掲 堤邦彦氏「生首をいとおしむ女——偏愛奇談の時代」
(54) 太刀川清氏は「第二章 仮名草子の百物語」第一節『百物語』と『諸国百物語』(註(25) 前掲)において、「牡丹堂女のしうしんの事」の事(巻四)は、『剪燈新話』の「牡丹燈記」(巻二)に拠ったものである由、「その説話の核心部分だけを採って一話を構成」している由を述べている。しかしながら本稿では、太刀川氏が巻四ノ五「牡丹堂女のしうしんの事」を「翻案説話」と述べている由に着目し、比較の爲ここに「牡丹燈記」を提示した。なお、『剪燈新話』(明・瞿佑)の巻二ノ四「牡丹燈記」は、美女・麗卿の亡霊に魅入られ、落命するに至った喬生が、その死後、麗卿と共に亡霊となって土地の人々に災いを為していたところを、鉄冠道人の法術によって罰せられ、地獄へ送られてゆくという話である。

(55) 『奇異雑談集』(写本) 下巻(朝倉治彦氏、深沢秋男氏編『仮名草子集成』第二十一巻、東京堂出版、一九九八・三)には「新渡に、剪燈

新話といふ書あり、奇異なる物語を、あつめたる書也、今、二三ヶ条を

取て、こゝに、のするなり」との記述がある。また渡辺守邦氏は「第三章 近世怪異小説」(末木文美士氏他執筆、岩波講座 日本文学と仏教 第二巻『因果』、岩波書店、一九九四・一)において『剪燈新話』所収の怪異談を仮名交り文に翻する試み」として『奇異雑談集』に『剪燈新話』(明・瞿佑)の巻一ノ四「金鳳釵記」(揚州の富人・呉防禦の娘・興娘は、恋人の興哥を思うあまり焦がれ死にしよう。その後、呉防禦の許に身を寄せていた興哥は、ある夜忍んで来た妹娘・慶娘と結ばれ、やがて駆け落ちをする。一年後、呉防禦の許に戻った興哥は、駆け落ちのことを詫びるが、呉防禦は、慶娘は病床に伏したきりである由を告げる。そして興娘の霊が慶娘に乗り移っていたという事実が明らかになり、興娘の希望により、興哥は慶娘と結婚するという話。

『奇異雑談集』(写本)には下巻ノ十三「金鳳釵記」として収録されている。下巻ノ十三「金鳳釵記」の物語展開は、原話のそれをほぼ忠実に踏襲している。しかしながら、慶娘が興哥の許に忍んで来た夜、興哥が驚いてこれを拒もうとした際の慶娘の台詞が、原話では「汝乃チ深夜ニ於テ我ヲ誘イテ此ニ至ル。将二何ヲカ為セント欲ス。我将ニ之ヲ訴ヘント。」といった、些か脅迫めいたものであるのに対し、巻ノ十

三「金鳳釵記」においては「我、此家のうちを、よく、しつて、忍び

きたれハ、人しらし、父母も、また、しるべからず。心をやすんじ、悠
／＼として、まくらを、ならべん」といった穏やかなものにならわって
いる。作品冒頭に「金鳳釵」についての説明があるなど、細かな改変
が幾つか見受けられる。巻二ノ四「牡丹燈記」(あらすじは註(54))

前掲。『奇異雑談集』(写本)には下巻ノ十四「牡丹燈記」として収録
されている。両者の設定、物語展開上の相違点に関しては、本文参照。)
巻三ノ三「申陽洞記」(隴西の李徳逢が、申陽洞記に住む猿の妖怪を退
治し、美女と富を得るという話。『奇異雑談集』(写本)下巻ノ十七「申

陽洞の事」として収録されている。両者の設定、物語展開上の相違点
に関しては、「第七章 「天狗」譚の系譜——『諸国百物語』と『狗張
子』——」において後述する。)が所収されていることを述べている。
本稿では典拠、類話との比較を通じた作品の考察を行う為、『諸国百
物語』巻四ノ五「牡丹堂女のしうしんの事」と典拠を同じくする「牡丹
灯記」を取り上げることにした。

(56) 宇佐美喜三八氏は「伽婢子に於ける翻案について」(註(32))前
掲)において、『伽婢子』巻三ノ三「牡丹灯籠」が『剪灯新話』巻二ノ
四「牡丹燈記」に「依拠」していることを述べている。本稿では典拠、
類話との比較を通じた考察を行う為、『諸国百物語』巻四ノ五「牡丹堂
女のしうしんの事」と典拠を同じくする「牡丹灯籠」を取り上げるこ
とにした。

(57) 松田修氏他校注『新日本古典大系75 伽婢子』(岩波書店、二〇
〇一・九)脚注。

(58) 註(25)前掲 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一
節「『百物語』と『諸国百物語』」

(59) 池田彌三郎氏は「人を目指す幽霊」(『日本の幽霊』、中央公論新
社、一九七四・八)において「後妻打ち」の原動力である「うわなり
妬み」——先妻の後妻に対する嫉妬——に言及した際「先妻の怨念は、
夫には向かわない。後妻に集中するのである。」と、「後妻うち」の傾
向について述べている。また、堤邦彦氏は「女霊の江戸怪談史——仁
義なき「後妻打ち」の登場」(註(7)前掲)において『諸国百物語』
巻二ノ九「豊後の国何がしの女ばう死骸を漆にて塗りたる事」を取り
上げ「男に死滅の返報をもたらす女霊の恐怖が新時代の主題となって、
人々の怪異観を形成した経緯は、日本怪談史の特筆すべきことがら」
と評し、「後妻うち」の話のルールに破綻が生じている由を指摘し

ている。これら両氏の指摘をふまえ、本稿では池田氏の「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」を「後妻うち」の「ルール」として定義づけてゆく。

- (60) 註(12) 前掲 宮田登氏「『女の首』のフオークロア」
(61) 註(12) 前掲 宮田登氏「『女の首』のフオークロア」
(62) 註(1) 前掲 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「〈鼎談〉江戸の怪異譚と西鶴」
(63) 註(1) 前掲 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「〈鼎談〉江戸の怪異譚と西鶴」
(64) 註(12) 前掲 宮田登氏「『女の首』のフオークロア」
(65) 註(2) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」
(66) 註(12) 前掲 宮田登氏「『女の首』のフオークロア」
(67) 註(49) 前掲 堤邦彦氏「近世説話の一視覚——唱導から文芸への軌跡——」
(68) 註(25) 前掲 太刀川清氏「『諸国百物語』成立の背景」
(69) 湯沢賢之助氏は「『新御伽婢子』解説」(『古典文庫第四四一冊 新御伽婢子』、一九八三・六)において、「最近の話としてその面白さを味わってもらい、かつ、教訓のよすがにしたかった」と、『新御伽婢子』の執筆意図について言及している。また、太刀川清氏は「第七章 浮世草子の伽婢子」第一節「新御伽婢子」(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)「初出：『新御伽婢子』の位置」(『国語国文研究』第六十一号、一九七九・二)において、「民話的怪異小説として成立した」が「名所記的な性格と見聞記的な性格」を持ち、「新しさ」がそこにあったと、『新御伽婢子』の有する斬新な特質について述べている。さらに当麻晴仁氏は「『新御伽婢子』考——片仮名本『因果物語』との関係——」(註(7) 前掲)において「読むための怪異談を志向し、怪異性を高めるための積極的な改変を見せる」といった、『新御伽婢子』における、娯楽性を追求する為の改変について言及している。
- (70) 註(6) 前掲 堤邦彦氏「生首をいとおしむ女——偏愛奇談の時代」
(71) 高田衛氏「怪談の寺」(『江戸の悪霊祓い師』、筑摩書房、一九九一・一)
(72) 註(12) 前掲 宮田登氏「『女の首』のフオークロア」
(73) 註(7) 前掲 当麻晴仁氏「『新御伽婢子』考——片仮名本『因果物語』との関係——」
(74) 渡辺守邦氏は「第三章 近世怪異小説」(註(55) 前掲)において、「和漢儒仏にわたる博識を動員して、もろもろの怪奇を論評した書」と、『百物語評判』を評している。
- (75) 谷脇理史氏他校注『新編日本古典文学全集64 仮名草子集』(小

学館、一九九九・九）頭註。

(76) 太刀川清氏は「第三章 浮世草子の百物語」第一節『諸国新百物語』(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)(初出…『諸国新百物語』と『御伽比丘尼』)(『長野県短大紀要』第三十三号、一九七八・十二)において、『諸国新百物語』は貞享四年二月刊行の西村本『御伽比丘尼』(江戸新革屋町 西村半兵衛・京三条通 西村市郎右衛門版)の改題本であった」由を指摘している。

(77) 註(2) 前掲 富士昭雄氏「伽婢子と狗張子」

(78) 和田恭幸氏は「浅井了意の仏書とその周辺(二)」(『国文学研究資料館紀要』第二十四号、一九九八・三)において、『狗張子』卷一ノ六、

卷四ノ九、卷四ノ十を例に挙げ、唱導説話との類似性を指摘している。なお氏は、『法林樵談』、『父母恩重経話談抄』、『善悪因果経直解』、『堪忍記』などといった了意自身の著作にも、これら三話の類話が認められることを述べている。

(79) 註(78) 前掲 和田恭幸氏「浅井了意の仏書とその周辺(二)」
(80) 註(1) 前掲 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「(鼎談)江戸の怪異譚と西鶴」

以下、『伽婢子』本文引用は全て、松田修氏他校注『新日本古典文学大系75 伽婢子』(岩波書店、二〇〇一・九)に拠る。

【表1】近世初期～中期怪異小説における、斬首する・首を持ち去る話

作品	説話中	幽霊・妖怪変化によるもの	人間によるもの
『奇異雑談集』 (写本)	1/39 (2.6%)	0/39 (0%)	1/39 (2.6%)
片仮名本 『因果物語』	4/187 (2.1%)	2/187 (1.1%)	2/187 (1.1%)
平仮名本 『因果物語』	4/85 (4.7%)	1/85 (1.2%)	3/85 (3.5%)
『曾呂利物語』	5/41 (12.2%)	3/41 (7.3%)	2/41 (4.9%)
『伽婢子』	3/68 (4.4%)	2/68 (2.9%)	1/68 (1.5%)
『宿直草』 (『御伽物語』)	3/68 (4.4%)	0/68 (0%)	3/68 (4.4%)
『諸国百物語』	11/100 (11%)	9/100 (9%)	2/100 (2%)
『新御伽婢子』	4/48 (8.3%)	1/48 (2.1%)	3/48 (6.3%)
『百物語評判』	1/42 (2.4%)	0/42 (0%)	1/42 (2.4%)
『御伽比丘尼』 (『諸国新百物語』)	1/22 (4.5%)	0/22 (0%)	1/22 (4.5%)
『狗張子』	4/45 (8.9%)	0/45 (0%)	4/45 (8.9%)

* 斬首する・首を持ち去る話/所収話数

* カッコ内は割合 (小数点第一以下四捨五入)

* 「幽霊・妖怪変化によるもの」は、斬首する・首を持ち去るという行為が幽霊・妖怪変化によるものである話、「人間によるもの」は、これらの行為が人間によるものである話を指す。

【表2】近世初期～中期怪異小説における、斬首する・首を持ち去る話の巻次・章題・概略 (『諸国百物語』を除く)

作品	巻次	章題	概略
『奇異雑談集』 (写本)	上巻ノ四	「古堂の天井に、女を磔に、かけをく事」	夫が間男を殺して首をとり、磔にした妻の前にそれを置く。
片仮名本 『因果物語』	上巻五ノ一	「妬深女死シテ、男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事」	本妻に妾を殺害し、首を持って来るよう言いつけられた手代が、妾の首を取り、本妻の許に持参する。本妻はその首に食いつく。
		上巻六ノ二	「妬深女、死シテ後ノ女房ヲ、取殺事付下女ヲ取殺事」

			れに食い付いている。
	中巻七ノ二	「鳩来、御剣ヲ守居事付神前ノ刀ニテ、化物ヲ切事」	奉公先を逃げ出し、異形の姿となった下女の首を、主人が切り落とす。
	中巻三十五	「幽霊、刀ヲ借テ人ヲ切事」	前妻の幽霊が、後妻の首を切り落とす。
平仮名本 『因果物語』	巻一ノ八	「妾を妬て、夫に怨をなしかる、女房の事」	本妻に妾を殺害し、その様を見せてくれるよう言いつけられた手代が、妾の首を取り、本妻の許に持参する。本妻はその首に食らいつく。
	巻二ノ十七	「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」	火車が、邪な仏道の教義をとなえた僧の死骸を持ち去り、手足、首を引きちぎる。
	巻四ノ一	「恋ゆへころされて、其女につきける事」	主君の娘に思いをかけた下人が、その望みゆえに主君の怒りを買ひ、斬首される。
	巻六ノ四	「非分にころされて、怨をなしける事」	主君の怒りを買った侍が、首をうち落とされる。
『曾呂利物語』	巻一ノ一	「板垣の三郎高名の事」	主君の命を受け、魔所に向いた侍が、妖怪変化に首をとられる。
	巻三ノ二	「離魂と云ふ病ひの事」	妻が二人になったため、どちらが「變化の物」かを吟味していた夫が、「變化の物」と判じた妻を、首をうち落として殺す。
	巻三ノ四	「色好みなる男見ぬ戀に手を執る事」	契りを交わした男に、醜貌を嫌われ殺された女の亡霊が、男を引き裂いて殺し、首をとる。
	巻四ノ七	「女の妄念怖ろしき事」	本妻の亡霊が、妾の首をねじ切って殺す。
『伽婢子』	巻五ノ五	「因果讎悔の事」	旅の僧が、自分を殺そうとした男の首をうち落とす。
	巻六ノ六	「死難先兆」	何者かが己の首を切って持ち去る夢を見た男が、主君の罪科を押し付けられ、首を切られる。
	巻八ノ二	「邪神を責殺」	鹿島明神が配下の神に云いつけ、災いをなす蛇神の首を取らせる。
	巻十ノ三	「折て幽霊に契る」	主君の娘に思いをかけた小姓が、恋文を送ったために、首をはねられる。
『宿直草』 『御伽物語』	巻一ノ二	「七命ほろびしめんぐはの事」	密夫に殺されかけた旅の僧が、男の首をうち落とす。
	巻二ノ五	「三人しな／＼勇ある事」	間男をした女が、殺された間男の首に執

	巻五ノ三	「仁光坊といふ火の事」	着する。
『新御伽婢子』	巻二ノ四	「女生首」	人妻に艶書を送ったという濡れ衣を着せられた僧侶が、斬首される。
	巻二ノ九	「鷹塚昔」	都から関東に下る僧侶が、己に恋慕する女に懇願され、その首を切り落とす。
	巻三ノ三	「死後嫉妬」	侍が雉の鷹の首を射切る。
『百物語評判』	巻三ノ九	「血滴成小蛇」	前妻の亡霊が、夫が目をかけていた召使の首を引き抜いて殺す。
	巻四ノ九	「舟幽霊附丹波の壱が火、津の国仁光坊の事」	東国の男と恋仲になった女が、男が本妻の怒りを恐れたが為、その中間によって首を打ち落とされる。
『御伽比丘尼』 〔諸国新百物語〕	巻三ノ二	「昔ながらの今井物がたり 付継母の邪見観音の慈悲」	己に恋慕する人妻の想いを拒絶したため、その恨みを買った僧侶が讒言ゆえに斬首される。
	巻四ノ五	「非道に人を殺す報」	継母に憎まれた少年が、その下部によって刺し殺され、首をとられる。
『狗張子』	巻五ノ一	「今川氏真没落付三浦右衛門最後」	侍が、召し使っていた下人夫婦を、些細な過ちゆえに首をうって殺す。
	巻六ノ四	「亡魂を八幡に鎮祭る」	戦の折、主君を見捨てて逃亡した寵臣が、首をとられて殺される。
	巻七ノ三	「飯森が陰徳の報」	朋輩に讒言された侍が、打ち首にされる。恩義ある相手を殺害しようとした侍が、それを知った家臣により、首をとられる。

【表3】『諸国百物語』における、斬首する・首を持ち去る話の巻次・章題・概略

巻次	章題	概略
巻一ノ一	「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」	主君の命を受け、魔所に向いた侍が、妖怪変化に首をとられる。
巻一ノ八	「後妻うちの事付タリ法花經の功力」	前妻の亡霊が、生前已を「てうぶく」していた後妻を殺害し、首をとる。
巻一ノ十一	「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」	妻が二人になったため、どちらが「まことの妻」か「へんげの物」かを吟味していた夫が、「へんげの物」と判じた妻を、首をうち落として殺す。
巻二ノ五	「六端の源七ま男せし女をたす」	間男をした女が、殺された間男の首を樽打ちに渡し、

	けたる事」	寺で供養をしてくれるよう頼む。
卷二ノ九	「豊後の国何がしの女ぼう死骸を漆にて塗たる事」	前妻の亡霊が、後妻の首をねじ切って殺す。
卷二ノ十八	「小笠原殿家に大坊主ばけ物の事」	大坊主の化け物が、小笠原殿の内儀の身を二つに引き裂き、首をとる。
卷三ノ七	「まよひの物二月堂の午玉にをそれし事」	後妻と夫に共謀して殺された前妻の亡霊が、二人を殺して首をとる。
卷三ノ二十	「賭づくをして我子の首を切れし事」	「賭づく」のため、死人の指を切り取った女が、子の首をとられて殺される。
卷四ノ一	「端井弥三郎幽霊を舟渡せし事」	本妻の幽霊が、夫と共謀して己を殺した妾を、首を引き抜いて殺す。
卷四ノ五	「牡丹堂女のしうしんの事」	女の亡霊が、契りを交わした男を取り殺す。その鬨騒が棺の中で、男の首をくわえている。
卷五ノ六	「紀州和哥山松本屋久兵衛が女ぼうの事」	母親の亡霊が、己の夫を奪った継娘を、のど首を食いちぎって殺す。

七―一・はじめに

以上、前章段では『諸国百物語』において、一つの章群を形成している
と見られる、斬首・首を持ち去る話を取り上げ、典拠や類話との比較を通
じて、その目的あるいはそこに込められた意図について、考察を加えてき
た。

結果、『諸国百物語』以前の近世怪異小説における、斬首・首を持ち去る
という行為には、「後妻うち」、「罰」、「愛人の首への執着、妖怪退治とい
つた意図が込められていること。

そして、『諸国百物語』における、斬首・首を持ち去る話では、その行
為に込められた意図は、「罰」、「後妻うち」、復讐の成就の証左、恋人の首
への執着、妖怪退治などであり、復讐の成就の証左を除けば、意図そのも
のは独自性を持った真新しいものではないもの、そこに登場する人物の
造形や話のモチーフなどに工夫をこらすことで、怪異の人間に対する優位
性を強調していること。

さらには、『諸国百物語』以後の、近世怪異小説における、斬首・首を
持ち去る話では、行為の主体が人間であり、こうした傾向に対し、斬首・
首を持ち去るといふ行為の主体の大半が「異界の存在」であって、各々の
話に怪異の脅威をいや増す為の工夫をこらす『諸国百物語』は、近世怪異
小説群の中でも際立つ特質を持ち続けているという、結論が導き出され
たのである。

本章段ではそこで、このような『諸国百物語』のさらなる文芸的特質及
び近世怪異小説の一潮流について考察を加える為、「天狗」譚というテー
マを取り上げてゆく。

そして、前述した近世怪異小説群（1）の中で、「天狗」譚の所収比率が
最も高い『狗張子』の読解を中心に、本論を進め、『諸国百物語』におけ
る「天狗」譚との比較を通じて、各々の作品の文芸的特質のありようを、よ
り明確にしてゆきたいと考える。

七―二・「天狗」譚——『諸国百物語』以前

浅井了意の怪異小説短編集である『伽婢子』は寛文六年（一六六六）に
刊行された。その続編である『狗張子』が刊行されたのは、それから二十
六年後の、元禄五年（一六九二）一月のことである。

だがこうした「正編続編の関係」にありながら（2）、これら二作品に与
えられてきた評価は、決して同等のものではない。

『伽婢子』に関しては、先学から「和歌、和文脈、或いは狂歌、神仙、軍事、医学など、和・漢・仏をはじめ、諸々の思想や学問が組み込まれているのである」(3)、「了意は翻案する時に、その背景となるべき時代、場所の選択にかなり注意を払っている」(4)、「原話を日本化しようとする翻案意識と、原話を文学化しようとする創作意欲」(5)、「物語文学の伝統である浪漫的精神によって、原話は日本的に換骨奪胎せられ」ている(6)といった、その思想性、翻案手法、創作性について、今日では高い位置づけがなされているようである。

また『伽婢子』についての研究も、数多くなされてきた。このような先行研究の中心を占めてきたのは、『剪燈新話』、『剪燈余話』、『五朝小説』との関連性について論じたものや、典拠論であった。その結果、『伽婢子』の典拠は、今日ではほぼ明らかにされたといつてよい(7)。こういった典拠論の他には、翻案手法研究や、了意の啓蒙作家精神、『伽婢子』と道教の関わり、仏教との関連など、『伽婢子』の思想を扱った研究などが存在している(8)。

一方、こうした『伽婢子』の評価に比すれば、『狗張子』の文学作品としての位置づけは、さほど高いものとは言い難い。

富士昭雄氏は『狗張子』はその典拠を「『剪燈新話』『余話』のごとき艶情溢れる伝奇小説ではなく、素朴な説話性の濃い志怪小説や雑著」に依拠している為、『伽婢子』に比べて作品としてやや香気を欠く」ことを指摘しており(9)、和田恭幸氏は、『伽婢子』よりはるかに精彩に乏しく、ネタ切れの感を禁じ得ない。」と述べ、その理由として「誰の目にも典拠がわかる、使い古された唱導材の援用と思しき数話が含まれる」ことを挙げている(10)。

また『狗張子』は先行研究も、典拠ないしは類話の探索が中心を占めており(11)、中には『狗張子』の男色譚について言及している研究もあるものの、その数もさほど多くはない(12)。

なお、これらの先行研究の中には、了意の版本の筆跡に関する研究も存在する。そして本稿においては、これらの先行研究のうち、北条秀雄氏(13)、石川透氏(14)の説に従い、『狗張子』が了意の手による作品であるという前提のもと、論を進めてゆきたいと考える。

いずれにせよ、『狗張子』の文芸的価値、ならびに文芸的特質については、これまであまり着目がされてこなかったようではある。

本稿ではそこで、『狗張子』に収録されている三話の「天狗」譚(15)

——卷六ノ二「天狗にとられ、後に帰りて、物がたり」、卷六ノ三「板垣信形いたがきのぶかた逢あふ天狗てんぐ」、卷六ノ五「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」——に着目する。

これら三話はこれまでも先学から、典拠ならびに類話の指摘がなされている。しかしこれらの作品を通読してみると、これまでに典拠として指

摘されてきた前述の章群との構成・展開上の共通点は、部分的なものに留まっている、ないしは更なる典拠が存在するように思われ、再検討の必要性を感じた。

本稿ではこうした先学の意見を踏まえつつ、『伽婢子』や『諸国百物語』をはじめとする、『狗張子』以前の近世怪異小説群に登場する天狗譚との比較により見出した、『狗張子』の「天狗」譚との差異を通じ、主人公の人物設定や天狗の描写に対して加えられた改変に着目し、読解を進めてゆきたい。

初めに、『狗張子』以前の近世初期怪異小説における、「天狗」譚を提示し、その特徴について考察を加えてゆく。

【表1】は、『狗張子』が刊行された元禄五年までの近世初期怪異小説を取り上げ、各々の作品において、「天狗」譚が収録されている割合を示したものである。

万治頃の刊行が推定される、片仮名本『因果物語』を例にとると、所収説話187話のうち、「天狗」譚は1話であり、全体の0.5パーセントを占めているのである（小数点第一以下は四捨五入とした）。

このようにして【表1】に掲載されたそれぞれの作品を見てゆくと、『狗張子』と他の近世初期怪異小説とを比した際、『狗張子』の「天狗」譚の所収率は6.7パーセントとなっており、【表1】に掲載した怪異小説群の中で、最も高い。

以上の事柄をふまえると、『狗張子』においては、「天狗」譚というテーマが、他の近世初期怪異小説に比べ、比較的重要視されている様子がうかがわれるのである。

ついで、【表1】に掲載された近世初期怪異小説のうち、「天狗」譚の読解を進め、それぞれの特質を明らかにしてゆきたい。

【表2】は【表1】に掲載した近世初期怪異小説における、「天狗」譚の、巻次・章題・概略を、それぞれ記したものである。

初めに、寛文元年（一六六一）に刊行された、片仮名本『因果物語』に収録されている天狗譚について、考察を加えてゆく。

先学から、後続の文芸作品への影響、唱導性、ならびにその語り口や筆法（16）についての高い評価が賦与されている、片仮名本『因果物語』

の当該話は、下巻一「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」ノ二であり、以下にそのあらすじを述べる。――下総国・大龍寺の祖龍

長老は慢心が深かったが、ある時老僧たちを呼んで「向上ノ事」を談じている折、自分の顔はどのようなかと言った。すると長老の鼻は八寸程に伸び、口は耳元まで裂けていた。その後杉の下にて自分を呼ぶので、ただ今参上すると言い、あまりに叫び狂乱するので、それをようよう押し留め、僧侶たちが集まって般若心経を唱え、強く祈った。すると山々

の天狗が名乗り、退いて行った。それから七日七晩、昼夜の区別なく祈ったところ、長老の容貌はもとに戻り、本復したが、何も覚えてはいなかった。人々の話を聞いた長老は、自らの前非を悔い、三年を経て死去したという。

本編における「少シスコ法門ハフモンノ上手ナルニ依テヨツ、尊タフトバレテ。慢心マンシン深カリケルガ。」といった祖龍長老の人物描写からは、なまじい才覚のあるが故に慢心した高僧に、天狗がとりつくという構図がうかがわれよう。

また、「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」ノ二においては、天狗は慢心した僧侶を戒める為の超人に近い役割を担っており、物語末尾において、一連の話を聞いた祖龍長老が「自ラミシカ前非ゼンヒヲ悔クヒ」るといふ展開からは、本編の有する教訓的色彩も見出されるのである。

さらには、自らの非を悔いたにも拘らず「三年ネンヲ経テ死去ス。」——すなわち、三年しか生きることが叶わなかったという設定からは、天狗が、いかに改心しようとも、ひとたび慢心を抱いた人間を、全きまでには許しはしないという、強靱な意志と力を有した存在として位置づけられている様、ならびに天狗の呪力のもたらす、どこかしら薄気味の悪い余韻が、見受けられるのである。

以上の事柄から、片仮名本『因果物語』における「天狗」譚からは、①天狗が慢心した僧侶を罰する、超人的存在として位置づけられている。②教訓的色彩が濃厚である。

とといった特質がうかがわれる。さらには、「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」ノ二に見る、教訓性・唱導性、ならびに、天狗の超人的能力に比した際の、慢心した人間の卑小さは「因果応報のことわり」(17)を人々の心に浸透せしめ、「人の心の罪障性を戒める」(18)といった、片仮名本『因果物語』の特質を、体現していると言っていいたいだろう。

つづいては、万治年間頃の成立が推定される、平仮名本『因果物語』における「天狗」譚を取り上げてゆく。先学からその文芸性、物語性や娯楽性、ならびに後続の文芸に対する影響などへ、高い評価を賦与されている(19)平仮名本『因果物語』。そこに収録されている「天狗」譚は、卷三ノ九「学匠がくしやう高慢かうまんして、天狗てんくにつかれし事」であり、前述の「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」ノ二と内容が一致する話である(20)。

そして、祖竜長老に関する「かくれなき学匠がくしやう也」「あまりに高慢かうまんして」といふ描写からは、「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」ノ

二と同様に、才能がある為に慢心した高僧と天狗との結び付き、ならびに、天狗がその慢心を戒める役割を担うという構図の踏襲が、見受けられるのである。

これらの事柄から、平仮名本『因果物語』における「天狗」譚からは、①天狗が慢心した僧侶を罰する、超人的存在として位置づけられている。②教訓的色彩が見受けられるものの、片仮名本『因果物語』のそれに比し、やや希薄となっている。

といった特質が見受けられるのである。

しかしながら、「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」ノ二とは、長老が前非を悔い、三年後に死去するという展開が異なっており、「学匠高慢して、天狗につかれし事」においては、一連の騒動の後、長老は何も覚えていなかったという形で、話が結ばれている。

以上の事柄から、「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」ノ二に比し、「学匠高慢して、天狗につかれし事」では、その教訓的色彩、ならびに天狗の有する強靱な力の描写が、少しく薄れていると言うことが出来よう。

従って、平仮名本『因果物語』の「天狗」譚である、「学匠高慢して、天狗につかれし事」は、その概略を、「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」ノ二からほぼ受け継いでいるにも拘らず、「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」ノ二の眼目であった、天狗の呪力のもたらす薄気味の悪い余韻を削除することにより、怪異の人間に対する優位性が削られているのである。

前述したように、先学からその文芸性や物語性、ならびに娯楽性についての指摘がなされている、平仮名本『因果物語』の所収話にしては、やや文芸的意匠を欠いていると言えるだろう。

ついで、寛文三年（一六六三）に刊行された『曾呂利物語』における、「天狗」譚についての読解を進めてゆく。

これまでの章段でも言及してきたように、先学から近世怪異小説中に占める大きな役割、ならびにその娯楽性（21）についての指摘がなされてきた、『曾呂利物語』における「天狗」譚、卷二ノ七「天狗の鼻つまみの事」のあらすじは、以下のようなものである。――参河の国に住む「だうしん」という坊主は、何につけても怖ろしいということを知らずにいた。ある時、在所からの帰るさ、寺の近くに死人が横たわっていた。「だうしん」は死人の腹を踏んで通ったが、死人は「だうしん」の裾を啜えた。何者を路頭にこのように置くのだろうと訝った「だうしん」は、夜が明けたなら取って置こうと思い、件の死体を寺の門前の大木に縛りつけた。その夜、死人は「だうしん」の名を呼び、縄で己を縛ったことをなじり、家の中に入ってくる。「だうしん」が、太刀で死人の手を切り落とすと、死人は消えた。それから夜が明け、寺には毎朝参詣に来る老女が訪ねてくる。老女は昨夜「だうしん」が怖ろしい目に遭ったことを聞いた由を言い、件の腕を

見せてくれと云う。「だうしん」が腕を見せると、老女は「我等が手にてはべる。」と言って消え失せ、辺りは再び暗闇に戻った。それから「だうしん」は「世の常の臆病」となり、土地にいられなくなったという。

「天狗の鼻つまみの事」においては、前述の片仮名本『因果物語』や平仮名本『因果物語』の「天狗」譚のように、天狗がその異形の姿を現すことで怪異の正体が判明するという描写はなく、結末部分の「常に自慢しける故、天狗の鼻をつまみけるとぞ。」の一条で、怪異の正体が天狗による戒めであったことが明らかになるという構図を取っているのである。

さらに「それより此の坊主世の常の臆病になりて、此所にもゐ侍らざりしとかや。」という展開からは、前述の章群に比し、慢心した人間が、天狗から被る「罰」の重さが、増大している傾向を、見て取ることが出来る。しかしここでもまた、怖いもの知らずという一種の非凡さ故に慢心していた僧侶が天狗に戒められるという展開、天狗は慢心した人間を戒める為の超人的役割を担うという設定は、前述の二話に通底している。

そして「何事によらず、よろづ高慢なるものわざわひに逢へることこれに限るべからず。」といった末尾に見る教訓的事象(22)もまた、前述の作品群に類するものがあると言えよう。

以上の事柄から、『曾呂利物語』における「天狗」譚には、
 ①天狗が慢心した僧侶を罰する、超人的存在として位置づけられている。
 ②教訓的色彩が濃厚ではないにせよ、見受けられる。
 といった特質がうかがわれるのである。

しかしながらこれらの特質は、前述してきた、片仮名本『因果物語』、平仮名本『因果物語』に所収されている「天狗」譚の規矩をさほど脱し得てはおらず、『曾呂利物語』独自の「天狗」譚の特質が見受けられるとは言い難い。

これらの事柄から、『曾呂利物語』における「天狗」譚は、『曾呂利物語』自身が有する「娯樂志向の世俗系怪異小説」(23)としての魅力を全きまでに生かしたものでないと言えよう。

つづく「天狗譚」は、先にもその文芸的意匠ならびに特質について言及を加えてきた、『伽婢子』に収録されている二話である。

初めに卷十ノ六「了仙貧窮付天狗道」を取り上げる。『剪燈新話』卷四ノ

三「修文舎人伝」を原話とする(24)この話のあらすじは、以下の通り

である。——播州賀古郡の了仙法師は、博学にして弁舌にも優れていた。しかし頑固で狂気じみた性分が災いし、世に容れられず貧しい生活を送っていた。己の不遇が前世からの因縁であると心を慰めつつも、慢心を捨てきれぬ了仙は、天文の末に鎌倉に病死し、光明寺に葬られた。ある日同学の栄俊は藤沢辺で、豪華な装いをした了仙の行列に行き会う。友人がその才覚に相応しい地位を得たことを誉める栄俊に、了仙は自分が慢心ゆえに天狗道に落ち、学頭の職に選ばれたことを告白する。しかしながら、生前に徳も功も立てることが出来なかった自分が慢心の報を受けていることを告げ、天狗の姿となった了仙は、熱鉄の湯を飲まされ、もだえ苦しみつ姿を消す。栄俊は信心を深くし、諸国を行脚しつつ了仙の菩提を弔ったという。

ついで、原話とされている「修文舎人伝」のあらすじを述べる。——博学ではあったが貧乏な文士・夏顔は、全てを運命と甘受する日々を送り、旅先で没する。だが夏顔の友人——「了仙貧窮付天狗道」の栄俊に相当する——はある時、盛装した夏顔と従者たちの行列に出くわし、その後の朝再度、夏顔に出会う。夏顔は友人に、自分が冥土の修文舎人となったこと、遺稿を出版して欲しいことを告げる。友人がその頼みに応じると、その後も夏顔は友人のもとを訪れては未来の吉凶を教え、生死の境を越えた交遊を続ける。やがて友人が病気にかかると、夏顔は己の役職の期限がもうじき切れること、遺稿の出版の礼として代わりに友人を推挙したいと思っていることを告げる。友人は喜んでその勧めに応じ、数日後に死ぬ。「了仙貧窮付天狗道」と「修文舎人伝」の相違点に関しては、花田富二夫氏による詳細な分析がなされており(25)、さらには「原話においてはその因果応報の理が善報として輪廻してゆくのに対して、『伽婢子』では悪報として構想化されている」との、仏教的色彩の濃厚な評が賦与されているのである(26)。

しかし本稿においては、「天狗」譚という観点から、「了仙貧窮付天狗道」の読解を進めていきたいと考える。

「天狗」譚という観点から本編を一読した際、先ず目に付く特質は、作品名ならびに「わが天狗道はたゞよくその器量をえらび、その職をあてがふに、あやまらず。をよそ世の人貴賤をいはず少も慢心ある者はみな死して魔道に来る。」「その慢心のむくひを見たまへ」という了仙の言に見る、慢心した僧侶と天狗の結び付きであろう。

そしてこの構図は、前述の「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」ノ二における「少シ法門ノ上手ナルニ依テ、尊レテ。慢心深カ

リケル」僧侶に天狗が憑依するという物語展開、「学匠高慢して、天狗につかれし事」(27)、さらに「天狗の鼻つまみの事」における、怖いもの知らずを鼻にかけた僧侶が天狗に脅され、「世の常の臆病」となってしまうという話の流れにも、見出すことが出来るのである。

このような視点から「了仙貧窮付天狗道」の読解を進めたならば、本編は【表2】に見る、『伽婢子』以前の近世怪異小説(28)の規矩を脱し得ていない作品として位置づけられてしまうことになる。

しかしながら、慢心した僧侶が天狗道に陥るといって、従来の「天狗」譚の踏襲のみならず、「了仙よ／＼、汝学問よくつとめて才智あり。心ざしよこしまなく、名は世に聞えながら、いかに身ひとつを過わび、一寺の主ともならざるや」「なんぞ因果の理にまよふて、みだりに名利をもとめんや」といった、二つの矛盾する思いを抱えた主人公の姿を描く点。

さらには「修文舎人伝」の「盖シ命有り。幸ニシテ致スベカラズ。吾順受スルコトヲ知ルノミ。豈ニ敢テ非理ニ妄ニ求ンヤ」からうかがわれる、貧窮を天命として受容する夏顔の心情とは対照的な——「され共学智に

慢心あり。人のをのれを用ひざる事をいきどをる思ひむねにふさがり、天文の末の年鎌倉にして病死しければ、光明寺のかたはらにうづみたり。」といった描写に見る——慢心に起因する憤懣故に、天狗道に墮ちるといって了仙の心情を具体的に描く手法。

そして、典拠の主題であった、二人の文人の幽冥境を超越した、麗しい交遊といった主題(29)を払拭し、世に容れられぬあまり憤死し、天狗道に墮した僧侶の醜悪さを以て、それに代えるという翻案技法は了意独特のものであり、『伽婢子』以前には見受けられないものである。

そしてこれらの技法は、「了仙貧窮付天狗道」の天狗像をして、自身が慢心に起因する苦しみや弱さを背負った存在にせしめているという結論が、導き出されるのである。

続いての天狗譚は、卷十三ノ一「天狗塔中に棲」である。『酉陽雜俎』卷十四「諾臯記」の「博士丘濡説云々」を原話とする(30)、「天狗塔中に棲」のあらすじは、以下のようなものである。——都の糺の河原で猿樂能が行われた際、棧敷から火事が起こり、死人も出る騒ぎになった。その騒ぎの最中、町人の子どもが行方知れずになる。二十日ほど後に帰ってきた子どもは、自分が法勝寺の九重の塔に住む天狗にさらわれていたこと、火事が天狗の仕業であること、天狗が道行く人々に様々な怪異をなしてい

たことなどを語ったという。

作者たる了意はこの話を執筆するにあたり、原話「博士丘濡説云々」を、大幅に改変している。

「博士丘濡説云々」は、古塔に住む天人が、妻にするために村の女をさらい、その女性がさまざまの怪異を目の当たりにする話である。奇談であると同時に、異類婚姻譚としての側面も有しているといえる。

対する「天狗塔中に棲」においては、この設定が法師と町人の子の次郎に置き換えられ、婚姻譚の要素が削除されているのだ。前述の「了仙貧窮付天狗道」に見る、原話にはない、「天狗」譚の側面を本編に挿入し、その主題を「天狗」譚に変貌させるという手法が、ここからもうかがわれよう。

そして「博士丘濡説云々」には、天人が地に降り、人間に怪異をなす場面がある。以下にその箇所を引用する。

地ニ至リテ方二人ト雑ル。或ヒハ白衣ノ塵中ナル者有レバ、其物、斂手シテ側ニ避ク。

或ヒハ其ノ頭ヲ打チ、其ノ面ニ唾スル者ヲ見ルニ、行人悉ク見エザルガ若シ（訓点は私にほどこした）。

女がこの振舞いのいわれを尋ねると、天人は自分が敬意を払った者は「忠直孝養ニシテ釈道ノ戒律法籙ヲ守ル者」、悪さをしたのは「牛肉ヲ喫ラフ者」であると答える。

そして、「天狗塔中に棲」においては、このくだりにかなり大幅な改変が見受けられる。

地に降りた天狗に悪さをされる人間は「牛をくらひ馬をくらひ、あるひは家に飼をきながらその犬・庭鳥をころしくらふもの」といった、「博士丘濡説云々」に見る肉食者だけではない。

「又頭をはりて通りしは、あるひは金銀・財宝おほくもちてまづしき人

をあなづり、生才覚ありてをろかなるものをくだし見る、すこしの

芸能あれば、これに過じと自慢する奴原は、つらのにくさにかうべ

をはりて通る。又せなかをつきたをしけるは、小学文ある出家の、内

には道心もなく慈悲もなく重邪欲にあまり、外には学文だてして人を

あなづり、いたづらに信施をくらひ旦那をむさぼり、非道濫行なるが

にくさに突たをしたり。すこしの武勇を自慢して、人のある物かと思

はぬつらつきの見られねば、にくさに喧嘩けんくわさせたり。」

といった、地に降りた天狗が、慢心した人々に様々な所作を為す描写からは、天狗に罰せられる対象が多様化、具体化され、その描写が詳細になっていること、ひいては人間の軽薄さ、醜悪さといった負の側面が強調されていることがわかる。

さらには、町人の子どもをさらい、誰にも見咎められずに大名の棧敷から、酒やさかな、菓子などをとる、道行く悪人に罰を与える。はては、

棧敷のならばたる家／＼の幕まくうちまはし、大きにをگریたる体ていなりけ

れば、此(二)法師、「あなにくや。あな見られずや。なにのこともなき奴

原はらのひげくひそらし、我はがほなる風流づくし、鼻はなのさきうそやぎた

るありさまかな」と、ひとりごととして、「汝は此(二)もの共のうろたゆる

躰てい見たく思ふか。いでさらばうごきみだれて、うろたゆる躰見せん」

とて、我をかきいだき舞台ぶたいの屋ねにあがり、なにやらとなへられし

かば、東の棧敷より火もえ出て風ふきまどひ、百余間の棧敷一同に焼

あがり、貴賤男女うへをしたへもて返し、さはぎみだれうろたへまど

ふてあやまちをいたし、疵きずをかうふり、死するものはなはだおほし。

という、慢心する人間を嫌悪するあまり、火事と、それに起因する惨憺たる混乱状況を創り出すのは、他ならぬ天狗なのである。

こうした描写からは、前述の片仮名本『因果物語』や平仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』の「天狗」譚に描かれていたような、慢心した人間を戒める、超人的存在としての天狗像が踏襲されている様が見受けられるのである。

しかしながら、「天狗塔中に棲」における天狗は、慢心した人間を、その超人的能力によって罰するだけの存在ではない。

・「出て行給ふ道に人にあふて礼をなし給ふは、誰ぞ」といへば、「それは道心ふかく、慈悲正直じひちきに信心しんくあつき人なり。此人邪欲じやく名利の思

ひなし。善神身をはなれず諸天したがふて守り給へば、おそれて礼をいたせし也。」

・「すべて、なにのみち、なにの人といふとも正直慈悲ちきじひにして信しんある人はおそろしきぞ。」

といった描写からもうかがわれるように「正直慈悲にして信ある人」には畏敬の念を払うという側面をも兼ね備えているのである。

また天狗は「高位高官かうみかうはんの人も邪欲じやく・非道ひだう・慢心まんしんあるは、みなわれらが一族ぞくとなし、たよりをもとめて、心をうばふなり」と述べ、前述の巻十ノ六「了仙貧窮付天狗道」と同様に、慢心を抱いた者が落ちる天狗道の有する、負の側面についても言及しているのである。

以上の事柄から、「天狗塔中に棲」における天狗は、慢心した人間を翻弄し、罰する超人的側面と、正しい心根の人間に対しては畏敬の念を抱き、その超人的能力を發揮出来ないという両側面を備えた存在として描かれている様がうかがわれる。

また、こういった二面性のある描写は、本編における天狗像に、より一層の奥行きを与えていると言っても良いだろう。

以上の事柄から、『伽婢子』における「天狗」譚には、

①典拠の主題（文人同士の生死を超越した友情、異類婚姻譚）に大幅な改変が見受けられ、元来「天狗」譚ではないものが、「天狗」譚に仕立て上げられている。

②天狗と僧侶の結びつきが見受けられる。

③天狗は、慢心を抱いた人間がそれと化した存在である。

④天狗は、人の世では得られなかった厚遇、ないしは異能といった肯定的側面も獲得してはいるが、同時に、魔道にあるが故、熱鉄を飲まされ、かつ特定の人間には畏敬の念を払い、その超人的能力を發揮することが叶わないといった側面をも有している。

といった特質が見受けられるのである。

典拠の主題の大掛かりな改変、そして天狗が超人的能力とその限界、ならびに「天狗道」にあるが故の苦悩を有するという設定は、「了意は翻案する時に、その背景となるべき時代、場所の選択にかなり注意を払っている」（31）、『伽婢子』には「諸々の思想や学問が組み込まれている」（32）、「原話によりながらもできあがった世界は、原話と離れた了意独自の世界となっている。」（33）といった、先学の『伽婢子』に関する文芸的意匠を、裏付けるものと言えよう。

ついで延宝五年（一六七七）に版行された『宿直草』（『御伽物語』）における、一連の「天狗」譚を取り上げる。

その高度な文芸性（34）、ならびに脱唱導的色彩（35）についての言及が先学からなされている、『宿直草』（『御伽物語』）。

その第一の当該話は、巻一ノ五「あるてらの僧てんぐ天狗の難なんにあひし事」で

あり、あらずじは以下のようなものである。——京の醍醐の辺りで、僧侶たちが徒然の折、寄り合いなどをして遊んでいた。しかしある僧侶が、ふと座敷を立ったまま戻ってこない。居合わせた僧侶は訝って、寺へ戻ったのかと人を遣って見させたのだが不在であった。そこで醍醐の街中もとより、あちこちを尋ねたのだが、行方はいっかなわからぬ。周囲の人々は大いに嘆き合ったのだが、その三日後、ある寺の僕が薪を拾いに山に行くと、遙かな峰を見た際に、白い色のものが、大木の、とても登れない所に翻っていたのを、寺に帰って人々に語った。人々は訝って僕を連れてゆき、件の場所に至ると、そこには僧侶の死骸があった。白い小袖は枝に翻り、死骸はほうぼうに散らばっていた。人々はその醜い骸を見、かえって嘆き悲しんだという。

「あるてらの僧天狗の難にあひし事」の冒頭における「我朝にいふ天狗とはなにものやらん。古今の大とここれを病めり。今とても自勝他劣の見にしづみ、我慢増上の念あらば、くちばしもつばさもなくて、生のてんぐなるべし。」といった描写からは、前述の「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」等に見た、天狗と高德の僧侶、慢心との結び付き。そして天狗の外貌が、嘴や翼を有しているものだという認識が、近世期には流布していた様うかがわれるのである。

さらには、天狗にさらわれた僧侶に対する「しろき小袖は木にかかり、かばねは方／＼へひきちらせり。(中略)これなん天狗の所為ならん。何たる犯戒したまひて、降魔の加護もなかりけると、あさましくもかなし。」といった描写からは、件の僧侶の罪状は明らかになってこそいないものの、さらわれて骸を晒す事が浅ましいものだという認識が見受けられよう。

なお、天狗が人間をさらひ、その遺骸を散乱させるという物語展開は、前述の章群には見られない、珍しいものであると言えるのである。

ついで、巻一ノ六「てんぐつぶてうつ事」を取り上げる。

ある侍が日光山普請奉行として下った際、長く会うことが叶わなかった従弟もこれも奉行として下った。互いに喜び、会いたいという望みはあったのだが、他家に仕える者を小屋に入れることは禁止されていたので、叶わずに日が過ぎた。ある時従弟から、「いついつに、どこそこの山で話をしよう」などと言ってきたので、すぐ承諾の返事をし、その日に出会った。酒を酌み交わしながら、飽きることなく語っていたのだが、やがて日も暮れてきたので名残を惜しんでいると、とうとう夜の十時頃になってしまった。こうして別れの挨拶をしていると、どこからともなく大きな石礫が飛んで来た。「これは乱暴な」と言ったのだが聞き入れない。互いに石を防ご

うとしたのだが、向かうべき相手も見えない。そうこうしているうちに、石礫は畳もうとした毛氈、刀、挟み箱、提灯に当たり、当たったものは皆壊れ、火も消えてしまった。仕方がないので、道具などをそのままにして帰ったのであるが、石礫は人には全く当たらなかった。翌朝人を遣わしたところ、壊れたと思っただ道具はそのままであったというのが、おおよそあらずじである。

このように「てんぐつぶてうつ事」においては、天狗が登場する直接の描写はないけれども、天狗が人を翻弄しつつも、その身を傷つけることはない様が描かれているのである。

また、天狗に翻弄された侍たちが慢心しているという設定も見受けられないので、「てんぐつぶてうつ事」は天狗の異能を描いた奇談としての側面が濃厚な話であると言えよう。

続いての話は、巻一ノ七「てんぐいしきる事」である。以下にそのあらずじを挙げる。――ある侍の主人が日光山の御普請を仰せつかり、その侍は三人の奉行のうちの一人に任命された。筑紫の山で多くの石を切り出させていたのだが、ある夜見回りをしてしていると、石切り山に火が灯り、石を切る音が高く聞こえた。件の侍は、人夫に夜普請を申しつけることは過酷であり、二人の奉行が自分に断りもなしにこのような夜詰めを申しつけたのを腹立たしいことと思いつながら、小屋に帰って寝た。翌日二人の奉行の許に使いをやり、真夜中の石切りのことを尋ねさせたが、二人揃って知らないと言う。次の夜、三人が揃って石切り山に出て見ると、火が灯っていて、石を切る音が聞こえる。だが翌日見ると、石の切り目は変わっていない。それが十余日して石が切り上がったのだが、船に積み、東国に送る際に、難風に遭って沈んでしまった。「この石は用に立たない前触れとして、このような不思議があったのか」と、後で思ったということである。

「てんぐいしきる事」にも、前述の「てんぐつぶてうつ事」同様、天狗の登場する直接の描写はないが、天狗の振る舞いが不吉を予告するものとして位置づけられている様子がうかがわれる。

さらには、天狗の怪異を目撃した侍たちにも、慢心といったような、天狗に罰せられる悪徳を備えているという設定も見られないので、「てんぐいしきる事」も「てんぐつぶてうつ事」と同様に、天狗の超人的な能力を描いた奇談としての側面が濃厚な話と言えよう。

続いての天狗譚、巻一ノ八「てんぐつぶて附こころにかからぬ怪異けいはわざわひなき弁べんの事」であるが、これは前述の二話と少しく趣を異にする話である。そのあらずじは以下のようなものである。

大阪の石町辺りのある家に、毎夜誰かが石礫を打つことがあった。その数は多くはなく、音がしないこともある。近隣の人々は恐れ、「天狗が礫を

打つ家は必ず火事に遭う。祈りなどをしなさい」などと忠告したが、一向宗の家主は全く驚かないので、諫める人々も仕方なく止めたのだが、その家の人々は何事もなく住んでいた。四十年後、この家のことを思い出した作者は、通りがかりに家の中を覗いてみたが、別段変わったこともなかった。自分が気にしない怪異は、全くその難がないものである。

「てんぐつぶて附ころにかからぬ怪異はわざわひなき弁の事」末尾における「しかるに此つぶてうたれし家主も、自然と機にもかけざるは、理の常をえし冥加ならんか。」といった描写からは、天狗の怪異は、それと気にしない人には害を及ぼさないものであること、あるいは害を及ぼす程強いものではないことがうかがわれ、これらの事柄はまた同時に、天狗の力の及ぶ限界を描いているのである。

さらに「自然と機にもかけざる」人に天狗の害が及ばないといった設定は、前述の「天狗塔中に棲」において、天狗が「正直慈悲にして信ある人」を恐れ、力を及ぼすことが出来ないといった設定に、類似するものがあると言えよう。

以上の事柄より、『宿直草』（『御伽物語』）における「天狗」譚からは、①天狗に翻弄される人間の「罪状」が不明である。

②天狗が登場する直接の描写はない。

③天狗の超人的な側面を描いた、奇談としての話の所収率が高い。

④天狗の具体的な行動がバリエーションに富んでいる。

⑤天狗と僧侶との結びつきが、前述の章群に比し、やや希薄となっている。といった特質が見受けられるのである。

そしてこれらの事象は、先学から指摘された『宿直草』（『御伽物語』）の「宗教哲学に根ざす教化布宣の目的性をはじめから用意されていない」（36）といった側面、ならびに「奇異なるものを見つめる感覚が、ありきたりな怪談の域を超えていると同時に、そこに新たな表現の工夫が加味され、独特の世界を持つことができた例」（37）といった側面を、肯定していると言えよう。

七―三・『諸国百物語』の「天狗」譚

以上、先の章段においては、『諸国百物語』以前の近世怪異小説を取り上げ、そこに所収されている「天狗」譚に、考察を加えてきた。

結果、片仮名本『因果物語』、平仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』、『伽婢子』では、天狗は己の才能に慢心した人間を戒める、超人的存在として設定されていること。

片仮名本『因果物語』、平仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』、『伽婢子』

といった作品群からは、天狗と僧侶との密接な関係が見出されること。

『伽婢子』、『宿直草』(『御伽物語』)からは、天狗の力には、それを及ばず限界がある様子がわかれることが、明らかとなった。

近世初期に流布していたと見られる、これらの天狗の特質を考慮しつつ、本章段では【表2】に巻次・章題・概略を掲載した、『諸国百物語』における「天狗譚」をとりあげ、従来の天狗譚と比較した際の文芸的特質に着目しつつ、読解を進めてゆきたい。

「第一章 はじめに」ならびに、これまでの章段において、その文芸的特質について言及をしてきた『諸国百物語』の、第一の「天狗」譚は、巻一ノ三「河内の国かわち 閻峠道珍天狗くらがりとうげどうちんに鼻はぢかるゝ事」であり、前述の『曾呂利物語』巻二ノ七「天狗の鼻つまみの事」を、その典拠としている(38)。

なお、「河内の国閻峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」については「第三章『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ」において、その梗概ならびに仏教色という観点からの考察を記してきたが、本章段においては「天狗」譚という観点から、再度読解を進めてゆきたいと考える。なお、あらずじは以下の通りである。――河内の国「くらがり峠」という山の奥の宮に、道珍という怖いもの知らずの僧侶が住んでいた。ある時出先から帰るさ、道珍は行きには何もなかった筈の石橋に、死人が横たわっているのを見る。少しく訝った道珍であるが、元来が怖いもの知らずであるので、死人の腹を踏んで通ったところ、死人が道珍の衣の裾を啜えた。道珍は、自分が腹を踏んだので死人の口が塞がったのだと思い、果たしてその通りであったのだが、道珍はさらに、この死人を寺へ持ち帰り、埋めてやろうと考える。しかしながらこの死人には自分の裾を啜えた「とが」があるので、罰として松の木に件の死人を縛り付けておき、道珍は寝入ってしまった。その夜、死人は道珍の名を呼び、縄で己を縛ったことをなじり、家中に入ってくる。道珍が、わきざしで死人の片腕を切り落とすと、死人は消えた。死人の手は「針のごとくなる毛」の生えた、「なか／＼おそろしき手」であった。それから夜が明け、宮には毎朝参詣に来る、道珍の母が訪ねてくる。母は昨夜夢見が悪かった由を言い、何事もなかったかと問う。道珍が一部始終を語り、母の所望によって件の腕を見せると、母は「是れこそわが手なり」と言って消え失せ、辺りは再び暗闇に戻り、どつと笑う声が響いた。気を失った道珍は、しばらくしてやって来た本物の母たちの介抱によって目を覚ましたものの、その後は「日本一のくびやうもの」になったという。

このように、「河内の国閻峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」のあらすじは、典拠とされる「天狗の鼻つまみの事」にもおおむね忠実なものである。

しかしながら、小澤江美子氏はこれら二話の比較を通じ、「河内の国閻峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」の結末においては、「天狗の鼻つまみの事」に

見られる「何事なにごとによらず、よろづ高慢かうまんなるものわざわひに逢あへることこれ

に限かぎるべからず。」という教訓が削除されていることを指摘しているのである（39）。

なお、「河内の国關峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」ではこの他に、典拠たる「天狗の鼻つまみの事」と比した際の、幾つかの改変が見受けられる。以下にそれを挙げる。

第一の改変は、主人公たる「道珍」（「天狗の鼻つまみの事」では「だうしん」）の人物描写である。以下に当該箇所を挙げる。

・この道珍五十一の年までつゐにおそろしきと云ふことをしらず。（A）
あわれちとおそろしき事にもあひたきなどゝ思ひ、人にも抗言かうげんしける。

・（B）此死人しにんすそをくわへて引きたるとがあれば、そのくわたいにこよひはしぱりをき、夜あけてうづめんとおもひて、さし繩をぬひて、

松の木に死人しにんをしぱりつけ、道珍はねやに入りてねにければ（以下略）

「河内の国關峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」

・参河国みかはのくににだうしんといふ坊主ぼうず、萬よろづに付け、恐ろしきといふこと露つゆほ

どもなかりしこそ不審ふしんなれ。

・まづ夜あけば取り置き侍はべらんと思ひ、寺の門前もんぜんなる大木たいぼくにし

たゝかに縛いましめ置き、だうしんは内うちに入りていね侍はべる。

「天狗の鼻つまみの事」

これら傍線部（A）、（B）からは、人の言に逆らつてまで、少しく怖い目を見てみたいと嘯く、あるいは、死人に「罰」を与えるべく松の大木に縛り付けるといった振る舞いの挿入により、「天狗の鼻つまみの事」以上に、主人公の慢心、強氣が強調されている様が、うかがわれるのである。

そして、そのことは同時に、主人公が天狗に「罰」を与えられる理由をも、より合理化していると言つてよいだろう。

第二の改変は、怪異の描写である。以下に当該箇所を挙げる。

「是れこそわが手なり」とて、けすがごとくにうせにけり。今までは
れやかなるそらにわかにくらやみとなり、（C）こくうとぎに関とぎのこゑをつ

くりて、どつとわらひける。

「河内の国關峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」

「我等が手にてはべる。」とて我が手にさし接ぎ門外へ出でけると思へ

ば、又もとの暗闇になりぬ。

「天狗の鼻つまみの事」

このように、典拠たる「天狗の鼻つまみの事」にはない、傍線部（C）の挿入は、天狗の有する力が人を嘲弄する様、ひいてはその薄気味悪さを、より際立たせる効果を上げていると言えよう。前述した小澤氏はこの箇所に着目し、『諸国百物語』の話が『曾呂利物語』のそれに比べて面白味を増している点で、相応の役割を果たしている（40）と述べている。

しかしながら、慢心した人間を罰するという、「河内の国關峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」における天狗の行動パターンは、前述した、片仮名本『因果物語』、平仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』、『伽婢子』のそれを、そのまま踏襲しており、従来の「天狗」譚の規矩を、さほど脱していない様うかがわれよう。

続いての「天狗」譚は、卷三ノ一「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」である。

なお、本編に関しては「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」において、その詳細なあらすじ、ならびに典拠たる『曾呂利物語』卷三ノ六「をんじやくの事」（41）と比した際の、主人公と怪異の関わりの変遷という観点からの、考察を記してきた。

従って本章段では、「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」のおおよその梗概、ならびに「天狗」譚という観点からの読解を記してゆきたい。――武勇の腕に慢心を抱いている「わか者」が、化け物が出るという噂のある山堂に出向いたところ、そこに天狗がやって来て散々に「わか者」を脅し、嘲弄した。以来、件の「わか者」は「心うつけて気がい」のようになつてしまったというのが、本編の梗概である。

「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」においても述べたように、「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」の大まかな物語展開は、「をんじやくの事」に拠っているのだが、ここでは物語展開に影響を及ぼすと思われる、顕著な違いを、再度記してゆく。

第一の相違点は、座頭との会話に見られる、「わか者」の人物設定である。

「第二章 『諸国百物語』における怪異と人との関わり」にても指摘したように、「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」においては、「わか者」は、天狗の化身である座頭――しかも「わか者」は、この座頭が天狗の化

身であるとは、この時点では知らない——に對してなかなか警戒をとかず、用心深く接している。それと同時に、己の判断力や武力に相当の自信を持つており、攻撃的で居丈高になつてはいる様もうかがわれるのである。

一方、「をんじやくの事」の若者は、最初のうちこそ座頭を不審に思うものの、「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」に比し、警戒心を解くのが早い。また、良い連れが出来たといつて招き入れるなど、座頭に對して比較的好意的であり、攻撃性や居丈高さもより少ないのである。

このように、「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」からは、前述の「河内の国關峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」のように、主人公が天狗に「罰」を与えられる理由が、より合理的なものとなつてはいる様がうかがわれよう。

第二の違ひは、その結末である。

「をんじやくの事」では、天狗に遭遇した若者は、しばらくは錯乱状態に陥つてはいるが、「遂には本性になりて斯く語り侍る。」と、最終的には正氣に戻つてはいる。

對する「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」の主人公は怪異に遭遇したことがきっかけで「そのゝちかのわか者も心うつけて氣ちがいのやうになりしと、その所の人かたり侍る。」——すなわち、正氣を失つてしまつてはいるのである。典拠に比し、天狗が人間にもたらす災いが、ならびにその超人的な力の余韻が、その度合いをいや増している様が、見受けられるのである。

第三の相違点は、怪異の正体に関する描写である。

「をんじやくの事」では、妖怪は「長一丈もあるらんと覺しく、頭は焰立ち夥しき、口大きに裂け、角生ひて、怖ろしとも云はん方なし。」という鬼のような形態をとつてはいる。

だが、對する「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」に登場する妖怪は、座頭、仲間の侍らの姿をとるのみで、結末の「かのわか者あまりにぶへんにかうまんせしゆへに、天狗のなすわざにてありしと也。」という一条で初めて、その正体は天狗であつたということが判明している。

すなわち、鬼のような形態を取る妖怪から、「天狗」という明確な名称を冠せられた妖怪へと、怪異の正体は変貌を遂げているのである。

以上の事柄から、「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」においてもまた、天狗は慢心した人間を戒める、超人的な存在として設定されている様うかがわれるのである。

ついで卷三ノ十五「備前の国うき田の後家まん氣の事」を取り上げる。

あらずじは以下のようなものである。——備前の国にうき田の後家といふ者がいたが、ある夜徒然の慰めに、幸若舞の「高館」(42)を舞わせて

いた。舞の中途の「べんけいわりたておんまわし」という一節を聞いた後家が、「べんけい一人にはさやうにはせられまじきものを」と、弁慶の勇猛さを揶揄するかのような言葉を口にし、厠に立つと、戸の内に「十二三になるかぶろ」が横たわっていた。元来「心ふてき」の後家は臆せず禿を踏み越え用を足し、落ち着いて雪隠を出たのだが、背後から笑い声が聞こえ、後ろから引き倒される。人々が走り出して介抱したところ、後家は気付き、出来した出来事を語ったという。

弁慶が大勢の敵の中へ割り込んで切り立てる様を揶揄する、かつ、「後家あまりにまんきあるゆへ天狗しやうげをなしけると也。」という末尾からの一条からも、天狗は慢心した人間に、その報いとしての災いをもたらす存在として位置づけられている様うかがわれよう。

以上、『諸国百物語』における「天狗」譚からは、

①天狗は慢心した人間を戒める、超人的存在として描かれている。

②僧侶との結びつきが、前述の章群に比し、やや希薄となっている。

といった特質が見出されるのである。

しかしながら、『諸国百物語』に見る、これらの「天狗」譚もまた、前述した、片仮名本『因果物語』、平仮名本『因果物語』に見る、「天狗」譚の規矩からはさほど脱した特質を備えてはおらず、『宿直草』（『御伽物語』）のそれのように、天狗の行動がバリエーションに富んでいるということもなく、『伽婢子』に見る天狗像のように、その人物造形に、超人的能力を発揮する側面と、心根の正しい人間に対しては畏敬の念を抱き、その異能を発揮することが叶わないという、対照的な側面があるということもない。

先学から「話を話として楽しむための娯楽本位の怪異小説となっている」（43）、「古い話を使うけれども、その中に新しい要素（中略）新しい恐怖のスタイルがどんどん入ってくる」（44）との指摘がなされて来、これまでの章段においてその独自性について論証してきた『諸国百物語』の作品群にしては、やや文芸的意匠を欠いている感があると言えよう。

七―四・「天狗」譚――『諸国百物語』以後『狗張子』以前

以上、前段においては『諸国百物語』における「天狗」譚を取り上げ、その読解を進めて来た。

結果、『諸国百物語』における「天狗」譚は、天狗が慢心した人間を戒める、超人的存在として描かれているといった傾向が目立ち、前述した「衆生教化を目的とする『因果物語』（45）における「天狗」譚の規矩をさほど逸脱しておらず、「一層唱導や教訓からは離れた、話を話として楽しむための娯楽本位の怪異小説となっている」（46）といった『諸国百物語』自身の魅力を、十全に生かしきれてはいない様が、明らかとなった。

これらの事柄をふまえつつ、本章段では第一に、天和三年（一六八三）

刊行の『新御伽婢子』に収録された、「天狗」譚を取り上げる。

先学からその文芸的意匠について、様々の評価を賦与されてきた『新御伽婢子』(47)における当該話は、巻四ノ三「金峰崇」^{きんぶのしがらみ}であり、あらずじは以下のようなものである。――大和の金峰山の山上には、人々が決して参詣せぬ「秘所」があった。しかし浄慶という僧侶が、自分は若い頃からこの山に参詣しているの、その至徳の為に「秘所」に立ち入っても平気であると言い、周囲の忠告を聞き入れず、その禁を破った。途端、黒雲が空を覆い豪雨となり、雷電が鳴り響いた。人々は浄慶を呼んだが答えがなく、そうこうするうちに雨も止んだのだが、浄慶は跡かたもなく消えてしまった。妻子は大いに悲しみ、浄慶が金峰山にて消えた日を忌日として仏事を営んでいたのだが、三回忌を行っていた時、家の棟に浄慶が忽然と立っていた。それから月の夜、雨の夕方など、浄慶の姿が棟に立つことが止まなかったという。

「此人慢心まんしんに繫縛けいばく（筆者註…「繫縛」は右側に「けばく」、左側に「つなぎしバリ」の振り仮名あり。）せられて天狗道てんぐどうに入れむいぶかし」といった

「金峰崇」の末尾、ならびにその物語展開には、

① 慢心した人間が天狗道に落ちるといった、天狗道と慢心との結び付き。

② 慢心と僧侶、天狗といった結び付き。

といった、このような特質が描かれており、これら二つの設定は、前述の『御伽婢子』巻十ノ六「了仙貧窮付天狗道」、巻十三ノ一「天狗塔中に棲」に、通じるものがあると言えよう。

しかしながら、「金峰崇」は、「了仙貧窮付天狗道」、「天狗塔中に棲」の特質を継承しているとは言えるものの、その他の新たな文芸的特質が見受けられるとは言い難く、当麻晴仁による「読むための怪異談を志向し、怪異性を高めるための積極的な改変を見せる」(48)といった魅力も、さほど生かしきれてはいない様が見受けられるのである。

ついで『百物語評判』の「天狗」譚を取り上げる。貞享三年(一六八六)に刊行され、先学から作中における種々の知識、ならびにそこに見受けられる、怪異に対する合理的論評姿勢を指摘された(49)『百物語評判』の当該話は、巻三ノ三「天狗てんぐの沙汰さた附浅間岳あさまだけぐもんち求聞持もともんぢの事」であり、本編は天狗とは何者かという問いかけに、以下のような解釈を与えている。――天狗は深山幽谷に住まう魍魎やうりやうの類であり、日に三熱の苦しみがあって熱丸を服するというのは、その怒りの心の例えである。天狗礫も多くは狸の仕業であり、「人道」を治めたならば、その怪異も自然と消えるものだ。

このように、「人道」を治めた正しい心根の持ち主の前では、天狗の怪異は無になるというくだりは、前述の『宿直草』(『御伽物語』の巻一ノ八「て

んぐつぶて附こころにかからぬ怪異はわざわひなき弁の事」の、天狗の怪異はそれと気にしない人には害を及ぼさぬものである、あるいは害を及ぼす程強いものではないという設定。ならば、「天狗塔中に棲」において、天狗が「正直慈悲にして信ある人」に畏怖の念を抱き、その力を及ぼすことが出来ないといった設定に通底するものがあると言えるだろう。

さらに「日に三熱の苦しきありて、熱丸を服する」というくだりは、前

述の「了仙貧窮付天狗道」の「銚子に熱鉄の湯をもりいれ、盃にいれて」渡された了仙が「これをのみいる」という物語展開に、類するものがあるのである。

以上の事柄から、「天狗の沙汰附浅間岳求聞持の事」は、従前の近世怪異小説に見る「天狗」譚の特質を話の中に盛り込み、そこに合理的解釈を施すという構造を取っている様が、うかがわれるのである。先学の「和漢儒仏にわたる博識を動員して、もろもろの怪奇を論評した書」(50)という指摘を裏付けた「天狗」譚と言えるであろう。

続いての「天狗」譚は『御伽比丘尼』(『諸国新百物語』)のそれである。先学からその改題本である『諸国新百物語』の「怪談集」「咄本」としての性質、その序文に見る「それが中には艶なるあり、哀れなるあり、をかしきあり、怪しきあり、恐ろしきあり」といった性質が、作中に体现されていることを指摘されている(51)『御伽比丘尼』(『諸国新百物語』)。その

当該話は、巻五ノ二「かねをかけたる鳶の秤付天狗物語」であり、あらすじは以下のようなものである。――直真という僧侶が、東福禅林寺の開山忌に出向く為、都の大路に出たところ、若い数人の男女が大きな鳶を捕え、殺す相談をしていた。直真がこれを止めると、男の一人が家に伝わる膏葉を作る為、鳶が必要のだと怒った。直真が生きた鳶の代わりにと、死んだ鳶を買うだけの金を与えると男の心も静まったので、直真は鳶を空に放した。その足で大仏殿を拝み、なお南に向かおうとすると、やにわにつむじ風吹き、その中から山伏が現れた。山伏は命を助けられた礼を言い、直真を東福寺まで連れ行き、庵まで送り届けてくれた。直真が、山伏の振る舞いは「神反」のそれであるのに、先刻は僅かの男たちに手ごめにあっていたのが訝しいと言うと、山伏は、自らは「神反」の身ながら、日に六度鳶に身を変ずる苦しみがあり、これを天狗道ということ、嬌慢によりこの道に入ってしまうのだと言い、姿を消したという。

このように「かねをかけたる鳶の秤付天狗物語」では、

①天狗の超人的能力。

②慢心と僧侶、天狗といった結び付き。

③天狗道に堕ちた者の苦しみ。

といった特質が描かれている様がうかがわれるのである。こうした天狗の造形は、前述の「了仙貧窮付天狗道」、「天狗塔中に棲」に類似していると言えよう。

そして、こうしたことを考慮すると、『御伽比丘尼』（『諸国新百物語』）における斬「天狗」譚は、一つの作品の中に、その序文に見たような「それが中には艶なるあり、哀れなるあり、をかしきあり、怪しきあり、恐ろしきあり」といった性質を有している様が、見受けられるのである。

以上の事柄から、『狗張子』以前の近世怪異小説に見られる天狗像は、それらが収録されている作品こそ異なるけれども、共通する要素を多分に有している様がうかがわれるのである。

七―五・『狗張子』の「天狗」譚

(一) 卷六ノ二「天狗にとられ、後に^{のち}帰りて、物がたり」を中心に

以上、先の章段においては、『諸国百物語』以降『狗張子』以前の近世怪異小説における「天狗」譚を取り上げ、その読解を進めてきた。

結果、『新御伽婢子』、『御伽比丘尼』（『諸国新百物語』）における「天狗」譚からは、僧侶と天狗、そして慢心との密接な結び付きが見受けられること。

『百物語評判』、『御伽比丘尼』（『諸国新百物語』）における「天狗」譚からは、天狗の苦惱、ならびに弱さが見受けられること。

そして、これらの特質は、『諸国百物語』以前の「天狗」譚における特質に通底するものであることが、明らかとなった。

近世初期に流布していたと見られる、これらの天狗の特質を考慮しつつ、本章段では【表2】に巻次・章題・概略を掲載した、『狗張子』における天狗譚をとりあげ、従来の天狗譚と比較した際の文芸的意匠の変遷、ならびにその独自性について、考察を加えてゆきたい。

初めに、卷六ノ二「天狗にとられ、後に^{のち}帰りて、物がたり」を取り上げる。おおよそのあらずじを以下に述べる。――慶長の頃、藤の社に彦八という、田畑の耕作を生業にしている者がおり、その息子は名を次郎と言った。この次郎がある時行方不明になり、親は悲しがつてあちこちを探したが、見つけることが出来なかった。しかし次郎は五年後に帰って来、自分が天狗と共に居たこと、その際に、天狗が熱した「銅^{あか}がねの湯^ゆ」を飲み、

悶絶していた様を見たこと、天狗に連れられて空を飛び、「伯耆^{はうき}の国^{だいせん}大山」

をはじめとする、方々を回ったこと、天狗道について話をきかされたこと。さらには、天狗が海上に大風を巻き起こしたり、能見物の棧敷や舞台に火事を出来させたりなどして、おごり高ぶった人々を翻弄したことなどを語った。その後次郎は、形見の品の檜木笠、檜木の棒、篠懸を残し、再び行方知れずとなったという。

富士昭雄氏は、「天狗にとられ、後に帰りて、物がたり」の典拠として、『太平記』巻二十七「田楽事付長講見物事」、『本朝神社考』巻六「僧正ヶ谷」を、類話として『伽婢子』巻十三ノ一「天狗塔中に棲」、『酉陽雜俎』巻十四「諾臯記」「博士丘濡説云々」を、それぞれ挙げている（52）。

さらに今野達氏は、本話を『今昔物語』巻十九「東大寺僧於山值死僧語第十九」の類話として指摘している（53）。

しかしながら、「天狗にとられ、後に帰りて、物がたり」の物語展開ならびに表現上の特色に着目しつつ読解を進めてゆくと、前述した話以外にも典拠が存在すると考えられ、再検討の必要性を感じた。

そこで「天狗にとられ、後に帰りて、物がたり」の、次郎をさらった天狗らが「銅がねの湯」を飲み、悶え苦しむ場面に着目してみると、新たな

典拠として『太平記』巻二十五「ミヤカタノフシヤウクワイスル 官方怨霊会ニ六本杉ニ事付イシヒヤウヂヤウノ医師評定事」が新たな典拠として指摘出来ると考えられる。

さらに、富士昭雄氏は「天狗にとられ、後に帰りて、物がたり」の典拠として『太平記』巻二十七「田楽事付長講見物事」を引用しているのみならず、了意には『太平記首書』の著があり、『太平記』に親炙している点、そうした観点から『狗張子』巻七ノ二「蜘蛛塚」、巻一ノ四「守江海中の亡魂」、巻七ノ四「五条の天神」、巻一ノ六「北条甚五郎出家」が、それぞれ『太平記』巻二十三「大森彦七事」、巻十一「越中守護自害付怨霊事」、巻三十五「北野通夜物語事」、巻二十「結城入道墮地獄事」と類似している点を指摘してもいる（54）。

そして土屋順子氏は『狗張子』巻二ノ五「形見の山吹」の典拠として、『太平記』巻十五「賀茂神主改補事」を挙げているのである（55）。

また、詳細は後述するが、拙稿「『狗張子』論——巻六ノ三「板垣信形逢いたがきのぶかたあふ天狗てんぐに」を中心に」においては、『狗張子』巻六ノ三「板垣信形逢天狗」が、『太平記』巻五「相模入道弄ニ田楽ニ并闘犬事」を典拠としている可能性を挙げた（56）。

これらの事柄からは、作者たる了意が『太平記』に通暁しており、そこに収録されている話を『狗張子』の典拠として積極的に用いていた様子がう

かがわれる。

ついで、「官方怨霊会ニ六本杉一事件付医師評定事」のあらすじを述べる。

都の仁和寺の辺りを通りすぎた僧侶が、夜更けに南朝にゆかりのある僧の怨霊がやって来るのを見た。それぞれ昔通りの姿ではあるが、目つきが鋭く、鳶のような嘴と、左右の脇に長い翼を有している。僧侶は彼らが天狗道に落ちたことを怖ろしく思うが、そこへ後醍醐天皇の皇子、大塔宮護良親王が法体で現れた。彼らは金の盃を酌み交わしたかを見ると、頭から黒煙を出して悶絶し、焦れ死にしまったが、二時ばかりすると生き返り、今度はどのようなことをして世の中を乱してやろうかという相談を始めたという。

続いて、「天狗にとられ、後に帰りて、物がたり」の本文と、その典拠と見られる、「官方怨霊会ニ六本杉一事件付医師評定事」の当該箇所を引用する。

いづくともしらず、たうとげなる僧の、(1)紅染の衣の上に、紫の袈裟をかけ、(2)手にハ、水精いらたかの数球をもち。(中略)同じさま

の僧七八人、まいられたり(中略)その次に、鼻たかく、(3)眼大にして。両の脇に翼ある法師三人、いづれも、足ハ鳥のごとく、柿色の衣に、太刀をはき。たまだすき、あげ脛高に、かゞげ、甲斐ドしき躰

にて、(4)白かねの茶碗に、鉄がねの杓を、釜にさしいれ。銅がねの湯を盛て、七八人並居たる僧衆に、まいらするを、僧衆。うたて憂たる色、あらハれ、茶わんを取て、飲けるに。僧衆、一同に、ふしまる

び。(5)頭の上より、黒煙たちて。もえあがり。(中略)暫くして。(6)僧衆ハもえ、株のやうに。黒く、ふすぼり。(7)とばかり、ありて。

夢の覚たるごとく。又、おきて、座せしかバ。本のごとくの僧となり。

「天狗にとられ、後に帰りて、物がたり」

座中ノ人々ヲ見レハ。上座ニ先帝ノ御外戚。峯ノ僧正春雅。(A)香ノ衣ニ袈裟カケテ。眼ハ如ニ日月一光リ渡リ。嘴長シテ鳶ノ如クナルガ。

(B) 水精ノ珠数爪操テ坐シ給ヘリ。其ノ次ニ南都ノ智教上人。浄土

寺ノ忠円僧正。左右ニ著座シ給ヘリ。皆古ヘ見奉シ形ニテハ有ナカラ。

(C) 眼ノ光リ尋常ニ替テ。左右ノ脇ヨリ長キ翅生出タリ。(中略) 暫

有テ坊官カト覚シキ者一人。(D) 銀ノ銚子ニ金ノ盃ヲ取副テ。御酌ニ

立タリ。大塔宮御盃ヲ召レテ。左右ニ屹ト礼有テ。三度聞召テ閣セ

給ヘハ。峯ノ僧正以下ノ人々次第ニ飲流シテ。サシモ興アル気色モナ

シ。良遙ニ有テ。同時ニワツト喚ク声シケルガ。手ヲ挙テ足ヲ引カ、

メ。(E) 頭ヨリ黒烟燃出テ、(中略)(F) 焦レ死ニコソ死ケレ。穴恐シ

ヤ是ナメリ天狗道ノ苦患ニ。熱鉄ノマロカシヲ。日ニ三度吞ナル事ハ

ト思テ見居タレハ。(G) 二時計有テ。皆生出給ヘリ。

「官方怨霊会ニ六本杉」事付医師評定事」すなわち、身分の高いないしは高いと見える僧侶の身なりが、衣に袈裟をかけている点(傍線部1)―(A)、ならびに水晶の数珠を持っている点(傍線部2)―(B)。その仲間と思しき僧侶の外貌が、眼光が尋常でなく、両脇から翼が生えているという点(傍線部3)―(C)。そしてこれらの僧侶たちが、金属製の容器に、これも金属製の杓で、熱した金属を溶かした湯を勧められ、不快そうな表情をする点(傍線部4)―(D)。それを飲んだ僧侶たちが、頭上から黒煙を出す点(傍線部5)―(E)など、「天狗にとられ、後に帰って、物がたり」と「官方怨霊会ニ六本杉」事付医師評定事」には、このような表現上の類似点が見受けられるのである。

また、熱した金属の湯を飲んだ僧侶たちが黒焦げになって死に(傍線部6)―(F)、しばらくしてから、何事もなかったかのように蘇るなど(傍線部7)―(G)、これらの二話には、その後の物語展開上の類似点も見受けられる。

以上の事から「天狗にとられ、後に帰って、物がたり」は、先学から指摘されてきた典拠のみならず、「官方怨霊会ニ六本杉」事付医師評定事」をも、典拠として利用しているのである。

さらには、「天狗にとられ、後に帰って、物がたり」には先に引用した箇所以外にも、天狗たちが苦しみを強いられている場面がある。「伯耆の国大山」の宮殿の柱に件の天狗たちがつながれていた際、空から猛火が燃え下

り、全てが炎上する場面がそれである。以下に当該箇所を引用する。

今の我らも、かゝる心ざしより、魔道まどうに入いて。堪たへがたき苦くるしみを、うけながら。慚愧ざんぎ懺悔ざんげの心を、おこさず。却かへつて、仏敵ぶつてき法敵ほうてきとなる、浅あましさよ、と、いふか、と、すれば、八人の僧そうは、いふにをよはず、数多あまたの法師ほうし原はらまで。おそれ、わなゝき。立たちさハぐほどに、みなともに、宮殿くうでんの柱はしらに、つながれて。はたらき得えず、そらより、猛火みやうくわもえくだり、宮殿くうでん楼閣ろうかく一同いどうに、もえあがり、おめきさけぶ声こゑとともに、やきくづれて、残のこる人ひとハなし

これらの箇所からうかがわれるように、「天狗にとられ、後に帰かへりて、物がたり」における天狗は、自らを「魔道まどうに入いて」と称なづし、天狗道てんこうどうに陥おちつた者たちを「魔道まどうの眷属けんぞく」「魔道まどうの網あみにかゝる人」と呼よんでいる。天狗道てんこうどうを「魔道まどう」とする認識は、先に取り上げた、『伽婢子かへし』卷十ノ六「了仙貧窮付天狗道りょうせんひんきやうつてんこうどう」の設定に通底するものがあると言えよう。

さらに件の天狗は、「魔道まどう」に陥おちる理由として、その心根が貪欲こんよくであることや、愛欲あいよくにひかれてしまったが為ゆゑであることを述べているが、同時に「我慢増上慢がまんぞうじやうまん。山よりも、たかく。海よりも、ふかし。」と、慢心が甚しだしいことも、その一つとして挙あげている。

このような、慢心が甚しだしい者が「魔道まどう」である「天狗道てんこうどう」に陥おちり、苦しみを受けるという設定もまた、「了仙貧窮付天狗道りょうせんひんきやうつてんこうどう」に類似しているのである。

また、「天狗にとられ、後に帰かへりて、物がたり」には、天狗が慢心故に苦しみを味わう場面のみならず、その超人的能力を發揮して、人間を翻弄ほんろうする様も描えがかれている。

「此やつばら、あまりに、物の心も失うしなひたるに。諸人の目をさまさせん」と、天狗が人々を懲らしめる由を述べた後に、能見物の人々を巻き込んだ火災という大惨事が出来する箇所に加え、天狗が舟子を翻弄する場面がそれである。以下に当該箇所を引用する。

又、京ちかく帰かへる、とて、播磨はりまの灘なだにて、便船ひんせんを請これしを、舟子ふなこども。

はしたなく、いらへて。のせざりければ、僧そう、すでに、歩かちより、ゆく

／＼いで、をのれらに、思ひしらせん、とて、沖のかたにむかひて、印

を結むすバレしかバ、俄に、黒雲くろくもおほひ、大風吹ふきおこり、海のおもて。く

ら闇やみのごとく、波たかくあがり（中略）数多あまたの舟ども。簸みにて、ひる

がごとく。垢あかをかへ、苦たまを打いれて、磯いそ近くよせんとするに、叶かなひが

たく。舟の内にハ、伊勢のかたにむかふて、おがみ、観音くわんおん経ぎやうをよみ、

念仏申す。

このように、天狗が慢心した人間に対し、彼らを思い知らせる由を述べた後に惨事が出来するという物語展開は、類話として指摘されている『伽婢子』卷十三ノ一「天狗塔中に棲」に通じるものがあると言えよう。

しかしながら、「天狗にとられ、後に帰りにて、物がたり」においては、「天狗塔中に棲」の主題であった、天狗が慢心した人々を懲らしめる様、「了仙貧窮付天狗道」の主要モチーフであった、慢心した僧侶をはじめとする、人々が天狗道に陥る様が、一つの話に盛り込まれている。

さらには、先に述べたように、「天狗にとられ、後に帰りにて、物がたり」では「了仙貧窮付天狗道」に比し、天狗が苦しみを味わう場面が増しており、「天狗塔中に棲」と比しては、天狗が慢心した人々に対し超人的能力を発揮し、彼らを懲らしめる場面も強調されている。

それ故、「天狗にとられ、後に帰りにて、物がたり」は、そこに描かれる天狗の弱さ、苦悩、超人的能力を一举に見せることで、読み手に恐怖感を賦与するのみならず、天狗をより人間的にとらえる傾向が、前述した「天狗塔中に棲」に比しても、強調されているのである。

(二)．卷六ノ三「板垣信形逢いたがきのぶかたあふ天狗てんぐ」を中心に

先の章段では『狗張子』卷六ノ二「天狗にとられ、後に帰りにて、物がたり」を取り上げ、その読解を進めてきた。

結果、「天狗にとられ、後に帰りにて、物がたり」は先学によって指摘されてきた作品に加え、『太平記』卷二十五「官方怨霊会二六本杉一事付医師評定事」を、その典拠として利用していること、浅井了意の前作の怪異小説短編集『伽婢子』の「天狗」譚に比し、そこに描かれている天狗が、苦悩、超人的能力の発揮を共に見せることで、その人間味が強調されていることがうかがわれた。

これらの事からは、既存の文芸作品や『伽婢子』を積極的に利用しつつ、

そこにさらなる工夫——類似した場面の反復、人物造形の多様化、『伽婢子』においては別個に描かれていた主題の統合——を加えるといった、『狗張子』の新たな側面が見受けられたのである。

以上の事柄をふまえ、本章段では『狗張子』における第二の「天狗」譚、

卷六ノ三「板垣信形逢_二天狗_一」いたがきのぶかたあふ てんぐにについて考察を加えてゆきたい。——板

垣信形は、主君である武田信玄の信頼厚い勇士であったが、思慮が浅く頑ななため、粗忽な振る舞いが多いという面も持ち合わせていた。ある日、信形のもとを山伏が訪れ、齋料を乞うた。信形は山伏の常人らしからぬ容姿に興味をひかれ、先達と思しきその山伏と、九人の同行者らを泊め、もてなす。食事の折、山伏は膳の上の料理、箸を一尺ほどの鎧武者の群れに変化させ、戦の有様を見せる。信形は感心し、山伏に術法の教えを請うために、家人を部屋から出す。夜が明けかかり、家来が信形の様子をのぞき見ると、山伏ではなく天狗たちを相手に打ち合いをしていた。家来たちが騒ぐと天狗の姿はなく、信形は前後不覚で寝入っている。家来たちは天狗の来訪を恐れたが、元来が「したゝか者」ものである信形は気にしなかった。

しかしその後の信形は戦での分別を失い、上田原の戦で討死したというのが、「板垣信形逢_二天狗_一」のおおよそのあらすじである。

前述した富士昭雄氏は、「板垣信形逢_二天狗_一」の類話として『曾呂利物語』卷一ノ一「板垣の三郎高名の事」を挙げている（57）。

「勇者」ゆうしやである主人公・板垣の三郎が魔所である社に出かけ、妖怪に遭遇する。その場は事なきを得るが、主人のもとに板垣が帰ると豪雨となり、虚空からは怪しげな声が響く。主人は板垣を唐櫃にかくまうが、明け方に櫃を開けると板垣の姿はなく、縁側に板垣の生首が落とされていた。卷一ノ一「板垣の三郎高名の事」のあらすじは、このようなものである。

主人公の名前が「板垣」である点、甲斐の国の住人である点は卷「板垣信形逢_二天狗_一」と共通している。

また、恐れを知らぬ主人公がいったんは妖怪の手を逃れるが、最終的には怪異からの報復にあう点も類似しており、この点がこれら二話の主要モティフであることがわかるのである。

しかしながら、「板垣信形逢_二天狗_一」を通読してみると、「板垣の三郎高名の事」との構成・展開上の共通点は部分的なものに留まっているように思われ、再検討の必要性を感じた。

そこで「板垣信形逢_二天狗_一」の、信形の元を来訪した山伏の正体が天狗と判明する箇所に着目してみると、『太平記』卷五「相摸入道_{モテケン}弄_ニ田楽_一」

「相摸入道_{トウケン}」が浮かんできた。江本裕もその論中において「相摸入道弄_ニ田

楽「并闘犬事」と「板垣信形逢ニ天狗」の関連を指摘しているが、プロットの類似性の指摘に留まっている(58)。

本章段ではそこで、これら二話のプロットのみならず、表現上の類似にも着目した上で、「相摸入道弄ニ田楽」并闘犬事」が「板垣信形逢ニ天狗」の典拠であることを論証し、その後、本編のさらなる読解を進めてゆきたいと考える。

鎌倉幕府の執権、北条高時は田楽に感溺し、政治をおろそかにしていた。そんなある夜、泥酔した高時の許を、田楽師に姿を変えた異形の者たちが訪れ「天王寺ノヤヨウレボシヲ。見バヤ」とはやしたてる。この話を伝え

聞いた儒者は、「ヨウレボシ」すなわち「妖霊星」が天下の動乱の前兆であることを指摘した。しかしその後も高時は遊び事への耽溺を止めなかった。時の人は高時の暗愚さを嘆いたというのが、「相摸入道弄ニ田楽」并闘犬事」の、おおよそのあらすじである。

ここで、「板垣信形逢ニ天狗」と、「板垣信形逢ニ天狗」が典拠としていると見られる、「相摸入道弄ニ田楽」并闘犬事」の当該箇所を引用する。

中間若党ども、(1)障子の隙よりも、忍びて、のぞきミれば、(2)山伏
とおもふ者ハ、人にハあらで、或ハ、鼻のさき、高くそバだち。或ハ、
口のほど。鳥の嘴のごとく。又ハ、身に翅あり、異類異形の者ども
なり。(中略)中間若党ども、(3)太刀よ、長刀よ、と。ひしめき、障子
をあけて。こみ入れれば。十人の山ぶしどもは。いづちへか、行けん、
みな、きえうせて、(4)信形ハ、前後もしらず。勞れ臥たり。精進奇麗
の膳部、肴以下ハ、少も喰はず、捨ちらし。酒ハ、こぼし流し、(5)畳
の上にハ、鳥の足跡のごとくなるが。よごれて、踏たる有さま。疑が
ふ所もなく、天狗どものあつまりけり、と、家中の上下ハ、おそれ、
つゝしみけり(6)信形は、その日の暮かたに、やう／＼睡さめて。起あ
がりけれども、只、まう／＼として、有けり。

「板垣信形逢ニ天狗」

或官女此ノ声ヲ聞テ。余ノ面白サニ。(A)障子ノ隙(筆者註…「隙」は

右側に「ヒマ」、左側に「アナ」の振り仮名あり。ヨリ是ヲ見ルニ。

新坐・本坐ノ田楽共ト見ヘツル者。一人モ人ニテハ無リケリ。(B)或ハ

觜勾テ鴉ノ如クナルモアリ。或ハ身ニ翅在テ。其形山伏ノ如クナル

モアリ。異類異形ノ媚者共カ。姿ヲ人ニ変ジタルニテゾ有ケル。(中

略)人ヲ走ラカシテ。城ノ入道ニソ告タリケル。入道取物モ取り敢ス。

(C)太刀ヲ執テ其ノ酒宴ノ席ニ臨ム。中門ヲ荒ラカニ歩ケル。燈ヲ聞テ。

化者ハ搔消様ニ失セ。(D)相摸入道ハ前後モ不知酔伏タリ。燈ヲ挑サ

セテ。遊宴ノ座席ヲ見ルニ。(E)誠ニ天狗ノ集リケルヨト覚テ。踏汚シ

タル畳ノ上ニ。禽獸ノ足迹多シ。(中略)(F)相摸入道驚覺テ起タレ

共。惘然トシテ更ニ所レ知ナシ。

「相摸入道弄ニ田楽一并闘犬事」

このように、天狗になぶられている主人の有様を、家来が「障子の隙」から覗き見をする点(傍線部(1)―(A))、妖怪の描写に「異類異形」という表現が用いられ、それらが「觜」「翅」を有している点(傍線部(2)―(B))、家来がともに「太刀」を取って駆けつけると、天狗たちは姿を消す点(傍線部(3)―(C))、天狗になぶられた人間は「前後もしらず」眠っている点(傍線部(4)―(D))、汚れ、鳥の足跡のついた「畳」が、天狗の来訪の証拠となる点(傍線部(5)―(E))、天狗になぶられた人間は、目覚めた後も放心状態にある点(傍線部(6)―(F))など、「板垣信形逢ニ天狗」と「相摸入道弄ニ田楽一并闘犬事」には、表現ないしは物語の展開上の類似点が見出されるのである。

さらに、その後の信形は「何条、かやうのためしハ、武家にハ、ある物なり。おどろき、おそるゝに足ず」と天狗の来訪を評し、高時は「懸ル妖怪ニモノ不レ驚。増々奇物ヲ愛スル事止時ナシ。」と己の行状を改めようとなない。

しかしながら、天狗の来訪をきっかけにし、信形は「心だて。上気にな

り。分別あしく、軍法の備も、ちがひ。危き怪我を、いたし、終に、信州上

田原の軍に、打死」をしている。また高時も「ヨウレボシ」が暗示したかの如く、鎌倉幕府の滅亡に直面し、自殺するという、悲劇的な運命を辿っているのである。

このように、天狗になぶられた人間には、即座の目立った被害はない。そして彼らは天狗の来訪を恐れ、自らの行状を省みることをしてしない。しかし怪異に遭遇した人間は、結局は身の破滅を免れ得てはおらず、天狗の出現は、不吉の前兆として位置付けられている。「板垣信形逢天狗」と「相摸入道弄田楽并闘犬事」からは、このようなプロットの共通性も見受けられるのである。

また先の章段で述べたように、富士昭雄氏、土屋順子両氏が、『狗張子』と『太平記』の関連性を指摘している上(59)、『狗張子』巻六ノ二「天狗にとられ、後に帰りて、物がたり」は『太平記』巻二十五「官方怨霊会ニ六本杉事付医師評定事」を、その典拠として利用していることが明らかとなった。

以上の事柄から、「板垣信形逢天狗」は、「相摸入道弄田楽并闘犬事」を典拠として利用している可能性が、導き出されるのである。

これらの事をふまえつつ、本章段では「板垣信形逢天狗」について、さらなる読解を進めてゆきたい。

前述したように、「板垣信形逢天狗」における信形には「したゝか」の形容が冠せられていた。

本章段ではそこで【表3】を参照しつつ、浅井了意のもう一つの怪異小説『伽婢子』において、「したゝか」の形容を冠せられている人物、その類義語である「不敵」の形容を冠せられている——この点については後述する——人物が登場する話。その他の近世怪異小説において「不敵」「したゝか」ものの登場する話を取り上げてゆく。

そしてこれらの章群における「したゝか」「不敵」ものに対する考察、ひいては「板垣信形逢天狗」に対する読解を深めてゆきたいと考える。まずは『伽婢子』において「したゝか」の形容を冠せられる主人公の登場する話を取り上げる。巻六ノ五「白骨の妖怪」が、それである。

本編については若干の考察を述べてきたが(60)、本稿では原話と比較した際の人物造形の方法、「したゝかも」という観点から、改めて考察を加えてゆきたい。——世を逃れて隠者のような生活を送る長間佐太は、ある夜白骨の妖怪に遭遇する。しかし「したゝかも」である佐太は、持ち前の豪胆さでそれを退けるといのが、「白骨の妖怪」のおおよそのあらすじである。

宇佐美喜三八氏は「白骨の妖怪」の典拠として、『睽車志』巻六「劉先生者云々」を挙げている（61）。

本章段においては、これらの「したゝか」な主人公の登場する作品の読解を深める為、「劉先生者云々」の主人公・劉先生と「白骨の妖怪」における長間佐太の人物設定を比較してゆく。二編において、主人公の人物像が描かれている箇所を、以下に引用する。

北山に行て柴しばといふものを買うけて、都に出て売しろなし、すこしの利をもとめ、餅もちあくひ酒かふて打のみつゝ、庵りにかへる時は尻しりうちたゝき歌うたうたひ、ある時は房てらに行て庭の塵ちりを掃治さうぢし、仏前の壺ぼりをはらひ、日暮て道遠ければ堂の軒に夜をあかし、明あれば又柴をになひうりけり。渋染しぶぞめの帷子かたびら一重だに肩かたすそやぶれ侍れども、心にかゝるすべもなし。

「白骨の妖怪」

間衡山ノ縣市ニ出テ人従リ丐ヒ、錢ヲ得レバ則ハチ醢酪ヲ市ヒテ徑ニ帰ル。
諸寺ノ廟ヲ遍遊シテ神仏ノ塑像ヲ扨拭シ、鼻耳ノ竅ニ塵土有ラハ、即チ筆ヲ以テ之ヲ撚リ出ス（訓点は私にほどこした）。

「劉先生者云々」

飄々とした隠者という「劉先生者云々」の人物設定を、「白骨の妖怪」は忠実に踏襲しているようにうかがわれる。しかし佐太が飄逸をもつぱらとする人物でない事は、白骨の妖怪に遭遇した時に明らかとなる。

佐太は心もとより不敵てきにして、力もつよかりければ、すこしもおどろかず（中略）一具の白骨ありて、頭かうべより足までまったくつゞきながら、肉にくもなく筋すぢも見えず、たゞ白骨のみかうべ手足つらなりて臥ふしてあり。その外には何もなし。この白骨にはかにむくりとおきあがり、佐太さたにひしといだきつきたり。佐太はしたゝかものなれば、力にまかせてつきければ、のけざまにたをれて頭かしら手足はら／＼とくづれちり、重ねてうごかず。

「白骨の妖怪」

北壁ニハ惟白骨一具アリ。頂ヨリ足ニ至ルマデ俱ニ全タキモ、余ハ一

物モ無シ。劉方ニ起坐シ少シ近ヅキテ之ヲ視ルニ、白骨倏然トシテ起チテ急ニ前ミテ劉ヲ抱ク。劉力ヲ極メテ奮撃スレバ、乃ハチ零落シテ地ニ墮チ、復タ動カズ（訓点は私にほどこした）。

「劉先生者云々」

「白骨の妖怪」においては、「したゝかもの」の類似表現として、「不敵」なる語が用いられている様が、うかがわれるのである。

なお、「劉先生者云々」には見られない、腕力に秀でた「不敵」あるいは「したゝかもの」の描写が、「白骨の妖怪」には挿入されている様も見受けられる。

すなわち「白骨の妖怪」においては、「劉先生者云々」の隠者像を踏襲しつつも、気骨ある大胆な「不敵」な「したゝかもの」へと、主人公の人物像は変貌を遂げているといえよう。典拠の物語展開ならびに人物設定を踏襲しつつも、そこに独自性を加えてゆくという手法が見受けられるのである。

さらには、怪異に遭遇した後、「白骨の妖怪」は「後に佐太はその終る所をしらず。」という、主人公が行方不明になる形で、幕を閉じているのに対し（62）、「劉先生者云々」においては、怪異に遭遇した後も、主人公の日常生活の継続が明記されている点も、これら二話の相違点であると言えよう。

ついで、『伽婢子』における「したゝかもの」に類する「不敵」の形容を冠せられた人物の登場する話を取り上げる。巻二ノ三「狐の妖怪」がそ

れであり、以下にあらずじを述べる。――「相撲をこのみ、力量ありて、

心も不敵なりける」人物の割竹小弥太は、ふとした偶然から狐が美女に変化する姿を見かけ、逆に狐をだまして儲けてやろうと決意する。そして正

体を狐とは知らず、件の美女に一目ぼれした石田市令助に、女を売り渡し

てしまう。その結果、石田は狐美女に精気を吸われて殺されかけるが、裕覚僧都の祈祷により事なきを得たという。

前述の宇佐美氏は「狐の妖怪」の典拠として、『剪燈餘話』巻三「胡媚娘伝」を挙げている（63）。

しかしながら、「胡媚娘伝」の黄興（小弥太に相当）には、大力で「不敵」の描写はない。進士の蕭裕が金持ちで女好きなのを見て取った黄興は妻に「吾力貧行脱スヘシ」と嘯き、狐の変化である媚娘とそれとなく引き合わせている。

対して、「狐の妖怪」の石田には不品行の描写はなく、狐美女を見初め

たのも偶然である。なお、狐を売り渡すときの小弥太の心情の記述もなされていらない。

すなわち「胡媚娘伝」における、富裕になるためには手段を選ばない、野心的で狡猾な策士から、腕力に秀でた「不敵」な人間へと、主人公の人物像は変貌を遂げているのである。

そしてこれらの主人公は、物語におけるその結末をも異にしている。以下に当該箇所を引用する。

さて武佐むさの小弥太をたづねさするに、女を売うりて徳つき、家うつして、

いづち行ゆきけるともしらず。

「狐の妖怪」

人ヲ新鄭ニ遣シテ黄興ヲ問ハシム。興已ニ居ヲ移ス。家道殷ンニ富テ復タ驛ノ卒タラズ。蓋シ裕カ聘財ヲ得タルノ致ス所ノミ。始メ略狐ヲ嫁セル実ヲ人ニ言フ。詢ヒシ者ノ帰テ具ニ以テ太守ニ告ス。

「胡媚娘伝」

狐を売り渡した金で富裕になっている点までは、小弥太、黄興ともに共通である。しかし、太守が遣わした使者に対して狐を売ったことを白状している黄興に対し、裕福になったはずの小弥太のその後は不明である。「胡媚娘伝」と異なり、日常生活の継続が明記されていない様子がうかがわれるのである。

続いての「不敵もの」が主人公である話は、卷十一ノ「隠里かくれざと」である。

前述の「白骨の妖怪」同様、本編には若干の考察を加えてきたが（64）、本章段では原話・類話と比較した際の主人公の人物造形、ひいては「不敵もの」という観点から、再度考察を加えてゆきたい。——「武芸ぶげいをたしなみ、弓馬の道に稽古けいこの功こうをかさね、しかもそのこゝろ根ねきはめて不敵てきもの」である内海又五郎は、洞窟に住まう猿の化け物たちを退治し、さらわれていた美女ふたりを助け出し、妻と財産とを得るというのが、「隠里」のおおよその物語展開である。

前述した宇佐美氏は、「隠里」の典拠として『剪燈新話』卷三ノ三「申陽洞記」を挙げている（65）。

以下、作品についての読解を深めるため、「隠里」の典拠ならびに類話と見受けられる作品——延宝五年（一六七六）に刊行された『あやしぐさ』卷六「申陽洞記」、そして寛永頃の成立が推定される『奇異雑談集』（写本）下卷ノ十七「申陽洞シンヨウドウの事」——から、主人公の人物設定を引用し、比較する。

内海又五郎とて武芸をたしなみ、弓馬の道に稽古の功をかさね、しか

もそのこゝろ根きはめて不敵ものなり。

「隠里」

李生名ハ徳逢。年二十五。騎射ヲ善クス。弓馬ヲ馳騁シ、胆勇ヲ以テ称セラル。然トモ生産ヲ事トセズ郷党ノ為ニ賤棄セラル。

卷三「申陽洞記」

李生名は徳逢とゆふもの有。其比年廿五歳、よく馬に乗り、弓を射る。ついに弓馬を以、けなげ物なりと名をしられたり。然とも世をわたるわさをことゝせず。なみ／＼の人にかわりて、人をひとゝともせず。たいたんものなれば、其所の人にもきらわれ、すてられたり。

卷六「申陽洞記」

李生徳逢と、いふものあり

年廿五、よく、馬にのり、よく、弓をい、勇をもつて称せらる、妻子を、ことゝせず、郷党に崇敬せられず

下卷ノ十七「申陽洞の事」

以上の比較からは、弓馬の道に秀でてい、という原話の設定を踏襲しつつ、郷里に受け容れられていないという描写を、「不敵もの」の描写に改変するという、「隠里」独自の人物設定がうかがわれる。

原話のプロット及び人物設定を受け継ぎながらも、そこに独自性を加えてゆくという手法が、ここでも見受けられるのである。

ついで、これらの章群の結末を比較する。当該箇所を以下に引用する。

又五郎それより武門の望をはなれ富祐安穩の身となりぬ。後に又木

幡山の野はづれを尋ぬるに、かへり出たるあなは跡もなく松茅しげり、

草むらとぢたるばかり也。又五郎は後つみに子もなく、その行がたをしらず。

卷十一ノ一「隠里」

生一タヒ三女ヲ娶、富貴赫然タリ。復タ其ノ処ニ至リ、路口ヲ求メ訪へバ、則ハチ豊草喬林ニシテ、遠近一ノ如シ。復タ舊蹤無シ。

卷三「申陽洞記」

一度に三人のむすめをめぐりて、たのしみを極たり。

卷六「申陽洞記」

李生、一身にして、三女を、めぐるなり、富貴繁昌するなり

「隠里」における又五郎は、武芸をたしなみ、苗字を許されていること、さらには傍線部のように「武門の望をはなれ」という描写のあることから、武士階級の出身である。

そもそも日本は血族信仰の国である。「家」を次世代に継続させる意識が強くあり、武家にあつてはそれが顕著であった。中世の武士が「一所懸命」になって守ろうとしたのは、彼らの所有する土地であり、それを生活基盤とする一族の血脈だった。江戸時代においては末期養子などというなりふり構わぬ手段を弄してさえ、武士たちは己の家門を絶やすまいとした(66)。

又五郎は洞窟からふたりの美女を救い出し、両家の婿になつていく。にもかかわらず、彼には子どもがいない。当時の武門の人間の悲願たる血脈の存続が出来ないのである。

加えて「その行がたをしらず」。又五郎の生存も死も、不幸も幸福も不明な一文である。主人公の栄達や幸福のみを描く原話、類話とは異なつた、独特な結末であるといえよう。

以上の事例を考慮すると、「隠里」、「狐の妖怪」、「白骨の妖怪」――これら三話の主人公には、次のような特質がうかがわれる。

第一に、これら三編の主人公の人物描写には、典拠ないしは類話に見られない、「したゝかももの」「不敵もの」の形容が冠せられている点である。

また、「狐の妖怪」の割竹小弥太は相撲を、「隠里」の内海又五郎は武芸及び「弓馬の道」をそれぞれの特技とする。そして、「白骨の妖怪」の長間佐太は、白骨の妖怪を粉碎するほどの剛力である。

以上のことから、「不敵もの」で「したゝかももの」の主人公たちは、傑出した身体的能力の持ち主であるか、武勇に秀でているという特質がうかがわれるのである。

さらには、「狐の妖怪」の小弥太は狐が美女に変化する有様を見ても、「すこしもをそれず」、「白骨の妖怪」の佐太は、白骨を目の辺りにしても「すこしもおどろかず」といった有様であり、怪異への恐怖を抱いていない。また「隠里」の又五郎は、偶然遭遇した猿の妖怪に、とがり矢の不意打ちを浴びせている。

このように、主人公が神靈的なものに畏敬の念を持ちあわせていない点も、前述してきた三話の特質といえよう。

また、原話の結末が改変され、主人公の行方不明で幕を閉じている点にも、着目すべきであると考えられる。

続いてはこれらの特質をふまえつつ、改変された結末に託された作者たる了意の意図について、考察を加えてゆきたい。

・ 仏教には三世因果の理ををしへて、四生流転の業をいましめ、或

は神通或は変化の品／＼を説給へり。又神道の幽微なる、草木土石

にいたるまで、みなその神霊ある事をしるして、不測の妙理をあら

はせり。三教をの／＼霊理・奇特・怪異・感応のむなしからざるこ

とををしへて、其道にいらしむる媒とす。

・陰陽五行、天地の造化は広大にして測がたく、幽遠にして知がたし。

このように『伽婢子』序文には、三教を引き合いに出し、人智の及ばぬ領域と、神霊、それに起因する奇特が存在し、それらを強調する記述が見られる。そしてこうした描写からは、人知の及ばぬ領域の妙を説くことが、『伽婢子』の主眼の一つであった様うかがわれるのである。

しかしながら、前述のした三話の主人公たちには、神霊的な存在への畏敬の念はない。それは了意が重きを置いて、その強調を試みた価値観を否定することにつながる。

何らかの事物の脅威を強調するには、その事物に反逆した存在に「罰」を与える、あるいは貶めることが効果的である。そしてその「罰」は、「隠里」における「又五郎は後つゝに子もなく」という、武門の出身でありながら一族の存続が叶わないという主人公の不幸であり、三話に共通する「その終る所をしらず」という結末であったと考えられる。

各々の原話には見受けられない、このような描写は、「不敵もの」たちの、神霊的な存在をも恐れぬその大胆が招いた事態であることを、暗に読者に示しているのではなからうか。

「その終る所をしらず」——拙稿でも述べたように(67)、この描写で了意が意図したのは、「不敵もの」「したゝかももの」たちにいったんは退けられた怪異が、後になって彼らに果たすかもしれない報復の暗示と、それに起因する恐怖だったと考えられるのである。

以上、本章段では『伽婢子』における「したゝかももの」「不敵もの」たちの人物造詣ならびに特質を考察し、彼らの運命には、翻弄され、凌駕された怪異の報復の暗示が影を落としている点を述べてきた。

これらの事柄を踏まえつつ、【表3】に掲載してきた、さらなる「不敵」ものたちの登場する近世怪異小説群を取り上げ、考察を加えてゆきたい。

初めに、『曾呂利物語』巻三ノ三「蓮臺野にて化物に逢ふ事」を取り上げる。——都の蓮台野には二つの不思議な塚があり、一方の塚は夜な夜な燃え、もう一方の塚からは「こはや／＼」とのすさまじい声がしていた。ある時若者たちが集まり、蓮台野に行つて件の声の正体を晴らす者を募つ

たところ、ある「不敵なる男」が、申し出に応じて出かけた。暗く雨降るすさまじい夜であったが、男が「こはや／＼。」と呼ばう塚に向かい、その正体を誰何すると、塚の内から年四十あまりの「色青く黄ばみたる」女が現れ、もう一つの塚に自分を連れて行って欲しいと頼んだ。男が承諾して女を背負い、件の塚に行ったところ、女はそのまま塚の内に入り、ややあつてすさまじい「鬼神の姿」になつて出てきた。再びもとの塚に自分を連れて戻れと言われた男は、鬼神を背負い、言う通りにしてやった。鬼神は再び塚の内から女の姿となつて現れ、男の勇気を褒め、感謝の言葉を述べたから、ちいさな袋に「重き物」を入れて与える。男が帰宅し、人々に事の次第を語ると、人々はその手柄の程を感じ入つたというのが、おおよそのあらすじである。

しかしながらこの「不敵なる男」、塚の内から女が現れた際には「男恐ろしくは思へども」、女が「鬼神の姿」となつてもう一つの塚から立ち現れ、元の塚に連れて行けと言つた際には「此の度は気も魂も失せけれども」、満足した女が、ちいさな袋をくれた際には「彼の男鰐の口を逃れたる心地してぞ、急ぎ家路に帰りける。」と、いざ怪異と相対し、その人知を超えた力を目の当たりにした折には、結構恐怖心の表明をしているのである。「不敵」な主人公が怪異の脅威を際立たせる役割を担っている様、ひいては人間に対する怪異の優位性が強調されている様が、うかがわれよう。

ついで、巻四ノ十「怖ろしくあいなき事」を取り上げる。あらすじは以下の通りである。――陸奥の小野寺という山寺には化け物があり、それが為無人の家があつた。その噂を耳にした旅人が、話の種にする為にと、件の家へ出向いたところ、「五丈余なる男の、色青く如何にも瘦せ衰へたる」様子の化け物が現れ、戸を蹴り放して家の中に入ってくる。旅人はこれを組み止めようとすもの、あべこべに胸を蹴られて気絶してしまふ。夜が明けて人々がやって来、旅人に事の次第を聞くと、彼は事の次第を語つた。その家に住む者は、いよいよいなくなつたという。

五丈余なる男の、色青く如何にも瘦せ衰へたるが、妻戸に取り付き

大息つき、(中略) 怖ろしとも云はん方なし。されども不敵なる者なれば動ぜず、かゝらば切らんと思ふ。

このように「不敵なる者」と設定され、出現した怪異にも恐れを抱くことのない旅人であるが、結局は「化物に胸をはたと蹴られて倒れて」そのまま気絶してしまうのである。主人公の「不敵」さ故に、怪異の脅威がかえって際立たせられている様が、ここからもうかがわれよう。

以上の事柄から、『曾呂利物語』における「不敵もの」たちは、怪異を恐れぬその豪胆さ故に、怪異に挑もうとはするものの、結局はそれを打破することはできない人物として設定されている様が、うかがわれるのである。『伽婢子』における「不敵もの」「したゝかもの」程ではないにせよ、あまり肯定的な描かれ方をされていない様が見受けられると言えよう。

ついで、前述した『諸国百物語』巻三ノ十五「備前の国うき田の後家まん気の事」を取り上げる。

「後家あまりにまんきあるゆへ天狗しやうげをなしけると也。」の一条からもうかがわれるように、本編は、慢心した後家が天狗にこらしめられる話である。

しかしながら同時に、後家は「心ふてきなる人」としても設定されている。「ふてき」と慢心の結びつきが、「備前の国うき田の後家まん気の事」には見受けられるのである。

以上の事柄から、「備前の国うき田の後家まん気の事」における「後家」は、『伽婢子』における「不敵もの」「したゝかもの」同様、怪異を恐れていないが、その豪胆さ故に、当初は妖異からの脅しに屈しないものの、二度目の脅しに屈し、醜態を晒してしまう人物として描かれていることが、うかがわれるのである。

続いての「不敵もの」が登場する話は『新御伽婢子』巻二ノ十「樹神罰」である。以下にその物語展開を挙げて行く。

上京の五辻に住まい、絹屋を営む「ふてき」の男が、樹神の宿る木を自ら切り倒そうとし、数度斧を入れる。そしてその夜男は、傷付けられた樹神の精の化身に遭遇する。以下にその場面を挙げる。

若き女の 賤 からぬが、足に疵をミせて亭主か傍により(中略)涙にむせびさめ／＼と泣元来ふてきの男なればわきかへる茶をひとつ女の顔にざぶとかけ起なをる内に女は消て失ぬ是より男狂乱しておめき

さけび己と斧を持って足手に切付鑊子をとりにて茶を浴し荒あつやたえ

がたやと悩乱する事二時斗して狂ひ死にしけり

樹神を恐れず、それに不敬な態度を取った男はその罰を受け、自らが樹神に与えたと同じ傷を我が身に与えながら、狂乱して死ぬという、無残な末路を辿っているのである。

ついで『新御伽婢子』巻四ノ二「禿狐」を挙げる。都の西洞院に住む「不敵」の男が、ある夜友人のもとから帰るさ、怪異に遭遇するというのが、本編のおおよそのあらすじである。以下にその遭遇場面を挙げる。

後よりほそ腰にいだきつきて引とゞむる。其重さ盤石のごとし。此男

あくまで不敵の人なりければ。心得たりと先両の手を妻手にてとらへ。

弓手にて後をつかむに。

狐の化身である異形の禿に遭遇した男はこれをとらえるが、結局は逃げられてしまうのである。

以上の事柄から『新御伽婢子』における「不敵もの」たちは、怪異を恐れぬその豪胆さ故に破滅してしまう人物。ないしは、その豪胆さ故に、一度は怪異を捕えるものの、結局はそれを打破することはできない人物として設定されている様が、うかがわれるのである。ここでも「不敵もの」の人物像が『伽婢子』における「不敵もの」「したゝかももの」程ではないにせよ、あまり肯定的な描かれ方をされていない様が、見受けられよう。

以上、『伽婢子』における「したゝかももの」「不敵もの」たちの人物造形ならびに特質を考察し、彼らの運命には、いったんは嘲弄され、凌駕された怪異の報復の暗示が、影を落としている点。

そして『曾呂利物語』、『諸国百物語』、『新御伽婢子』に所収されている「不敵もの」が登場する話においては、これらの登場人物もまた、怪異を恐れず、ひとたびはそれを凌いだように見えるものの、最終的にはその豪胆さ故に破滅してしまう点、怪異に逃げられてしまう点、ないしは醜態をさらしてしまう点をふまえ、これらの「不敵もの」たちが、あまり肯定的な描かれ方をしていない点を考慮してきた。

これらの事柄をふまえつつ、「板垣信形逢天狗」の主人公たる「したゝかももの」――板垣信形と、怪異の關係に考察を加えてゆきたいと考える。

「板垣信形逢天狗」において、「不敵もの」に類する「したゝかももの」

の呼称を冠せられている信形は、「武勇の名、たかく。諸方の軍に、手柄を

あらハせし者」「晴信秘蔵の勇士」という人物として設定されており、『伽婢子』の「不敵もの」「したゝかもの」同様、武勇に優れた豪胆な勇士である。

さらには「何条、かやうのためしハ、武家にハ、ある物なり。おどろき、

おそるゝに足らず」と天狗の怪異を恐れていない。また「別の事ハなく」と、天狗が立ち去った後も、当座の目立った被害はない。

しかしながら、その後の信形は精神の均衡を失い、いくさで討死しているのである。すなわち、「板垣信形逢天狗」においては、恐れを知らぬ者、妖異に畏敬の念を払わぬ者は、最終的には怪異からの報復を免れ得ないのである。

以上の事柄から、「板垣信形逢天狗」における「したゝかもの」の板垣信形に対しては、『伽婢子』では暗示に留まっていた、「不敵もの」に対する怪異の報復が、より明確な形を取っていること。そしてまた、「したゝかもの」である信形は『新御伽婢子』に見受けられたような、当初は怪異からの脅しに屈してはいないものの、最終的にはその呪縛から脱し得ることが出来ず、破滅してしまう人物として位置づけられていることがうかがわれるのである。

また、武勇に秀で、主君からの信頼も厚い信形だが「信形、此頃、武篇の名、世にたかく。むかふ所、軍にかたず、と、云事なれば、武勇に慢をおこし。敵方にハ、手足もなきものゝやうに、思ひあなどり、家人原も、

同じくほこり。慢心を、起せし故に、かゝる妖怪をも、うけたり」と「武勇」から「慢心」を引き起こし、その心ゆえに怪異を招くという、否定的な側面も兼ね備えている。

さらには、「不敵」に類する「したゝか」が「慢心」と密接な関係を持つという構図は、前述の「備前の国うき田の後家まん気の事」に通じるものがあると言えよう。

以上の事柄から、「板垣信形逢天狗」においては「したゝかもの」「不敵もの」であることの罪状がより強調され、『伽婢子』の「したゝかもの」「不敵もの」よりも人物設定が否定的になっており、天狗はその「罪状」である「慢心」を戒める為の役割を果たす、超人的役割を果たしているという結論が、導き出されるのである。

(三) 卷六ノ五「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」を中心に

先の章段においては、『狗張子』卷六ノ三「板垣信形逢ニ天狗」を取り上げ、それに考察を加えてきた。

結果、「板垣信形逢ニ天狗」は『太平記』卷五「相摸入道弄ニ田楽一井闘犬事」を典拠としている可能性があること。

「板垣信形逢ニ天狗」の主人公・板垣信形は、浅井了意による前作の怪異小説短編集『伽婢子』に散見される登場人物が備えている、「したゝかもの」といった特質を有しているが、本編においては、『伽婢子』や、他の近世怪異小説に登場する「したゝかもの」あるいはその類義語である「不敵もの」に比しても、その人物造形が否定的なものになっていること。

さらには「したゝかもの」の板垣信形に対しては、『伽婢子』では暗示に留まっていた、「不敵もの」に対する怪異の報復が、より明確な形を取っていることが明らかとなった。

本章段ではこのような事柄を踏まえつつ、『狗張子』における第三の「天狗」譚、卷六ノ五「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」について、さらなる典拠の指摘ならびに考察を加えることを目指してゆきたい。――武蔵国榛沢郡の住人・杉田彦左衛門は、性質が不敵で怖いもの知らずだった。月に三回開催される日光の今市に出かけ、帰りには山賊をして道行く人を殺して金品を奪うことで、裕福に暮らしていた。ある年の九月、市の帰途に日光山の孫太郎という天狗に出会う。彦左衛門が道を空けるよう一喝すると、天狗は来年の四月十五日にお前をとると言い捨て、姿を消す。その時は何事もなく帰宅した彦左衛門だったが、それから日光には行かなくなった。やがて彦左衛門は二月末から煩い出し、四月十五日には高熱のあまり狂ったようになり死ぬ。国西寺の国道和尚を引導の師とし、彦左衛門の葬礼が行われる。だが雨風がひどく、葬列が墓所の近くに至ると雷が鳴り、屍を渡せとの声が空から響く。和尚は、師檀の契約を結んでいる者の屍は渡せないと言いつ返し、菊一文字の脇差を抜く。雷は脇差にだけ落ち、屍は無事であり、葬儀も滞りなく行われた。和尚は、彦左衛門はその不敵さゆえに人も神仏をも恐れず、悪事を働いたので、怪異を招いたと語り、仏道に専心することを人々に勧めたというのが、おおよそのあらすじである。

富士昭雄氏は、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」の類話として『奇異雑談集』卷四ノ一「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きたりて死人を、とる事」、卷四ノ三「管根山、火金の地蔵にて、火車を見る事」(前述してきた

『奇異雑談集』(写本) 下巻ノ一「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きた

りて死人を、とる事」、下巻ノ三「ハコネヤマヒカネ菅根山火金の地蔵の事」に該当）を挙げ

(68)、江本裕氏は片仮名本『因果物語』下巻十一「アッケン悪見ニ落タル僧、ジタ自他ヲ損ズル事」ノ三、平仮名本『因果物語』卷二ノ十七「ソウ仏法を、あしくすゝめて、バチ罰あたりし事」を、それぞれ指摘している(69)。

さらに江本氏は「地域共同体の中で死人を弔う場面では雷が鳴り響く点(場所も山で大雨)、さらに、天狗ではないが黒雲が死体をさらおうとする点、葬式を取り仕切る者が強気に立ち向かい死体を取り返す点なども共通する。」として、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」と「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きたりて死人をとる事」の類似性を指摘してもいる(70)。

なお江本氏は、「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損スル事」ノ三、「ソウ仏法を、あしくすゝめて、バチ罰あたりし事」を挙げ、妖怪による死体の略奪という点が卷六ノ五「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」に類似することを述べている(71)。

これらの話と「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」の共通項については、後程詳述する。

しかしながら「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」のストーリーならびに表上の特徴に着目しつつ読解を進めてゆくと、前述した話以外にも、本編の執筆に際し、了意が利用した話が存在すると考えられる。

了意自身の著作であり、万治二年(一六五九)に刊行された『堪忍記』の七ノ二十二ノ九(72)がそれである。以下にそのあらすじを述べる。――東国に嫉妬深い女がいた。夫が別宅に妾を置いていることを知った女は激怒し、その思いが昂じてついには死んでしまう。その死に様は、髪は逆立ち、口は耳まで裂け、目は塞がらず虚空を睨みつけるといふ、鬼のような有様であった。人々が葬礼を営んだところ、にわかには雷雨となった。やむをえず人の家を借り、屍を安置したところ、火車が出現し、女の屍を奪い去った。しばらくして雷雨は止み、女の屍は引き裂かれ、木にかかられていた。その夜から女の亡霊が現れるようになったので、人々は真言の阿闍利を頼んだ。現れた件の亡霊に阿闍利が仏道の理を説くと、女は姿を消したという。

ここで卷六ノ五「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」が『堪忍記』の七ノ二十二ノ九を引用していると見られる、その当該箇所を引用する。

・いなり稲荷の家より、(1)さうらい葬礼をいたしけるに、ふう風あらく、(2)ふる雨の降事は

うつつすがことくうつつすがことく。むしよ墓所ちかく、成しより。(3)いなびかりいなびかり。しき荐りに

して。はた、雷、すでに棺のうへに。おちかゝるやうに、おほひ
て、

・そのかみは、(4)関東がた。人死すれば、(5)火車の来りて、戸をう
ぱひとり。(6)ひき割て、大木の枝に、懸置たる事も。おほかりし

「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」

・人、おそろしく思ひ。(A)葬礼の事いとなみければ。空かきく
もり。(B)いかづち、いなびかりして。

・(C)雨は風まじりに横きりて。うつすがごとく、ふりければ。

・(D)東国がたに。物ねたみふかき女あり。

・(E)火車落かゝり。女のかばねをとりて去けり。(中略)女のかばね
は、(F)引ききて。うしろなる木にかけたなり。

『堪忍記』七ノ二十二ノ九

すなわち、怪異が起こるのが「葬礼」の時である点(傍線部(1)―(A))。妖怪の出現に際し、雨が「うつすがごとく」降る点(傍線部(2)―(C))。雷がとどろき、その描写に「いなびかりして」という表現が用いられている点(傍線部(3)―(B))。火車の出現がともに「東」の地方である点(傍線部(4)―(D))。火車が出現し、屍を略奪する点(傍線部(5)―(E))、火車が屍を引き裂いて、木の枝に懸けるといふ点(傍線部(6)―(F))など、卷六ノ五「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」と『堪忍記』七ノ二十二ノ九には、このような表現上の類似点が見出されるのである。

また「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」は、妖怪を退けた国西和尚が人々に仏道への帰依を説く場面で幕を閉じている。

対する『堪忍記』七ノ二十二ノ九の結末は、火車に屍を引き裂かれた女の亡霊に、阿闍利が仏道の理を説き、亡霊が成仏するというものである。

このように、これらの二話には、怪異を退散させた僧侶が、物語の最後で仏道の理を説くという、展開上の共通性も見受けられるのである。

ついで、前述の江本氏が類似性を指摘した、「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損スル事」ノ三、「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」と「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」の当該箇所を引用し、共通項の分析を試みる。

彼長老、報尽テ。頓テ死去ス。龕ヲ昇出サントスル処ニ。俄ニ、天曇

雷鳴、火車来テ長老ヲ擗行。此彼コニ、死骸ヲ捨タリ。

しかるに、かの長老、むなしく成ければ、葬さうれい礼せんとして、棺くわんをかき出しける所に、火車くわしや来りて、尸骸しがいをつかみて、ゆき、かなたこなたに、手て足首あしくびを引ちぎり 木のえだに、かけをきけり

「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」
このように「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損ズル事」ノ三における、葬礼の折に火車が死体を略奪し、それを引き裂く点、また火車の出現時に雷がとどろく描写は、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」に類似しているが、雨の描写、火車が死骸を木の枝にかける描写は見られない。

「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」においては、葬礼の際の火車の出現、死体を略奪し、引き裂いたそれを木の枝にかけ置く点が共通しているが、火車出現の際の雷鳴と雨の描写が見られない。

またこれらの二話には、怪異を退けた僧侶が仏道の理を説くくだりも見受けられないのである。

以上の事柄から「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」はその執筆に際し、了意自身の著作である『堪忍記』七ノ二十二ノ九を利用している可能性が導き出されるのである。

以上の事柄をふまえつつ、本章段では「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」について、さらなる読解を進めてゆきたい。

前述のように、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」では、雷雨とともに出現した妖怪によって死体略奪の試みがなされるものの、僧侶が脇差をかざすことで、それを阻止している。さらには「関東がた。人死しすれば、火車くわしやの来りて、尸かみねをうバひとり。ひき割さきて、大木ほくの枝えだに、懸置かけをきたる事も。おほかりし」という描写が見受けられる。

一方、天保四年（一八三三）に刊行された『茅窓漫録』には、次のようなくだりが見られるのである。

愚俗の言伝へに、其人生涯シヤウガイに悪事を多くせし罪ツミにより、地獄ヂゴクの火車クハシヤが迎ムカひに来りしといふ。後に其尸ノカバネを引裂き、山中の樹枝キノエダ、又は岩頭イハカドなどに掛ケ置く事あり

堤邦彦氏はこのくだりを「民衆の目に映じた火車妖怪のイメージを代弁したものであると述べ、「近世の民俗信仰において、荒天が葬棺を吹き飛ばして屍を連れ去る「火車」の怪異は、広い伝承圏をもって諸国に語り伝え

られていた。」ことを指摘している(73)。

また山田巖子氏は、火車が「近世期には、葬式の際に死体を取りに来る化け物の名称として広く知られていた。」ことを述べている(74)。

さらに前述の『茅窓漫録』には、火車に関する次のような記述が見受けられる。

西国雲州薩州の辺、又は東国にも間々ある事にて、葬送のとき、俄に大風雨ありて、往来人を吹倒す程の烈しき時、葬棺を吹上吹飛す事あり。其時、守護の僧珠数を投かくれば異事なし、若左なきときは、葬

棺を吹飛し、其尸を失ふ事あり、是を火車に捉れたるとて、大に恐れ恥る事なり。

火車の出現が東の地方である点、雷雨とともに出現した妖怪が屍の略奪をもくろむ点、僧侶の法力により阻止が可能な点、火車が悪人の死体を引き裂き、木の枝に掛けようとする点など、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」における妖怪と『茅窓漫録』の「火車」の項には共通する要素が見受けられるのである。

さらには『堪忍記』七ノ二十二ノ九、片仮名本『因果物語』下巻十一「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損ズル事」ノ三、平仮名本『因果物語』巻二ノ十七「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」、『奇異雑談集』巻四ノ一「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きたりて死人を、とる事」、巻四ノ三「菅根山、火金の地蔵にて、火車を見る事」(前述してきた『奇異雑談集』(写本)

下巻ノ一「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きたりて死人を、とる事」、

下巻ノ三「菅根山火金の地蔵の事」に該当)。――「杉田彦左衛門、天狗

に殺さる」の典拠・類話として前述してきたこれらの作品群にも、火車や、火車と思しき妖怪の出現は共通している。

以上の事柄から、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」は、「火車説話」としての要素を内包しているという結論が、導き出されるのである(75)。

それ故本稿では、【表4】に見る『狗張子』以前の近世怪異小説における「火車説話」を取り上げ、これらの作品群を、描かれている火車像、ならびに火車に罰せられる人間の「罪状」という観点から、読解を進めてゆく。

なお、火車に罰せられる人間の「罪状」に関しては、その「罪状」と仏教性との関連という視点から、中村祥子氏による研究がなされている(76)。

しかしながら本稿においては、火車に罰せられる人間の「罪状」ならびに火車の形状という観点を通じて、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」で描か

れる火車像と、【表4】に見る近世怪異小説集における火車像との比較を試み、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」の独自性について、考察を加えてゆきたいと考える。

初めに寛永頃の成立とらしい、『奇異雑談集』（写本）に収録されている、二話の「火車説話」について、考察を加えてゆく。

第一の「火車説話」は、前述した「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きたりて死人を、とる事」であり、そのあらずは以下の通りである。――
越後の上田の庄に、雲東庵という寺があった。その檀那が亡くなったので、長老が引導を渡すことになったのであるが、葬列が山頂にさしかかった折、雷が激しく鳴り、大雨が降りだした。やがて黒雲がやって来、柩の蓋を開けて死人を取ろうとするところを、長老は死人の足にしがみついた。ややあって、長老は死人と共に地に落ち、雷雨も止んだ。人々は長老の強靱な気性を褒め称え、いかなる罪人でも助けることが叶うと言った。

・(1) 電雷はなはた、なりて、人、頭を破がごとし、(2) 大雨ふるこ
と、盆の水を、かたむくるがごとし

・(3) 黒雲一むら、龕のうへに、おちくたりて(中略)(4) 死人を、つかんで、あかる処を、(5) 長老、たいまつを、すてゝ、はしりかゝりて、死人の足に、とりつく、なを引てあかる

・雷、雨やうやく、やミ、(6) 長老、気たいらかにして、つゐに、下火をなすなり(中略)長老のきぶん強精なり、いかなる罪人なりとも、

たすけらるへしと、しよ人いへり

・その辺に、高山あり、(7) 黒雲、嶺に、かゝれば、火車いてゝ、雷雨はなはたしきことあり

このように、「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きたりて死人を、とる事」において描かれる火車は、前述の「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」や『茅窓漫録』と同じく、葬儀の際に、大雨と雷鳴、黒雲と共に現れる様(傍線部(1)、(2)、(3)、(7))。死人を取ろうとする妖怪である様(傍線部(4))。僧侶に退散させられるべき存在として位置づけられている様(傍線部(5)、(6))が、うかがわれるのである。

しかしながら、後述する章群に登場するような、火車に連れて行かれた人間の「罪状」は不明である。

続いての「火車説話」は、「ハコネヤマヒカネ管根山火金の地蔵の事」である。――伊豆国管根山権現の傍に、火金の地蔵の堂があり、権現に参詣する人は、地蔵に詣でるのが習わしとなっていた。駿河の府中に朝日名孫八郎という人がおり、その隣家の地下人に、左衛門という者がいた。ある時左衛門が権現に参詣するついでに、地蔵に参ることがあった。ややあって仏前に、色青白く、やせ衰えて、幽霊のような姿の、朝日名殿の女中が一人やって来た。朝日名殿は大名であるのに、女中が一人でやって来たことを、自分が仏前にいるのにも見もしなかったことなどを訝っている、空が急に曇り、雷鳴と光が甚だしくなった。やがて黒雲が地に落ち、中から火車と鬼神が現れ、女中を火車に乗せて去った。地蔵堂の別当にこのことを語ると、別当は、この先に地獄谷という所があること、先刻の女中は幽霊であること、を告げた。やがて帰宅した左衛門に、妻は朝日名殿の女中が亡くなったことを語った。人々の中には、朝日名殿の女中は常から情け心のない人であったので、地獄に落ちることは疑いがないという者もいたというのが、おおよそのあらすじである。

(1) クロクモ黒雲そらに、みちて、しんどう、らいでんし、ひかり、はなはだし

(2) クロクモ黒雲地におちて、雲の中より火車クルマいてきたりて (中略) 雲の中より、(3) キジレン鬼神、現じきたりて、ヒメノシヤ女生を、つかんで、クルマシヤ火車に、のせて、サさる

傍線部(1)、(2)からうかがわれるように、火車が「クロクモ黒雲」と密接な関わりを有する様は、前述の「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きたりて死人を、とる事」に通底している。

しかしながら、傍線部(3)に見るように、「管根山火金の地蔵の事」において描かれる火車は、地獄の獄卒である鬼が、悪人を載せて地獄へ連れ行く為の乗り物とされている。前述の「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きたりて死人を、とる事」や、巻「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」で描かれるように、「火車」が妖怪それ自体の名称を示している作品とは、一線を画していると言える。

なお、「管根山火金の地蔵の事」においては火車によって地獄へ連れ去られる「罪人」の「罪状」が明記されており、それは「へいぜい、けんとむの人」であったこととなっているのである。

岡田純平氏は、鎌倉時代に成立した京都府永観堂禅林寺本十界図、十六

世紀に成立した出光美術館本六道絵、『今昔物語集』「造悪業人、最後唱念仏往生語第四十七」、『発心集』第四―四十四「或る女房、臨終に魔の変わるを見る事」を引き合いに出し、中世における火車観が「悪人を臨終の際に地獄へ連れ去るもの」「獄卒が燃える車を牽いている」「悪人を罰するために地獄へ連れ去り呵責するという、仏法の番人としての存在」であったことを指摘している（77）。

さらに、近世になってからの火車像は「極楽往生を妨げるもの、僧侶によつて撃退されるべき存在」へと変貌したこと、その特徴として「葬列を襲う」、死体を「掴む・引き裂く」、「木に掛ける」ということを挙げているのである（78）。

また、堤邦彦氏は火車が「葬列を襲う」ようになった経緯として、「中世後期の地方農村部において、真言宗とならんで着実に教線を伸張させた総持寺派下の曹洞宗各流が、民間布教に際して、他宗では顧みられることの稀であった庶民の葬儀・法要を積極的にこなった事実」に着目し、それが為「地方有力寺院にからめた口碑伝説・口頭伝承において、出棺時の靈異を鎮めた禅僧の法力譚」が流布したことを指摘している（79）。

以上の事柄を考慮すると、前述した『奇異雑談集』（写本）の「火車説話」のうち、「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きたりて死人を、とる事」における火車は、葬列の際に死体の略奪を試み、それを僧侶によつて阻止されていることから「近世になってからの火車」像であり、「管根山火金の地蔵の事」における火車は、悪人を地獄に連れて行く為、獄卒が引く火の車として描かれていることから、「中世における火車」像を踏襲していると言えよう。

これらの事柄を考慮し、前述した片仮名本『因果物語』における「火車説話」である、「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損ズル事」ノ三を取り上げる。あらすじは以下の通りである。――濃州八屋という所の、関山派の長老に、

快祝という者がいた。神木を切らせ、仏像を破壊させ、「仏ハ、我心ニ有^{ホトケ}。

外ニ、仏無^{ホトケナシ}。」という教えを説いていたが、これを聞いた者たちは、長老を尊んでいた。やがて快祝が死に、葬礼をしようと棺を出したところ、俄かに空が曇って雷が鳴り、火車がやって来た。火車は長老の死骸を掴んで行き、あちこちに死骸を捨てた。また、この長老の教えを聞いた者たちも、疫病にかかり、大半は死んだという。

このような物語展開、また、先の引用箇所からうかがわれるように、「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損ズル事」ノ三で描かれる火車は、大雨と雷鳴、そして黒雲と共に、葬列を襲って悪人の死骸をさらい、それを引き裂く、「近世になってからの火車」像である。

そして、罰せられる罪人の「罪状」は、前述のような、邪な仏法を勧めたこととなっている。

また、片仮名本『因果物語』には、火車の名称こそ直接は登場しないものの、「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損ズル事」ノ三に物語展開が通底する話が所収されている。中巻五「二桝ヲ用者、雷ニ掴ル、事付地獄ニ落ル事」ノ一がそれであり、以下にあらすじを述べる。――二桝を用いていた後家が、雷に打たれて死ぬ。舟で廟所に行く際に大雨が降り、雷が轟く。ようよう廟所に着き、遺骸に火をかけたものの、翌日行つて見たところ、遺骸は取り出され、十間程遠くに投げ出されていたという。

・(1) 俄ニ大雨降テ、車軸ヲ流。 (2) 雷電轟テ、四方黒暗ト成。東西

失ス（筆者註…「失ス」は右側に「シツ」、左側に「ウシナフ」の振り仮名あり。）

・明日、行テ見レバ。(3) 死骸ヲ取出シ。十間程遠クニ、捨置タリ。

このように傍線部(1)、(2)からは、前述した『堪忍記』七ノ二十二ノ九、「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きたりて死人を、とる事」、「菅根山火金の地蔵の事」、そして「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損ズル事」ノ三に見たような、火車出現の前兆である、大雨、雷、黒雲といった要素がうかがわれるのである。

また、傍線部(3)に見るように、生前に悪行を働いていたものの遺骸が捨てられるという点も、「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損ズル事」ノ三に共通していると言えよう。

ついで、平仮名本『因果物語』における、前述した「火車説話」であるところの、「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」を取り上げる。

なお、「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」は先に考察を加えた、「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損ズル事」ノ三と内容が一致した話であることが、指摘されている(80)。

それ故、「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」の物語展開や描写は、「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損ズル事」ノ三をほぼ踏襲しており、「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」における火車像は「近世における火車」像であると言えよう。

続く「火車説話」、巻四ノ四「ねたみ深き女、つかみころされし事」のあらすじは次のようなものである。――京の富小路白山町に住む、伊兵衛の女房は「きかめて、りんきふかきものにて、しかも、口わろく、人の事あしさまに、いひなし、人の仕合よくなるを、そねみ、あしくなるを、よろこび」といった人物であった。本願寺宗であったので、夫がある早朝、町内にある道場に参り、夜明けに帰宅したところ、女房の姿はなかった。裏の戸は内側からかけ金のはまっていたので、訝った夫が裏に出て見ると、裏の町の境目の壁際に、裸で倒れていた。のみならず両足を引き抜かれ、

はらわたが出て居り、何者の仕業とも知れなかつた。人々は日頃の行い故にこのような目に遭つたのだとそしり、憐れむ者はいなかつたという。

・立よりてミれば、両のあしを引ぬき、はらわた出て、死てあり

・生ながら、火車にとられける事ハ、をして、しられけり

このように、「ねたみ深き女、つかみころされし事」においては、火車出現の前兆としての、雷雨、黒雲の描写は見受けられないが、悪人を生きながら殺害し、死骸をばらばらにする妖怪として設定されている本編の火車もやはり、「近世における火車」像であると言えよう。

また、罰せられる罪人の「罪状」は、嫉妬深く、他人の幸せを喜ぶような、歪曲した心根の持ち主だつたことである。

続く「火車説話」は、巻四ノ五「生ながら、火車にとられし女の事」である。以下にそのあらすじを述べる。——河内の国・八尾という辺りに、弓削という在所があつた。ある夜、八尾の庄屋が用事があり、平野海道を引き返していると、弓削の辺りから、大きな松明を灯してやつて来る者がある。近くに来たところを見ると、松明ではなく大きな光であり、その中に八尺程の男が二人、若い女房の両手を引き立てて行つた。件の女は弓削の庄屋の女房であつた。八尾の庄屋は怖ろしく思いながらも見送つていたが、やがてその姿は消えて行つた。夜が明けてから使いを出し、様子を尋ねさせたところ、件の女房はここ四五日程病にかかつており、それから三日目に亡くなつた。件の女房は日頃から情けがなく、人に辛く当たり、召し使う者たちにも食物を多くは与えなかつたという。

・大なるひかり也、その中に、何とハしらず、(1)八尺計のおとこ二人、わかき女房の、両の手を引たて、ゆく

・(2)生ながら、地ごくにおちける事、うたがひなし、近き比の事也
傍線部(1)、(2)からもうかがわれるように、この「生ながら、火車にとられし女の事」における火車は、悪人を地獄へ引き立ててゆく、二人組の大男として描かれているのである。

また、罰せられた罪人の「罪状」は「心だてはしたなくて、人を、つらく、あたりて、めしつかひ、朝夕の食物をも、ひかへて、おほくハ、くらハせず」といったこととなつている。

さらに、片仮名本『因果物語』には、この「生ながら、火車にとられし女の事」にあらすじが類する話が収録されている。下巻八「無道心ノ僧、亡者

ニ責ラル、事付破戒ノ坊主、雷ニ逢事」ノ二がそれに該当する。

人を弔うこともせず、殺生を好んでいた僧侶が、雷と共にやつて来た二

人の大坊主に連れて行かれる本編の「本慶寺坊主。徒ラ者ヲ伴テ行ゾ。再

び、娑婆シヤバエ返ス可カエラズ」という大坊主の言葉からは、「生ながら、火車にとられし女の事」と同様、僧侶の連れて行かれる先が地獄であることが示唆されているのである。

これらの事柄をふまえ、前述した西田氏は「生ながら、火車にとられし女の事」では悪人が「大なるひかり」の中に「八尺計のおとこ二人」に連れられて行ったこと、「無道心ノ僧、亡者ニ責ラル、事付破戒ノ坊主、雷ニ逢事」においては殺生を好む僧侶が「大入道二人」に引き立てられていったことから、「近世前期、火車と鬼と雷の像が混融していたことが伺える。」と指摘している（81）。

さらに西田氏は、前述の「二榎ヲ用者、雷ニ摑ル、事付地獄ニ落ル事」をも、「火車と鬼や雷との意味の混融」の事例として挙げている（82）。

以上の事柄から、これら三話は、火車という直接的な名称が、作品中に登場するしないという差異こそあるものの、「火車」「鬼」「雷」という不可分の要素が登場する、類話と言えるだろう。

ついで『諸国百物語』における「火車説話」を取り上げる。巻五ノ二「二榎ますをつかひて火車くはしにとられし事」がそれであり、あらずじは以下のようなものである。――西国の巡礼が京の誓願寺に参詣した折、女来の庭で「とし四十あまりなる女を牛頭馬頭のごづめづをに火ひのくるまよりひきををろし、いろ／＼にかしやくして」また西の方に連れてゆく様を見た。いぶかった巡礼が後をつけてゆくと、車は四条堀川のとりの米屋に入った。巡礼が様子を尋ねると、米屋の女房がここ四、五日の間に急に病にかかり、昼夜に三度ずつ、身が焼けると言って苦しむ由を聞かされた。巡礼が己が見聞きしたことを語ると、亭主は驚き、件の女房は欲深で、常に二榎を用い、己が止めても聞き入れぬ由、その罪によって生きながら地獄に堕ちた由を語り、そのまま出家した。女房は程なく死に、米屋の跡は絶えたという。

このように、「二榎をつかひて火車にとられし事」で描かれる火車は、牛頭馬頭の鬼が罪人を連れ行く為の乗り物であり、すなわち「中世における火車」像である。

また、罰せられる罪人の「罪状」は吝嗇なこと、そして前述の「二榎ヲ用者、雷ニ摑ル、事付地獄ニ落ル事」のように、二榎を用いたこととなっている。

続いて『新御伽婢子』における「火車説話」、巻一ノ六「火車桜」を取

り上げる。――摂州・大阪に近い平野という所に老人夫婦がおり、二人の娘は他に嫁していた。ある時この老母がひどい病にかかり、娘たちが昼夜つききりで看病したところ、ようよう快方の気配が見えた。娘たちが各々の家に帰ったところ、その夜の夢に牛頭馬頭の獄卒が現れ、老母を火車に乗せ、呵責して連れ去ろうとした。兄弟たちは火車を留めようと、庭の桜に結いつけたが、綱も桜も燃え切れ、車は虚空に消えた――というところから覚めた。慌てて親の許に向かおうとしたその時、老母が亡くなったという使いがやって来た。その亡骸は浅ましい悪相になっており、庭の桜は炎で燃えて枯れしほみ、縄目の痕がはつきりと残っていたというのが、おおよそのあらすじである。

この「火車桜」で描かれる火車は、「牛頭馬頭（筆者註…「牛頭馬頭」は右側に「ぎょうとうばとう」、左側に「うしのかしらむまのかしら」の振り仮名あり。）の獄卒火車を引来つて母を取のせ呵責してつれ行」という描写からもうかがわれるように、牛頭馬頭の鬼が病人の極楽往生を妨げ、地獄へと連れて行く為の乗り物であり、「中世までの火車」像であるが、連れ去られる側の「罪状」は明確になってはいない。

これらの事柄を考慮すると、近世初期怪異小説における火車像は、悪人の死骸を引き裂く妖怪としての火車、悪人の魂を地獄へと引き立ててゆく、二人組の異形の大男としての火車、牛頭馬頭の鬼（ないしは鬼神）の引く、悪人を乗せる為の乗り物としての火車に、おおまかに分類されること。大雨や雷、黒雲といった要素と、密接な関わりが見受けられること。

さらに、「管根山火金の地蔵の事」、「二榊をつかひて火車にとられし事」、「火車桜」は、牛頭馬頭の鬼が罪人を地獄へ引き立てて行く為の乗り物としての火車であり、前述の岡田氏言うところの中世の火車像（83）の面影を濃厚に留めていること。「越後上田の庄にて、葬の時、雲雷きたりて死人を、とる事」、「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損ズル事」ノ三、「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」、「ねたみ深き女、つかみころされし事」は、悪人の死体をばらばらにするという、近世期の火車像（84）を顕著に現したものであり、近世期初期の怪異小説には、中世と近世の火車像が混在して描かれていること。

また、火車が罰する死人の罪状は、情け知らずであったこと（「管根山火金の地蔵の事」、「生ながら、火車にとられし女の事」）、邪な仏法を説いたこと（「悪見ニ落タル僧、自他ヲ損ズル事」ノ三、「仏法を、あしくすゝめて、罰あたりし事」）、嫉妬深い心の持ち主だったこと（「ねたみ深き女、つかみころされし事」）、二榊を用いていたこと（「二榊をつかひて火車にとられし事」）となっていることが、うかがわれるのである。

ここで「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」における、主人公の人物設定を引用する。

・武蔵国播磨郡に、杉田彦左衛門といふ者あり、心操不敵にして、物におそれず

・杉田彦左衛門は、その心ね。ふてきにして、力つよき、したゝかものなり。をのれが、つよき心よりして。人をハ、物とも思はず。仏神天たうの冥慮をも、慙おそれず。ほしぬまゝに、悪行をいたし。

人をころし、財物をうばひ。只、よこしまをもつて、身のかざりとす。此故に、かゝるあやしき事をも、感じけり。

前述してきた火車が登場する作品群からは、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」に見られるような、「仏神天たうの冥慮をも、慙おそれない」「不敵」な「したゝかもの」が、その心根ゆえに罰せられるという構図はあまり見受けられない。

また、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」という作品名からもうかがわれるように、本編の作品名には「火車」ではなく「天狗」が冠せられており、彦左衛門を襲った怪異の正体が、天狗である由が明記されているのである。こうした事柄から、「したゝかもの」が天狗に罰せられると言う構図は前述の「板垣信形逢天狗」に通底するものがあると言えよう。

「不敵」ないしは「したゝかもの」の描写。怖い者知らずであり、己の力を誇るあまりに他者を軽んじるという性質。――以上の事柄からは、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」における主人公の人物設定は、冷酷、吝嗇、破戒行為という火車に罰せられる人間の性質ではなく、天狗に罰せられる人間のそれに類似していることがわかれるのである。

よって、「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」からは、前述のような「天狗譚」の流れに「火車説話」としての描写を取り込むことで、怪異小説としての要素をより際立たせようとする、文学的特徴が見受けられるのである。

そして以上の事柄からは、天狗・火車という近世期に比較的流布していたと見られる題材や、了意自身の前著を利用しつつ、そこに新たな要素・設定を加えてゆくという手法が見受けられると言えよう。

七―六・まとめ

以上、本章段においては、近世初期～中期の怪異小説における天狗像をまとめ、それらと『狗張子』における天狗像を比較し、それによって見出された『狗張子』の「天狗」譚の独自性や創作手法について、考察を加え

てきた。

結果、

- ① 『狗張子』以前の近世怪異小説群における天狗像は、己の才能に慢心した人間を戒める、超人的存在である（片仮名本『因果物語』、平仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』、『伽婢子』、『諸国百物語』）。
- ② 僧侶との密接な関係を有している（片仮名本『因果物語』、平仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』、『伽婢子』、『諸国百物語』、『宿直草』、『御伽物語』、『新御伽婢子』）。
- ③ 天狗の力には限界がある様がかがわれる（『伽婢子』、『宿直草』、『御伽物語』、『百物語評判』）。
- ④ 天狗道とは慢心した人間が落ちるためにある（『伽婢子』、『新御伽婢子』、『御伽比丘尼』（『諸国新百物語』））。
- ⑤ 天狗は熱した金属の湯を飲むという苦しみを強いられている（『伽婢子』、『百物語評判』）。

といった事柄が明らかとなった。

そして、『狗張子』における「天狗」譚は、これら従来の天狗像を利用しているのだが、それは単純な形に留まっていない。

巻六ノ二「天狗にとられ、後に帰って、物がたり」は、従来の「天狗」譚に見受けられる、慢心や高僧と密接な結び付きが描かれていることに加え、『伽婢子』巻十三ノ一「天狗塔中に棲」に見た、天狗が慢心した人々に対し超人的能力を発揮し、彼らを懲らしめる様、巻十ノ六「了仙貧窮付天狗道」に見た、天狗が熱鉄を飲むことを強いられ苦しむ様が、一つの作品に盛り込まれている為、そこに描かれている天狗像は、読み手に恐怖感を賦与するのみならず、天狗をより人間的にとらえる傾向をも、与えているのである。

それ故、「天狗にとられ、後に帰って、物がたり」は、天狗を単なる超人的存在として描く、片仮名本『因果物語』、平仮名本『因果物語』、『諸国百物語』などの作品群とは、一線を画していると言えよう。

続く巻六ノ三「板垣信形逢天狗」では、『伽婢子』に見られた「不敵もの」「したゝかもの」の性質をより否定的にし、かつ怪異から被る因果応報の構図をいっそう明確にしている。そして、その裁き手として、従来の怪異小説に見受けられる、慢心した人間を戒めるといふ、天狗の性質を利用しているのである。

さらに巻六ノ五「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」には、近世初期～中期怪異小説に見受けられる、慢心した人間を罰し、かつ熱鉄を飲む苦しみを有するという、天狗のイメージを用いつつ、そこに、悪人の死体を略奪してゆくといふ、近世期の火車説話の側面を導入されているのである。

以上の事柄からは、既存の怪異小説、了意自身の前著である『伽婢子』や『堪忍記』を利用しつつ、そこに新たな工夫を加えるといった『狗張子』の創作手法が見受けられるという、結論が導き出されるのである。

(1) 本稿では『諸国百物語』における「天狗」譚と、他の近世怪異小説における素材を同じくする章群との比較の為、小澤江美子氏が「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」(『大妻女子大学大学院文学研究科論集』第二号、一九九二・三)で『諸国百物語』刊行の延宝五年「までの「近世初期の怪異小説」として挙げている『奇異雑談集』、片仮名本『因果物語』、『曾呂利物語』、『伽婢子』、『宿直草』(『御伽物語』)に、片仮名本『因果物語』以前の成立が見込まれる平仮名本『因果物語』。ならびに太刀川清氏が「序章 百物語と伽婢子」(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)「初出…「怪談会から怪異小説へ」(『国語国文研究』第二十四号、一九六三・一二)」において「伽婢子」と「百物語」、この書名をもつ作品は膨大な数の怪異小説からするとごく僅かなものにすぎないが、これほど近世の怪異小説を意義づけたものもなかった」由を指摘していることを鑑み、これらの「伽婢子」や「百物語」が作品名に冠せられている怪異小説群を取り上げた。しかしながら、江本裕氏によって「第一部 仮名草子」

「四 了意怪異談の素材と方法」(『近世前期小説の研究』、若草書房、二〇〇〇・六)「初出…「了意怪異談の素材と方法」(『近世文芸 研究と評論』第二号、一九七二・五)」において「零本で、巻七のみ」と指摘される『続伽婢子』に関しては、所収比率が完全には網羅出来ない為、取り上げなかった。なお『狗張子』に関しては、富士昭雄氏の「伽婢子と狗張子」(『国語と国文学』第四十八巻第十号、一九七一・十)における、『伽婢子』と「正編続編の関係」にあるという指摘を鑑み、ここに掲載した。

(2) 註(1)前掲 富士昭雄氏「伽婢子と狗張子」

(3) 花田富二夫氏「『伽婢子』の意義」(松田修氏他校注『新日本古典文学大系75 伽婢子』、岩波書店、二〇〇一・九)

(4) 市古夏生氏「第一部 作品と作者」第二章『伽婢子』における状況設定」(『近世初期文学と出版文化』、若草書房、一九九八・六)「初出…『伽婢子』における場の設定」(『国文白百合』第十四号、一九八三・三)

(5) 宇佐美喜三八氏「伽婢子に於ける翻案について」(『和歌史に関する研究』、若竹出版、一九五二・十一)「初出…「伽婢子に於ける翻案について」(『国語と国文学』第十二巻第三号、一九三五・三)」

(6) 註(5)前掲 宇佐美喜三八氏「伽婢子に於ける翻案について」

(7) 『伽婢子』の典拠研究は、宇佐美喜三八「伽婢子に於ける翻案について」(註(5)前掲)に始まる。現在では、『伽婢子』が類書の『古今説海』『唐人説薈』などを利用していることを指摘する麻生磯次氏の「第一章 怪異小説に於ける影響」二・怪異小説の支那文学翻案の態度及

び技巧」(『江戸文学と中国文学』、三省堂、一九四六・五)、『伽婢子』が類書の『説郛』『五朝小説』を利用して指摘している中村幸彦氏の「第二章 仮名草子の性格」(『中村幸彦著述集 第四巻 近世小説史』、中央公論社、一九八七・十一)、『伽婢子』が類書の『説郛』を利用して指摘する渡辺守邦氏の「浅井了意「伽婢子」」(『国文学』第三十七巻第九号、一九九二・八)、『伽婢子』が類書の『太平広記』を利用して指摘する王建康氏の『太平廣記』と近世怪異小説―『伽婢子』の典拠関係及び道教的要素」(『芸文研究』第六十四号、一九九三・十二)を経て、『伽婢子』が類書の『五朝小説』を利用して指摘する、黄昭淵氏「『伽婢子』と叢書―『五朝小説』を中心に―」(『近世文芸』第六十七号、一九九八・一)により、『伽婢子』の典拠はほぼ明らかにされている。

- (8) 『伽婢子』翻案手法研究には、前述した花田富二夫氏、市古夏生氏ほか、富士昭雄氏「伽婢子―怪異と超現実へ―」(『解釈と鑑賞』第四十五巻第九号、一九八〇・九)がある。さらには、渡辺守邦氏の『五朝小説』と『伽婢子』(一)―(『実践国文学』第七十号、二〇〇六・十)、『五朝小説』と『伽婢子』(二)―(『実践国文学』第七十一号、二〇〇七・三)、『五朝小説』と『伽婢子』(三)―(『実践国文学』七十二号、二〇〇七・十)、『五朝小説』と『伽婢子』(四)―(『実践国文学』第七十三号、二〇〇八・三)といった一連の論文は、『五朝小説』が『伽婢子』に翻案される際、「どの部分が採られ、どの部分が採られなかったか、採用された個所がいかに消化吸収されているかなど」を検証するべく、典拠となっている『五朝小説』を「書き下」している。また、『伽婢子』中における了意の啓蒙作家精神を扱ったものには、江本裕氏「了意怪異談の素材と方法」(註(1)前掲)、太刀川清氏「第六章 仮名草子の伽婢子」(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)〔初出…『伽婢子』の意義〕(『長野県短大紀要』第三十二号、一九七七・十二)〕があげられる。『伽婢子』と道教との関連を扱ったものには、王建康氏「『伽婢子』の翻案に見られる浅井了意の中国道教の受容―伊勢兵庫仙境に到る」をめぐって」(『日本語日本文学』第四号、一九九四・三)、楊永良氏「『伽婢子』の長生論―道教の「気」の思想」(高田衛氏編著『見えない世界の文学誌』、ぺりかん社、一九九四・三)、仏教との関連を扱ったものには、常吉幸子氏「第七章 『伽婢子』の戦略と主題」(『近世における文芸的領域の成立と位相』、おうふう、一九九四・五)〔初出…『伽婢子』試論―(作者)によるひそかな画策と勝利について―』(『活水論文集』第三十四集、一九九一・三)〕、和田恭幸氏「『伽婢子』考―序文釈義」(『見えない世界の文学誌』、ぺりかん社、一九九四・三)などがある。

(9) 註(1)前掲 富士昭雄氏「伽婢子と狗張子」

(10) 和田恭幸氏は「浅井了意の仏書とその周辺(二)―鼓吹物の変

遷と怪異小説の素材減の変容——」（『国文学研究資料館紀要』第二十四号、一九九八・三）において、『狗張子』巻一ノ六、巻四ノ九、巻四ノ十を例に挙げ、唱導説話とのモチーフの類似を指摘している。なお氏は、『法林樵談』、『父母恩重経話抄』、『善悪因果経直解』、『堪忍記』などといった了意自身の著作にも、これら三話の類話が認められるとしている。

（11）富士昭雄氏は「浅井了意の方法——狗張子の典拠を中心に——」（『名古屋大学教養部紀要』第十一集、一九六七・三）や「伽婢子と狗張子」（註（1）前掲）において、中国の志怪小説や我が国の先行文学に、『狗張子』の典拠ないしは類話が見られる由を指摘している。また土屋順子氏は『狗張子』の和歌」（『大妻女子大学大学院文学研究科論集』第九号、一九九九・三）や『狗張子』考——巻二—五「形見の山吹」を中心に——」（『大妻国文』第三十号、一九九九・三）において、『狗張子』における和歌の出典や『太平記』との関連に着目している。

（12）常吉幸子氏は「第八章 『狗張子』の到達地点」（『近世における文芸的領域の成立と位相』、おうふう、一九九四・五）「初出——狗張子墨繩——了意の到達点の明確な記述のために——」（『活水日文』第二十八号、一九九四・三）において、巻五における男色譚を取り上げ、その冒頭は「耽美的な純愛物語」でありながら、次第に「否定的要素」が目立ち、最終的には男色への戒めへと収斂させていることを述べている。また齋藤努氏は『狗張子』改——巻五の男色譚についての試論」（『駒沢大学大学院国文学会論輯』第三十六号、二〇〇八・三）において巻五を取り上げ、「男色の弊害を述べることで男色を戒め、正道を求めさせようとする了意の意図が汲み取れる」ことを指摘している。さらに拙稿『狗張子』論——その恋愛物語を中心に——（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊十三号二、二〇〇六・三）においては、巻五ノ三、巻五ノ四、巻五ノ五、巻五ノ六という一連の男色譚が、恋愛の抒情性から男色の戒めへとその主題を変貌させている由を述べた。

（13）北条秀雄氏は「第二章 浅井了意と本性寺昭儀坊积了意」——第一節 一人説」（『改訂増補 浅井了意』笠間書院、一九七二・三）において、『狗張子』序文の記述から、『狗張子』本文が了意の自筆版下を用いていることを指摘している。

（14）石川透氏は「浅井了意筆奈良本・絵巻の存在」（『中世文学』第四十七号、二〇〇二・六）において、『狗張子』序文の記述、本文の筆跡の検討を通じ、「自筆版下と呼ばれる筆跡が了意によるものと考えるのが妥当である」ことを述べている。

（15）本稿では、作品名に「天狗」という言葉が冠せられているもの。あるいは作品中に「天狗」ないしは「天狗」の引き起こす怪異の描写が登場し、それを作品の主題としているもの。——こうした話を「天狗譚」として定義づける。

(16) 堤邦彦氏は「特集・安土桃山ルネッサンス 地方資料の発掘――

雑談、夜話の原風景」(『国文学』第五十一巻第十一号、二〇〇六・五)において、片仮名本『因果物語』について、「因果応報のことでありを身のまわりに起きた靈験・利生のかずかずを引いて説明する筆法」が「江戸の怪談文芸に大きな影響を及ぼした。」と、片仮名本『因果物語』の事実性に根ざした筆法、ならびに後続の文芸に及ぼした影響について指摘をしている。また、中嶋隆氏も「第四章 因果物語」(末木文美士氏他執筆、岩波講座 日本文学と仏教 第二巻『因果』、岩波書店、一九九四・一)において、「片仮名本・平仮名本『因果物語』は、ともに広く後続文芸の典拠となった」ことを述べている。さらに堤氏は、「女霊の江戸怪談史――仁義なき「後妻打ち」の登場」(一柳廣孝氏、吉田司雄氏編著『幻想文学、近代の魔界へ』ナイトメア叢書2、二〇〇六・五)において、「正三ならびに周辺の人々が体験した世俗の幽霊咄を題材に、人の心の罪障性を戒める」と、ここでもまた片仮名本『因果物語』の事実性、そして唱導・教訓性の特質を評している。

(17) 註(16) 前掲 堤邦彦氏「特集・安土桃山ルネッサンス 地方資料の発掘――雑談、夜話の原風景」

(18) 註(16) 前掲 堤邦彦氏「女霊の江戸怪談史――仁義なき「後妻打ち」の登場」

(19) 堤邦彦氏は「第一章 近世の説話――仏教怪異譚の系譜」(時代別日本文学史事典編集委員会編、『時代別日本文学史事典 近世編』、東京堂出版、一九九七・六)において、「因果の理法をうたいながらも、はるかに文芸意識のまさる作柄となっている。」「片仮名本『因果物語』の法席との親縁性に比べると、平仮名本の方は話の筋立てや文脈上の情趣を重んずる」として、平仮名本『因果物語』の文芸性や物語性について言及をしている。また江本裕氏は「第一部 仮名草子」(三『因果物語』における鈴木正三」(『近世前期小説の研究』、若草書房、二〇〇〇・六)「初出」、『因果物語』をめぐる諸問題――片仮名本検討を通して――」(『大妻国文』第十一号、一九七八・三)において、「娯楽作品としての読物を前提とする」と、平仮名本『因果物語』の娯楽性について述べている。さらに前述の中嶋氏は「第四章 因果物語」(註(16) 前掲)において、「片仮名本・平仮名本『因果物語』は、ともに広く後続文芸の典拠となった」ことを述べている。

(20) 註(19) 前掲 江本裕氏「『因果物語』をめぐる諸問題――片仮名本検討を通して――」

(21) 穎原退蔵氏は「近世怪異小説の一流流」(『国語国文』第八巻第四号、一九三八・四)において、『曾呂利物語』を「近世怪異小説の大きな一源流」と評している。また小澤江美子氏は「延宝期の怪異小説考――『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」(註(1) 前掲)において、『曾呂利物語』について「寛文期にあつては仏教臭・教訓臭の薄れた

娯楽志向の世俗系怪異小説」と述べている。

(22) 小澤江美子氏は「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」(註(1)前掲)において、「教訓を付す話」として、巻二ノ七「天狗の鼻つまみの事」を挙げている。

(23) 註(1)前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(24) 註(5)前掲 宇佐美喜三八氏「伽婢子に於ける翻案について」。なお、『剪燈新話』(明・瞿佑)巻四ノ三「修文舎人伝」のあらずじ、ならびに『伽婢子』巻十ノ六「了仙貧窮付天狗道」との相違点に関しては、本文及び註(25)参照。

(25) 花田富二夫氏は第二部第一章「二 伽婢子の批判性―原話離れを中心に―」(『仮名草子研究―説話とその周辺―』、新典社、二〇〇三・九)〔初出：『伽婢子』教訓的要素の考察―原話離れを中心に〕(『有明工業高等専門学校紀要』第十七号、一九八二・一)において、巻十ノ六「了仙貧窮付天狗道」と「修文舎人伝」の結末に着目し、「特に、『伽婢子』の方は、了仙を魔道に堕としており、原話の単なる冥土とは違う趣向で構を立てている。由を指摘している。また氏は、「了仙貧窮付天狗道」の主人公・了仙を「自分では学智あるにもかかわらず誰にも認められず、結局仕官することもできない自己を悔やみ、あげくの果ては憤死する」人物、「修文舎人伝」の主人公・夏顔を「すべてを天命と考えて無欲の日々を送り、死後公正な冥土の選抜方法によって修文舎人の地位を与えられる」人物であると述べている。

(26) 花田富二夫氏 第二部第一章「二 伽婢子の批判性―原話離れを中心に―」(註(25)前掲)

(27) 江本裕氏は「第一部 仮名草子」「三 『因果物語』における鈴木正三」(註(19)前掲)において、片仮名本『因果物語』下巻一「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧ノ事付長老、魔道ニ落事」ノ二と平仮名本『因果物語』巻三ノ九「学匠高慢して、天狗につかれし事」の内容が一致するとしている。

(28) 本稿における「近世怪異小説」の定義は、註(1)に拠る。

(29) 松田修氏他校注『新日本古典文学大系75 伽婢子』(岩波書店、二〇〇一・九)脚注において、「原話の主人公が遺稿の出版を依頼するという文学的なテーマを、増上慢によつて魔道の天狗道へ堕ちるという人間性の問題へと改変した。」ことが指摘されている。

(30) 註(5)前掲 宇佐美喜三八氏「伽婢子に於ける翻案について」。なお、『西陽雜俎』(唐・段成式)巻十四「諾臯記」の「博士丘濡説云々」のあらずじ、ならびに『伽婢子』巻十三ノ一「天狗塔中に棲」との相違点に関しては、本文参照。

(31) 註(4)前掲 市古夏生氏「『伽婢子』における場の設定」

(32) 註(3)前掲 花田富二夫氏「『伽婢子』の意義」

(33) 註(25) 前掲 花田富二夫氏 『伽婢子』教訓的要素の考察―原話離れを中心に―

(34) 穎原退蔵氏は「近世怪異小説の一流流」(註(21) 前掲)において『曾呂利物語』やその他の御伽の咄に胚胎した説話が、『とのゐ草』に於いていかに文藝的な成長を遂げて居るか」と、『宿直草』(『御伽物語』)の有する文芸性について言及しており、田川邦子氏はまた「怪談『とのゐ草』論」(『文教大学女子短大部研究紀要』第二十三号、一九七九・十二)において「奇異なるものを見つめる感覚が、ありきたりな怪談の域を超えていると同時に、そこに新たな表現の工夫が加味され、独特の世界を持つことができた例」として、『宿直草』(『御伽物語』)の高度な文芸的世界観について述べている。

(35) 堤邦彦氏は第三部「第三章 江戸時代人は何を怖れたか」―「怪異との共棲―『宿直草』に萌すもの―」(『江戸の怪異譚』、ペリカん社、二〇〇四・十一)「初出」：「怪異との共棲―江戸時代人は何を怖れたか―」(『伝承文学研究』第五十号、二〇〇〇・五)において、『宿直草』(『御伽物語』)には「宗教哲学に根ざす教化布宣の目的性をはじめから用意されていない」ことを述べている。

(36) 註(35) 前掲 堤邦彦氏第三部「第三章 江戸時代人は何を怖れたか」―「怪異との共棲―『宿直草』に萌すもの―」

(37) 註(34) 前掲 田川邦子氏「怪談『とのゐ草』論」

(38) 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百物語』と『諸国百物語』」(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)「初出」：『諸国百物語』成立の背景」(『長野県短大紀要』第二十八号、一九七三・十二)

(39) 註(1) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(40) 註(1) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(41) 註(1) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(42) 「高館」は幸若舞の一種で、頼朝から義経追討の命を受けた鎌倉方と藤原泰衡が、義経が立て籠もっている高館に攻め入るものの、弁慶がそれを退けようとして奮戦し、ついには凄絶な立往生を遂げるまでを描いた作品。

(43) 註(1) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(44) 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏「(鼎談)江戸の怪異譚と西鶴」(高田衛氏他編『西鶴と浮世草子研究 特集・怪異』第二号、笠間書院、二〇〇七・十一)

(45) 註(1) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(46) 註(1) 前掲 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考―『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」

(47) 湯沢賢之助氏は『新御伽婢子』解説(『古典文庫第四四一冊 新御伽婢子』、一九八三・六)において、「最近の話としてその面白さを味わってもらい、かつ、教訓のよすがにしたかった」と、『新御伽婢子』の執筆意図について言及している。また、太刀川清氏は「第七章 浮世草子の伽婢子」第一節『新御伽婢子』(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)〔初出：『新御伽婢子』の位置(『国語国文研究』第六十一号、一九七九・二)〕において、「民話的怪異小説として成立した」が「名所記的な性格と見聞記的な性格」を持ち、「新しさ」がそこにあつたと、『新御伽婢子』の有する斬新な特質について述べている。さらに当麻晴仁氏は『新御伽婢子』考―片仮名本『因果物語』との関係―(『青山語文』第二十二号、一九九二・三)において「読むための怪異談を志向し、怪異性を高めるための積極的な改変を見せる」といった、『新御伽婢子』における、娯楽性を追求する為の改変について言及している。

(48) 註(47) 前掲 当麻晴仁氏『新御伽婢子』考―片仮名本『因果物語』との関係―

(49) 渡辺守邦氏は「第三章 近世怪異小説」(末木文美士氏他執筆、岩波講座 日本文学と仏教 第二巻『因果』、岩波書店、一九九四・一)において、「和漢儒仏にわたる博識を動員して、もろもろの怪奇を論評した書」と、『百物語評判』を評している。

(50) 註(49) 前掲 渡辺守邦氏「第三章 近世怪異小説」

(51) 太刀川清氏「第三章 浮世草子の百物語」第一節『諸国新百物語』(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十一)〔初出：『諸国新百物語』と『御伽比丘尼』(『長野県短大紀要』第三十三号、一九七八・十二)〕

(52) 註(1) 前掲 富士昭雄氏「伽婢子と狗張子」。なお、『酉陽雜俎』(唐・段成式)巻十四「諾臯記」の「博士丘濡説云々」のあらすじは、「七―二・「天狗」譚―『諸国百物語』以前」における『伽婢子』巻十三ノ一「天狗塔中に棲」の項参照。また、典拠である「博士丘濡説云々」は、古塔に住む天人が、妻にする為に村の女性をさらひ、その女性が天人の起こす様々の怪異を目にする話であるが、『狗張子』巻六ノ二「天狗にとられ、後に帰って、物がたり」においては、天人と村の娘という人物設定が、天狗と子どもという設定に置き換えられている様子がうかがわれる。

(53) 馬淵和夫氏他校注『日本古典文学全集22 今昔物語集二』(小学館、一九七二・九)の今野達氏の「各話解説」においては、『狗張子』

卷六ノ二「天狗にとられ、後に帰りて、物がたり」が、僧侶——天狗ではない——が生前の罪によって熱銅の汁を飲まされ、総身が燻るといふ描写のある『今昔物語』卷十九「東大寺僧於山值死僧語第十九」の類話として位置づけられている。

(54) 註(11) 前掲 富士昭雄氏「浅井了意の方法——狗張子の典拠を中心に——」

(55) 註(11) 前掲 土屋順子氏『狗張子』考——卷二—五「形見の山吹」を中心に——

(56) 拙稿『狗張子』論——卷六ノ三「板垣信形逢いたがきのぶかたあか天狗てんぐ」を中心に——

(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊十五号一、二〇〇七・九)

(57) 註(1) 前掲 富士昭雄氏「伽婢子と狗張子」

(58) 江本裕氏『狗張子』注釈(五)(『大妻女子大学紀要—文系—』第三十八号、二〇〇六・三)における「板垣信形逢ニ天狗ニ」【余説】に『太平記』五には、相模入道が田楽師たちと酒宴を催した際、侍女が覗くと田楽師ではなく妖怪の類が山伏姿で現れたようであったといふ話がある。」との指摘がある。

(59) 富士昭雄氏は「浅井了意の方法——狗張子の典拠を中心に——」(註(11) 前掲)において、了意には『太平記首書』の著があり、『太平記』に親炙している点、そうした観点から『狗張子』卷七ノ二「蜘蛛塚」、卷一ノ四「守江海中の亡魂」、卷七ノ四「五条の天神」、卷一ノ六「北条甚五郎出家」がそれぞれ『太平記』卷二十三「大森彦七事」、卷十一「越中守護自害付怨霊事」、卷三十五「北野通夜物語事」、卷二十「結城入道墮地獄事」と類似している点を指摘している。また土屋順子氏は『狗張子』考——卷二—五「形見の山吹」を中心に——(註(11) 前掲)において、「形見の山吹」の典拠として、『太平記』卷十五「賀茂神主改補事」を挙げている。

(60) 拙稿『伽婢子』の方法——異界に翻弄される人間——(『近世文芸 研究と評論』第六十七号、二〇〇四・十一)においては、怪異に抗った大胆不敵な人間の物語の一例として、卷六ノ五「白骨の妖怪」を取り上げた。

(61) 註(5) 前掲 宇佐美喜三八氏「伽婢子に於ける翻案について」。なお、『睽車志』(宋・郭象)卷六「劉先生者云々」のあらずじは、俗世を離れ、隠者の如き生活を送る劉先生が、白骨の妖怪に遭遇し、これを粉碎するというものである。卷六ノ五「白骨の妖怪」との相違点については、本文ならびに註(62) 参照。

(62) 拙稿『伽婢子』の方法——異界に翻弄される人間——(註(60) 前掲)で、「劉先生者云々」においては、怪異に遭遇した後も、主人公の日常生活の継続が明記されているのに対し、卷六ノ五「白骨の妖怪」は、主人公の行方不明で幕を閉じていることを指摘した。

(63) 註(5) 前掲 宇佐美喜三八氏「伽婢子に於ける翻案について」。

なお、『剪燈餘話』(明・李禎)の卷三「胡媚娘伝」は、新鄭の馭卒・黄興が、狐が変化した美女を、進士・蕭裕に嫁がせる。その為、蕭裕は狐に精気を奪われて死にかけるが、道士・伊澹然の術で事なきを得るといふ話である。卷二ノ三「狐の妖怪」との相違は、本文を参照。

(64) 註(60) 前掲 拙稿『伽婢子』の方法——異界に翻弄される人間——」

(65) 註(5) 前掲 宇佐美喜三八「伽婢子に於ける翻案について」。なお、『剪燈新話』(明・瞿佑)の卷三ノ三「申陽洞記」は、隴西の李徳逢が申陽洞記に住む猿の妖怪を退治し、美女と富を得るといふ話である。卷十一ノ一「隠里」との相違点に関しては、本文を参照。

(66) 註(60) 前掲の拙稿『伽婢子』の方法——異界に翻弄される人間——」の注釈において「女大学」に「子なき女は去るべし。是妻を娶は子孫相統の為なれば也。(中略)或は妾に子あらば、妻に子なく共、去に及ばず」(高野義男『貝原益軒 上巻』、日本図書センター、一九七九・一)との記述があることを引用し、「子孫相統」を妻の義務とするくだりからは、当時の人々の、「家」の存続に対する執着がうかがわれることを指摘した。

(67) 拙稿『伽婢子』の方法——異界に翻弄される人間——」(註(60) 前掲)では、卷六ノ五「白骨の妖怪」、卷十一ノ一「隠里」の結末には、大胆不敵な主人公たちに対する異界からの復讐が暗示されていることを述べた。

(68) 註(1) 前掲 富士昭雄氏「伽婢子と狗張子」

(69) 註(58) 前掲 江本裕氏『狗張子』注釈(五)」

(70) 註(58) 前掲 江本裕氏『狗張子』注釈(五)」

(71) 註(58) 前掲 江本裕氏『狗張子』注釈(五)」

(72) 『堪忍記』の典拠については、これまで多くの研究がなされてきた。

小川武彦氏は『堪忍記』の出典 上の一——中国種の説話を中心に——」(『近世文芸 研究と評論』第十卷、一九七六・五)において、『堪忍記』が明代の善書『迪吉録』に依拠していること、『堪忍記』の出典上の二——中国種の説話を中心に——」(『近世文芸 研究と評論』第十三号、一九七七・六)において、『堪忍記』の啓蒙教訓的言辞が『明心宝鑑』を利用していることを、それぞれ指摘している。また和田恭幸氏は『堪忍記』の性格」(『近世文芸』第五十五号、一九九二・二)において、了意作仏書と『堪忍記』との関連性を指摘している。さらに花田富二夫氏は「二 『堪忍記』とその周辺」(『仮名草子研究——説話とその周辺——』、新典社、二〇〇三・九)「初出」：「浅井了意の文事——『堪忍記』を中心に——」(長谷川強氏編『近世文学俯瞰』、汲古書院、一九九七・五)、『堪忍記』周辺考——和・漢堪忍説話の視覚を中心に——」(『大妻国文』第二十八号、一九九七・三)にて、『堪忍記』執筆に影

響したとされる、和・漢の「堪忍説話」について考察を加えており、『堪忍記』が『事文類聚』、『太平広記』などといった中国文学関連書籍から説話を引用していた由を述べてもいる。そして花田氏の「二『堪忍記』とその周辺」において、今日では『堪忍記』の典拠はほぼ明らかになっている。しかし本稿で取り上げた七ノ二十二ノ九の典拠は、未だ明らかになっていない。

(73) 堤邦彦氏「怪異——近世怪異小説と仏教——」(伊藤博之氏他編、仏教文学講座 第五卷『物語・日記・随筆』、勉誠社、一九九六・四)
(74) 山田巖子氏「変容する寺社縁起 火車説話の受容と展開」(堤邦彦氏他編『寺社縁起の文化学』、森話社、二〇〇五・十一)

(75) 岡田純平氏は「近世火車説話の成立」(『山口国文』第二十九号、二〇〇六・三)において、中世までの「火車」観が「悪人を臨終の際に地獄へ連れ去るもの」「獄卒が燃える車を牽いている」というものであったこと、これに対し、近世における「火車」観は「極楽往生を妨げるもの、僧侶によって撃退されるべき存在へと変化した」ことを述べている。後に詳述してゆくが、本稿で取り上げた「近世怪異小説」における「火車」像には、これら両方の側面が混在している為、本稿では「火車」が怪異の主体である作品群を、「火車説話」と定義づけた。

(76) 中村祥子氏は「火車説話における「火車」のイメージの変遷」(『昔話伝説研究』第三十号、二〇一〇・十二)において、平安時代後期から江戸時代にかけての三十四例の「火車説話」を取り上げ、「火車」の対象となる罪「に見る仏教要素の変遷という観点から、考察を加えている。

(77) 註(75) 前掲 岡田純平氏「近世火車説話の成立」

(78) 註(75) 前掲 岡田純平氏「近世火車説話の成立」

(79) 堤邦彦氏「第二章 昔話・伝説と曹洞宗」(「火車と禅僧——近世奇談文芸の淵源」(『近世説話と禅僧』、和泉書院、一九九九・二)「初出：「禅僧の法力——曹洞宗関与の火車説話と近世奇談文芸」(『説話文学研究』第二十八号、一九九三・六)

(80) 註(19) 前掲 江本裕氏「第一部 仮名草子」(三 『因果物語』における鈴木正三)

(81) 西田耕三氏「雷撃震死の説話」(『熊本大学文学部論叢』第六十三号、一九九九・三)

(82) 註(81) 前掲 西田耕三氏「雷撃震死の説話」

(83) 註(75) 前掲 岡田純平氏「近世火車説話の成立」

(84) 註(75) 前掲 岡田純平氏「近世火車説話の成立」

以下、『あやしぐさ』本文引用は全て長谷川強氏編『古典文庫第四八三冊 あやしぐさ』(古典文庫、一九八七・一)に、『堪忍記』は深沢秋男氏編『仮名草子集成』第二十卷(東京堂出版、一九九七・八)に、

『睽車志』は『五朝小説 36』（「出版地不明」、「出版者不明」、「出版年不明」、早稲田大学中央図書館蔵）に、『剪燈餘話』は『剪燈餘話』卷之1―7（京都、明・河南四郎右衛門、元禄五年（一六九二）刊、早稲田大学中央図書館蔵）に、『太平記』は『太平記』目録・劔巻 卷第1―40（「出版地不明」、「出版者不明」、「出版年不明」、早稲田大学中央図書館蔵）に、『茅草漫録』は日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』（第一期）22（吉川弘文館、一九七六・五）に、『酉陽雜俎』は商務印書館編『叢書集成初編』001―0500（上海、商務印書館、一九三六）に拠る。

【表1】近世初期～中期怪異小説における「天狗」譚

作品	章題	説話中
『奇異雑談集』 (写本)	0/39 (0%)	0/39 (0%)
片仮名本 『因果物語』	0/77 (0%)	1/187 (0.5%)
平仮名本 『因果物語』	1/85 (1.2%)	1/85 (1.2%)
『曾呂利物語』	1/41 (2.4%)	1/41 (2.4%)
『伽婢子』	2/68 (2.9%)	2/68 (2.9%)
『宿直草』(『御伽物語』)	4/68 (5.9%)	4/68 (5.9%)
『諸国百物語』	2/100 (2%)	3/100 (3%)
『新御伽婢子』	0/48 (0%)	1/48 (2.1%)
『百物語評判』	1/42 (2.4%)	1/42 (2.4%)
『御伽比丘尼』 (『諸国新百物語』)	1/22 (4.5%)	1/22 (4.5%)
『狗張子』	3/45 (6.7%)	3/45 (6.7%)

* 「天狗」譚/所収話数

* カッコ内は割合 (小数点第一以下四捨五入)

【表2】近世初期～中期怪異小説における「天狗」譚の巻次・章題・概略

作品	巻次	章題	概略
『奇異雑談集』 (写本)			
片仮名本 『因果物語』	下巻一ノ二	「閻魔王ヨリ、使ヲ受ル僧 ノ事付長老、魔道ニ落事」	慢心深い僧侶に、天狗がとりつ く。
平仮名本 『因果物語』	巻三ノ九	「学匠高慢して、天狗につ かれし事」	高慢な僧侶に、天狗がとりつく。
『曾呂利物語』	巻二ノ七	「天狗の鼻つまみの事」	怖い者知らずを鼻にかけた僧侶 が、天狗の難に遭遇する。
『伽婢子』	巻十ノ六	「丁仙貧鴉付天狗道」	博学ではあるが不遇で、慢心を 捨てられなかった僧侶が、死後 天狗道に堕ち、熱鉄を飲まされ る。

	卷十三ノ一	「天狗塔中に棲」	天狗にさらわれ、後に帰って来た子どもが、天狗がなしていた様々の怪異を語る。
『宿直草』 〔御伽物語〕	卷一ノ五	「あるてらの僧天狗の難にあひし事」	ある寺の僧侶が天狗にさらわれ、屍が散乱する。
	卷一ノ六	「てんぐつぶてうつ事」	天狗の撃つ石礫が、人々を翻弄する。
	卷一ノ七	「てんぐいしきる事」	天狗が不吉の前兆として、石を切る音をたてる。
	卷一ノ八	「てんぐつぶて附ころにかからぬ怪異はわざわひなき弁の事」	天狗が礫を打つ家があり、周囲は折りをして災いを退けるよう諫めたが、家主は相手にしなかった。その後、その家には何も変わったことはなかった。
『諸国百物語』	卷一ノ三	「河内の国關峠道珍天狗に鼻はぢかるゝ事」	怖いもの知らずを鼻にかけていた僧侶が、天狗に脅される。
	卷三ノ一	「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」	武辺に慢心していた若者を、天狗が脅す。
	卷三ノ十五	「備前の国うき田の後家まんの事」	慢心していた後家に、天狗が災いをなす。
『新御伽婢子』	卷四ノ三	「金峰崇」	慢心していた僧侶が天狗道に堕ちる。
『百物語評判』	卷三ノ三	「天狗の沙汰附浅間岳求聞持の事」	天狗や、天狗のなす怪異とは何かと云う問いかけに、解釈を与えている。
『御伽比丘尼』 〔諸国新百物語〕	卷五ノ二	「かねをかけたる庵の柙付天狗物語」	僧侶が、天狗の化身である庵を助け、その礼を受ける。
『狗張子』	卷六ノ二	「天狗にとられ、後に帰って来て、物がたり」	天狗にさらわれ、後に帰って来た子どもが、天狗と共に見聞きした、様々の不可思議な出来事を語る。

卷六ノ三	「坂垣信形逢天狗」	武勇に慢心していた坂垣信形が、山伏に化けて来訪した天狗たちになぶられる。
卷六ノ五	「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」	山賊をして世渡りをしていた杉田彦左衛門が、天狗に命を奪われ、葬儀の際に死骸を奪われかける。

【表3】近世初期～中期怪異小説における「不敵」「したっか」ものの登場する話の巻次・章題・概略

作品	巻次	章題	概略
『奇異雑談集』 (写本)			
片仮名本 『因果物語』			
平仮名本 『因果物語』			
『曾呂利物語』	卷三ノ三	「蓮臺野にて化物に逢ふ事」	「不敵」なる男が、蓮臺野の二つ塚の怪異に遭遇する。
	卷四ノ十	「怖ろしくあいなき事」	「不敵」な旅人が、化け物が出るといふ無人の家で、怪異に遭遇する。
『伽婢子』	卷二ノ三	「狐の妖怪」	「不敵」な心根の割竹小弥太は、ある時狐が美女に化けるのを見かけ、その美女を他人に売り渡して金持ちになる。
	卷六ノ五	「白骨の妖怪」	隠者のような生活を送る、「不敵」「したっかも」の長間左太が、ある夜白骨の妖怪に遭遇する。
	卷十一ノ一	「隠里」	武芸に長け、「不敵」な心根の内海又五郎が、猿の化け物たちを退治する。
『宿直草』 (『御伽物語』)			

『諸国百物語』	巻三ノ十五	「備前の国うき田の後家ま ん気の事」	慢心していた「ふてき」なる後 家に、天狗が災いをなす。
『新御伽婢子』	巻二ノ十	「樹神の罰」	「ふてき」の男が樹神の宿る木 を切り倒そうとし、罰を受けて 狂死する。
	巻四ノ二	「禿狐」	「不敵」の男が、狐の化身であ る異形の禿に遭遇する。
『百物語評判』			
『御伽比丘尼』 〔『諸国新百物語』〕			
『狗張子』	巻六ノ三	「板垣信形逢天狗」	武勇に慢心していた「したゝか」 者、板垣信形が、山伏に化けて 来訪した天狗たちになぶられ る。
	巻六ノ五	「杉田彦左衛門、天狗に殺 さる」	山賊をして世渡りをしていた 「ふてき」な杉田彦左衛門が、 天狗に命を奪われ、葬儀の際に 死骸を奪われかける。

【表4】近世初期～中期怪異小説における「火車説話」の巻次・章題・概略

作品	巻次	章題	概略
『奇異雑談集』 (写本)	下巻ノ一	「越後上田の庄にて、葬の 時、雲雷きたりて死人を、 とる事」	葬儀の折に、屍を略奪しようと やって来た火車を、僧侶が逃げ る。
	下巻ノ三	「窟根山火金の地蔵の事」	鬼神が、情け心のない女性を、 自らが引く火車に乗せて去る。
		「悪見ニ落タル僧、自他ヲ 損ズル事」	生前、邪な仏法を説いていた僧 侶の屍を、火車が掴みゆき、あ ちこちに捨てた。
片仮名本 『因果物語』	下巻十一ノ三		生前、邪な仏法を説いていた僧 侶の屍を、火車が掴みゆき、手 足を引き千切り、木の枝に掛け 置いた。
平仮名本 『因果物語』	巻二ノ十七	「仏法を、あしくすゝめて、 罰あたりし事」	生前、邪な仏法を説いていた僧 侶の屍を、火車が掴みゆき、手 足を引き千切り、木の枝に掛け 置いた。
	巻四ノ四	「ねたみ深き女、つかみこ ろされし事」	嫉妬深い女性が、生きながら火 車にその身を引き裂かれる。

	巻四ノ五	「生ながら、火車にとられし女の事」	冷酷な女性が、「八尺計のおとこ二人」に、地獄へ連れ去られてゆく。
『曾呂利物語』			
『伽婢子』			
『宿直草』			
(『御伽物語』)			
『諸国百物語』	巻五ノ二	「二婢をつかひて火車にとられし事」	二婢を用いていた米屋の女房が、火の車に乗せられ、午頭馬頭の鬼に呵責される。
『新御伽婢子』	巻一ノ六	「火車燵」	病にかかった老女を、午頭馬頭の鬼が呵責し、火の車に乗せて連れ去ろうとする。
『百物語評判』			
『御伽比丘尼』			
(『諸国新百物語』)			
『狗張子』			

論文初出一覧

- 一. はじめに
(書き下ろし)
 - 二. 『諸国百物語』における怪異と人との関わり
(書き下ろし)
 - 三. 『諸国百物語』における仏教と僧侶の位置づけ
(書き下ろし)
 - 四. 「後妻うち」の系譜
(書き下ろし)
 - 五. 「執心」譚の系譜
(書き下ろし)
 - 六. 「斬首」の系譜
(書き下ろし)
 - 七. 「天狗」譚の系譜——『諸国百物語』と『狗張子』——
 - ・『伽婢子』の方法——異界に翻弄される人間——
(『近世文芸 研究と評論』第六十七号、二〇〇四・十一)
 - ・『狗張子』論——卷六ノ三「板垣信形逢^{いたがきのぶかたあふ}天狗^{てんぐ}」を中心に——
(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊十五号一、二〇〇七・九)
 - ・『狗張子』論——卷六ノ五「杉田彦左衛門、天狗に殺^{てんぐ}さる」を中心に——
(『近世文芸 研究と評論』第七十三号、二〇〇七・十一)
 - ・『伽婢子』と『狗張子』——「天狗」譚を中心に——
(『文学・語学』第二一〇号、二〇一四・八)
- これらを基に加筆・修正したものである。

(四百字詰め原稿用紙換算枚数約七百三十八枚)